

の指の下、世界プロレタリア革命戦争として創出、世界

正統な赤軍として組織、帝国主義の普遍的危機
8、3 論文

向過渡期七員大の

防衛と発展のために

塩見孝也

査証出版



一向過渡期世界論の防衛と発展のために 塩見孝也 査証出版

一向過渡期世界論の防衛と発展のために 目次

(1) 序論

一向過渡期世界論の防衛と発展のために

(2) 前史

ゲバラカスト口路線とわれわれ

——いわゆる世界革命の第三の道派について——

現代過渡期世界と世界革命の展望

——世界プロレタリア統一戦線・世界赤軍・世界党建設の第一歩へ——

シンガポール・クウェート連続作戦勝利万歳！パレスチナ・アラブ

人民連帯4・14集会へのアピール

(3) 情勢分析

七〇年代中期国際情勢の基本的動向と世界革命の展望

(次ページからの序章は、「論叢・6」執筆完了後、(1) 序論のた
めの序章として昨年(一九七四)五月執筆されたものであり、合本
に際して新たに追加されるものである。)

同志諸君、読者諸君！

ここに「過渡期世界論の防衛と発展のために」という課題をもち、他面では、連合ブンドを中心とするブンド系諸派の批判を含んだ——主に赤報派批判だが——、八木同志と臨総パンフを中心とする清算主義のメンシエビキ路線の批判、の意義をもつ論文を送ります。

1

清算主義のメンシエビキ路線は、主要側面は小ブル日和見主義ですが、一面では、連赤敗北の総括過程では、赤軍派の闘いと理論・路線を全否定することによって、小ブル革命主義に鋭い批判を浴せることによって、我々が正しい総括を勝ちとる上で、必要不可欠な反面教師の役割りを果たしてくれた。そして、この限りで、メンシエ諸君が、連赤敗北以降のこの二年間まがりなりにも存在し得た歴史的必然をもつていたと考えます。勿論、連赤敗北の「後退」局面、国際階級闘争の転換、等の客観的諸条件もあります。

だが、この清算路線は、否定と批判の役割りで指導力を発揮はすれ、新たな階級闘争の段階に対して、ひとたび前進を開始しようとするならば、その主要側面としての反動的な性格

それ故、清算主義のメンシエビキを克服する気運が生じてきたことを、我々は心から大いに歓迎するものです。我々はこの気運を全同盟をあげて、促進しなければならぬ。我々は小ブル革命主義の教条主義の無政府主義的傾向が一定程度克服された以上、そして他方では、清算主義のメンシエビキの克服が猶予ならぬものになった以上、この任務を徹底して推進し貫徹する党内戦線を形成しなければならぬと考える。この小論は、かかる意味合いをもって書かれたことを隠すつもりはありません。と同時に、この小論は、標題でも明瞭の如く、同盟の綱領上、理論上の歴史的総括を一定程度、果さんとするものです。——完全ではないが。

臨総パンフに集中された清算主義路線は、赤軍派の理論と実践の全面清算であり、又、赤軍派に反対してきた連合ブント諸派の批判を取り入れたり、これを背景にした七・六以来の、歴史的な広がりをもった、清算であるが故に、——敵の敵は自分の友——の友敵論に従って、驚くべき精力をこめて、赤軍派の一滴の痕跡すらも残さず清算せんとする志向は全くもって誠にもって見あげたものです——従って、我々の反批判も、同盟の創生にいたるまでさかのぼって全面にわたらざるを得ないし、又そうすべきです。こういうわけで、この論文は、その前半部を連合ブントの一二・一八路線を中心とする同盟外からの批判への反批判を展開し、その上で、豚小屋

は、その正体をあらわさざるを得ないが故に、矛盾は爆発する。そしてこの矛盾は清算主義の発生とともにつきまとう宿命であったが、最早これは陰蔽放置すべからざる程に激成されている。「経済主義の克服」／「小ブル日和見主義の克服」／「部落問題」だ／「民族問題」だ／「日本資本主義批判」だ／等とシタバタミつともなく、大同にして小異の類に、責任転嫁して、無責任にお茶を濁そうとしている。君達が幾ら新手の小道具を持ち出してきても、正しい立場が礎かたない以上、ザルで水をすくうようなものであり、団結も出来なければ、前進も出来はしない。

「経済主義の克服」だ／「小ブル日和見主義の克服」だ／「部落問題」だ／「民族問題」だ／「資本主義批判」だ／全て結構です。しかし、君達は一切誰に対して、この言辞を吐いているか／自分達自身ではないのか／「再生に向けて」だけを批判すれば、こゝとがすむと考えているのかね。小ブル日和見主義の伏魔殿たる「臨総パンフ」に代表される、清算主義のメンシエビキ路線は、手をつけなくていいというわけなのかね？ この臨総路線を清算しない限り、「小ブル日和見主義の克服」も「経済主義の克服」も「新たな諸戦術」も、何も実現されはしないのです。立脚点も団結もないところに、任務・方針を實現しようとする意欲が生れるわけがないのです。

2

パンフ||臨総パンフを批判する構成をもったわけです。

又、この小論が序論とされている如く、この小論は本題の課題を全面的に論じたものではない。第二次ブンドからの党内一分派闘争も、連赤にいたる総括や組織・戦術問題で不十分であることは明瞭です。

いずれにせよ、これを契機に、「過渡期世界論」を一つの中心にする綱領理論討論を活発化させ前進させてゆくべきです。ところで、かかる情況創出に向けてなげくべきは、同盟に結集してきた新しい同志は勿論のこと、それ相当の経験をもちた同志すらが、同盟赤軍派の歴史や理論を全く知らずにいる状態があることです。これは打破されるべきです。この事態は、私達が党史をつくり出す程までの力量をもち得てないことから、というより、そのような努力―課題を軽視していたことに根本がありますが、特殊には、清算派が、赤軍派の歴史や理論の全てを組織に蓄積することを意図的に、排除してきたことにあります。(しかし、赤軍派の党史を書くなんてことは、余程の配慮をもって、同盟の総意を反映し、また確固たるヘゲモニーをもってこそ初めて可能であるにも拘らず、我が清算主義者はこの事業をいとも軽々にし遂げたとは、自分のこの行為がなんたる意味をもっていたかすらわかっていないのだ！)

この小論はこの点に於て、一面に於て、同盟の小史であり、党史編集に向けての一つの作業に過ぎないが、同盟団結の基

礎であり前提ともなるものです。同志読者諸氏は、この論叢への補足の両論文や「赤軍派政治理論誌総集」や「世界革命戦争への飛翔」等はぜひ参照しておいて下さい。

臨臨派は結局は、第二次ブンド内・連合派（主に関西ブント系）に結局は屈服、解体され、赤軍派に敵対していた彼らの側から、赤軍派の歴史を書きかえ、彼等が「資本主義批判」を強調し過渡期世界論を捨てることによって、武闘と国際主義を捨てたこと、又、共産主義と武闘を組織する党組織構造も捨てたこと、同じ構造——従って残ったのは、「資本主義批判」の講壇マルクス主義と大衆追隨の戦術のみで、この媒介項にして政治的核心部分たる、政治的・組織的分野（過渡期世界論と国際共産主義運動史、綱領——権力——陣型問題、組織問題）がスッポリ抜け落ちていく——で、過渡期世界論を捨てることによつて、小ブル思想主義の講壇マルクス主義と大衆追隨に陥ち込んでいるが故に、清算派は、連合ブンド等諸派に、何んらの党派性も示せず、彼等の批判のお先棒をかつぎ、自らの赤軍派の闘いに唾をはきかけるといふ驚き狂態を演じたわけです。（八木同志は、連赤直後連合ブンド諸派に涙を流して自己批判し——連合ブンドの連中はこんな事態も思いもかけてなかったのだ——、××、××両同志は日向一派にすら媚態を呈し、小ブル反スタ主義にまで成り下ってしまった。清算「左」派は、イデオロギーの同一平面に引きつけられているにも拘らず、生来のモスキート級

3

「過渡期世界論」といつても、何んら宗派的教理を全く意味しないし、マルクス・レーニン主義に従つた世界把握——世界変革の基本的な立場・方法・観点にしか過ぎないし、本来科学的に説明出来るし、誰でも十分理解出来るものです。これを簡単にまとめれば以下です。

① 世界把握——変革の方法としての三層分析と科学的共産主義のマルクス・レーニン主義の原則路線。

世界把握（批判）は、弁証法的唯物論を基礎にして、この人間社会の歴史への適用たる史的唯物論と、この弁物論・史物論を基礎とする資本主義批判によつて、実現される。いわゆるマルクス主義は三つの部分によつて構成される。ただし、資本主義は、産業資本主義、帝国主義、現代帝国主義——過渡期世界の、特徴的な発展段階を跡づけているわけで、この発展の小段階（小歴史）が踏えられるべきこと。要約すれば、過渡期世界の把握はマルクス・レーニン主義の三層分析の方法でなされること。そして、これをもつて、その変革の目的、諸条件、道筋、方法、手段のマルクス・レーニン主義の科学的共産主義の基本原則路線を導くこと。

② 過渡期世界の革命路線（攻撃的階級闘争）とその三つのテーゼ。

① 世界武装プロのテーゼ……ロシア革命以降の世界史的階級関係の変化、プロレタリアートの世界史的成熟段階を示す。

の軽薄性故に、「赤軍派」批判のバスに乗り遅れまいと、無節操に、「軍事力学主義」だとか、いい始めたわけだ。それ故に、同盟の正しい歴史を獲得し、連合ブンド等諸派に同盟が確固たる批判的立場を保持せんとする点でも、この作業は極めて重大なわけです。

げに、赤軍派は、ただひたすら、ひたむきに、日帝・国際帝国主義と資本家どもに闘ってきた。そしてこの姿勢に於て、我々は、全世界の共産主義者に対して孫色ないものと、誇るものです。だが、このようなしつかりした根本的姿勢をもつていつつも、闘えば種々な矛盾も生れ、欠陥も発生する。これ等に対して、種々な批判がなげかけられてくる。これ等の批判を放置したまま、突き進めばいつか息ぎれがして、自己崩壊し、総潰乱状態が生れ、とるに足らない批判や勢力が台頭してくるものです。かかる動向に対して、弱点を不断に克服し、党派闘争——理論闘争——思想闘争を不断に推進し、我々の綱領的立場を常に現在の生きた立脚点として保つておくことが必要なわけですが、赤軍派結成から連赤敗北までは、幾つかの小階段がありながらも全体的には、一瀉千里の長駆前進の侵攻戦であつたので、必要な思想・政治・理論上の補修が不十分のまま、連合ブンド等の批判をとるに足らぬものとして批判のままに委せていたこと、このことがいつのまにか、同盟の一部日和見主義部分に「過渡期世界論」は間違っているのではないか、という風潮を生み出してきたのです。

又その本質的性格、形態としての世界プロ共産主義革命の展開期としての、世界プロレタリア独裁運動を意味し、その形態が世界革命戦争であることを意味する。（「世界武装プロ」という用語はいかつすぎるので、上記の意味を示す他の用語でかえてもいい）。

② 帝国主義の最終小段階として、相互が国際的に矛盾的に連携し、反革命・侵略・抑圧をおこなわずには存在できない帝国主義たる現代帝国主義と、これに規定され、かつ、これを能動的に逆規定する、先進国——前段階決戦のプロ社会主義革命（戦争）、途上国——民族民主主義革命（戦争）、プロ国家——根拠地化と継統革命、この三ブロック革命のプロ世界共産主義革命の世界革命戦争としての、不可避的結合性、同質性、統一性。

特殊には、帝国主義と同盟しこれを疎む帝国主義の救済者、プロ国家の資本主義への逆転、復活としての社会帝国主義の存在。

③ 労働者、人民の根底的経済的解放をめざす世界共産主義（社会主義）の同時革命、その過渡にして手段たる世界プロ独、その形態としての世界革命戦争、その手段・陣型としての世界党——世界赤軍——世界革命戦線。

以上三つのテーゼと三ブロック・テーゼ。

④ トロツキー、スターリンの非マルクス性、小ブル性と限界性、マルクス・レーニン主義の過渡期世界での最初の継承・発展

者としての毛沢東思想、スターリン主義の社会帝国主義への転化、反スタロツキズムと毛沢東教条主義の止揚、等を結論する過渡期世界の歴史と国際共産主義運動の総括。

③ 日本（世界）革命の基本綱領（戦略―陣型）

④ 現在は世界革命戦争の対峙期に包摂されていること。

⑤ 日帝は主に米帝と連携し、国際・国内反革命、侵略・抑圧（なし崩しファシズム）を展開せんとしていること。

日本資本主義の歴史と特質、諸階級と権力・支配構造。

⑥ 反帝反米の日本（世界）社会主義革命の性格規定とその綱領。反米愛国路線とトロツキ―式「社会主義革命」論の克服。プロ革命戦争としての攻撃的蜂起とその発展段階・現在の位置。その手段としての、反帝反米の社会主義統一戦線と日本（世界）赤軍の建設（三種の）。

⑦ 社会帝国主義―日共の打倒、社民の解体、反スタロツキズムと毛教条派の変革・止揚を結論する、日本資本主義の歴史と革命闘争の総括。

④ 日本（世界）プロ党建設のテーゼ

① 基本原則路線、過渡期世界革命路線、日本革命の基本綱領、を総綱とし、また社会帝国主義―日共の打倒、社民の解体、反スタ・トロツキズムと日本型毛沢東（教条）主義を変革・止揚すること。

② プロレタリア階級の前衛党であること。

③ 党員の資格として、革命者であること、二名の推薦と上

性を克服し、全ゆる方面での思想・理論闘争、党派闘争を闘い、党建設を前進させること。

③ 中央軍―地方軍・民兵軍で構成される建軍路線を堅持し、プロ革命戦争の反帝反米の攻撃的蜂起の陣型を促進する。

④ 第三世界人民とその革命的指導部たる諸組織や中・朝・ベ党を支持し、全世界人民と団結し、世界党―世界赤軍―世界革命戦線の陣型を打ち固めてゆくこと。

以上、再構成されるべき過渡期世界論の大雑把な構成・骨格・基本観点をメモしておきました。

同志、読者諸氏は、この内容観点よりも――これは厳密さを欠くので――、その構成に注意を払って、この枠組の中で、内容をより精密にしてゆくようにしたいと考える。

以上①―④の如き過渡期世界の革命路線をガッチリ打ち固め、意志一致すること、このことが、まずもって必要なのです。①―④の内容は、64からみれば――相対的にはプロレタリア的、マルクス主義的のだが――、その非マルクス主義の小ブル的残滓が払拭され、ML主義の路線にしっかりとち、また国際共産主義の総括や、日本革命の綱領や党建設のテーゼなどが付け加わり、発展豊富化されてゆくよう志向されるべきです。この中には、過渡期世界論の中に思想問題を組み入れ、正しいマルクス主義の認識路線を組み入れたら、又、労働の中で特殊な位置を占める性活動に対しても、原則

級の承認、ML主義を学び、毛思想を学び、日本と世界のプロ人民の利益をはかり、団結すること、個人的野心家、陰謀家、二面派をとにも警戒し、大衆と相談すること、批判と自己批判を勇敢におこなうこと、^{etc.}。組織原則としての民主集中、批判と自己批判の作風、個人は組織に従い、少数は多数に従い、下級は上級に従い、全党は中央に従う。党の中央組織、基本組織について、地方組織について。

④ 地下化、非公然化、国際化等を前提にして、合法、公然面を拡大すること。政治と軍事を統一する組織内陣型、当面黨員で組織された中央軍の建設、本来的には中央軍の中に党細胞をつくること。

以上の如く特徴的に概括される（特徴点よりも、構成にこそ注意、特徴点はより厳密にしないとまだ駄目）。

⑤ これに現在の政策を付け加える（四大政策）。

⑦ 七〇年代革命勢力を中心とするプロ・農民の全ゆる闘いを、支持支援し、これを正しく分析し正しい政策を打出し、これと原則的基本路線・過渡期世界の革命路線・日本革命の綱領・党建設のテーゼで構成される戦略的総路線の体系と結合させ、この体系の下に包摂すること、召還主義と大衆追従主義の排除と、このような意味での共産主義と労働運動の結合、の推進。

⑧ 帝国主義、日共―社会帝国主義、革マル―反革命、や社民と闘い、また反スタ・トロツキズムの毛教条主義の小ブル

的立場を組み入れる構造が追求され、更に、それ故に過渡期世界論を資本主義批判でもって再構成するという、課題も組み入れなければなりません。

このような方向性での過渡期世界論の防衛とその再構成・発展（清算や教条ではなく）が我々に問われていること。

これは決つて、国際・国内情勢分析等現状分析のレベルとは全く次元が違うわけです。

4

八木同志等の清算主義には小ブル思想主義の講壇的マルクス主義は強調されるが、これが現代世界把握の批判・変革するものとしては把えきれず、革命路線へと一向に物質化されないこと。従つて、組織問題は「堅忍の党」「打ち鍛える」とかの無内容な道徳主義のカケ声に終り、結局は、講壇マルクス主義十現状分析のサークル主義の大衆運動主義を一步も出ていない（それも右翼的な）。我々は、当面の国際情勢を正しく分析し、七〇年代革命勢力を中心とする当面のプロ人民の多種多様な闘争を支持し、その闘いの方向性を打ち出し、これを四大政策にし、まとめあげ、これを過渡期世界の革命路線とガッチリ結合させてゆかなければなりません。この両方の作業のどちらか一方がかけても、階級闘争は正しく発展しないわけです。このような問題として、共産主義と労働運動の結合、個別闘争の革命的展開の問題があるのです。この点に於て、赤報派の如き召還主義や、清算派や烽火派の如き大

衆追随主義に陥ち込んでほらないのです。

5

以上の同盟の現状を踏まえた上で、清算主義のメンシェビキの臨終路線の批判点を要約しておきます。

① ブルジョア供の「超階級の極限人間論の飢狼共食論」に腰を抜かし、これに屈服し、「共産主義化」の疎外化形態のみをみて、これを本質的に小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への止揚の挫折として把えようとしなさい。

② 反動的ブルジョア思想—整風運動を具体的な情勢や具体的な路線問題の中に求めず、「共産主義化」に於ける諸論点を具体的に分析せず、これ等から切り離された抽象的一般的な「小ブル性」に求め、赤軍派一般の「小ブル性一般」に拡張し、更に赤軍派の立脚点たる「第4」に求め、赤軍派の全理論と全行動を否定してゆくこと。

③ 従って、小ブル性は、ブル性以上に罪悪・敵視され、諸悪の根源に昇められてゆき、「小ブル性が一かからでもあれば武闘はすべきでない」小ブル性は完全には克服されないから武闘はすべきでない」の如き「観念論の絶対論の見地」に立ち、小ブル性を唯物論の相対論の見地にたち、具体的情況の具体的分析の中で小ブル性を分析・批判・克服せず、小ブル性と名のつくものは全て否定し、「左翼的」「革命的」「戦闘的」と名のつく小ブル性に関して、これが全て「反革命」に結びつくと考え、否定する、失敗を恐れて何もした

い消極主義、日和見主義。小ブル革命主義の中から、その戦闘性、革命性、急進性を通して「一が分れて二となり」プロ革命路線が生み出され、小ブル革命主義が止揚されてゆく側面をみず、小ブル革命主義の反動化した側面のみをみ、闘う前から敗北することが約束されていたかの如く「到達点だ」「必然的帰縮だ」と観念形而上の分析をおこなうこと。

④ 以上①②③の如き、連赤敗北の総括の立場・方法・観点故に、思想を、マルクス主義の唯物弁証法としての認識路線、史的唯物論、資本主義批判—科学的共産主義、過渡期世界の革命路線としての三つのテーゼ、日本革命の綱領（戦略・陣型）、四大政策等として、包括的に把えきれず、思想を神秘化し、天賦論で把えたりし、小ブル思想主義になり、又その変形としてのマルクス主義のスコラの解釈憶え込みとしての講壇マルクス主義に陥ち込むこと。

⑤ 過渡期世界論に対して、「具体的、歴史的に分析せず、史的唯物論を原理的に体系化し、階級闘争のイデオロギ—闘争形態組織形態等をも一つの原理で把えようとしている。史的観念論で自然成論」等の批判をしているが、これは、八木同志が、「過渡期世界論」を藤本の「革命の哲学」と自己の見識でもって、勝手に思い違いして把えている批判であり、———それ故、八木同志執筆の第四章の批判にあてはまる———一章—三章には全くあてはまらない。「過渡期世界論」を「革命の哲学」に矮小化するが故に、「主体的唯物論の一変種だ」など

のピンボケなデタラメな批判をやることになること。八木同志が何故に「革命の哲学」の批判にこだわっていたかの秘密はとりもなおさず、八木同志が六九年の段階まで藤本を批判できていず、それを卑劣にも私の批判にかこつけてやっていったこと、ここに秘密があること。又、「法則発見—適用」は正しいし、歴史を「自然史過程として法則」としてマルクス主義に把えるのは全く正しいこと。

⑥ 「マルクス・レーニン主義の立場・方法・観念にたった科学的社会主義ではない」という批判は、対象—資本主義の批判をもって科学的社会主義の路線を導く方法をとっており、不十分なながらも資本主義批判をおこなっていること。

むしろ、「労働力商品所有者—私の商品所有者」という分野に代表されるブルジョアの認識をおこなっているのは、第四章の八木同志の文章であり、また序章第5では、榎原修正主義経済学に立脚し、剰余価値の生産—賃金奴隷性批判をおこなわず、「労働と所有の分離」や「死んだ労働の生きた労働の交換と前者への吸収」「処分権の問題」等資本論以前の「経済学批判要綱」の哲学的レベルに終っていること、この点でも八木同志は、自己の誤ちを私にナスリつけていること。

⑦ 資本主義生産—剰余価値の人狼的追求（賃金奴隷制）の国際的・国内的発展が、無政府的、暴力的国際競争戦を生み出し、生産の社会化・国際化を生み出し、他方では、プロレタリア人民に矛盾を転化することを通して、世界共産主義

の客観的・経済的基礎及びこれを実現するプロ世界革命と世界プロレタリアートを形成せしめること、このことを、「資本主義生産—ブルジョア民族国家とブルの一国性とプロの世界性の関係構造」として提出した第4を、「プロの世界市場からのみプロの世界性を説く」とかの歪曲した批判をやり、「生来世界性がプロに備わっているかの如く考える」などの間違った批判をすることによって、逆に一国主義に転落していること。八木同志は、「資本制生産とブルジョア民族国家の関連を述べてのブルとプロの関係やプロ世界革命の不可避性」等の問題が統一的に把えられていず、バラバラになっていること。

⑧ 世界把握（批判）のマルクス・レーニン主義の方法たる、（弁証法的唯物論）—史的唯物論—資本主義批判—現状分析の三層分析の方法を「史的唯物論の体系化だ」と称し世界を立体的重層的に把えきれず、歴史記述主義の現状分析にのみ一面化・解消すること。

⑨ 「世界武装プロ」の規定をロシア革命以降の具体的なプロの世界史的階級闘争、プロレタリアートの成熟段階規定、世界史的階級関係の変化の規定、或いは、資本主義から共産主義へのプロ共産主義革命としての過渡期世界の本質の規定、その具体的形態としての世界プロ独運動としての世界革命戦争規定、等として把えきれずこれらの基本的規定を否定し、「革命の哲学」の「階級形成論」の視野でのみ把えたり、単

なる現状分析の表現にとどまり、あげくの果ては「コスモポリタニズムだ」と非難し、これにこめられたプロレタリア国際主義の精神や「世界同時革命」の意義は否定されてゆくこと。「コスモポリタニズム批判」を持ち出し、自己の一国主義を正当化すること。

⑩ 「逆制約の能動のテーゼは正確な反映ではない」と称して、現帝の分析がこれから導かれる、民族解放・社会主義革命―前段階決戦のプロ社会主義革命戦争―根拠地化と継続革命、社帝批判の三ブロック・テーゼ及び、この世界的な有機的統一としての世界革命戦争性を否定すること。とくに、前段階決戦のプロ社会主義革命戦争の路線―陣型の否定を導くこと。

⑪ 世界共産主義、世界プロ独、の目的と手段、世界党―世界赤軍―世界統一戦線の陣型、この有機的関連性や個々のテーゼを否定すること。

⑫ 以上の如き、M.L.主義の過渡期世界の革命路線の不在故に、スタ・トロ論争やスターリン評価、毛沢東思想や中ソ論争が正しく扱えられず、従って毛沢東思想をマルクス・レーニン主義の過渡期世界での発展として扱えられず、毛沢東思想と反スタ・トロツキズムの間を浮動すること。

⑬ 上述した日本革命の綱領や党建設のテーゼが獲得されず、反スタ・トロツキズムの社会主義路線に近く建軍抜きの特定期主義の受動的蜂起主義に象徴される日和見路線、無内容

難場所の性格が強く、従って、彼等の団結は革命的左翼の批判と変質の促進が最大の任務となり、その為、他党派の「赤軍派」への批判に対して、これを防衛するのは思いもよらず、逆にこれを利用する対応すらとったこと、等の最大の特徴をもつこと。

実践的には、確固とした革命路線をもち得ていず、「小ブル思想主義の講壇マルクス主義十右翼経済主義の大衆運動主義」故、全く結集力をもたず、困り込みのサークルの域を出ず、それを「堅忍の党建設」「打ち鍛えてゆく」とか称して、道徳主義のスローガンをもってゴマかしてしまふこと。せつかくの「部落問題」「民族問題」にしても、路線抜きの小ブル思想主義からの取り組み故、何んら現状に切り込み得ない。かかる路線の特質故、この破産と分解は必至であり、現に矛盾の大爆発の過程にいたっていること。

⑭ 八木同志は百パーセント「マルクス・レーニン主義者」の如く振舞っているが、マルクス・レーニン主義の講壇で非マルクス主義の小ブル民族主義者の仮面がかくされているのではないかと危惧するし、真にマルクス・レーニン主義を血と肉にしている、という点是非常に疑問だ（毛沢東は、インテリのマルクス・レーニンの憶え込み主義者を教条主義として批判している）。

フォイルエバツハ流の観照主義、表相主義、現象の網羅的歴史的記述はあるが、その内的法則的分析力は殆どないこと。

な「堅忍不拔の党」「打ち鍛えてゆく党」等の道徳主義。

⑭ 四大政策の欠除。

⑮ 赤軍派の歴史的实践を、弁証法的唯物論、史的唯物論の見地にたち具体的に分析せず、「一が分れて二となる」見地、「矛盾論」の見地等で分析せず、観念論形而上学の「到達点論」や「帰結論」などにみられる、清算的否定の塑求論でおこなうこと。また講壇マルクス主義を視点にして、結果解釈でおこなうこと。

ここから、「赤軍派は生れるべきでなかった」「大言壮語はあつてもリアリズムはない」「小ブル民族主義・利用主義・コスモポリタニズム」「黒ヘル諸君は浮浪人的行動」「馬鹿から白痴にいたる過程」「客観的諸条件を飛び越えた闘い」「コスモポリタニズム」「単純な反権力主義」「軍事力学」「無政府主義」等の革マルや民青まがいのレッテルを動員すること。

⑯ 臨終路線は、連赤敗北の責任を「赤軍派」におしつけて、全面清算をはかり、革命勢力に「自分が関係ない」とアリバイ証明をはかり、非難をかわし、同情を得んとしたわけだが、それが無責任な「組織解散―新規捲き直し」の「逃」路線の「いい子ちゃん」路線であることが判明する中で、ヒンシュクと非難を浴び、解散も出来ず、自己防衛のために開き直りを組織的に表現するものとして、臨終があつたこと、従つて臨終の本質は保釈安穩集団の避難場所・右翼墮落分子の避

歴史記述主義のブルジョア実証主義だが、唯物弁証法なのか？彼の文章に体系性や論理性がなく、従って真の意味での論理性がないこと、現状分析にのみ解消されるのは何故か？これと相互関係にたつて、理論が行動の導きになるのではなく、「潮流に逆えず」、その逆に情況への埋没の、理論的というより情況主義的な反映になっていること。唯物論の革命的能動的な反映論ではなく、その反対の、現実の弁証論におうように陥ちいる構造、或いは折衷主義に。

このような認識路線の連赤直後の典型的表明―「身を削りつつ闘ったが報いられなかつた↓挫折だ」「赤軍派の政治生命は終わった 赤軍派は解散せよ」「連合ブンドに自己批判すべきだ」「七・六の後、実は関西に帰ろうと思つていた」等の「いい子ちゃん路線」の狂態振り。このような「潮流に逆えない」無定見さは、その時に始まつたものではないが、余り古いことを出さなくても、第八回大会では、ブンド主流派（左派）を仏派の観点にたつてアレコレ批判し、その次に赤軍派に結集し、6/4を共同執筆したかと思えば、六九年前峰後、連合ブンドに媚を売る文章を書き、非難にあらやゲリラ戦争路線の文章を何んの自己批判もせず、書き―「党の軍化、軍の党化」や「ゲリラ戦争路線」は、私の接禁中もあつて、菩薩グループが提起したのだが、「前衛の軍人化」「軍の中の党」は私の専売特許の如く批判している。勿論私は、防衛するつもりですし、幾ら批判されても一向に構わな

いが——、保釈が近づけばナリを潜め、「堅要の任務」と称して蜂起主義に後退し、連赤が発生するや「赤軍派にコンプレックスを感じていて、ブハーリン的資質だったが故に、引つ張られてきた」と笑うべき子供扱い天命論の天才論のいい訳をやり、あげくの果てには「赤軍派を埋葬する」とかオッサナル、全くのアッチヘフラフラ、こつちヘフラフラのこの中に、どこに、首尾一貫した、指導者としての指導性があるのか！

八木君がマルクス・レーニン主義者としてあるのは、観念的文章の中の世界でしかなく、階級の実践の中ではないのではないか？”吉本の自立論+サルトルの「アンガージュ」のミックスみたいなものでなりたつ、”小ブルインテリの宿業論“的獨特の小ブル観に行動の源泉があるのではないか？

(1) 序論

目次

第一章	「過渡期世界論」を防衛し、反赤軍派キャンペーンを撃滅しよう！	2
第二章	諸「過渡期世界論」批判と連合フロント「12・18路線」について	3
第三章	「反スタ」にかこつけてマルクス主義経済学を修正する榎原君の経済学を批判する	5
第四章	小ブル傲慢主義・空論主義の反スタ・トロツキズムからの「過渡期世界論批判」を反批判す	15
第五章	八木同志等清算主義のメンシエビキの黒い「臨総パンフ」を批判す	33

第一章 『過渡期世界論』を防衛し、反赤軍派
キャンペーンを撃滅しよう。

「一向過渡期世界論」の継承、防衛、発展は、同盟の再建、統一に於て焦眉の理論的課題です。又この課題は別の側面に於て、理論、綱領面の方面での銃撃戦と「清」として帰結点をみた、運赤敗北の総括の役割も果たすこととなります。

何故ならば、同盟赤軍派が一連の「一向過渡期世界論」を立脚点にして、これを導きの糸としてこれまで斗ってきたこと、いわば同盟赤軍派の綱領上の立場・方法・観点を「一向過渡期世界論」(今后、「過渡期世界論」という用語を使用するときには、断りが無い限り、「一向過渡期世界論」を意味すると了解しておいてください。)が一定程度表現してきたからに他なりません。それ故にこそ、同盟の再建・統一に際して、この「過渡期世界論」の正しい総括継承・防衛・発展の立場・方法・観点が要求されるのは当然のことです。

ところで「過渡期世界論」が同盟にとってどのような要衝的位置を占めているが故にこそ、日米両帝国主義・資本家階級の人民内部の日和見主義的・修正主義的分子が我々のこれまでの斗いに対して、実践面で攻撃をかけてくるにとどまらず、これに満足せず、内側から理論面に於てこの「過渡期世界論」にアレコレの、同様の誹謗・中傷を必死で集中的に投げかけ、同盟の解体を促進せんと血道をあげたのはけだし当然な事です。

にせよこのような清算主義の諸傾向は、プロ人民や同盟を攪乱させる役割を担ったとしてもなら実践的支力を創造力をもつていず、せいぜい反赤軍派キャンペーンを一生懸命「学習」して同盟内に持ち込むのが関の山です。

かくして我々が第二回大会の成功を当面の組織目標として同盟再建と連赤総括の核心たる「過渡期世界論」の総括防衛・継承・発展とは、とりもなおさず反赤軍派キャンペーンの種類たる理論的攻撃を反批判し撃滅することであり、かつこれを成果にして「過渡期世界論」を発展させることを意味するのも当然なわけです。

第二章 諸『過渡期世界論』批判の特徴と連合 ブンド『12・18路線』について

「過渡期世界論」に関する批判や論評は沢山あります。それらの批判や論評の大半は赤軍派の理論的發展過程を分析して、事実に基づかない憶測に基づいたものであったり、自分の土俵に導くために我田引水的に都合のいいところだけを引っぱり出して批判するものであったり、ヒドイものに至っては我々の思想を密輸入しておきながら、逆に、赤軍派は、「この主張がない」として批判するようなものです。

或いは「164」をその前後の理論的發展過程の脈絡と切り離して特殊に取り出して、私の第二次ブンド時代の主張は評価、継承するが、164は駄目だ」といった具合に政治主義的

そしてこの反赤軍派キャンペーンに影響されて、同盟内にも極く一部の「過渡期世界論」を清算する清算主義の日和見主義的・修正主義的傾向が発生してきたこともまた当然なわけ
です。

右翼日和見主義の清算主義は、赤軍派の実践上の斗いを清算すると同時に、その行為のやましきから解放され自己正当化するための良心の抛り所を求めめるためにこの反赤軍派キャンペーンに援護を求めて、「過渡期世界論」を清算し赤軍派のこれまでの全ての実践、全ての理論を一切合財洗い流して、同盟赤軍派を同盟赤軍派とは似ても似つかぬメンシエウイキ的な「サークルに、変質・再編せんとしているわけです。

この反動的陰謀の中心に「パンフ164」への誹謗中傷の攻撃を据えていっているのです。

又、このような右翼日和見主義の清算主義とは性質が違うのだが、つまりこれまでの赤軍派の斗いを正しいと肯定し、理論、路線面も基本的には肯定、止揚せんとしつつも、「過渡期世界論」の本質的な意義について未熟な理解しかもたず、又、小ブル反スタ主義のトロッキズムに対して正し164立場を礎けず、動揺し、「過渡期世界論」164の防衛に確信を持ち切れず、小ブル反スタ主義の批判に武装解除している一人か二人位の人もいます。

これは中心的傾向ではないにせよ、やはり一種の理論上の清算主義であることを我々は見究めておくべきです。いずれ

対応を取る人もいます。いずれにせよ、さしたる内容も経験も実践もない輩が、我々が獄中にあることをいいことにして、したり顔をして同盟を引き合いに出し、コケにして、自己のどうしようもない商標を売りさばかんとする事に対して我々が怒りを表明しておくのも、いくらかの意味を持つことでしょう。

このような誹謗・中傷を旨とする批判に対しては、読者が正当な客観的態度・判断を維持し得るよう私達は「過渡期世界論」に関連する必要最低限度の文献は復刻すべき必要を感じます。このような観点に立った場合、「革戦派」グループの諸君が、「同盟機関紙総特集」を刊行してくれたことは意義多いことです。又、この総特集を補完する意味あいでは、「164」12・18路線と我々」(烽火五号掲載・六七年一月)・「8・3論文」(第二次ブンド・六八年八月)を復

刻します。少なくともこのような復刻作業をもって諸君は一定程度、反赤軍派キャンペーンや清算主義の軽重浮薄性を感じとられるものと思えます。是非とも読者はこれらの復刻された文献を検討し、同盟の政治的歴史を理解し、論争への正しい前提を獲得されるよう要望するものです。

「過渡期世界論」への批判や意見は以下大雑把に分類して七つ位あります。

その第一は戦旗派・日向君や最近の千葉君の如き純正小ブル反スタトロッキズムの立場からの批判です。

第二は中間的小ブル反スタトロッキズムの連合ブンドのいわゆる十二・十八路線（共産主義十四・十五号掲載）その特殊な一流としての赤報派の批判です。

その第三は同盟右翼清算派の臨総パンフに代表される第二の見解を部分的には手直ししつつも、しかし全体的には、ほぼ直輸入した類切見解です。

その第四は小ブル教条派のその一部の反スタ主義の見解、これも基調は第二の見解と同一のものです。この特徴は、実践上は反清算主義で「左」からの清算主義の傾向を持っていることです。

第五は、これまでの四つの見解の如き小ブル反スタトロッキズムの観点からとは違って、その意味で健康な性格を有した「査証」六号の「デイルヤシン作戦勝利万歳」のVZ 58の来見論文や、アラブ赤軍の「新左翼」紙や「序章」誌に投稿された見解です。

第六は、一〇四の反スタトロッキズムの見解に反発する余り毛沢東思想に溶解し、「過渡期世界論」を発展させたと思われるような見解です。

第七に、仏派の諸君は我々に何のことわりもなく「過渡期世界論」を継承・発展させるとか、「世界共産党史観」と称して「われわれの過渡期世界論」を小ブル反スタ主義に矮小化しているが、我々に対しては赤報派の諸君と同じ「毛沢東思想への屈服」というレッテルをはるだけにとどまっている。その他

さて、我々の「過渡期世界論」の継承・発展の対象に「12・18路線」と赤報派にしほり、且つこれとの関連でその他の反批判を進めてゆく方法を取ることに今一度整理し、まとめてみる。

その第一は、「12・18路線」に関して我々は「論叢」1で概略的位置付けをやり終えていたわけですが、同盟の影響力に解体されることを恐れ「スタ・反スタマルクス主義の克服」と称して我々にスターリン主義のレッテルを貼り、中間的反スタマルクス主義の域にとどまり、69年以来、一貫して日和見主義であり又、武装斗争から召換するために党派斗争至上主義であつたが、資本主義批判を軸にして反スタマルクス主義批判の志向と一定の内容を提示したが故に一定の歴史的意義をもつていたこと、それ故に同盟に一定の影響をおよぼしたこと。

その第二は、「一向過渡期世界論」を継承すると称しつつも、実際は「資本主義批判」党を一般的に強調し、また、「スタ・反スタマルクス主義の克服」と称しつつこれを「スターリン主義で無政府主義と中傷して7・6以後の赤軍派の闘いを承認せず」「過渡期世界論」の清算を行なっているが故に、「過渡期世界論」を継承しているかの如き幻想を与えること。

その第三は、「過渡期世界論」の批判がその実質的内容は、反スタトロッキズム——反スタマルクス主義の内容に過ぎないにもかかわらず、それが一方で「反スタマルクス主義批判」の看板掲げているが故に陰蔽されてしまい、又批判者達が往年の第二次ブンド時代の同志達であり、そのくせ決定的時点で脱落していった人々であり、我々の事を熟知しているが故

烽火派の諸君や、佐野君などもいるわけだが、仏派、烽火派、佐野君など含めて基本的には、第二の「12・18路線」に基づく「過渡期世界論」の枠内にある見解と考へても差し支えない。

さて、このような批判や意見が概観されるわけですが、同盟のごれまでの政治的・理論的發展の歴史からして①④の反スタトロッキズム・反スタマルクス主義の見解とは徹底して論争し、粉碎しなければならぬ。⑤や⑥の見解に対しては①④への対応とは違って、「過渡期世界論」を共に止揚する方向でもって、この次元で徹底して論争する対応をすればいいのです。かくて、③・④の見解は基本的には①②の見解に影響されている以上、①②の批判は至上命令的です。しかも①の純正反スタトロッキズム・反スタマルクス主義の見解は、一定の批判的伝統がブンド系左翼の中に定着している以上、それ程力を注ぐ必要は無いわけだが、②の12・18路線に関しては簡単に看過するわけにはいきません。

以上からして我々の課題たる「過渡期世界論の防衛・継承・発展」とは、とりもなおさずその最大の代表格的批判者たる七〇年末の連合ブンドの「12・18路線」とその特殊一流たる赤報派への批判に当面の主力が集中されるのは当然のことです。そしてこの批判との関連で清算派等の割拠グループの意見を批判してゆくことです。

に、批判がベテンにも拘らず詳細で現実性を持っているかの如く映り、ダメなやうなこと。

以上の三点からして「12・18路線」による過渡期世界論の批判は一定の歴史的意義を持ち、批判の代表的格的位置を占めている。（おそらく、「共産主義」14号の「わが同盟の立脚点」の執筆者は鈴木君か旭凡君だろう）

第四には、この「12・18路線」を榎原式に再編しつつ、赤報派が連赤敗北につけこんで、小黒寛よろしく「革命戦争派」を自称して、「過渡期世界論」を批判し、反赤軍・キャンペーンに血道をあげ、のさばりかえり、単なるサロンマルキストの日和見主義分子の正体が覆いかくされ一定の幻想が生まれていること。かかる状態に規定されて、同盟内外に一定の清算主義の基盤が醸成されていること。

第五に、それ故にこそこれらの礎石たる「12・18路線」を今一度批判の狙上であげ、全面的に批判的検討を加えつつ、臨総パンフを初めとする他の種々の批判、意見の検討に入る順序を取った方が賢明であること、等の諸点です。

第三章 「反スタ」にかこつけてマルクス主義経済学を修正する榎原君の経済学を批判する連合ブンドの「12・18路線」は「共産主義」14・15号に表現されています。この論題に関する限りで我々が検討しておかねばならないのは、主要には榎原君、旭凡君の

宇野批判に代表される反スタマルクス主義と両君の経済学です。第二は十四号に展開された「我が同盟の立脚点」を構成する、「我が同盟の過渡期世界論総括」「世界プロレタリア独裁の綱領諸問題」の二つの論文です。我々の批判に関して、彼らは前者を強調し、反スタマルクス主義の批判がないとか、自らの中間的反スタマルクス主義故に黒田理論を密輸入して「スターリン主義」だとかのデタラメな批判をおこなひ、これを主張点にして、「世界プロ独」の主張を強調しつつも結局は過渡期世界論のエキスたる、④ 階級斗争の世界史的攻撃段階（つまり、世界革命戦争の形態をもつ世界プロ独運動の段階）——世界武装プロへの到達のテーゼ、⑤ 現代帝国主義の恒常的な国内的、国際的侵略抑圧反革命戦争となし崩しファシズムの階級危機という特質と、これに規定された発展途上国の民族解放——社会主義、先進国の前段階決戦Ⅱ攻撃的階級斗争Ⅱプロ社会主義革命戦争、プロ国家の根拠地化と共産主義継続革命の必然性と其の攻撃性能動性及びそしてこの三ブロック階級斗争の結合としての世界性、攻撃性等として位置付けられる逆制約の能動のテーゼ。⑥ 過渡期世界のかかる特質を止揚するものとしての世界プロ共産主義革命（世界同時革命）——世界プロ独—世界党—世界赤軍世界革命戦線の革命路線のテーゼ、という三つのテーゼを放棄、清算していっています。

従ってこの二つの批判Ⅱ検討を踏まえて、最近の赤報派グに、その理論は、革命の実践抜き単なる「理論」であり、革マル的な「他党派解体」が自己目的化された「為にする理論」であったこと。

第三に、それ故に資本主義批判という決定的に重要な課題に接近しつつも、その内容は階級斗争に対決する思想や綱領の獲得とは全く無縁であり、思想的には彼らの日頃の小ブル的傲慢さに鮮明なように小ブル性を払拭していなかったこと。この革マル的な召喚主義の「党派解体斗争」は赤報派の中に現在受け継がれているわけで、我々は現在の赤報派の諸君が七〇年末の連合ブンドのB斗争の主導勢力ではなかったこと——彼らは自らが斗ったの如きポーズをとっているが、むしろ中心は神奈川左派を中心とするRGの戦士達が斗ったのであること——と合わせて、第二次ブンド以来赤軍派フラクに顔を出したりひっこめたりして動揺していた榎原君の思想性・政治性がなら変革されていないことを残念ながら確認しておく必要があります。これらのことは、清算派の言う「赤軍派発生そのものがあやまり」なる破廉恥極まる反動的主張のデマを暴く点でもしっかりと確認されていなければなりません。

① 反スタマルクス主義者——榎原君

榎原君が宇野経済学等反スタマルクス主義の枠を突破できず、基本的には反スタマルクス主義の手直しに終わっていること、単なる中間的な反スタマルクス主義でしかないことは、

ループの批判をおこなえばいいわけです。この検討に際しての我々の批判的立場を記しておきますと以下です。

第一に、彼らは意識的に「赤軍派は党建設の観点がない」とかのデマを流し、彼らの現在を「党」を赤軍派に對置した成果の如く述べるわけですが、これは嘘です。赤軍派は党建設を重視しなかったわけではない。これは我々の論文を参照すれば一目瞭然です。又、彼らの党は本質的には、党の革命を通じたプロ党建設の斗い、前段階武装蜂起Ⅱ革命戦争を日和る為の主張でしかなく、彼らの結束力は全く皆無で、最初は反赤軍派で日向や叛旗を含めて野合し、その後は関西ブンド・神奈川左派・仏派の無原則的な野合、そしてこの第二次連合の三分解と関西ブンドの烽火派と赤報派への分裂をおこない、時がたてばたつ程、四分五裂し櫛の刃が抜けるようにコボしていった始末を、何が「赤軍派に党を對置した成果」と誇れるだろうか。全く、馬鹿も休み休みにいたまえた。7・6の第二次ブンド分解と赤軍派の結成は歴史の必然性であり、我々の党建設の斗いは相対的に一番正しかったのです。第二次連合派の「12・8路線」を基本的には、第二次ブンドⅡ7・6以来の中間派の日和見主義と動揺の路線上に生まれたものであり、根本的に小ブル日和見主義と刻印されているのです。

第二は、彼らにあっての「党」主張は、実際は武斗や大衆運動からの召喚の日和見主義を正当化するものであったが故

彼が宇野や黒田哲学に対して「俗流的な低俗な虚偽のイデオロギーということではなく、まさしく数々ある虚偽のイデオロギーということではなく、種々ある高邁なイデオロギーの二大支柱として敬意の念を持って……見抜いてほしい」（「共産主義」一四号、一四六頁）といっているように、彼はブルジョア御用理論家たる宇野、黒田を驚くべきことに「高邁なイデオロギー」として「敬意の念を持って」遇しているわけだ。

「資本論以降、宇野経済学と梯井哲学がその個々の内容に於て新しい問題を提起している」（同書一四七頁）と考えているに至っては、榎原君が反スタの名分に眩惑されてマルクス主義経済学の境界線を全く見失ってしまっているのは明らかなのです。否、彼が関西ブンドの中にまぎれこんできた最も異質な小ブル個人主義の反スタマルクス主義者であったことを表明しているわけだ。

その他「①価値法則と剰余価値法則、②資本主義社会の生成・発展・消滅の法則性、③生産力と生産関係の矛盾等の対決点で、宇野経済学はスターリン主義を論破した。」一休どこを、どのように論破したのか！

スターリン主義は「史的唯物論を科学として措定しており、その結果、資本主義社会の生成・発展・消滅とか、生産力と生産関係の矛盾とか、科学のみによって解決されない諸課題をも科学の課題として提出した」から「宇野はスターリン

主義を論破した」ことになるらしいが……。

我々はスターリンの諸論文をそのML主義の俗流化、教条化、一部の修正故に批判的立場をとるが、だからといって反スタに名を借りて「史的唯物論は科学ではない」とか、「生産力と生産関係の矛盾は科学では説明されない」とかのマルクス主義を修正する意見を許容することはできない。君はマルクス主義を科学以外の何と考えているのか、驚くべき不可知論の神秘主義！

② 剰余価値法則、窮乏化法則の否定——ブルジョア国独資論に影響されて「ポロポロ窮乏化」を否定する榎原君

榎原君のマルクス主義の最大の決定的修正点は以下です。「資本の生産過程の内的作用を剰余価値の生産の面でのみ捉えて『剰余価値法則』なるものをデッチ上げ、そのことによって資本の生産過程の内的作用の分析を単に剰余労働の搾取の問題に至少化する」(前掲書一五二頁)

資本主義を搾取の仕組みに至少化させ、その結果革命論の根拠を労働者階級の窮乏化に求めざるを得ない」(一五二頁)「価値法則に対して、剰余価値法則なるものを措定し、それによって資本の生産過程を分析することによってポロポロ窮乏化論に陥ち入っている」(一五八頁)

榎原君は反スタマルクス主義の色眼鏡をかけているが故に、マルクス主義が踏みこえてはならない重要な一線をやすやす

と踏みこえてしまったわけです。

つまり、第一はマルクス主義における最大の党派性たる剰余価値学説(剰余価値法則ともいっていい)を完全に否定してしまっていること。第二はマルクス主義経済学の重要な党派性たる窮乏化法則(絶対的、相対的な)を否定してしまつたこと。第三は、価値法則と剰余価値法則の同一性と差異の関連がわからず、宇野の主張と同じように剰余価値の法則を価値法則に解消し超階級化していること。この誤りが、スターリンの「商品社会—価値法則、産業資本主義——剰余価値法則、帝国主義——最大限利潤の法則」(ソ連邦に於る経済的諸問題)の批判のあまり——この特徴付けは基本的には正しいのだが、スターリンはこれでもって社会主義下の価値法則を規定的存在と捉え、ニセ社会主義を正当化しようとした点が問題なのだ——宇野の修正主義に屈服していることから発生しているのは明白である。

第四は、宇野達はスターリンを右から、ブルジョア御用理論家の立場で批判したのですが、他方で宇野の悪業は現代帝国主義の国独資の政策をブルジョア的に美化し、「マルクスの窮乏化法則は古くさくなって間違っている」と吹聴してまわり、恐慌や窮乏化の不可避性を否定し、労働者階級を武装解除してきたわけですが、我が榎原君はこの陰謀が見破れず「資本主義のポロポロ貧困化」を否定しているわけなのです。こんな主張は日帝の相対的安定期では一定のゴマカシ力を持つていたが、資本主義の危機が激化している現在では、マルクスの命題はますます正しさを証明しつつあるのです。

第一の点に関して敷衍してゆけば、一体榎原君は資本論の最大の成果をどここの点に見ているのか、剰余価値学説の展開ではないのか、マルクスは何故「剰余価値学説史」を書いたのかね。レーニンがいたるところで「搾取理論」とか「搾取制度」とか使用しているのをどう考えるのかね。

「資本の生産過程の内的作用を剰余価値の生産の面で捉える」ことが何故に間違いなのか。又、剰余労働の搾取の問題に解消して何故悪いのか。

ここでは、榎原君の観点では「資本の生産過程の内的作用を、ここにおかれている労働の状態を分析していない」(前掲書、一五一頁)ことになるらしいが——確かにスターリン経済学や日共経済学にはそのような側面がなきにしもあらずだが、これは純粋経済学上の問題と、その政治経済的な「労働の状態—労働制度」を混同するものです。確かに科学的に措定される経済学上の剰余価値の生産の面と、その政治的・経済的側面たる労働の状態・労働様式・労働制度(資本の専制と賃金奴隷労働、賃金奴隷制度)とは不可分一体で、一面では同一の事柄である。だが何の連関もなく混合して語るは間違です。

つまり、経済学上の「剰余価値の生産」という規定的目的と推進動機を確定し、これに基づいて「絶対的、相対的剰余

と踏みこえてしまったわけです。

つまり、第一はマルクス主義における最大の党派性たる剰余価値学説(剰余価値法則ともいっていい)を完全に否定してしまっていること。第二はマルクス主義経済学の重要な党派性たる窮乏化法則(絶対的、相対的な)を否定してしまつたこと。第三は、価値法則と剰余価値法則の同一性と差異の関連がわからず、宇野の主張と同じように剰余価値の法則を価値法則に解消し超階級化していること。この誤りが、スターリンの「商品社会—価値法則、産業資本主義——剰余価値法則、帝国主義——最大限利潤の法則」(ソ連邦に於る経済的諸問題)の批判のあまり——この特徴付けは基本的には正しいのだが、スターリンはこれでもって社会主義下の価値法則を規定的存在と捉え、ニセ社会主義を正当化しようとした点が問題なのだ——宇野の修正主義に屈服していることから発生しているのは明白である。

第四は、宇野達はスターリンを右から、ブルジョア御用理論家の立場で批判したのですが、他方で宇野の悪業は現代帝国主義の国独資の政策をブルジョア的に美化し、「マルクスの窮乏化法則は古くさくなって間違っている」と吹聴してまわり、恐慌や窮乏化の不可避性を否定し、労働者階級を武装解除してきたわけですが、我が榎原君はこの陰謀が見破れず「資本主義のポロポロ貧困化」を否定しているわけなのです。こんな主張は日帝の相対的安定期では一定のゴマカシ力を持つていたが、資本主義の危機が激化している現在では、マルクスの命題はますます正しさを証明しつつあるのです。

第一の点に関して敷衍してゆけば、一体榎原君は資本論の最大の成果をどここの点に見ているのか、剰余価値学説の展開ではないのか、マルクスは何故「剰余価値学説史」を書いたのかね。レーニンがいたるところで「搾取理論」とか「搾取制度」とか使用しているのをどう考えるのかね。

「資本の生産過程の内的作用を剰余価値の生産の面で捉える」ことが何故に間違いなのか。又、剰余労働の搾取の問題に解消して何故悪いのか。

ここでは、榎原君の観点では「資本の生産過程の内的作用を、ここにおかれている労働の状態を分析していない」(前掲書、一五一頁)ことになるらしいが——確かにスターリン経済学や日共経済学にはそのような側面がなきにしもあらずだが、これは純粋経済学上の問題と、その政治経済的な「労働の状態—労働制度」を混同するものです。確かに科学的に措定される経済学上の剰余価値の生産の面と、その政治的・経済的側面たる労働の状態・労働様式・労働制度(資本の専制と賃金奴隷労働、賃金奴隷制度)とは不可分一体で、一面では同一の事柄である。だが何の連関もなく混合して語るは間違です。

つまり、経済学上の「剰余価値の生産」という規定的目的と推進動機を確定し、これに基づいて「絶対的、相対的剰余

「価値論」価値法則さえあれば剰余価値法則をいふ必要は剰余価値法則はひとりでは導かれる」という風に短絡させることはできません。価値法則は資本主義を含む商品経済の法則ですが、それ自体は剰余価値の法則を直線的に導くものではなく、剰余価値の生産は私的所有の労働力の商品化を契機とする資本制所有への発展と一体であり、これを条件として実現されるのであり資本としての労働力の消費たる賃金奴隷労働を介してのみ存在すること、ここには明白な差異があり宇野等の「剰余価値法則は価値法則さえ知つておれば証明される」といって「実際は反革命的に労働の資本制的性格を忘却視する——剰余価値法則を価値法則に解消してしまふのは全くの誤りです。

③ マルクス主義経済学の階級的党派性たる剰余価値学説
——賃金奴隷制批判を否認し、「労働と所有の分離」に日和見的に一面化すること——「資本の生産過程の内的作用の価値論的説明の正体」

榎原君は剰余価値の学説を否定し「資本の生産過程の内的作用の、そこに於ける労働の状態の分析にもとづく価値論的説明」(一五〇頁・一五三頁)と大上段にふりかぶって大見得を切ったわけですが、この主張はどのような結論に導かれていくのか?

②項でも触れたようにこの大見得の誤りの根源には①労働力と労働の区別がすっかりされてないこと、又これを区別去勢されてしまっています。
赤報派は結局「資本の生産過程の内的作用」この「価値論的説明」なるものを資本蓄積の一帰結たる(その限りで重要なのだが)「労働と所有の分離」に短絡させてしまっているのです。
資本主義批判の本質たる「剰余価値の生産・賃金奴隷制」を「労働と所有の分離の法則」にすりかえることはプロレタリアの階級的党派性を換骨奪胎化し日和見主義化させるものです。

「労働と所有の分離」の証明は、直接的生産過程で証明されていると扱えられないこともないが、常識的には蓄積論に於いて「一方に於いて富の集中が、他方に於ける貧困の集中として進行する」(資本論)等の命題によって展開されるべきものであり、「マルクスは『労働と所有の分離』の法則的説明をしている」とするのは飛躍があります。

④ マルクスが何故に「商品にあらわされる二重性」と表現したかわかっていない榎原君

榎原君は「商品にあらわされる労働の二重性と、生きた労働の二重性の混同」を宇野批判を機軸に於て流通過程と生産過程の混同と前者への後者の解消(労働力の販売と購売の一つの行程の全く異なった二つの作用の同一視)、労働力商品化の資本発生的前提条件としての意義をその資本の実現条件

する意味が理解されないこと、労働力が価値(形態)であり、労働はその消費の状態であり、労働力は価値の源泉だが価値そのものではない、⑥ 価値や資本は本質的には人と人との結びつきの経済学上の社会的表現形態であること等がはっきり理解され切らず、それ故に経済学範疇と政治経済的労働実態との関連が混乱していることに基いているわけですが、この誤りは資本の内的作用の分析を、第一には、マルクスがいまだ労働力と労働の区別を明確にし切れていない従って価値論と政治、経済範疇が混合し、この矛盾が経済哲学的に隠蔽されている「資本論」や「経済学批判」以前の「経済学批判要綱」の地平に逆戻りされ、正に「資本の内的作用の価値論的説明」が何ひとつ「資本論」のレヴェルでなされず、「資本家が労働者の労働の処分権を買い取る」(一五九頁)の如き曖昧な俗流の実態論に矮小化されてしまっていること。(これを八木同志は「死んだ労働と生きた労働の交換」という誤った理論と合わせて密輸入して平然としていたわけです。)

「資本論」ではこんな権利と義務の独立生産者の関係として扱えられるブルジョア的自由主義の残滓は存在しない。
第二は、生産過程の状態なるものがマルクス資本論で展開される剰余価値の生産と一体に、直接的生産過程や賃金論や蓄積論で展開されている、労働の賃金奴隷制度として総括される諸特質、諸実態が「所有と労働の分離」に一面化され、抽象化されてしまい、労働者としての資本への階級的告発が

と混同する誤り等を指摘しているわけですが、この点は私も指摘してきたし、正しい指摘ですが問題は榎原君が「この商品にあらわされる労働の二重性と生きた労働の二重性」の混同が何故にマルクス主義経済学にとって死活の位置を占めているかを理解して展開しているか否かです。この点に於て我々は「否」という答を出さざるをえない。又、それ故榎原君は、資本の生産過程の内的作用の分析をせず、これを省略し、代行するものとして宇野が「生きた労働」という超歴史的(自然永遠的な概念を導入し、人間と自然の物質代謝のような?)経済原則に、資本の生産過程に於ける労働の特質を解消したことを証明せんとしているわけです。が、この点が商品にあらわされる労働とは結局は可変資本としての資本の消費を意味し、もとより資本の専制に基く賃金奴隷労働を意味することとして指摘し、かつこのことに対して、ブルジョア御用理論家たる宇野にあっては必死に隠蔽せざるを得ないことをすっきり指摘しきれないこと等の欠点をもっています。

以上のことは、結局はマルクス主義経済学とは、資本主義という特定の歴史的段階の労働様式—制度の分析対象とし、この資本主義生産様式は商品経済社会であり、マルクスの指摘する如く全ての商品は使用価値と価値の契機で構成され、商品にあらわされる労働は全て資本の下での労働であり「生きた労働」など存在せず、可変資本としての労働力の消費を意味し、価値や資本が人と人との社会的関係の経済的表現形態

である以上、それは資本の専制の下での奴隷労働とならざるを得ないこと等の基本的な観点がしっかりと把握し切れてないのです。

⑤ 価値関係Ⅱ交換関係とする誤り

榎原君は価値あるいは価値関係の本質が、商品経済社会に於ける人と人との生産を基礎とする交換、分配、消費も含む社会的関係の経済(学)上の表現形態であること従って資本家と労働者の関係は資本専制Ⅱ賃金奴隷制の下でのその総体が価値或いは価値関係であるわけです。どうもこのへんの問題がはっきり理解されていないことと関連し、価値関係Ⅱ資本と賃労働の交換関係と狭め、しきりに使っているわけですが、榎原君は価値関係は生産関係でもあることを理解してないようです。たとえば「労働力商品は資本との間の価値関係によって結ばれているのではなしに」「共産主義」十五号、一九五頁」というところに明白に見られるように、榎原君は宇野と同様に概念規定に於ては、「価値関係」とは交換関係と同一概念の上で立って、宇野が資本と賃労働の関係は「価値関係」としているのに対し、榎原君はそうでないといっているわけです。両君はもともとの前提に於て価値や価値関係に対する把握が間違っているか、漠然としてしか把握されていないわけです。

⑥ 資本の生産と階級関係の混乱

榎原君は資本(価値、剰余価値)の生産と階級関係の生産と再生産の関連について、少々混乱した把握をしているようにみえます。

榎原君は、しきりと資本の生産が階級関係を生産、再生産することを強調し、資本の生産の前提条件に階級関係をもつてくることに反対しているわけですが、これは一応正しい指摘ですが、この際も、両者の関係に歴史的考察を加えておかないと、経済学が史的唯物論を前提にして、又逆に経済学をもって史的唯物論はより深められて科学的に立証されてゆくという両者の相互前提的循環関係を正しく捉えて主張すべきです。つまり原始蓄積をもって直接的生産者と生産手段が暴力的に剝離され、この過程を経て小生産者や商業資本が産業資本に発展され、二重の意味での自由な労働者が生まれたこと、この過程は暴力的な階級斗争を通じて形成されること。

つまり、資本発生的前提には貝の身と貝殻の如き、固く結合した直接的生産者が暴力的に解体され、一方では生産手段が資本の下に集積、集中し、他方では自由な労働者という階級関係が前提にされていること。しかし、ひとたび資本は発生するや自らの足で立ち、自らの生成の前提条件も資本の生産と蓄積の中で再生産してゆくこと。このような、資本と階級関係は、最初后者が前提であり、その後結果になったこと、としての循環関係をもっているのです。我々は、宇野の如く、

労働力の商品化に関して、資本発生条件と資本の蓄積条件とを混同する誤りと同じ誤りを犯してはなりません。

今一つは、資本の生産と蓄積という階級関係とは同一の事柄の二つの側面であったり、又相互前提関係にも個々の蓄積の局面ではなっていることを忘れてはなりません。これ等の点を忘れると、必らず宇野式の経済決定論の「科学主義」が生まれるわけですが、榎原君も相当その傾向に感染しているようです。

⑦ 「生産過程では所有をめぐめる問題は提出されないとデマリ、召還主義としての日和見主義を正当化する榎原君

榎原君は、宇野派や社会民主主義者が労働力の商品化を資本蓄積の条件と捉える観点から、生産過程での所有をめぐめる階級斗争の存在を主張し、組合主義、社会民主主義を正当化する見解を批判するのにかこつけて、「生産過程では所有をめぐめる階級斗争は存在しない」とレーニンを歪曲しつつ主張し、自らの召還主義、日和見主義の正当化に利用しています。

「直接的生産過程に於る資本の支配の内実を①労働に対する資本の指揮②強制労働③生産手段への労働者の従属、として把握する、これ等の根拠は階級斗争の根拠ではあるが、その斗争の質は所有をめぐめるものではない。レーニンが正しくも、雇主との斗争は組合意識しかもたらさず、社会民主主義意識はこの関係の外からもちこまなければならない。たとえ直接的生産過程に於て所有の問題を提出した場合も——「賃金労働制度徹底」としてスローガン化し得るが——この要求を工場で雇主に

対して主張しても、大衆を獲得し得ない。雇主との斗争、直接的生産過程に於ては所有をめぐめる階級斗争の根拠は存在しないのです。」(「共産主義」十五号、一九九頁傍線は筆者)

榎原君は初め、前段階武装蜂起や武装斗争に反対し、「ソウイェト運動」とか「階級的労働運動」とかをデタラメに主張し、第二次ブンドの革命的左翼に反対し、又赤軍派に反対し、七〇年末になって最早下部のつきあげにあつて武斗が避けられなくなるや、今度は一転して、完成に召還主義の『左翼日和見主義になり、「武斗」や「非合法」の名分をもって生産点での革命的闘いの推進に自らが拘り合い、前面に引き出されてしまうことを警戒して「生産点では所有をめぐめる階級斗争は提出されない」外から持ちこまれる」と称してレーニンを歪曲しつつ、生産点での革命的階級的闘いを切り捨て否定してしまふわけです。

結局は、榎原君の「宇野批判」なる大げさな商標は「宇野批判」にかこつけて、自らの日和見主義を召還主義、党派斗争主義としてゴマかすための手段であったことに実践的な階級の意味があつたわけです。

「直接的生産過程では所有の問題(？)資本主義の根本的矛盾、共産主義の不可避性のこと、と考える」は提出されな「いのだらうか」「賃金労働制度の徹底を工場で提出しても大衆を獲得し得ない」のだらうか？断じて否である。直

接的生産過程を起点にして所有の問題が提出されなかつたら、一体どこで提出されるのか。「賃金労働制度の徹底というスローガンを掲げて大衆を獲得できない」としたらマルクス主義は否定されることにならないだろうか。マルクスは「公正なる賃金を要求して、賃金斗争のゲリラ戦に埋没するのではなく、賃金奴隷制度そのものの廃絶をめざすべき」と主張しているではないか。レーニンには、「雇主と賃労働者の資本主義的關係の中からは自然発生的にはML主義の共産主義意識と路線は産み出されないこと、これは資本主義的意識の外部で科学的に初めて獲得されることを主張したが、だからといって工場での雇主との斗争の中からは共産主義が生長しないと云ってないし、正しい路線に基いて組合主義や改良主義や諸ブルジョア路線やイデオロギーと闘うならば所有の問題は提出され、共産主義は工場の中でも成長していくのは当然のことです。

「共産主義の階級的意識は資本主義のイデオロギーと闘いつつ、この外部で科学的にのみ獲得される」というレーニンの有名な命題を榎原君は、「工場の内と外の空間的次元の問題と混同して扱ってあげます。これでは工場での闘いは、全て組合主義の改良主義になり、街頭斗争や地域斗争のみが革命的である」ということになり、生産点での階級斗争の革命的推進を完全に放棄するわけです。(勿論、これのみが階級斗争の主要形態と考えるのは間違いで、レーニンも指摘するが如く、国家をめぐ

ぐる政治斗争が最も重要な階級斗争の形態であることは至明瞭です。他に理論斗争が存在するが。)

④ マルクスの「資本蓄積を通じた革命の不可避性の論証」の立場、方法、観点の否定
「資本の生産過程の内に所有をめぐる階級斗争を見てしまふと、資本の蓄積と共に階級斗争も蓄積され、その結果、革命の必然性が理論的に明らかにし得るかの如き、幻想がうまれる……」(前掲書 二〇三頁)

これは明確にマルクスの「資本蓄積の一般的傾向」等に典型化される資本論の方法や主張を否定する主張です。マルクスは「剰余価値の生産の分析を展開しつつ、資本の蓄積の諸節の中で「一方で富の蓄積が他方で貧困の蓄積となり」

「無知、貧困、道徳的墮落、頹廢……が蓄積され」「組織され訓練されたプロレタリア階級が成長」「収奪者が収奪される……」等の展開をしているが否定され、修正されてしまっているわけです。

又、「生産の社会化と所積の資本主義的私有制の矛盾の増大」の史的唯物論の基本命題の論証が否定されてゆくのです。要は、榎原君が、マルクスが資本の生産と蓄積の分析を通じてこの分析にとどまらずこの分析それ自体が、資本主義と共産主義の科学的規定性、その物質的諸条件、道筋等を解明したことを、この資本論の立場、方法、観点を否認してしまっているわけです。

⑤ 「反スタ修正主義経済学」としての榎原経済学——まとめ
以上、榎原君の「経済学」なるものを概括的に特徴付けるならば以下のことがいえます。

剰余価値法則の否定、窮乏化法則の否定、修正主義・資本主義観たるブルジョア国独資論に立脚して「資本主義ポロポロ貧困化論の否定、経済学上の範疇としての、剰余価値の生産」とその実態たる政治・経済的な労働の状態の側面との混同。労働力と労働の区別の曖昧性、価値の本質的階級的特質の意義の無理解、資本の生産過程の内的作用を、そこに於ける労働の状態を解明しつつ、価値論的に解明する」と称して、逆に価値論以前の、「資本論」以前の「経済学批判要綱」のレヴェルに逆戻りさせ、俗流的「労働の処分権論」を持ち出したりしてマルクス価値論をぼやかさせ、あげくの果てには、マルクス主義経済学の最大の階級の党派性たる「剰余価値法則と賃金奴隷制」の規定を日和見主義の面的な「労働と所有の分離」にすりかえること、何故にマルクスが「商品に表わされる労働の二重性」としたか、がはっきり把握されていないこと。価値関係と交換関係と把える誤り、資本の生産と階級関係の関連の混乱、マルクスの「資本蓄積を通じた革命の物質的条件とその不可避性、道筋」等の立場、方法、観点の否定、等に見られるごとく、マルクス主義経済学のはとんと根本的諸命題や、重要諸命題を否定したり修正したりしてゐることは明白です。明らかに榎原君の経済学は修正主義の

偏向が多分に見られます。

これは一つには榎原君その人のマルクス主義理解の浅さ、無知や、或いは、彼の日和見主義によるものでもあるわけですが、このような要因と同時に次の事をしっかり留意しておくべきです。つまり、彼が戦後新左翼運動に付着していた小ブル反スタ主義の世界観に染まっております。この新しい日和見主義、修正主義の立場からスターリン主義を批判せんとするが故に、スターリン主義の修正主義の中に教条化され俗流化されているとはいへ、なお一定程度内包されているML主義の真理を反スタにかこつけて、押し流してしまふことにあるのです。「スターリン主義」の革命的ML主義の立場からの批判は、尚ほまだまだ端緒にすぎたばかりであり、安易にして卑俗な戦後族生した反スタマルクス主義者群のブル転状態を見れば明白ですが、榎原君も過渡期世界の攻撃的階級斗争史観を放棄し、スターリンに対する正しい態度がとれないが故に新たな日和見主義、修正主義の道を歩んでいるのです。

我々は「反スタの名分」にかくれてML主義を否定してゆく、このような陰謀に決して乗せられてはならないのです。又このような新たな修正主義の実践的帰結として、彼の召還主義の政治組織路線が生まれてきていることをしっかりと理解しておくべきです。

このことについては後述。

⑩ 旭凡太郎君の経済学の特徴についての断片

尙、旭凡論文「宇野労働力商品化論批判」「宇野経済政策論批判」は榎原君のような決定的修正、誤りは比較的少ないが——たとえば一応、価値の階級的意義付けや「労働と所有の法則的解明」に一面化していないこと。価値関係Ⅱ交換関係等の誤ちは犯していないこと——だが、榎原論文はさておいても、二応、直接的生産過程の分析をおこなってゆこうとする志向があるのに対して、そのような現れとして資本の内的作用の特徴付けとして④資本の指揮、⑤強制労働、⑥生産手段への労働の従属を正当に指摘しているのに対し、旭凡君も榎原君と同じように剰余価値の生産と直接的生産過程を中心とする賃金奴隷制の問題がしっかりと押え切れていないこと。賃金奴隷制を直接生産過程→蓄積論を貫通するものとして特徴付けず、蓄積論の所産としてのみ把える誤りがあり、直接的生産過程における剰余価値の生産と賃金奴隷制の批判を欠落させることよって、労働者の階級意識の芯樑を空洞化させていること、これが彼の日和見主義の理論的表現であること、又これも召還主義を正当化する誤りを犯していることは言をまたない。

しかし、本来旭凡太郎君は第二次ブント時代の私の親しい同志であり、本来学問的に小ブル反スタ主義の流れではなく——市大の経済学部は代々木系である——これを克服せんと

義分析、三ブロック分析などは、全く皆無、従って、世界—日本プロ独、革命戦争の物質的意義付けなどは全く皆無——また、トロツキー主義を批判し、後期レーニンや毛沢東思想を評価する観点が全くない。

② 具体的な過渡期世界分析や、国際共産主義運動史の総括のかわりに「64」を空論的に剽窃、ゴジラ的に極大化しつつ、空論的、理念的に目玉商品として「共産主義論」や「世界プロ独論」を特殊に強調し、「スターリン主義との対決点」を無媒介に「民族共産主義」とか「連邦主義」とか、全く実践上の意味をもたない点に論点を設定してしまっていること。

③ このような小ブル傲慢主義の理念主義の観点から、スターリン主義との国際的党派斗争の観点がない」と愚にもつかない批判をやるわけです。

この批判をもって、当時既に「過渡期世界論」の中に孕まれている後期レーニンや、毛沢東思想を評価せんとする志向を完全に清算せんとしているのです。

スターリン綱領の批判は「世界プロ独（統一共和制）」とかを無媒介に抽象的に強調することで乗り越えられるものではなく、現代帝国主義の分析を基礎として、先進国Ⅱプロ独・社会主義革命の前段階決戦、農業・植民地国Ⅱプロ・ヘゲのもとでの民族解放・社会主義革命、プロ国家の根拠地化と継続革命と三ブロック革命の世界的結合としての実践的路線

する志向性を持っていつつも、日和見主義故に私とともに決起することを日和り、脱落し、中間的反スタマルクス主義と接触し、逆に我々を「スターリン主義」と批判する理論活動の先頭にたつことよって政治的敗北は免れず思想的立場の矛盾の激成故に、破産せざるを得なくなったわけです。

第四章 小ブル傲慢主義・空論主義の反スタ・トロツキズムからの「過渡期世界論批判」を反批判す

「共産主義」十四号の「我々の立脚点について」での「過渡期世界論」批判は、「我々の立脚すべき地点」について『赤軍64』についての批判を、七〇年末の段階で連合派（現在の烽火、赤報、神奈川左派、仏派）がおこなったもので、この執筆は、どうも鈴木君（か旭凡か？）のようです。いずれにせよ、私の第二次ブント時代の同志、しかも神奈川左派の諸君の執筆のようにみえます。

周知の如く、神奈川左派の諸君は、私とブント主流派を形成した諸君であり、それなりに良心的に、「過渡期世界論」を総括しようとする姿勢は、部分的には見受けられます。

しかし、その批判の全体的特徴は、自らを中間的反スタ・トロツキズム、反スタ・マルクス主義の立場において、①現代過渡期世界—日本資本主義を、正しい方法的立場にたつて批判Ⅱ分析するのではなく——現代帝国主義、日本資本主

によって、はじめて批判されるべきものなのです。以上からして、この「立脚点」の最大の特徴は、ブントが所有する革命的リアリズムの感覚が完全に忘れ去られた、もって空論的な小ブル傲慢主義によって刻印されていることです。以下、愚にもつかないことへの反論のようですが、沈黙しておれば批判が市民権を得て、我々が承認したかの如き印象を与え、こんな事態を政治的に利用する人もなきにしもあらずなので一応の反批判をしておきます。

① 「ロシア革命をもって階級斗争が受動的な性格から攻撃的性質に変化した」という観点は誤りか。これを「法則的に把える」のは誤りか。

旧連合ブントや反赤軍派の人々は、自らの日和見主義故に、この命題に狂人じみた批判を集中するわけです。そして彼等が批判を強めれば強める程、逆に彼らは増々日和見化してゆくのですね。

受動から攻撃への変化の客観的、物質的根拠は、帝国主義そのものです。私はこの点をくり返し常に強調してきています。帝国主義の「独占—金融カネ頭制—過剰資本の形成と市場再分割、永続的な帝国主義戦争」「腐朽性と寄生性」「死滅しつつある資本主義」「プロレタリア世界革命の前夜」あるいは「超巨大金融独占体」等々として。従って、私に主観主義とかの批判をするのは、全くあたらないわけです。私は攻撃的階級斗争を帝国主義それ自身の内的基礎から裏付けんと

していること。だが、これのみでは、全く不十分なのです。正に「受動」とか「攻撃」とかの、主観的能因を含む概念を使用している以上、主観的諸条件が検討されて論証されねばなりません。尚、「主観的諸条件が入る以上」「法則（科学）」として提出できないと考える人は愚かです。唯物史観は、その法則をその物質的基礎から説明するが、上部構造の要因（その下部構造への反作用などの）を無視したり、それを法則の中に組み入れることを否定しはしないし、このことを否定する人は機械的唯物論の経済決定論者です。又、単純な帝国主義一元論からは攻撃的階級斗争を立証することは出来ません。つまり、ロシア革命の成功はそのロシア革命を導いたロシア人民の闘いとその指導部の経験・世界観たるマルクスレーニン主義の正しさを、完全に実証したこと、そのことをもってロシア革命の経験が、マルクス・レーニン主義として、普遍化、一般化され、全世界の労働者人民の武器となったこと、マルクス主義が、マルクス・レーニン主義として発展させられ、階級斗争を前進させる決定的な規定的要因となったこと、ML主義がプロ人民の階級斗争の武器になったこと、これが最大のロシア革命の成果なのです。主観的能因が客観的要因に転化したこと、帝国主義の物質的基礎とML主義の主観的条件が融合し階級斗争の攻撃的段階が創生されたこと、これは実態的には、レーニン在世中を典型とし、二〇年代に於いてロシアを根拠地として、コミンテルンの創設とこれを

通じての先進国、農業・植民地国を問わず全ゆるくに共産党が建設され、民族解放民主主義斗争や労働運動とML主義が結合されていったことでも明らかです。

比較的二〇年代は誰れでも現象的にも階級斗争の攻撃性については認めます。それでは、スターリン主義が生成した三〇年代や四〇年代はどうだろうか？この時代では、この命題は誤りだろうか？否です。小ブル反スタ主義者は、その後の日共とコミンテルンのスタへの変質を理由に、これを「間違い」といい、「スターリン主義を美化する」と躍起になって批難するわけですが、この意見は、その後のスタの変質にも拘らず、ロシア革命とその成果は、それ自体として（正に帝国主義の客観的条件とML主義の主観的条件の統一として）、既に国際プロレタリアートの力へと物質化されてしまっていたこと——二〇年代のソ連、これを引き継いだ三〇年代からの中・朝・ベトナム等アジア共産主義運動の前進として——を忘れているか、認めようとしてもしていない見解です。確かに二〇年代末から三〇年代（とりわけ七回大会以降のコミンテルン）のコミンテルンの路線が誤っている以上、党の路線の是非によって「階級斗争の攻撃性・能動性」はその大半を決定される以上、階級斗争が後退したことは事実です。しかし、次のことを確認すれば階級斗争の攻撃性は、充分、法則的に貫徹されている、といえるのです。

国際帝国主義は、ソ共とコミンテルンを内外から変質させ

る為に、又、国際プロレタリアートの攻勢を鎮圧するために、ソ連と国際プロレタリアートの恒常的、国際的革新革命包圍体制と国内国家独占資本主義体制と、なし崩しファシズム体制を敷いたこと、このことがソ共をスターリン主義に変質せしめたが、逆に帝国主義内共産党（とりわけ農・植民地の）を左傾化させ、今度は帝国主義の内側から国際性、軍事性、社会性が強まったこと、又、三〇年代には帝国主義間戦争が避けられなくなり、ソ連を帝国主義間戦争にまき込み、包摂し、国際プロレタリアートを「反ファシズム」の下に包摂しようとしたが、国際プロレタリアートの大半はこの反革命的裏切り路線によって混乱させられ、武装解除されたが、アジアに於ては、これを逆手にとってプロレタリアのヘゲモニーをもって、反ファシズム統一戦線を展開してゆく事態が生まれたこと。つまり国際帝国主義の攻撃、スタへの変質という事態の中で、帝国主義の一定の勝利それ自体の中で、二〇年代の世界的階級関係に攻撃的階級斗争は国際帝国主義に媒介され、そこに内面化されて発揮されたのです。その典型例として中国革命と中国共産党の前進を生み出しているのです。攻撃的階級斗争は帝国主義の運動それ自体の中に内包されて貫徹していったのです。

レーニン死後は、反スタ・トロツキー主義の小ブル傲慢主義の観点にたつて、二〇年代のコミンテルンの闘いや、三〇年代を中心として開始された毛沢東思想に導かれたアジア共

産主義の戦后に至る革命的闘いを否定する人々ならいざ知らず、まがりなりにもこれ等の歴史を承認する人ならば階級斗争の攻撃性が法則的に展開していることを承認するのは当然です。小ブル反スタ主義の色めがねをかけているが故に、国際共産主義運動を正しく総括し得ず二〇年代のコミンテルンの闘いや、中国共産党の闘いを否定してしまいが故に、我々に対して「世界武装プロは存在しない」とか「スターリン主義を美化する」とかの中傷をやり平気でいられるのです。

尚、我々のスターリンに対する態度は、「論叢3」でも展開したように、反スタ・トロツキズムの立場、方法・観点での批判はおこなわない。我々は基本的にはレーニンに対するスターリンを、マルクスに対するカウツキーの位置の如く考え、最初は、レーニンを忠実に継承せんとする志向をもっていったこと（この点でトロツキーやブハーリンを区別する必要があること、又、その結果は別にして）しかし、根本的な非マルクス主義の資本主義批判の不在の小ブル性と過渡期世界の革命にこたえきれず、先進国革命では独に於いて前段階決戦にプロ革命戦争に挫折し、農業植民地国に於いては、プロヘゲ下での国民革命に挫折し、自国に於いては根拠地化と継続革命の闘いに挫折し、総じて三プロックの革命とこれを世界共産主義・世界プロ独をめざし世界革命戦争に世界党——軍、下で闘う路線に挫折し、三〇年代スターリン本来の小ブル性を露わにし、反動化していったこと。

そしてこのスターリン主義の、レーニン主義の継承と挫折、裏切りの地点を乗り越えて、毛沢東はプロヘゲの下での国民革命と根拠地化と継続革命の斗いに成功し、現在残り一つの課題たる先進国革命の課題に直面しているのです。つまり我々は、三つのテーゼ、三プロックテーゼの観点から、スターリンを批判するのであってそれ以外の観点から批判するのではない。

② 「根拠地国家論にもとづく攻撃型階級斗争の決定的誤り」という批判の決定的誤り

確かにソ連一国でみれば三〇年代のスターリン主義の反動化、その後の四〇年代のスターリン死後の社会帝国主義化と、根拠地の役割を果たしてはいるがこれに中国革命を加えるならば、二〇年代のソ連、四〇年代以降の中国と軍事実態的にも根拠地の役割を果たしています。又、三〇年代のスターリンの反動化の時代も帝国主義がスターリン主義を内外から反動化せしめる行動それ自身が、国際帝国主義の内部に内面化され、内包的に中国革命の前進に象徴される攻撃的階級斗争貫徹させざるを得なかったことを考えるならば、この命題は全く正しいのです。「プロ国家が直接にか間接にか攻撃型階級斗争を生み出す」根底は、ロシア革命がその後、スタタの変質にも拘らずML主義が人民の武器となり帝国主義の危機と主体的なML主義の路線の普遍化・世界化・組織化と

命的リアリストの眼をもって後期レーニンや毛沢東を評価する観点を持ち、この観点で「プロ国家根拠地論」を展開しているのです。が、連合派はこれがわからず「スターリン主義との党派斗争がない。世界プロ独の観点にたつて、スタIIブへ綱領を批判していない」とかの誹謗を並べたて完全な小ブル傲慢主義の左翼空論主義を展開しているのです。

尚、過渡期世界の「プロ国家が、根拠地化するか否か」は、当然にもプロ党の路線にかかわりあることであり、それ故にコミンテルンの路線が検討されなければならないわけですが、しかし、スタIIブへ綱領を、「世界プロ独がない、連邦主義・民族共産主義——党・軍の世界党・世界赤軍への改組がない」などの、プチブル反スタ主義の空論的観点で批判すれば、根拠地国家化するわけではないことは明らかです。スタIIブへ綱領を無媒介に最大限綱領主義的に「世界プロ独がない連邦主義・民族主義」と レッテルをはってもなんの前進もないこと、この点、我々のスターリンへの態度は①で前述したし、スターリン主義への党派斗争が欠落しているわけでは全くないこと。

尚、留意しておきたいのは、このスタIIブへ綱領の批判の観点は「164」（赤軍派政治論機関誌一六—一八頁）の剽窃であること。「164」はこのような「左」翼空論主義の傾向を完全に払拭してはいませんが、それにしても我々の意見を剽窃しながら、逆にそれをもって我々を批判するとは、

結びついて、それ自体として巨大な力へと物質化されていったことにあります。まず批判者はこの客観的变化を認めるべきです。このような特質として階級斗争の世界史的段階が形成されているのです。

私は攻撃的階級斗争の要因を軍事実態論の側面でのみ展開しているのではないこと、ロシア革命以前との相異としてのレーニン主義のマルクス主義としての人民の武器化という思想・政治II路線面での前進を問題にしていること、又、ML主義を継承した毛思想の生成という路線・党の観点から問題にしているのです。これと軍事実態的に「根拠地の役割を果たすか否か」は、ML主義を正しく適用、発展し得たか否かの関連として派生的関連として把握するわけです。この点に関して「我々の立脚点^{すべさ}について」では、階級斗争の到達段階、或いは成熟段階を、軍事実態論風に、ソ連プロ国家の成立を強調し過ぎて説明するキライはあったが。

「プロ国家根拠地論」を否定する人は、その階級的・政治的本質に於いて実質は反スタ・トロツキストであり、後期レーニンや（これを忠実に継承せんとした二〇年代初めのスターリン）毛沢東思想を否定し、マルクス、レーニン、毛沢東に對して、トロツキイ的世界革命の空論を對置する人々なのである。

一向過渡期世界論の一つの歴史的意義は、一方では、左翼空論的トロツキズムの残滓を持ちながら、一九六七年当時革

何んと卑劣極まることか！

③ 「階級斗争に發展法則はないのか？」「過渡期世界論は史的唯物論の悪しき体系化か？」「攻撃的階級斗争は一つの『思い込み』で恣意的設定なのか？」——反スタ修正主義のベテンの批判

「ロシア革命をメルクマイルとして受動から攻撃II能動へと転化したという主張は何か階級斗争に發展法則があつて、ロシア革命によって攻勢段階に入ったとするような史的唯物論の悪しき体系化への傾斜が含まれているがそのような『一つの思い込み』によっては、スターリン主義との国際的党派斗争の勝利の方向を指し示すことは出来なかつたのである。生産力と生産関係の矛盾による社会發展の法則その他、スターリン主義こそが史的唯物論の悪しき体系化の権化なのであつて、我々に存在するのは唯物史観のみなのです。」（『共産主義』十四号二七頁）

受動から攻撃II転化しているの命題については①で説明した。ここでは彼等が黒田哲学の立場にたつて、史的唯物論を彼等が否定し、歴史的發展が法則をもって（科学的に解明されるものとして）展開されている、というML主義の根本的命題を否定してしまつてのことです。マルクスが「社会發展を自然史的法則でもって叙述する」（『経済学批判』）の観点は完全に忘却視されている。黒田哲学では「人間や実践がな

い」と、このマルクス主義の命題に小ブル人間主義的に反発して法則（や科学）の中には、人間の主観的諸条件は混入していないかの如きデタラメを主張するわけですが連合派もこの観点に影響されて「法則主義だ」とか史的唯物論の体系化などとかの愚~~水~~にもつかない批判を展開するわけです。

自然や社会の中に法則の存在を否定したら何が残るのか。マルクス主義は一挙に不可知論の神秘主義に降伏することになるではないか

「生産力と生産関係の矛盾から社会発展の法則をとく」のが誤りだつて？ これは史的唯物論の基本命題ではないのか

攻撃的階級斗争はなんら一個の人間の「思いつき」や「思い込み」ではないこと、ロシア革命をマルクマールとする客観的事実なのです。いづれにせよこの文章は反スタ「マルクス主義」の修正主義の本質が面目躍如としています。君達の唯物史観なるものを見せて欲しいのです。又、過渡期世界論は階級斗争の世界史的段階規定をふまえた上で、現代帝国主義の分析を機軸に、過渡期世界総体を分析し三プロック階級斗争を分析せんとしているのであって、事実としても史的唯物論の体系化では全くないわけです。

現代過渡期世界の批判たる現代帝国主義の国際的・国内的批判やその戦略・戦術として具体的・実践的にはおこなっていないのです。

以上①④までは「我々の立脚点について」に対する反論ですが、次に連合派がパンフ『赤軍~~4~~』をこの批判の観点に立って批判しているのに反批判を加えておきます。

⑤ 「大歴史」史的唯物論的領域、中歴史~~4~~現実形態的な現代帝国主義を中心とする過渡期世界の分析、小歴史~~4~~現状分析」とする三層的分析方法は誤りか。

現代過渡期世界を分析しようとするれば、まず現代世界が資本主義から社会主義への過渡期（世界的な）であること、その歴史的特徴を正しくおさえておく必要があること。この上になつて、これを科学的に証明すると同時に、又、史的唯物論によつてその正しい歴史的・階級的立場が礎かれるところの、資本主義批判~~4~~分析が可能になるのであって、史的唯物論の正しい認識~~4~~分析には現代世界を資本主義批判のみによつては把握できないこと、三層的分析は全く正しい規定であつて「観念的なスターリン主義の乗り越え」ではない。我々はこの立場・方法になつて「単純帝国主義一元論」やソ修式「体制間矛盾論」を批判しているのです。

④ 「帝国主義論に於ける自動崩壊論的傾向」なる批判について

「攻撃的階級斗争に対する帝国主義の反革命同盟と不均等発展の矛盾」侵略と反革命の不統一↓国内反革命という帝国主義論に於ける自動崩壊論的傾向である」（前掲書二六頁）

これは8・3論文（六八年八月）に対する批判らしいが、ロシア革命以降、国際帝国主義は世界的階級関係の変化~~4~~世界プロレタリアートの更なる成熟に規定されて帝国主義間の不均等発展の矛盾と国際反革命の共同利害とを統一しなればならぬ帝国主義にとっては根本的危機に達せしめられているという事実、この危機を国際反革命「体制」と、国際・国内管理通貨制による国独資・国内なし崩しファシズムによつて国際帝国主義は延命してきているという最も重要な現代帝国主義の特徴を否定することになる。それ故に、この現代帝国主義の特徴から根拠づけられる恒常的侵略・抑圧・反革命戦争と階級危機、先進資本主義国のプロ独・社会主義革命前段階決戦、農業・植民地国の民族解放~~4~~社会主義革命、プロ国家の根拠地化と継続革命や、この三プロックの階級斗争の世界共産主義をめざす世界革命戦争としての不可避的結合性とその戦略~~4~~戦術等が導かれず、世界プロ独や世界革命戦争を理念的に把握する日和見主義に陥入るのです。全体として、連合派の『共産主義十四・十五号』での特徴は、共産主義論や世界プロ独を文献学的に論じてはいるが具体的な

⑥ 「史的唯物論の悪しき体系化~~4~~歴史哲学への転落か」
「資本主義の否定的契機として階級斗争」を把握するのは全く正しい指摘です。これを何故、否定するのか？ 「プロの世界性の開花とブルの一国性」の露呈として、過渡期世界の世界史的階級関係を特徴付けることと正しい試みです。プロの物的姿態としての労働力商品が世界的であり、世界性をもつことに於いても自由で普遍的で世界的であるということに存在する。（『~~4~~三頁）この文章では私は「労働商品所有者」なる宇野式用語は一切使っていません。（第四章で八木同志がこの用語を使っているにせよ）現在程、理論的には宇野批判をやりきれなかったにせよ当時ですら、宇野の修正主義に影響はされていなかった。連合派は卑劣にも自らの「宇野批判」の商標を私が「労働力商品所有者」なる用語を使っているとデマリ、私をダシにして売り込みたかつたわけですが、これは全くの事実無根です。

プロを経済学上「労働力商品」と規定しているが、けつして「労働力商品所有者」なる用語など使用していない。この点で八木同志は自分のことは棚に上げて、「共産主義」十四号をウノミにし、原文を確かめもせず、私が宇野に感染したかの如く吹聴するわけですが、八木同志自らこそ宇野経の克服をめざすべきなのです。
「赤軍派の場合、藤本進治に依拠したまま、プロの物的姿態としての労働力商品」としたため何かしら資本が自然発生

的に世界武装プロを生み出す経済主義に転落してしまっている。」(前掲書三四頁)

確かに、赤軍派がその前身に於て、藤本進治の影響を受けていたことは確かですが、「赤軍」No.4のプロレタリアートの成熟の分析は、藤本進治の「革命の哲学」とは方法的に全く異っています。藤本の場合は、プロレタリアを資本と資本の蓄積の矛盾の中で分析する、マルクス資本主義批判の方法ではなく、プロを「主観的生産力」として、先験的に規定し、かつ、それは「私有性と社会性の矛盾」を内包している措置とし、この「二重性の矛盾」の自己展開のうちに、「革命―党―階級形成」の必然性を説くものです。これは、プロの對象たる資本を捨象した、ヘーゲル的な、かつ主観的で、自然成長論の客観主義を特徴としています。「赤軍」No.4では、こんな「自己展開論」とは全く異なる、「自由主義―貧民」「農業資本主義―組織されたプロ」「帝国主義―民主主義的プロレタリアート」等として不十分であり、對象たる資本の運動から階級形成の諸段階を特徴づけようとしています。従って、連合派の批判は全く不当なわけです。尚、VZ―五八の来見君が、これと同じような観点で「転びの弁証法」として批判をしています(「査証」六号論文)これも当然ならぬわけです。

ストだ」という主張です。(「過渡期世界の革命」日向著)これへの反論は、①②の反論で完全に論駁されているし、後は、我々は、日向翔君が「私を乗り越える」と称して、妙な野心を燃やして、一生懸命、黒田寛一の著作を読み込み、御用理論家、宇野を自分の師と賞揚し、ブンドの歴史の中に革マル主義の最大の墮落を持ち込んでしまったこと、その後、全革命的左翼に総スカンを食い、やっと、革マルの幻想から解放され、民族解放―社会主義革命への、階級的共感を見出し始めた頃には、戦旗派は単なる赤軍派の反対派に過ぎず、赤軍派の敗北とともに四分五裂してしまったこと、この事実をしっかりと知っておけばよいのです。今は、日向君は聞くところによれば、だいたい毛沢東思想に共鳴し始めたとのことですが、これはよいことです。大いに、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想を学習し、宇野や黒田等の、ブルジョアジーが人民の隊列の中に送り込んだ、御用理論家から解放されて、「誠心誠意、潮流に抗って、人民に奉仕する」ことを実行して欲しいものです。決して「挫折」だとか、なんだかんだの理由をつけて逃亡しないで下さい。これが、かつて日向君が「直弟子」(私は、こんな徒弟的、人身的関係をもったつもりはないのだが)と称した人からの、せめての忠告です。小ブル反スタ・トロツキズム、反スタマルクス主義から解放されるならば、いつかまた、互いに肩を並べて斗える時がくるのです。

⑦ 「過渡期世界に於ける人間の位相転換、攻撃的人間観は、完全な空想社会主義(無政府主義)」なる批判について

ロシア革命以降は、世界的にも、経済学的にも巨視的には、資本主義から共産主義(社会主義)への世界的過渡期であり、それは世界史的な規模での革命情勢といえます。これをもって、我々は世界革命戦争と規定してきたものではなかったのか。この革命情勢に於いては、主観的諸条件や上部構造の、下部構造への反作用が増大するのは当然です。このことを、上述の如く特徴づけたのは、全く正しいのです。過渡期世界―世界プロ独期―世界革命戦争と捉える人々なら、このことは常識ですし、連合派やRGは、実際はこのことを承認してないのです。

以上で「共産主義」十四号の「過渡期世界論」批判を終るわけですが、連合ブンドとは、別の、しかし、基本的には同じ手口の批判に簡単にふれておきます。

⑧ 日向翔君を批判す。

しかし、これらは、全体的には、「共産主義」十四号程、手のこんだ批判ではないので、反批判は単純です。それは、純正反スタ・トロツキー主義の日向君と千葉君ですが、一つは、日向翔君の「世界プロレタリアートなどは、スターリン主義が発生した以上、存在しない。一向健はプロスターリニ

⑨ 相も変らずの反スタ・トロツキズムの千葉君を批判す
彼の小ブル自由主義・小ブル個人主義の観点からの「革命戦争」「ゲリラ戦」の主張も、大分鼻息が衰えてきたようですが、ともあれ、「論叢」No.3で私の彼への反批判は既にやっておるわけで、論争はもはや決着がついていると考えるわけですが、後、残された論点に多少言及しておきます。

彼も「世界武装プロレタリアートは、神の思召しで、いつの間にか、降臨した如く叙述されている」と、小ブル反スタ派の中傷に歩調を合わせて主張し、これに加えて「体制間矛盾論だ、全般的危機論だ」と騒ぎまわり、「攻撃的階級斗争の根拠は、資本と賃労働の矛盾の中から論証、展開すべきだ」と、十年一昔前の、過渡期世界という統一観点を放棄して、単純反帝一元論の観点に逆戻りさせ、ここで、彼のお得意の、修正主義のローザと岩田弘の「世界資本主義論」をミックスした手製の「世界資本主義論」なるものを展開するわけです。彼は、毛沢東思想に憎悪の念をもって、毛沢東―中国共産党の「継続革命路線」を「プロ独―社会主義論」で「スターリン式の一國社会主義論」だと、使い古されたトロツキズムの反中国攻撃を繰り返すのです。

「世界武装プロへの成熟」や「世界史的階級関係の変化」として表現された、「帝国主義の危機とマルクス・レーニン主義の人民の武器化との結合」に概括される、プロレタリア階級の成熟を「世界プロ降臨論」に矮小化することはできな

い。これは「思い込み」(連合ブンド)、「ヘーゲル主義の先験論」(八木同志)等と同じ類の、ロシア革命の世界史に占めるそれ自体の独自の意味を、忘却視する見解です。

「体制間矛盾論だ」「全般的危機論だ」という非難に関しては、中傷だとか答えようがない。「体制間矛盾論」は全くあたらないにせよ、「全般的危機論」は、過渡期世界の特質を一面では表現している用語と考へ、むげに我々各々が否定ばかりはしないことも付加しておきます。とにかく、「スターリン主義と結びつけ、関連付けたら、論争は勝利し、自分は革命的で科学的だ」という具合に、単純に考へないで、何故にそれが反革命的で、非科学的なのかを証明して欲しい。

なるほど、攻撃的階級斗争は、資本制生産とその諸関係を基礎にして論証されるべきです。実際、私は「逆制約の能動のテーゼ」として、現代帝国主義の運動構造の中から、三プロツクの階級斗争の攻撃性、結合性を主張しています。千葉君は、我々が「世界的階級関係の変化」を強調したことをもって、ここからストレートに、現実形態的にも「世界革命戦争」世界赤軍「世界革命戦線」の陣型が形成されると説いているように吹聴しているわけですが、これは全くデマです。我々は、現実形態論としての現代帝国主義を正しく規定する前提として、この唯物史観的領域のテーゼを定立しているのです。何故なら、現代帝国主義の特質が、正しい方法の下に正しく規定されたなら、三プロツクの革命の特質

また、岩田弘は、宇野の「流通浸透視帝」の観点にたつて、「資本主義は一国経済ではなく、特定の段階の生産機軸と、農業地帯(非資本主義ウクラウ~~ド~~)とが、恒常的に資本主義商品経済によって結ばれ、後者が永続的に分解されながら有機的に統一されていると、宇野派内部に新説をたて、「原理論」世界資本主義「現状分析」の岩田式三段階論を展開するわけですが、これは、①資本主義の基礎は国民経済にあること。従って、国際的・国内的蓄積構造といえども無国籍ではないということを否定している。②レーニンの帝国主義の不均等発展の矛盾・市場再分割の観点を失ない、③それ故に、現代帝国主義の特質が、米帝を中心とする矛盾をもった連合であることが見失われ、米帝を生産機軸とする単一の有機的統一性をもった、「世界資本主義」なる超帝国主義論であるという点に於て完全に間違っている。

千葉君は、マルクス・レーニン主義を否定し、ローザと岩田に依拠し、不均等発展を無視し、マルクス蓄積論をローザ式に歪曲し、「非資本主義ウクラウドを存立条件にしてのみ、世界資本主義は成立する」とかの珍説を主張し、これでもって「世界革命の有機的統一性」が論証されたとダボるわけ

す。
この誤りに加えて、千葉君の世界資本主義の論理の中には、プロ国家の矛盾は全く位置づけきれず、切りすてられてしまっている。六〇年代初頭の東京社会学同の「反帝一元論」が、

やその結合性、世界革命戦争とその陣型等は、簡単に論証されるわけですから、千葉君はこの関連をふまえて、「赤軍」の展開をやっていることを、意識的に無視して、「世界武装プロ降臨論」を吹聴するわけです。現代帝国主義は、資本の蓄積構造・過剰資本の処理を、帝国主義が世界史的階級関係に対応して、自ら延命すべく、国際的・国内的管理通貨制を楯にした国独資政策で、米帝を軸に国際的・国内的侵略、なし崩しフアジズムの反革命として変容して、解決せんとすること。この先進資本主義の蓄積構造・過剰資本の処理の中に、発展途上国の資本主義の蓄積・発達構造を組み込んでしまい、自らの再生産の下部構造とすること、等として総括されるわけですが、だからこそ、この現代帝国主義の国際的・国内的蓄積構造を通して、三プロツクの革命の特質と、世界革命戦争の不可避性・陣型が正しく論証されるのだが、残念ながら、レーニン帝国主義論を岩田弘君と共に放棄する千葉君には、現代帝国主義のゲの字も出てこないわけです。

ローザは、「非資本主義ウクラウドの分解を原動力にして、資本蓄積は実現され生命力をもつたから、非資本主義ウクラウドが分解し尽したら、資本主義は生命力を失ない、自動崩壊する↓この関連があるが故に、逆に帝国主義は農業・後進国の植民地化に死活をかける」と、マルクスの蓄積論を歪曲しつつ、レーニンの帝国主義論とは、全く異質の左翼日和見的な資本主義自動崩壊論を展開したわけです。

ローザや岩田に 紛飾されて登場しただけのことなのです。確かに、中共の場合は、社会主義をプロ独まで含んだ広義の規定で使用し、他方では、厳密な意味での社会主義の段階にも、階級・階級斗争・プロレタリア独裁が存在すると主張している点で、我々を若干とまどわせるわけですが、ペダンチックな文献解釈学に沈溺するのではなく、革命的現実主義の観点にたつならば、この規定の意味は、反動的な意味合いにはなく、革命的な意味合いに受けとれるものです。この中国の「プロ独」社会主義論に文献解釈学的に反対し、十全大会、中国人民外交はおろか、中国プロ文革にまで反対し、「ソ連社論」を否定する人々は、まさしく、対真忠行ばりのスコラ論者であるわけです。社会主義を広義に解して、プロ独まで拡張すること自身は、レーニンもやっていることだし、問題はないわけで、「社会主義(厳密な意味での)の下で、階級・階級斗争・プロ独が存在するのか?」とするならば、「それはどういう意味に於てか?」という点で問題が残るわけです。この点について、我々の考へを述べておきます。

④ 過渡期世界の中で、権力奪取したのち、プロレタリア国家では、プロ独期を経て、生産手段を共有化する段階(ここでは、生産手段の共有化は、集団所有ではなく全人民所有と規定しておこう)に到達することは、十分理論的に考察し得ることです。社会主義の最大の規定は、生産手段の共有化を指す以上、生産手段の共有化は社会主義の段階の開始を意

味すると解してよい。この点で、過渡期世界の中では社会主義に到達することはできない、とするのは議論です。

① 本来、純粹理論上、規定される社会主義は、階級・階級斗争も存在せず、プロ独も必要ない社会であり、経済学上は、生産手段の共有化をもって、全ての労働は社会の下に、単一の共同労働として組織されるわけで、個別労働が直接の総労働の一部を構成している以上、商品・商品交換・価値法則・価値関係は消失している社会です。

しかし、この社会主義は実態的には、資本主義から、純粹理論的に否定的に抽象された社会であり、これは、實際的には国際帝国主義の打倒された後の、最も高い段階の（共産主義の入口の）、純粹な世界社会主義としてのみ想定される。

② 過渡期世界の生産手段（全人民）共有化後の社会も、勿論、このような社会主義の特性をもっているし、また、もたなければならぬのですが、それは、世界社会主義ほど、純粹に成熟したのではなく、不純で、低段階の特質を刻印されざるを得ない。

何故なら、国際帝国主義の包囲・競合下にあり、対外的には、プロ独を解除するわけにはいかないこと、また、そればかりか、低生産力で、賃金奴隷制（生産手段の私有と労働力の商品化に基づく、奴隷的労働による剰余労働の搾取）は消失したとはいえず、資本主義から生れ出たばかりであり、資本主義的社会関係が上部構造の面で残存しており、これが国際

会の如く、まだ、全面全人民所有ではなく、集団所有を残している社会では、一層、このような特徴は強くならざるを得ない。

従って、中国式的社会主義の概念規定の下では、一層「社会主義下、二つの道の階級斗争」を強調せざるを得なくなる。この点で、中共の対応は正しい。——その路線上の反米民族主義の世界革命の問題はあるにせよ。

③ 我々は、このような「社会主義の下での擬制的階級・階級斗争の存在」という、特異な事象からの、概念上の混乱を避ける為、このような低段階の不純な社会主義を、生産手段を共有化した後の、高度なプロ独社会、としても間違ではないと考える。いずれにせよ、千葉君の如く、内実を理解せず、概念規定でイチャモンをつける、反スタロツキズムを排し、中国共産党の実験的な創造的闘いの内実を理解し、これを支持してゆくことが眼目なのであり、「継続革命」と「社帝論」を支持するならば十分一致し得るのです。

④ 後、反スタロツキズムへの反撥と克服の努力のあまり、完全に毛沢東思想に溶解した花園同志や（しかし、このような行き過ぎは一定の必然性をもち、理論・路線の忠実な防衛から生れるもので、あらためるか否かの問題です。）「世界史的第三段階論」と称して、第一テーゼのみをゴジラ化して強調する、一時期の高原同志の見解など、「過渡期世界論」を発展すると称して、毛沢東思想に転向していったり、

帝国主義の包囲と結びつき、生産力の変革（その最大は労働者・人民）、上昇と、生産関係の共産主義的変革が統一的に——つまり、世界革命の根拠地化と継続革命——推進されたとしても、なお反作用し、生産関係を把え、部分的・一時的な資本主義生産関係や、基幹的な経済的基礎をもたないといえ、明確な資本主義的特質をもった擬制的階級との、擬制的階級斗争が展開されざるを得ないからである。（この擬制は、超資本主義的・超階級的な性質のものではない。）

従って、これらの擬制的な階級・階級斗争を消滅させる意味でも、プロ独は存続されねばならない。いわんや、正しい路線が貫徹されなかったならば、国際帝国主義の包囲と融合した残存する資本主義的社会関係は、下部構造たる生産関係を把え、局部的・一時的な性質から、全社会的な国家資本主義へと、社会主義から資本主義へと内側から変質してしまうし、資本主義と階級・階級斗争が逆転、復活してしまうので

それ故に、「社会主義か、国家資本主義か」を分つ分水嶺は、世界共産主義に向けて、対外的根拠地化と対内的共産主義継続革命が、「二つの道の階級斗争」として正しく展開されているか否かになるのです。この点で、ソ連は国家資本主義、政治的には社会帝国主義なのです。

⑤ 以上、過渡期世界の社会主義の下での、擬制的な階級・階級斗争やプロ独の必然性を理論的にみてきたが、中国社

教条化したりする傾向がありますが、今は詳しく論評する必要はない。

⑥ 「12・18路線」その後と、赤報派の残された問題点以上、第三章、第四章を通じて、「十二・十八路線」に於ける「反スタマルクス主義批判」「一向過渡期世界論批判」なる、内容を検討し、批判してきたわけですが、それは大きく概括すれば、

① 「資本主義批判の獲得、反スタマルクス主義批判」を掲げた一定の正しい志向が含まれていたにもかかわらず、7・6以来の日和見主義、我々と日向派との間で右往左往する日和見主義の中間主義折衷主義故、その内実は、ML主義を正しく復権できず、中間的な反スタマルクス主義の域にとどまってしまい、むしろ、その「資本主義批判」に於いて、「剰余価値法則、賃金奴隷制批判」の最大の階級的党派性を投げ捨て、これを資本主義の一特質たる「労働と所有の分離」にすりかえ、これを機軸に弁証法的唯物論、史的唯物論にもわたって、ML主義を修正していること。マルクス主義の一つの新しい修正主義の志向に結果してしまっていたことを指摘してきた。

② 「一向過渡期世界論」の歴史的意義と内容を評価するといいつつも、この革命理論に内包されていた革命的リアリズムの立場にたつ、現代帝国主義の解明や、後期レーニンや

毛沢東思想—アジア共産主義—民族解放社会主義や根拠地化
→ 運 統 革命を評価する観点を、左翼空論主義的に清算してしま
まい、「世界プロ独」を理念主義的に強調し、「民族共産主
義批判」「連邦制批判」などを空語的に主張し、反スタ・ト
ツキズムの空論主義をよりゴジラ化してしまったこと。「一
向過渡期世界論」はここに於いて、資本主義批判を通じて、
思想的綱領的に再構成されつつ継承発展させられることなく、
逆に、その負の側面としてあった反スタ・トロツキズムの残
滓が不幸にも継承され、肥大化されてしまっていることです。
◎ 実践的には、「労働と所有の分離」論から導いた召換
主義の組織戦術路線と、権力斗争、党としての斗争抜き革
マル主義的な、「スタ・反スタマルクス主義止揚」と「二派
止揚、八派解体」のスローガンにみられる如き、党派解体斗
争至上主義として表現され、形だけは「左」、実際は右の、
「左」翼空論主義の召還主義の体系をつくり出してしまった
こととなります。

要は、彼等の対応は、七〇年の動きにも鮮明なように、赤
軍派と革左の尻にくっついて、我々の斗いを評論したり、あ
れこれとケチをつけて、彼等の知的俗物主義を満足させるだ
けの代物にすぎなかったわけです。尚、この連合派の醜悪極
まる寄生的太鼓持ち路線に影響されて、「一向過渡期世界論」
への不満を、彼等の批判を借りて、跳梁し始めたのが、我が
八木同志等一部の清算主義の諸君だったのです。

義の路線総体を、全的に総括することはできず、大衆運動主
義を無原則に賞揚し、プラグマチックに清算してゆき、この
改良主義・合法主義・サークル主義の側面を多分にもった路
線を、正当化する為に、八木沢君達は、その後、レーニンの
「帝国主義経済主義批判」や、「最小限斗争、民主主義斗争
の強調」を拝借し、さも新発見をしたかの如く展開してゆく
わけです。また、我々の問題意識を吸収しつつ、「反スタ
トロツキズム批判—毛沢東思想の評価」等の観点をプラグマチ
ックに主張したりしてゆくわけです。烽火派の諸君は、関西
ブンド生来の大衆運動主義と、現実主義的感覚をもって、ま
がりなりに、運動—組織建設を継続してきているわけです
が、貴君達は、7・6以来、そして、十二・十八路線の日和
見主義路線を正しく総括し、現在の一定の妥当性も含んだ、
プラグマチックな曖昧な、漠然たる路線を、正しく否定的
に位置づけなおし、再編成してゆかない限り、いぜん合法主
義、改良主義、サークル主義を脱皮することはできないの
です。むしろ、一定の戦斗性を七一年秋に発揮する対応を示
したのは——といっても、部分的で、諸手をあげて評価する
性質のものではないが——神奈川左派のグループだったよう
です。（彼等の戦斗の中心部が、現在爆取攻撃と対決し苦斗
しています。）何故なら、彼等は、まがりなりに、「過渡
期世界論」を評価し、これと結合せんとする志向をまだ失っ
てはいない部分があったからです。しかし、彼等は、赤報グル

ともあれ、このような特質もっていた、「十二・十八路
線」は、思想問題や政治—綱領問題に切り込む性質の路線で
は全くなかったが故に、七〇年安保大会戦の大昂揚、頂点に
於て、何ら有効に対応しきれない性質のものではなかったの
です。それ故に、この日和見路線は一年を待たずして、パンク
していったわけです。

まず、獄中では、毛沢東思想やゲバラ—カストロ路線を評
価していた仏君は、持ち前の無定見と個人主義のサークル根
性故に、出獄するや一転して「毛沢東思想反対」を掲げて、
離脱していった。更に、榎原君や八木沢君等の対立が生じて
いったわけです。この対立、分裂は、全く革命的・階級的意
義をもった分裂ではなかった。つまり、要は、彼等の日和見
主義を従来通りの形態では、七〇年秋の昂揚を前に、陰蔽す
ることができなくなると、赤報派の如く、従来通り非武装・
非戦斗の召還主義に徹する意見と、大衆斗争に接点をもって
いる部分を中心にして、これに反発する部分の、武斗や「革
命戦争」路線を公然と放棄して、大衆運動をプラグマチック
に、なり振り構わず強調する部分との対立であったわけです。
七〇年の安保大会戦の最後にして、最大の決戦期に対して、
真正面から革命的に対決してゆくことをめぐって分裂したわ
けではなく、この決戦を如何に避けるかをめぐって形成され
た、情けない限りの分裂だったのです。烽火派は、十二・十
八路線の修正主義、反スタトロツキズムの空論主義、召換主

イブの反スタトロツキズムの空論主義、修正主義経済学、召
還主義路線を批判しきれず、——とりわけ、毛沢東思想に対
して、断乎たる評価の立場をとることができず——党的統一
性を保持できず、崩壊せざるを得なかったのです。

仏派は、その後も鳴かず、飛ばずで、運赤敗北総括をめぐ
り、「一向過渡期世界論」や「連赤総括」を正しくやれず、
何も学ぶことができません。我々の総括論争に介入しようとして、
大火傷をしてしまい、昨年、仏君達と羽山君達、中間派等に
三分解してゆく始末です。

また、日向一派も、連赤が遭遇した階級斗争の地平の前で
自らの反スタトロツキズム—反スタマルクス主義に自信を失
ない、革マル程の右翼反革命に徹することもできず、右往左
往することによって、「五月協議会グループ」や「国際主義
委員会グループ」等に四分五裂し、低迷し、結局は、自らの
存在意義が、赤軍派への右翼的寄生であったことを明らかに
したのです。

恥も外聞も感じない程、非マルクス・レーニン主義に徹し
ている叛旗派の諸君は、小ブル学生層にへばりついて、「自
立社学同」の伝統の余命を保っているわけですが、大衆運動
感覚だけは評価するにせよ、この先、彼等は、どんな情勢が
到来しようとも「国家の止揚、真の〇〇共同体の建設」とかの、
共同体論を十年一日の如く唱えるだけで、大勢には少しも影
響する存在ではないことは確かです。

以上の「十二・十八路線」以降について概観したわけですが、この背景の中で、赤報派のその後の動向をより詳しくみていけば以下です。

④ 榎原君は、ますます召還主義に転落しており、小デューリングか、小黒寛を気取って、実践と完全に遊離した、ベダンチックな文献解釈学に耽溺している。このことは、赤報派の革左への反論の中でも明瞭にうかがえます。(その反論のベダンチズムの焦点ボケ性を見よ)川島君(革左)への批判は、小ブル民族主義の理論的表現として、史的唯物論、資本主義批判、共産主義論が、生産関係抜きの生産力主義になつており、賃金奴隷としての、プロレタリアートの存在が正しく解明されていないこと、この象徴としてのマルクス主義経済学の階級的党派性を「労働の社会的生産力の増大のうちに、剰余価値の定在の因と源泉がある。」という、決定的なブルジョア経済学の次元の誤りを犯していることを指摘すればいいのです。榎原君は正しいマルクス経済学を獲得してないが故に、川島君を正しく批判できず、「スターリンの文献と関連があるか、否か」「古典を修正しているか、否か」の愚劣極まる議論に陥し込んでいるのです。(この点は論叢 46四参照)

⑤ 現代過渡期世界—日本資本主義の具体的・内的な分析が全くない。具体的な「革命戦争」の綱領や戦略・戦術を獲得しようとする志向が、召還主義故に全くない。

ではあれ、正しい見解ではない。

⑥ 「肅清を代償とする銃撃戦支持」と称して、銃撃戦支持に名を借りて、肅清を実質的には、美化・正当化してしまつてゐる。また、この主張でもつて、自らの小ブル性——これは「資本主義批判」の強調の名の下に隠蔽され、いまは全面化されていないが、その資本主義批判そのものの間違いからして、また、具体的な過渡期世界—日本資本主義批判の欠如と、これからくる綱領・戦略の欠如、統一戦線や七〇年代革命勢力との未結合等からして不可避です。——を正当化してしまつてゐる。七一年階級斗争の具体的分析や小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への主体の止揚の問題等、Mし主義の立場、方法、観点に立つ分析がなされていない。にも拘らず、傲慢にも自らの七・六以来の日和見主義を棚に上げて、「赤軍派」ドブレ主義の、党建設の欠如、中央集権思想の欠如」等の事実無根のデマを吹聴してまわり、連赤以降は、私に、「調停主義だ」とか、「スターリン主義への屈服だ」とか、「転向した」とか、階級の利益を見失つたような小ブル傲慢主義の、反赤軍派キャンペーンにウツツを抜かしている。

赤報派の諸君は、赤軍派の危窮につけこみ、私達が獄中にあることをいいことにして、「言いたいほうだいの、非戦士的言辞を吐きまくってきたが、このことにも限度があるということを思い知るがよい。榎原君は、愚かにも獄中に入つて、

⑦ 空論的な「世界プロ独」や「民族共産主義批判」「連邦制批判」の言辞の継続、このことでもつて、民族解放社会主義(パレスチナ革命等も含む)や毛思想等アジア共産主義を評価せず、小ブル傲慢主義で否定する、全くの一国主義、プロ国際主義精神の喪失。

⑧ 七〇年代革命勢力の分析とその指導路線を究明せず、これらの勢力と結合すべく、前面にたつことを恐れ、烽火派批判等に名を借り、「民主主義路線」とかと称し、階級斗争から召還することを正当化する。

⑨ 「PB||YB、RG||政治軍隊」とかの商標を売り込んでゐるが、これは、名目的には我々のゲリラ路線の影響の名残りに過ぎず、実際は、サロマルキストの、ベダンチックな売文・宣伝集団以上の域をでてないし、実際何もやつてはいない。

「軍事組織の非合法党」は、軍事一本槍のゲリラ路線の反映であり、党を軍事組織に一面化し切るのは、やはり間違ひです。PBがYBを直轄指揮し、党の中枢が地下化、国際化することに核心があるのであり、また、プロ人民の戦略的な正規軍化を目標に、これを特殊に促進し、独自に闘う党員で組織された軍を組織することが眼目であり、これを保持した上で、地区党や工場、地区学園の細胞は建設、維持されるべきです。「スターリン経営細胞論批判」と称して、地区党の活動を否定するのは、自らの召換主義の正当化をめざすもの

初めて、反省するというような愚を犯さないようにし給え。

⑩ 赤報派の諸君は「革命戦争派の中で現在の地位を築いた」と自己宣伝し、自己が「革命戦争派」で「しかるべき地位を築いた」と思つてゐるらしいが、一体誰が認めるであろうか? 一体、君達は何を斗つてきたのか? 人民に対してどんな利益や教訓を献じたのか? 君達の行為で、衆目一致して認めるであろうことは、連赤敗北後の我々や革左の窮状につけこんで、デタラメな言動を、「党派斗争」と称して吹聴し、赤軍派と革左(神)の両組織の特別寄生評論家集団たる役割を果たしてきただけのことではないか!

「革命戦争派」として認めてもらいたいのなら、また、ひとかどの指導力を発揮することを望むなら、まず、何よりも貴君達は、尊敬すべき戦役を展開すべきです。その資格を獲得してない以前には、大口をたたかず、少しは謙虚に、節度をもつて発言すべきです。

第五章 八木同志等、清算主義のメンシェヴィ

キの黒い「臨総パンフ」を批判す

第一節 八木同志等と豚小屋パンフ||「臨総パンフ」の全面批判を開始するにあたって、

我々は、これまで、主要には、赤軍派の外の部分からの反赤軍キャンペーン、赤軍派破壊活動を、主に連合ブンド十二

・十八路線と赤報派（或いは烽火派）の批判というかたちで反批判し、一掃してきたわけですが、次に、同盟内の八木同志等、清算主義のメンシェヴィキのグループを八木同志等、一時の安らぎを得るために、日々礼拝している、メンシェヴィキの大殿堂たる臨総パンフを中心にして、批判してゆくことにします。我々が、この清算主義批判に劈頭（ヘキトウ）から臨まなかつた理由は、この豚小屋パンフ「臨総パンフ」が、これまで検討してきた、ありと全ゆる反赤軍派の全ての傾向、論理、論点、思想性、心情、批判の方法等を集大成した——部分的には、八木同志によって、より適当に調査され、よりその臭気の威力が強められている——反赤軍派の、赤軍派破壊の大殿堂たる性質をもっていること、従って、このパンフの背景、地盤を、まず批判的につき出し、粉碎し、清算主義の糧道を断つておく必要があつたこと、また、陰や陽の、直接・間接の、清算主義の「左」右の援軍を、殲滅しておく必要があつたからです。また、副次的には、メンシェヴィキの筆頭の八木君を始めとする諸君が、これといつて階級斗争に貢献する何程かの創造力を持っていたわけではなく、日和見主義者達の、数々の日和見主義の理論、路線のツギハギをやっているにすぎないこと——しかも、多分に「赤軍派の敵は、自分達の味方」の如き、「友敵論」を援用しつつだ——創造力の貧困を、他党派のおこなっている赤軍派批判をツギ

れているからです。

我々は、これ程の執念をもつて、共に斗ってきた同志に、罵詈（バリ）雑言の限りを尽す能力に驚嘆を禁じ得ないくらいです。しかし、真剣に殺された同志とプロ人民に、誠心誠意自己批判せんとする我々の態度につけこみ、「今は、どんな無理難題をいっても承認する」と浅はかに考え、自らの自己批判を棚上げて、傲慢の限りを尽すことができた時期は終りつつあることを君達は思い知るがいい。もともとからしても、君達が、我々に何かの優越感を感じる理由など、何一つ持ち合わせていないのですから。

この臨総パンフの大毒草中の大毒草たるゆえん故に、この豚小屋臭気汚物（へきき）を、これまでその中に入り込むことをせず、外側から、我々の同志達は、日和見主義と決めつけ、これに、革命戦争（それは、往々にして小ブル革命戦争であつた）を対置し、こと足れりとした、余り説得力のない不十分なもの——それ自体は正しいのだが——対応し、切れなかつたのも、あながち無理もない話なのです。しかし、我々は、このような対応に甘んずるわけにはいかない。しばし、同志諸君は、一大奮気し、臭気をこらえ、豚小屋内部招待に、勇躍してついでに欲しいと考えます。

この豚小屋攻略を開始する前に、同志諸君に、我々の清算派IIメンシェヴィキや党再建II党建設に向けての党内斗争に対する態度を明らかにしておきます。

ハギした、ポロ旗でおおい隠していることを確認しておきたかつたからです。

これには、これまで赤軍派と対抗関係にあつた、連合ブンド諸派や日向、叛旗グループですら、否、権力ですら涙を流して感激する程の代物であつたことを確認しておきたかつたのです。八木同志は、この点に於て、権力や連合ブンド諸派から、赤軍派批判の集大成たる百科事典をつくつたという点で——さすがの彼らも、これ程には、徹底し、しかも鮮明には、我々に敬意を払っていたが故に、右翼反動には徹しきれず、やりきれなかつた——功労者として表賞されるに足るわけです。

とまれ、我々は、かかる前段工作は一応やり遂げたので、いよいよ、同志、斗う労働者人民から強い要請を受けてきた、清算派IIメンシェヴィキの批判、「臨総パンフ」批判に入ります。

この豚小屋パンフを批判するには、それ相当の覚悟と力量がいります。というのは、この豚小屋に入つて、その内部構造を調査し、解体しようとするに際して、余りにも強烈な悪臭、腐臭ふんぶんで、窒息させられそうになり、下手をすれば足をとられて、糞まみれになってはい出すことすらできず、遭難してしまいくらいの、メンシェヴィキの日和見主義の魔力がたちこめてくるからです。同志八木のこれまでの半生をかけた、日和見主義のウン蓄が、執念をこめて、たつき込ま

① 我々は、清算派が自らの清算主義のメンシェヴィズムを自己批判し、清算しない限り、二回大会以降も同志と呼び合い、共に協力し合つてゆけるわけがないと考える。この点で、現在知る限りの清算主義には、我々は何の幻想も持っていない。従つて、我々は、小ブル革命主義の教条主義（小ブル革命戦争の左翼反対派）の諸傾向が、ほぼ克服されつつある現在にあつては、最大の党再建の闘いの要は、清算主義のメンシェヴィズムの克服におくべきである。我々は、これまで責任をもつてきたし、今後も我々流に必要に応じた責任をとるつもりですが、清算主義の指導的同志達は、自らの犯した誤りの種類や、党におよぼした損害の程度に応じて、それ相当の自己批判と処分を受けねばならないでしょう。我々は、君達が必要な自己批判を行うならば、心から、今一度同志として迎えるでしょう。また、清算主義の路線に従つた、かつても、今も、これからは同志である下部同志達は、その事情を自己批判的に誠心誠意説明することを要求する。最早、革命に意欲を失い、斗志を失つた人々には、我々は誠心誠意離党を勧告する。

我々の党再建の義務は「プロレタリア人民の利益のみ、革命のみに妥協する」という原則に立つて、一切の法標を捨て、清算主義批判に全力をあげることが義務であると考える。これこそが、現在、清算主義のメンシェヴィズムに侵されている同志達への真の連帯だと考える。

④ 我々は、しかし、清算派の人々を、なお現在同志の呼称をつけて呼ぶ。それは、清算主義の路線に一抹の敬意を払っているが故ではない。また、組織的慣習故でもない。(この意味では、旧PBや「臨時CC」がその内実を備えているとは、全く考えられない。)

主要な理由は、我々が未だ完全には、彼等同志の可能性の有無を最終的に確立する、諸条件や資料をもち得てないという、消極的な理由によるものです。

今一つは、我々には安易に訣別したりしてはならない——子供っぽい、学生運動の諸サークルの如き——それ相当の重い歴史があり、使命があるからです。分裂を喜ぶのは、——といつても、要は清算主義の党からの放逐以上の事柄を意味しないし、大げさに分裂という程のことでもないのだが——他でもない、資本家共と国際帝国主義者達であり、プロ人民はなるだけなら、赤軍派が革命的力量を発揮し、その熱い革命的感化力によって、清算主義を溶解してしまい、ガラだけ吐き出してしまふ、六九年七・六を完璧に乗り越える方途を望んでいることを、よくわきまえているからです。それに清算派の問題とは別に、党再建の複雑な行程の中で、「中央委」に結集していかざるを得なかつた同志達もいることですし、また、我々は、党再建の過程、最早革命に意欲を失い、闘う氣力を衰弱させてしまつている人々には、組織にとどまつて腐敗、墮落してゆくよりはよいと考え、誠心誠意離党を勧告

と共に斗つてき、しかも今後も斗おうとしている革命的勢力に敵対し、破壊活動を続けることになるからなのです。

第二節 小ブルメンシェヴィズムの立場・方法・観点の

全体像を暴く。

① メンシェヴィズムを全面的に分析・批判する必要があること。

清算派との論点は、全面的で多岐にわたります。我々は、全面的に全ゆる方面で、清算主義の日和見主義を完全に一掃してゆかなければならないわけですが、その為には、清算主義の全構造を全面的に対象化し、その全関連を明らかにし、それに対する批判の基本的立場・方法・観点を鮮明にして、この機軸のもとに細部の論点も全批判体系の一環として適確に批判してゆく対応をとるべきです。清算主義の全面的な批判・分析ができれば、最早この本章の課題は、九割方、実現されていったようなものです。

清算主義のメンシェヴィズムは、もともと連赤敗北が露呈される以前から、同盟内に既に発生し始めていたわけですが、これが一定の力を得たのは、何はさておいても、連赤——「新党」の敗北を契機にしての、その後からです。いわば、清算主義のメンシェヴィキの立場、方法、観点をもつて、連赤敗北を総括することによって、それまで潜在していたメンシェヴィキ勢力を浮上させ、統合せんとしたわけです。といつて

し、一番害悪を流すことが少ないように処分することが必要と考えています。従つて、清算派の同志達は、我々のこのような態度をもつて、また、これまで、最大限、次元の低い批判は避けてきたことをもつて、我々が君達の黒い路線に同調していたなどと、或いは、批判できなかつたなどと見当違いをし、優越感にひたらないで欲しい。また、我々は、君達が最後まで悔い改めない場合、君達の断乎たる組織からの放逐を、何のちゅうちよもなく行つて覚悟があることも理解しておいて欲しい。以上を踏まえた上で、我々の批判に真剣に対処して欲しい。骨のある水準の高い、革命的情熱のあふれた反論を期待するものです。間違つても、先進的労働者人民にひんしゆくを買うような、口先だけの対応はしないで欲しい。君達は、既に赤軍派の礎きあげた評判を地に陥しめてしまつた。だが、これは、仮りに内輪の問題として一步譲つて見過ごすとしても、許されなないのは、六九年以来、^{めい}壁々として礎きかれてきた革命的勢力の斗いに唾を吐きかけ、侮辱し、この成果を台なしにする、革命の利益を損なう行為をしてきたこと、これはなんとしても償わなければならない性質のものであるが、その償いもせず、その反対に、我々の論争の中で、一時の感情や論理のおもむくままに走り、害毒をまき散らすなら、取り返しのつかない事態が生れること、君達は、烽火派や怒濤派の水準に、そのまま何の曲折や風波も経ないでとどまつておられると思つたら、全く甘いのです。君達は、我々

も、いまだ同盟総体から考えれば、極く極く少数派にすぎず、連赤敗北後のドサクサにまぎれて、清算主義の路線やためめの臨時總會をデッチ上げただけのことであり、革命的諸同志の大半が獄中や国外にあつたこと等を条件にしているにすぎず、彼等がのさばるのも時間の問題なのですが、従つて、我々は、清算主義の全構造を体系的に解明してゆこうとするならば、その機軸に、彼等の連赤敗北の総括の基本観点を抽出、分析することをすえねばなりません。

② 「小ブル性の克服」を觀念論の絶対論でとりあつかうまやかし。

清算派の総括の視点は、連赤敗北におけるその思想面の「小ブル性」を、無媒介に、觀念論的、特殊に歴史的階級斗争と路線の関連・関係から切り離してとり出して、「小ブル性の弱点が少しでもあれば、必ず連赤——新党敗北の如く同志殺しになる」と、共産主義化||肅清を、小ブルの恐怖をもつて、右翼的に否定し、「小ブル性が残っている限り、武斗はやるべきでない」と主張し、資本家共や権力の「武斗をやれば必ずあなる」という論理と、同一基調の主張を展開することです。つまり、「何故に、主体の小ブル的要素が、あのような共産主義化||肅清に発展していったのか」を、具体的な七一年階級斗争を中心にして、客観的条件・主観的条件の分析の中で、史的唯物論と弁証法的唯物論に従つて、科学的に解明するのではなくて、一切の媒介抜きに、その小ブル

性を、「赤軍派」をはじめとする諸個人の資質の問題として、観念論的・形而上的のうちに押し出してしまうわけだ。この限りでは、清算主義と、森君連連赤指導部は、「左」右の相違はあれ、小ブル性、思想性、倫理性、組織性、作風等を、一定の天賦の問題として、決定論的・宿命論的に把える志向の点で同質なわけだ。

このように、小ブル性を観念論的・形而上学的に把えるが故に、小ブル性は絶対的範疇に昂められて抽象化されてしまっている。「小ブル性の克服」は、観念論の絶対論として問題とされ、唯物論の相対論として取り扱われなくなってくるわけだ。

このような、「観念論の絶対論」の見地にたつ、「小ブル性の克服」のまやかしの論理は、小ブル性の克服は常に相対的な課題でしかない以上、武斗は永遠のかなたにおしやられてゆくわけです。また、前衛党建設にとって不可欠の鉄の規律の志向は、「鞭の規律」の悪例を強調して、完全に無視されてしまっています。ここから、資本と権力の論理たる「武斗をやれば必ずあなる」と同一基調をつくり出してしまおう。

また、連赤敗北を契機にして、革命的同志の内省的な自己批判の姿勢につけこんで、戦斗的、革命的同志達の誠心誠意の自己批判を悪用し、種々な種類の、また種々な程度の「小ブル性」に対して、その克服を「絶対的克服課題」として要求し、この告発をバネにして赤軍派のこれまでの実践と理論を、全面的に清算してゆくよう「命令」するわけです。まさ

に、精神界の法王としてだ。八木同志は、思想界に君臨する唯一絶対者であるわけなのだ。

このような「小ブル性の克服」をめぐる、連赤総括に關しての思想問題、思想斗争に対する、代表的な意見を検討してみれば、例えば、千葉君などは実質上、連赤「新党」指導部の観念論の絶対論に基づく、「小ブル性が克服されない限り、武斗は開始できない」に従って、「小ブル性」を所有する同志は肅清すると倒錯して、プロレタリア革命派の同志を殺した」対応を、事実上容認して、他方では、八木君等は、「小ブル性が払拭されない以上、武斗はやるべきでない」という、同じく観念論の絶対論の観点にたつて、赤軍派の理論と実践を清算していつていること、これら二つの意見対応は、「左」右の相違はあれ、同じ次元の対応です。革左（神）の対応はどうか。彼等は、「共産主義化」「肅清」の本質的性格を見破れず、「社会主義革命派の反米愛国派への内ゲバを正当化する」「ベテンの論理」としてのみ把えることによつて、この「小ブル性の克服」の観念論の絶対主義の見地を許容してしまっていること、このことは、「論叢」第四で証明したつもりです。なお、三者はいずれも「共産主義化運動」が、階級斗争の転換に見合う、主体の側の路線転換の疎外化形態であるという、本質と疎外形態の関連がしっかりと把みきれず、殺された同志達を侮辱してしまっています。

抽象的な「小ブル性一般」を、連赤敗北の「囚」とするこ

とによつて、具体状況の具体的分析に基づく小ブル性の分析でないが故に、彼等にとつては、小ブル性と名のつくものは、一切が恐怖の対象となる、このような奇妙な精神構造は、単に彼等の観念上に於ける誤りによるものだけではない。まさに、彼等が、連赤敗北の恐怖におびえきつてしまい、冷静にマルクス・レーニン主義の観点で事態を分析できず、あわてふためき、

また、連赤敗北以前に口先だけの革命戦争をガナリ立てていた裏側で、腐敗と墮落、裏切りの日和見路線が醸成さねていたことに根拠をおくのです。「身をけずりながら斗つたのに、何の報いもなかつた」（「序章」の八木同志の言）という、小ブル自由主義インテリの「挫折」感をふりまき、周囲の革命的部分を意気阻喪させ、一切の責任を「赤軍派」の資質」に求めつつ、「赤軍派の政治生命は終つた」「赤軍派は解散すべき——赤軍派を連赤敗北とともに埋葬する」「七・六を契機とする赤軍派結成は誤りで、連合ブンド諸君に自己批判する」とあらぬことを口走り、左翼ゴロにまで成り下がりがつたSや、~~某~~サ

ークルの連中や、烽火、その他の連合ブンド諸派に媚態を呈すといった、あきれ返り、革命的同志を呆然自失させるような、度し難い裏切りをおこなつた。これは、保釈後の逃亡という「裏切りの展望」の上に、まさに権力に首根つこをバッチリおさえ込まれる中で提起されていったという、舞台裏の事情も我々はしつかり踏まえておく必要がある。

③ 小ブル思想主義と講壇マルクス主義とその背景。

八木同志等、清算主義者の観念論の絶対論としての「小ブル性の克服」の方向は、特徴的には、小ブル自由主義インテリゲンチヤに特徴的な方向です。

これらインテリゲンチヤは、生産的労働、階級実践、科学的実験の現場から遊離した、浮遊的な存在であり、主要には、観念的な精神労働が主要な活動形態であること、それ故に、思想を、弁証法的唯物論、史的唯物論に基礎をおく、唯物論の反映論（能動的な）としての認識・綱領・組織・戦術の総体に於て具体的に把え、また、階級・階級斗争の反映として把えるのではなく、神秘的な決定論的天賦の存在として、超階級的に絶対化して把えること、思想を観念論的に絶対化して把え、「思想」万能主義の作用が習性化しており、我々はこれを小ブルインテリの小ブル思想主義とも命名できる。

現代においては、思想とは「マルクス主義」であるが故に、このような連中はマルクス主義に傾倒するわけだが、彼等は実践がないが故に、マルクス主義の活学活用がなし得ず、マルクス主義が実践と切り離せなく、階級性（イデオロギー）と科学性（認識、認識方法）との統一であるにもかかわらず、これをイデオロギー主義的に一面化して把え、ML主義を経典化し、文献解釈学に熱中し、その片言隻語の覚え込みに熱中し、マルクス主義を講談にかえてしまっています。つまり、小ブル思想主義は、マルクス主義の思想の分野では講壇マルクス主義としてあらわれ、かつ、小ブル自由主義インテリと、

講談マルクス主義とは好一対なわけです。この小ブル思想主義の典型に、吉本の「自立論」や黒田の「プロレタリア的人間の論理」等の形而上学があるわけですが、八木同志はサルトルー吉本の「自立論」―日共的講壇マルクス主義を身につけ、今や、その思想的栄位を「部落解放」「在日アジア人問題」にまで発展させ、我が日本の思想界の法王として君臨せんとしているわけです。

「小ブル性の克服」の観念論の絶対論としての提出たる、小ブル思想主義は、小ブル性を唯物論的に相対的に把えないが故に、逆に、これを敵・味方を越えて絶対論の次元で展開するが故に、敵対矛盾と人民内部の矛盾の区別がつかなくなり、人民内部の矛盾や、斗う主体の相対的弱点を絶対化して、敵対矛盾化して把え、その帰結として否認してゆくが故に、全て清算的に否定されてゆくわけです。連赤総括の否定面での基準を、観念論の絶対論の見地に立つて、「小ブル性の克服」においてが故に、当然にもこの克服の絶対的基準が捻出されざるを得ないわけで、まさにその対象として、講談マルクス主義が導入されてくるわけです。最初は、これもつと矮少化されて、「レーニンの学習ができてなかった」「レーニン主義のねまわしがなかった」(「再生に向けて」64)などのたわけた主張としてあったのだが。

このような総括方法の前提には、我々が小ブル性に対して、或いは「非マルクス主義性」に対して、これを前進的、継承的、軍事的天才、卓越した行政家としてたち現われるわけです。ちようど思想界で八木同志が法王的地位を獲得したように、この方面でも空前絶後の大天才を発揮するわけです。

彼等は、大天才を大いに発揮して、我々の歴史に対して、罵詈雑音の限りを尽すわけです。いわく、「ロマン主義」「急進民主主義」「急進的コスモポリタニズム」「小ブル民族主義」と「他民族利用主義」「肉化主義」「単純な権力斗争主義」「プロレタリアから独立した権力斗争」「権力問題を軍事問題に直接実態化してゆく」「観念論の半無政府主義」「大言壮語はあっても徹底したリアリズムはない」「戦斗の気分を拝跪する」「軍事力学主義、戦術左翼、類型主義、形態主義」「自然成長論と主観主義の理論的基礎」「ベトナム解放軍の日本分遣隊としての一握りのゲリラ」の否定、「あるべき理念や自己の気分や願望に基づき、頭の中でねりあげられた計画の実現の方法」「小ブル的浮動性」「斗争形態の世界的拡大過程として、世界階級斗争の発展として考える(？)」「世界革命戦争の否定」「ゲリラ戦だけをとり出して、ゲリラ戦の自立的発展を抽象的に展望し、アレコレ思いつく」「軍事力学と冒険主義」「時期尚早の主観的願望のみの軍事的熱中」「小ブルジョアの主体性論」「黒ヘル戦士達の斗いを、浮浪人的軍事行動」と罵倒すること」「世界単一同時革命」の否定、或いは「サークル主義」「戦斗団主義」「一つの傾向

否定として対するのに対して、彼等は逃亡的、清算的否定として対することにも現われる如く、我々も彼等も「小ブル性」や「非マルクス主義性」をとにも問題にしているようですが、同じスタートラインに立っていても、我々はこれを克服し、更に前進してゆく為の課題として把えるのに対して、彼等はこの課題の重さに驚き恐れて、合法主義の日和見主義に逃亡してゆく為のバネにする点で、スタートの方向は百八十度違う根本的に相違があるわけです。

以上の如き、清算主義の観念論の絶対論の立場に立つ、「小ブル性の克服」「赤軍派の小ブル性に問題があった。自分に関係ない。プーリンの資質が問題であっただけだ。」というような、連赤―「新党」敗北を主体的に受けとめているようなポーズをとりつつ、実際は無責任極まる責任転嫁の日和見主義の立場、そして、人民内部の矛盾や斗う主体の弱点の相対性を絶対化し、敵対矛盾化したり、小ブル性を清算的、逃亡的否定して取り扱ったり、部分的な非マルクス主義を講談マルクス主義の観点から、同じく清算的否定する方法から、次のような倒錯した、驚くべき右翼日和見主義の種々な観点が導かれてくるわけです。

④ 清算主義の清算の手法とその観点。

まず、赤軍派の実践上の総括に関しては以下です。

八木同志等清算主義者は、ここでもマルクス・エンゲルス・レーニンを上まわる、古今東西に類をみない、偉大な政治を反映する戦術左翼」etc.このように、赤軍派の急進性、革命性、「階級性」、根本的な長所たる、階級のラディカリズムとプロレタリア独裁の精神、プロレタリア国際主義の精神、権力斗争の遂行、武斗の開発、戦術の創造と駆使能力、世界同時革命・世界革命戦争、想像的展開性等は、全て憎しみを込めて、その弱点、欠陥を絶対化することによって、相対的には、革命性・階級性を有し、明らかにプロレタリア人民の斗いであることが忘れ去られ、清算的に否定されてゆくわけです。或いは、新左翼運動の、主として学生運動の意義の、つまり、「先駆性論」や「擬似前衛論」の清算的否定、これらのマルクス・レーニン主義の根本的核心を全て放棄するわけですから、後には何も残らないが故に、ほとんど革マルの「武装蜂起主義」と同じ類の反動へと墮落するのは必然であるわけです。

そして、これらの「根本的誤り」を、「赤軍」64を始めとする赤軍派の理論・路線の結果、帰結として、恣意的にきれいに整合させて説明してゆくわけです。

7・6の歴史的必然性と相対的正しい否定と、「下部につきあげられなかったら、関西に帰るつもりだった」という、指導者にあるまじき言動、大元帥の立場に立って、六九年斗争を「大言壮語はあっても、リアリズムはなかった」「政治過程論的指導」等と能書きをたれて、六九年当時の客観的、主観的条

件を考慮に入れて、唯物弁証法的総括方法の否定、国際根拠地路線や日斗争を、「他民族利用主義」の「小ブル民族主義」として唾を吐きかけ、^{林統}林統M作戦の意義など何一つ述べず、完全否定で無視しきり、6・17斗争すら否認してゆくわけです。黒ヘル戦士達の七一年秋の爆弾斗争は、「浮浪人的軍事行動」ときめつけられていくわけです。

このような恣意的、観念論的総括故に、連赤―「新党」敗北としての「共産主義化」―清浦と銃撃戦は、階級斗争の新段階に照応する、路線転換―赤軍派の飛躍の疎外化形態、及びその部分的克服形態と、正しく扱えられるわけがなく、七一年秋の過程のみは、「八木同志の浮動が極限化し、赤軍派から逃亡し、M.L.主義者」になる過程」（「序章」誌）―
―実際は、裏切りの清算主義の逃亡主義として、保釈出獄後連赤の戦線に参画することを決断できず、レーニン研や連合フンドに媚態を呈し始めていたこと―であったが故に、それをいかにしても革命的とは強弁できないが故に、この部分だけは空白にされており、自らの小ブル穩健主義とそのメンツェヴィズムへの転化が隠蔽されてゆくわけです。

また、「殺された同志達の復権」を、彼等も復権せんとするボーブはとるわけだが、いかんせん、彼等が七一年秋の第三次綱領論争―党内斗争に於て、右派―メンツェヴィズムの位置に立ち、殺された同志達と対立関係に立っており、また、彼等は内心では、連赤―「新党」の全ての同志達を小ブル革

ニズム」「ロマン主義」「急進民主主義」「小ブル民族主義」「単純な権力斗争」「主義」……という見地に立つ」「全斗争を伝統的に組織し、統率し、首尾一貫した見地と活動を確保し得ず、」「……を打鍛えてゆく」「一切のあらわれを統率してゆく」「プロレタリアの独立性、党の政治的独自性」「正規の攻囲軍」「諸個人の観点、諸個人の思想……」「現にある運動の傾向性の代表者……」「絶えざる動揺とグラツキ……」等々。何故に、このように講壇風にしな語れないのか？ 何故に、生き生きとして、情熱をこめて、人々を奮立たせるように書けず、人々をして灰色の気分のみ陥らせてゆくのか？ とりわけ、八木同志は、武斗を抑圧する方策を開発した点で、いま一つ注目されます。つまり、自らの思想や路線の不在故、空洞性故なのだが、マルクスやレーニンの権威に頼って、具体的状況の具体的分析として提出するのではなく、マルクスが武斗一般を必ずしも共産主義運動とは扱えなかったこと、レーニンの「エスエル批判」や「左翼小児病」を悪用し、「人民から独立した武斗」「軍事実態論だ」「ロマン主義だ」「エスエル戦斗団だ」等とガナリ、日共が新左翼に對したのと同じ口で、武斗を否定してゆくわけです。最近、日共と寸分たがわず「挑発者だ」という言動を発しているらしいが、こうすると、完全に日共である。我々は、マルクスやレーニンの教を忠実に守ってゆくことを第一とするし、マルクスレーニンの文献の研究と活学活用を第一とするが、これはまさに活学活

命主義の反動化した、無政府主義のエスエル戦斗団化した部分として否定しているが故に、「指導部と下部同盟員の党内斗争」（臨総パンフ）と言いつつも、一切その内容に關しては語ろうとしないわけです。この事情も、七一年秋の空白化の意図と同じ意図から生れているのです。ところで、八木同志等清算主義者が、このように、超越者的絶対者としての思想家・政治家・軍事家・行政家としてふるまえるのはどういうわけだろうか？ 答は簡単です。一つは、彼等が二〇四年前の事態を恣意的に、当時の歴史的条件を無視して、「その諸条件の中で、矛盾がどのように発生するのか」の矛盾の段階性、矛盾のラセン性、量から質、質から量、否定の否定、等の弁証法や矛盾論を駆使して、階級斗争の展開と主体の対応の全関連を、科学的に解明しようとするのではなく、「ああすればよかった」式の結果解釈の観念論の形而上学に依拠していること。今一つは、彼等の「偉大な天才たるボーブ」のゆえんは、「レーニン」の用語を訓古学よろしく覚え込み、もち出して、レーニン主義の真髓を骨抜きにして、それを、若干は脚色したりしつつ、殺し文句として多用することにあります。彼等の日頃の言行不一致を知らない人は、それ故だまされてしまうわけです。

いわく、「自己の中途半端な気分と心情の浮動」「組織的無政府性」「厳格な組織」「厳格さ、首尾一貫性」「思想的厳密さ」「頑強さ」「堅忍不拔の党」「急進的コスモポリタ用であって、如何なる主体が、如何なる目的に向け、如何なる条件で活用するかを不問に付して、マルクス・レーニン主義を、教条主義的、講壇的にしたり、利用したりはしない。八木同志等清算主義者は、まさにマルクスやレーニンの文言を利用し、その権威に頼って―自分の革命観や「権威」では、その正体がすぐあべかれるから―革命的、戦斗的同志達を変質させようとするわけだ。また、「都委員会」を名乗っていた清算主義者達は、一九〇五年のブレハーノフの有名な「武器をとるべきでなかった」を擁護しつつ、「六九年は決起すべきでなかった」とガナリたて、「赤軍派の発生そのものが間違いであった」「客観的諸条件を飛び越えた、主観的闘い」（「再生に向けて」65）「軍事力学主義」（同掲書）「馬鹿から白痴にいたる過程」（「再生に向けて」64）と、自分の言動がどんな意味をもち、どんな役割を果しているかすらわからず、ワメキたてたのであった。

⑤ 「過渡期世界論」を「批判」することによって、修正主義に転落していていること。

以上の如き、実践面での反革命的な清算的否定は、以下の如き理論面でも、同様の「小ブル性」「非マルクス主義性」のレッテル貼り、観念論の絶対論による、敵対矛盾規定化・マヤカシの方法によって、同様に貫徹される。

この、理論面での逃亡的、清算的否定は、赤軍派の立脚点の一つであり、一向過渡期世界論の重要な一結節点たる「赤

「軍」第4に向けられるわけですが、(彼等は、この文章が、赤軍派の一つの結集点であったとはいえ、主要には、「ゲバラ」||カストロ路線と我々)「我々の立脚すべき地点」―8・3論文「現代革命I、II、III」「赤軍」第8等の、有機的の一部であり、それ故、筆者は全てを全面展開し切ったり―「我々の立脚すべき地点」のように―して、尙、部分的であることを自認していること。また、内ゲバのさなか、非合法の中で、四〇五日間で、必要な資料や文献もなく、書きあげた、五年前の文章であることを、それ故に歴史的必然として、一定の弱点や不十分性、未熟性が伴なざるを得ないこと等を彼等は念頭におこうともしてない。といっても、五年前の文章が今でも批判の対象にあげられ続けていることは、我々にとっては大いに光栄なわけですが)この批判の立場、方法、観点は、我々がこれまで検討、批判してきた八木同志によって、相当脚色され、かえられてある部分もあるが、連合ブンドの「過渡期世界論批判」と同じであり、彼等が、「共産主義」14・15号から剽窃してきたことは明白なわけです。

清算派は、「赤軍」第4の弱点たる部分的な小ブル性、非マルクス主義性を―相対的にはプロレタリア的でマルクス主義的のだが―資本主義批判の深化―毛沢東思想等アジア共産主義の正しい評価―党組織問題||党建設の正しい獲得等を主要方面にして、これを克服し、過渡期世界論を再構成

世界の史的唯物論による把握の立場、方法、観点を見失ってゐること、この点で「法則主義を修正する革マルや連合ブンドと、手をあいたずさえてゐるのです。

第二は、「資本主義批判を軸にして、対象を媒介に―その批判・分析を通して―しての、科学的社会主義を科学的に証明する方法がとられず」として、得意になって非マルクス主義だと吹聴してまわっているが、確かに、価値論：剰余価値論：蓄積論の展開が不十分であるという欠陥はあるが、プロレタリアの対象たる資本の分析・批判を媒介にして、プロレタリア共産主義革命の必然性を解明する見地にたっていること、従って、この批判はデタラメである。

問題だったのは、過渡期世界は、非資本主義や、特殊なプロレタリア社会や社会帝国主義のウクラメ^{ウクラメ}を包含するが故に、これを一元的、統一的に把握しようとするならば、今一度、資本主義批判の前提たる、弁証法的唯物論や史的唯物論の解明||体得がない限り不可能であること、それ故に、三層分析の方法を提起して、初めて一元的、統一的、分析||批判の端緒についたのです。つまり、史的唯物論(の次元の世界武装プロレタリアート)の第一テーゼ、現代帝国主義を軸とする三プロレタリアの階級斗争の逆制約の能動のテーゼとしての現実形態の規定、第三テーゼとしての現状分析として、三層分析の方法をもってのみ、過渡期世界は把握できるのです。過渡期世界は、狭い資本主義批判一本槍の、資本主義一元論の経済決

しつつ、継承、防衛、発展させる立場にたつことができず、逆に、この弱点をことさら致命的弱点と誇張し、過渡期世界論のもつ、歴史的なプロレタリア的||マルクス主義的特質、意義を、全て否定して投げ捨て去ることによって、逆に批判者そのものをして、日共、革マル等修正主義者の側に追いついてゆくわけです。

第一は、「『赤軍』第4は、階級斗争を史的唯物論として、原理的に体系化、哲学化しようとした観念論であり、プロレタリアートの組織形態、斗争形態、イデオロギー形態が、何か一つの原理に沿って自主的に発展するかの如き、主張をしている」等として、黒田や連合派のスターリン批判に於ける「逆ヘーゲル主義の法則主義―法則適用論」という、不可知論の、法則不在、否定論に屈服し、史的唯物論としての、歴史的法則的展開を否定していること。マルクス・レーニン主義から「法則の科学的解明」の精神をとったならば、一体何が残るだろうか。また、八木同志は自己の、当時の藤本進治の哲学からの未解放状態を棚にあげて、それを私にまで拡張して―私は、当時、藤本進治の克服観点は十分保持していた。「赤軍」第4の第四章こそ完全な藤本の哲学ではないか―「革命の哲学」に屈服した”主体的唯物論の一形態”だという、的はずれの批判をしているが、これは君自身の問題ではないのか。いずれにせよ、清算派は、マルクス主義の史的唯物論の基本的立場、方法、観点を投げ捨て、過渡期

定論では把えきれない。八木同志はこのことを不問に付し、同時に、過渡期世界の統一把握ができず、単なる現状分析の次元での「諸階級・諸階層の世界的レベルの相互関係の分析」の如く、現状分析のレベルに逃げ込んでしまっている。「過渡期世界」という、せっかくの最高に正しく適切な一元的統一認識の立場、方法、観点は、完全に投げ捨てられてしまっている。これは、「科学的社会主義」なるものを対置して、「過渡期世界」論を清算してしまふ陰謀である。

第三は、過渡期世界論の最大の核心たる、プロレタリア国際主義の思想、プロレタリアートの国際性、世界武装プロレタリアートのテーゼに対して、死に者狂いの、愚にもつかない、いくつかの論理をこねまわして、急進的コスモポリタニズムという悪罵を投げつけ、これを否定して、結局は一国主義と先進国革命の主体的位置認識を欠落させた、民族解放・社会主義||最前線論と、毛沢東思想等アジア共産主義への溶解に終っていること。しかも、最初は、「民族共産主義」とかと、アジア共産主義を非難し、中国人民外交を批判し、連合ブンド等と同じ反スタ・トロッキズムの立場に立っていたこと、我々の批判にあって、やっとこれを撤回したかと思えば、だ。

第四は、「労働力適品」とプロレタリアを規定する”これは、―つまり、これは資本の一部であることも意味するので―正しいにもかかわらず、「労働と所有の分離」に資

本主義批判の核心を握える、榎原修正主義経済学にいかれてしまし、しかも、私は「労働力商品所有者」などというブルジョア用語は使用してないにもかかわらず——使っているのは八木同志だ！——これをもって、ブルジョアイデオロギーに侵されていると、あらぬ誹謗を行なっている。

第五は、「プロレタリアの世界性が生来的に、自然属性的に備わっているというのは誤り」と、異常に強調し、資本主義の原則的批判からしても、また、現代帝国主義の国際的、国内的蓄積構造と国際プロレタリアートの成熟との統一としての過渡期世界の特質からしても、その命題の正しさがますます証明されつつあるにもかかわらず、このように説明することができず、これを否定して、急進的コスモポリタニズムという悪罵を投げかけ、自らは一国主義に転げ込んでいっている。

第六は、「階級斗争の発展に、原理や法則があるわけではない」「階級斗争の世界史的段階を指定するのは誤り」「これはヘーゲル主義だ」とか矮少化して、唯物史観の次元での世界武装プロレタリアートのテーゼ、方法と観点を否定し、逆制的の能動のテーゼは、「武装プロレタリアートが、その外的条件——制約条件たる現代帝国主義を^{対象}放棄して、自己を実現してゆく」といった具合に、「赤軍」^モの4の対象をもってのプロレタリアートの形成を指定する方法を、悪意をもってさかさまにして歪曲し、「ヘーゲル主義」と疎外された批判を

し、また、現状分析は「具体的分析がなく、権力対人民になっっている」とデタラメをいひ、「過渡期世界」把握の立場、方法、観点を、三層分析と三つのテーゼを否定していっていること。

第七は、世界武装プロレタリアートの意義を、単なる六〇年代後半の国際的、国内的昂揚という現状分析の次元に狭めるこの昂揚を、ロシア革命以降の世界史的階級関係の変化と二重写し化している」とこじつけ、ここから「具体的分析がなく、プロレタリアートを一個の抽象物として把えることによつて、コスモポリタニズム化される」とか、「自然成長論や超階級的武装賛美論が導かれる」とかガナリたて、あげくの果ては「抽象的世界武装プロレタリアートによつて、具体的諸条件が飛び越えられ、空想化、平板化され、一挙的、世界同時革命になり」として、世界同時革命もまた否定されてゆくわけです。このマヤカンは、自分で勝手に歪曲して、その歪曲を批判するといった、ベテンの方法である。これは、実践的には三つのテーゼを実践に移し、創造的に発展しつつあるアラブ赤軍の同志達をコスモポリタニズムと非難し、敵対することに帰結してゆくわけです。

第八は、逆制約の能動のテーゼは、我々の主観的斗いとは相対的独自に、毛沢東思想をもつての党建設の前進による、民族解放：社会主義の斗いの前進が評価されず、反スタ・トロツキズムの小ブル傲慢主義の一人よがりの見地にたつて、

「自分達が党活動を前進させない限り、階級斗争は能動化しない」と主観主義的に批判し、農業・植民地、民族解放社会主義——プロレタリア国家継続革命——根拠地化——先進国・前段階決戦——プロレタリア革命戦争の客観的必然性と、この三プロック革命の世界革命戦争としての有機的結合性を否定し、

（一）とりわけ、前段階決戦——プロレタリア革命戦争を否定し、（二）三プロック革命と世界革命戦争の具体的物質化——推進力として党活動を重視するのではなく、党活動一般を無媒介に強調すること。抽象的一般的「堅忍不拔の党」を強調し、その内実や攻撃性や能動性の客観性を否定してゆく党活動を対置し、——対立的ではないのに——第二テーゼを否定してしまふ。つまり、三プロックテーゼと世界革命戦争のテーゼを、完全に放棄してしまふのです。

第九に、現代帝国主義の分析の立場、方法、観点は基本的に正しく、三つの欠点もあらぬことではないが、価値論・剰余価値論・蓄積論・再生産論等、資本主義の原則的批判がガッチリその基礎におききれなかつたこと、また、現代帝国主義を農業・植民地、プロレタリア国家群との関連を、有機的統一的に把える、国際主義・国内的蓄積構造の視点が弱いこと、また、決定的不十分性として、日本資本主義分析が、以上の諸点に踏まえられつつ、その戦前、戦後の歴史的特質を踏まえて提起され、世界・日本革命の綱領・戦略・陣型の基礎がつけられなければならないのだが、彼等は、私の自己批判を利用し、我が意を得たり、とばかり優越

感ひたり、にもかかわらず我々が世界・日本革命の綱領・戦略・陣型の科学的証明に結実させようとする、自己批判の意図は全く理解しようともせず、自己の、我々とは反対の日和見主義の受動的待期主義の「正規の攻囲」に利用せんとするわけです。ともあれ、私の真剣な誠意の自己批判を、自己の優越と思ひ違いをし、いわれなき優越感にひたり、「したり顔」にトクトクとしゃべる作風が、まじめな同志的作風ではないことだけは、今一度あらためて指摘してきます。

⑥ 臨総路線とその由来・特質・未露
以上、連赤敗北の総括が、これまでの赤軍派の理論面、実践面での如何なる総括を導くかを清算派の理論と実践についてみてきたわけですが、次に今度は、このような総括がどのような事態をもたらすかを、現在の清算派の実態を中心にみてゆくことにする。

彼等は、「赤軍」^モの抹殺に血道をあげんとするがあまり、弁証法的唯物論、史的唯物論を、「法則不在↓法則適用論は誤り」なる、わけのわからないたわ言な並べたてて否定することによつて、放棄してしまつた。

また、資本主義批判は中間的反スタマルクス主義の、修正主義の榎原経済学に解体され、これとボルシェヴィキ綱領の講壇化によつて、その階級性と科学性を見失つてしまひ、過渡期世界論を「科学的社会主義ではない」と否定し、経済決定論の単純帝国主義一元論を持ち込むことによつて、非資本

主義圏を含む過渡期世界を統一的に把える三層分析の手法や、三つのテーゼ、三ブロックテーゼを完全に否定し尽くし、このことよって、自らを完全な一国主義の非暴力主義のプロレタリア独裁・暴力革命の否定、軍事を組織し指導する党建設の体系を洗い流し、合法主義のサークルに変えてしまった。また、三つのテーゼや三ブロックテーゼを放棄するが故に、民族解放斗争と毛沢東思想等、アジア共産主義に対して、これを支持し、マルクス・レーニン主義を評価した上で（相対的に）、批判的立場を維持する関係構造を保ち得ず、連赤敗北直後頃は、反スタ・トロツキズムに先祖帰りし、「民族共産主義」を否定し、我々の批判にありや、今度は無批判に「民族解放斗争」最前線論」とがなったり、毛沢東思想に溶解し、先進国に於けるプロレタリアの主体的任務を放棄してしまっている。

現代帝国主義を、価値論・蓄積論・再生産論等の基礎的分析を前提にして、かつ、独占論≡帝国主義論を踏まえ、かつ過渡期世界に於ける、米帝を軸とする国際的≡国内的通貨体制・国独資政策に基づく、国際的・国内的蓄積構造の形成を基本視点にして、三ブロック階級斗争の個別性と統一性を把えきれず、従って、三ブロックテーゼが導けず、過渡期世界論≡現代帝国主義論を、「諸階級・諸階層の相互関係」等の、単なる現状分析に解消してしまふ誤りに陥っている。日本資本主義批判に関しても同じことがいえる。

内の「百鬼夜行」の状況の火付け役を担っていたことを、羞恥なくしては想い起せないであろう。このような、無責任極まる責任転嫁、責任放棄の逃亡路線が、プロレタリア人民や我が同志達の批難の目を逃れられるわけがなく、彼等の予測に反して、人民の同情を受けることができなことを思い知らされ、孤立の中で自己の日和見主義を独力で防衛せざるを得ない羽目に陥った。このプロレタリア人民から孤立しても「日和見主義を開き直る決意」を路線化したのが、いうまでもなく「臨総パンフ」であり、「臨時総会」であったわけである。（我々は「臨時総会」も「臨総路線」も百パーセント容認しはしない。我々は、同盟第二回大会に向けて、再建協議会≡「臨時CC」を中心にして、各フラクの連携を強化してゆく路線をとっている）

かかる歴史的由来故、臨時総会と臨総路線は、理論的・政治的研サンと自己犠牲の精神をもって、同盟を革命的に統合し、再建していくヘゲモニーを担う路線とは真反対のものであり、その第一の実践上の特質は、右翼日和見分子・腐敗・墮落の階級的異分子、消耗し尽し斗う意欲を失った分子等の部分を特殊に含んだ、メンシェヴィズム的傾向の綜本山、避難場所であること。八木同志は如何に弁解しようとも、君達が革命的左翼の結集点にはなっていないことを認めざるを得ないでしょう。客観的には、右翼的傾向分子の隠れ場所になっているのです。その一例として、赤軍派にもぐり込み、赤軍

このような、赤軍派の輝かしい歴史的意義をもった立脚点や斗いは、二足三文のかたちで打ち棄てられ、そのことよって、今や清算派は、自らが団結すべき立脚点や党派性を完全に喪失してしまい、使命感を完全に見失ってしまい、かつての赤軍派の同志達とは想像もつかない、墮落と腐敗の淵をさまよひ、党派性抜きで墮落したセクショナリズムの中でよりそい、互いを信じ合えずのしり合い、矛盾を深めているわけです。

彼等の中心は、連赤敗北以前に小ブル穏健主義であり、連赤―「新党」敗北を契機にして、公然と裏切りにメンシェヴィキとして登場し、連赤敗北の責任を一切赤軍派になすりつけ（これは、大いに光栄なことですが）、「我関せず」で、自分だけ「いい子にならん」とし、このことを権力や大衆に認知してもらわんと、悪しざまにあらん限りに、赤軍派の革命的左翼に悪口を投げつけ、自分達と「赤軍派」の区別立てに狂奔した。（つまり、小ブル穏健主義であったことの自認）「赤軍派は連赤敗北とともに、政治生命は終わった」「赤軍派は解散すべきだ」「ブンド再建、日本労働党を建設せよ！」と、錯乱的言動を繰り返していったのです。Sなどの、赤軍派から一度脱走した分子が、我が者顔に同盟内を徘徊し、指導者風を吹かしていたし、とにかく、清算派の諸君は、連赤敗北以降、約半年間、生涯忘れられない程の、右翼日和見主義の大混乱、取り乱しに陥ち込んでいたこと。当時、赤軍派

派を裏切り、権力に赤軍派を売り、自己犠牲を要求される部署からは巧みに逃げまわり、生き残り、赤軍派に寄生し、反弾圧戦線で利権をアサリまわっている、救援ゴロのプロレタリアの墮落分子の潮流を、自らの腐敗墮落故に、統制すらできなくなっているではないか。

第二は、自らの日和見主義を左翼から防衛するといっても革左や赤報派あるいは仏派等の批判は、それ程内的衝撃力をもたないし、又、直接利害関係をもたないが故に、（又、これらの部分を全部相手にする力量も気配もないが故に、彼等は防衛の対象ではなく、もっとも利害関係が深く、内面的せめぎあいの関係にある同盟の革命的左翼からの批判に対して自己防衛に必死になることです。この点に関して彼等は異状な執念を発揮して我々が同盟の統一のために他党派と論戦している時、他党派の主張をとり入れて我々を批判する位の常軌の逸し振りでです。つまり、党内の革命的左翼への敵対、これへの矛盾の排外化こそが、第二の特質なのです。）

第三は、革命的立脚点と路線の放棄を補うものとして、これにかわって、無内容な小ブル道德の規律主義や、課題が連赤―新党とは形態は違いますが、本質的には同じものとして、「堅忍不拔の党の建設」「自己を共産主義者に打鍛えてゆく」「講壇マルクス主義者になろう」とかのスローガンをもって、持ち込まれてゆくこと。しかし、これは内容がないが故に全くの見かけ倒しで、無内容無方針故に、組織活動の基調は、サ

「クル主義の困い込みにならざるを得ないこと。個人的誹謗中傷や「挑発主義だ」「誰それは、我々を支持している」とかのデマをふりまき、又自分達の意見の違う人々にはことさらの分断策動をめぐらし、権謀術数をやり、「公明正大で陰謀術策をめぐらさない」作風は見失われられてゆくのです。赤軍派らしくない、ブルジョアの作風をはやらしてしまっているのです。結局「堅忍不拔の党」とは、「保釈者集団」がなんとか表面をとりつくり、アリバイをつくる為の行動以上の姿を出さないわけです。保釈者安穩集団の、世をしのぶ仮の姿が「堅忍不拔の党」であると厭味をいわれてもしょうがないわけです。

第四に、最後に、「小ブル性の克服・プロレタリア化」とか「共産主義と労働運動の結合」と鳴物入りで、騒ぎだてた、戦術上の方針の実態はどんなものであったろうか？

又、武装斗争にただただ反対する為に捏造した、「最小限斗争の重視」民主主義闘争の重視は如何なる結果に導いたでしょうか？ 彼等はマルクス主義を放棄し、赤軍派の立脚点を放棄し、人民に結合すべき、共産主義も戦術も持たないが故に、その結果は明らかです。彼等が思いをこがして接近したが、その方針が民同左派以下の超右翼的サークル主義の困い込み路線故に、下層プロレタリアートには肘鉄を食らわされ、「結合」を拒否されたではないか？ 「部落完全解放の闘い」や「在日アジア人の闘い」との「結合」を

対にない。たとえ、一人か二人かが幾ら個人的に努力しても、腐敗墮落した路線を保持している限り、組織の発展など全く幻想に過ぎないこと。従って矛盾の激化と分解は必至です、現に現在爆発過程にある。

彼等の末路は、ほぼ以下の三つ位が考えられる。その第一は、彼等が赤軍派戦士として、かつて最前線を担ったという誇りや自尊心を含めて、革命的左翼の闘いの歴史の一切を捨てることをもって初めて可能なわけだが、連赤敗北の直後に鮮明にみられたように、革命的左翼を背後から刺して逃亡した行為を、体系的に理論化して革命的左翼に敵対して、権力の別動隊に成り下る道です。メンシェヴィキからカウツキー主義へと腐敗変質して、革マル、日共の後を、よりショボクして貧相を極めて跡ることです。第二は、革命的な左翼の誇りや自尊心を完全に捨てきれず一抹のえかすを宿す傾向としての、清算主義の組織的結束も保てず、個々人バラバラになって、「挫折した」と称して、それ相当のゴロツキーになる道です。第三は、自らが、一時、権力に屈服し、日和見主義に陥り、日和見主義の小ブルメンシェヴィズムの路線でもってそれを正当化しようとしていたことを、キツパリ自己批判し、プロレタリア革命派の戦列に再結集し同盟の革命的再建に邁進する道です。

我々は、第三の道のみを要求し、第一、第二の道に関して徹底した批判を加え、その日和見主義性・反革命性を飽く

ざしたが、彼等のそれは、日共や革マル流の「解消主義」の小ブル傲慢主義ではないという点で、一日の長を示しつつも、被差別階級部大衆や在日アジア人の立場にたつことを前提にしつつも、なおかつ、これを共産主義革命運動と党建設へと組織する闘いを放棄している——といっても、もともと共産主義がないのだが——点で、部落解放闘争や在日アジア人の解放の闘いの最右翼に位置せざるを得ないので、要は、下層プロに對する対応にみられた如く、彼等は、彼等が結合せんとする運動に對して、追隨と他方での講壇マルクス主義で對することによって、最右翼に常に位置しているわけです。ここには赤軍派の伝統的な最前線で闘う、姿勢や牽引力や指導力など、一かけらもないのです。

確かに、「共産主義と労働運動」の結合は焦眉の課題であり、赤報派の如く、烽火派の、大衆追隨の改良主義の非難と自己の召還主義の合理化の余り、「最小限闘争」「民主主義闘争」を切り捨ててしまふのは誤りにせよ、だからといって、清算主義派の如く、「民主主義闘争」や「最小限闘争」をレニンの權威に頼って強調し、実際は、武闘を放棄し、かつ最小限闘争をプロレタリア的・革命的に闘うことを放棄し改良主義に転落することが許されていないわけは無いのです。

第五に、それでは、現在の清算主義のメンシェヴィキは今後如何なる結末を迎えてゆくのだろうか？ まず確認しておかなければならないのは、このような清算主義のメンシェヴィキの路線と実態が安穩に、このまま持続してゆくことは絶えずなく、暴きたてて粉碎し同盟から一掃してゆくものです。

第三節 小ブル動揺・日和見分子・八木同志の連赤総括と党破壊活動を批判す。

清算主義のメンシェヴィキの親玉格の八木同志の連赤総括過程を跡づけてゆけば、現在の清算派の階級的性格はより鮮明になるし、又我々がメンシェヴィズムやそのカウツキー主義を一掃し切る為には、我々は八木同志の全てについてマルクス主義の観点にたつて対象化し、徹底して批判し抜き、このメンシェヴィズムの一切の理論・思想・組織・戦術・作風の全てを根絶し切る必要が絶対にあるわけです。（といって、八木同志個人を、我々がどうこうすることは無縁です。彼が自己のメンシェヴィズムを自己批判するならば、我々は喜んで歓迎するが）

八木同志は、何故に、どのようにして、連赤敗北を契機にして、ブルジョア共に解体されたのか？——もともと、本質的に、連赤敗北の発生・露呈以前に、潜在的には既に敗北していたのだが、その出発点には、ブルジョアマスコミに代表されるブルジョア世界観による、連赤「共産主義化」——「清算」の解釈に完全に解体されてしまったことにあります。共産主義化運動を「同志殺し」や、これに類する、しかし、これよりは少しましな「同志肅清」「内ゲバ」・リンチ殺人、権力の為の個人批判、等々の側面を本質とみてしまふ、或いは

この運動の根底にある階級的革命的性質の疎外化形態のみをみて、その根底にある階級的革命的性質をみないという根本的誤りが存在しています。

彼は、ブルジョア共が宣伝する「同志殺し論」に完全に屈服してしまったこと。この「同志殺し論」は、端的にいえば、「飢えた狼の共食い」と同じレベルに「共産主義化運動」を矮小化して把え、連赤―「新党」―「共産主義化」の過程を、「超階級の人間が、極限状態」に於て、どのように「本能」をむき出すか」といった類の、人間を特定の歴史的段階の経済的基礎とその社会関係・階級関係から切り離す、ブルジョア医学―心理学―生理学等を基礎とする、まさにその限りでは、全くの猟奇趣味のブルジョアイデオロギーです。ここには、客観情勢や、これと照応関係にたつ、思想・政治・組織・戦術・理論を検討したり、銃撃戦との関連を説明する姿勢などは、全くないこと。八木同志は、ブルジョア共の「極限に於ては本能をむき出しにする」といったブルジョア人間観たる「超階級の極限人間論に基づく飢狼共食い論」に脆くも解体され、連赤―「新党」諸同志を正しく、信頼することを、一挙に放棄したわけです。ブルジョア共は、赤軍派・革左・連赤・戦斗的革命的な遊撃軍の形成―成長に恐怖し、必死で共産主義革命に泥を塗ることに狂奔していたわけですが、その最大の象徴として、共産主義者も追い込まれたならば、主義主張など放り捨てて、命惜しさになんでもやる」といったこ

闘争の新たな段階への更なる進展、革命戦争路線の徹底的貫徹に向けての、革命主体の依拠すべき階級・階層と思想的・政治的・理論的・組織的武装が問われ、旧来の過渡的路線からの更なる転換が問われ、それは闘り革命主体に、反米愛国教条主義の克服、清算主義のメンシュエヴィズムの克服、自然発生的 小ブル革命主義の克服の三面の党派―党内闘争とこれと一体に、その内部に、自らの構成員全てに、階級的思想的性の検証―闘り姿勢―政治作風・規律の検証を要求する、組織総体をあげた思想―整風運動（修養運動）を、まず要求せざるを得なかったこと。この対外的・対内的な三面闘争と、対内的な思想―整風運動の展開を通して、その内から七〇年代プロレタリア革命戦争を担う、「新党」と「その指導体制」が形成される必然性をもっていったこと。

従って、思想―整風運動Ⅱ「新党」は、連赤兵士の全体的共同意志であったこと、この限りでは、死んだ同志は勿論のこと「新党」指導部の森君や永田君も例外ではなく、「超階級的人間論の飢狼共食い論」とは縁もゆかりもないこと。この点での森、永田両君への悪意ある誹謗中傷は断じて排されるべきです。

① この要求されるべき「新党」の内実とは、①弁証法的唯物論、史的唯物論、資本主義批判と科学的社会主義を根本的立場、方法、観点とするマルクス・レーニン主義、②現代帝国主義―途上国―過渡期社会Ⅱ現代過渡期世界批判と世

との例証に、「共産主義化運動」「肅清」を最大限利用してきたわけですが、八木同志は、このブルの攻撃にマンマと解体され、悲観・絶望し切り、このデタラメな醜悪極まる現認報告を承認し、「挫折」し、その後、この現認報告を基礎にして、驚きあきれかえるような言説を吹きまくり、客観的にはブルジョア共の先兵となって、働いたわけです。

それでは、「共産主義化運動」は、ブルジョア共や八木君が吹聴する、「超階級の極限人間論に基づく、飢狼共食い論」であったのか？断じて、断じて否です。これ程、連赤―「新党」を傷つけ、とりわけ死んだ同志達や、又、「肅清者」の森君や永田君をはじめ、生き残った同志達をも侮辱する意見は他にありません。彼等は、死んだ同志は勿論のこと、「新党」指導部も含めて、無原則・無方向・無規律に、或いは、客観的には、ともあれ、プロ共産主義運動とマルクス主義に主観的にも敵対するかたちで、共産主義化運動をおこなったのだろうか、断じて否です。

我々は、「共産主義化運動」の全側面を、全体的に把えようとすれば、最底限度次のはしっかりと踏えておく必要がある。つまり、「共産主義化運動」をその本質とその疎外化形態との関連で把える方法的立場にたつことです。又、その本質と疎外化形態の疎外化関係が、どんな関連にたっているかを解明する方向性をもつことです。

①「共産主義化運動」の本質は、七一年を中心にして階級界C・世界プロ独の世界同時革命、三プロクテレーゼと世界革命戦争のテーゼ、世界党―世界赤軍―世界革命戦線の陣型そしてこれに基づく、スタートロ論争の総括と毛思想の評価と反スタ・トロツキズム、毛教条主義の同時相互止揚、②トロツキー式飛び越え「社会主義革命」路線と小ブル民族主義の「反米愛国路線」を同時克服止揚した、反帝反米のプロ独―社会主義革命路線、③思想・政治第一―路線Ⅱ党の生命力を原動力として、プロレタリア革命勢力に依拠するプロレタリア革命戦争路線を待機主義の受動的「蜂起」路線と他方での路線Ⅱ党建設抜きの小ブルゲリラ路線や山根路線の克服、④党建設の組織の問題、⑤戦術転換の問題、⑥三面戦争、「過渡期世界論」を防衛止揚すること、等に概括されるものであり（詳細は「論叢」№4参照）、いずれも、旧来の赤軍派や革左（神）の路線を継承しつつも、乗り越えなければならぬ困難な課題であったこと。

② だが、この思想―整風運動―「新党」の要求に対して、その客観的必要条件にはこたえつつも、主観的諸条件に於ては、「新党」指導部は赤軍派と革左（神）の総体としての歴史的限界性に規定されて正しくこたえきれず、自らの不完全で不十分な路線を絶対化することによって、この内実Ⅱ本質を疎外化させ表出させてしまったこと、その限りで、③④で確認された路線転換の本質は疎外化されて、さかさまになって悲惨な性質も含めて、表出されざるを得なかった。

また、このような、客観的諸条件への適応、主観的諸条件に於ける部分的正しさと、全体の誤りの中で、「新党」とその指導部に従いつつも、その誤りや歴史的限界性に批判的な下部の革命的プロレタリア的な部分を生み出したこと。そして、このような指導部と下部の関係は、思想―整備運動を通じて一種の「党内闘争」的性格を帯び、下部同志は粛清の対象となつていったこと。下部の自然発生的なプロ革命派は、七〇年―七一年の両組織―連赤―「新党」の道程を、もっとも最前線にあつて闘い、種々な新しい経験をもち、新しい感覚、体質をもつていた部分であり、この点で遅れていた指導部とは軌轡を起さざるを得なかつたこと。勿論、このプロレタリア革命派は自然発生的で、自覚的、理論的存在ではなかつたことは確認できるにせよ、粛清者と被粛清者の間にはその相異の特質があり、我々がこの点を強調しているのを歪小化し、「粛清反革命、被粛清革命派」という図式は誤り」として、この相異を看過してしまふのは、やはり誤りなのです。清算派がすべて「新党」と「共産主義化」をブルジョアと同じ観点で否定してしまふのに対して、この意見は、小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への全的路線転換という本質の疎外化形態たる共産主義化を、右派に対抗せんとする余り、全て肯定・是認してしまふこと、そのことによつて「新党」指導部が遭遇していた思想的政治的課題やそれへの挑戦とそれの挫折の関係を不問にしてしまふわけです。又、「新党」と

に、その結果は、全て反動的に疎外された結果しか生み出さなかつたこと。彼等は思想―整備運動を起点とする、小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への転換を、次のようにして挫折・疎外し、決定的反動化を促進させたのです。①彼等は、この思想―整備運動に対して、従来から確認されてきた――がその具体的内容や方法に関して不明な――赤軍派の「人の要素」―「主観的能動性」―「共産主義化」等を、ブルジョア人間学（あるいは小ブルジョア）や孔孟の哲学のたぐいに、スリカエ実行していったのです。マルクス主義の唯物論の方法、史的唯物論の方法、資本主義批判に基づく階級分析の方法に従つて具体的状況の具体的分析にたち、具体的に抑圧されたプロ人民の資本家権力への、怒り―批判をわがものにする、具体的な国際帝国主義と社会帝国主義の国際的プロ人民・被抑圧民族の立場からの批判、具体的な日本帝国主義への七〇年代革命勢力プロレタリアート人民からの批判をわがものとしてこれを綱領―戦略―陣型―組織―戦術へと対象化すること。自己を、実践と学習教育の絶えざる反復の中でプロレタリアの前衛へと打鍛えてゆくこと。これ等の唯物論の開かれた、具体的実践の立場・方法・観点に対して、具体的なプロレタリア人民の具体的な敵権力への怒り―批判の科学的組織化にかえて、絶対的な「プロレタリア戦士」像―「絶対的共産主義的人間」像の措定とこれへの無限の接近の、超現実的なウルトラ精神主義のブルジョア修養運動を組織したこと。この神的人間像の代行者「現人神」として「新党」指導部はたちあ

その指導部のはらむ小ブル革命主義の変質とその決定的な反動的変質の側面を不問にすることに於て、連赤―「新党」敗北から教訓を引き出すことを閉ざすものです。

我々は、「新党」指導部を、清算派メンシェウイキの如く、「反革命の同志殺し者」とは全く規定しないにせよ、彼等が闘う人民の側にあるうとしたことを承認するにせよ、また主観的にはマルクス主義を志向せんとしたことを承認するにせよ、だが、客観的には指導部の対応は小ブル革命主義を反動化させた立場・方法・観点であり、マルクス主義ではなかつたのです。我々はこの点で、「新党」指導部の思想・政治路線は、①全員が資本主義と権力に命がけで闘う姿勢をもつていたこと。②毛沢東思想の国際面、歴史面での評価、清算主義の右派メンシェウイキ路線や、反米愛国の毛教条派や赤軍派の過渡性の批判を志向し、③「過渡期世界の革命」路線と反帝反米のプロ独社会主義路線を獲得せんとしていたこと（獲得されはしなかつたが）。④反スタロツキズム毛沢東教条主義の同時相互止揚を志向したりし、積極的に評価できる面があること。又、次の点でも評価できること。組織面では、思想性、倫理性、組織性や規律・作風を重視し、これの違反者には断乎たる処分をとるといふ、革命党の規律を守る志向をもつていたこと。⑤唯統主義の決戦論と言え初めて「銃による殲滅戦」を志向したこと。だが、これ等は、一つの志向でしかなく、しかも決定的弱点をもつていたが故

らわれ、この「絶対神」からみれば、「弱点多き、俗物たる」下部革命的同志へ、彼等の革命的戦闘性、献身性、犠牲性につけ込み、全く不可能なウルトラ精神主義の観念論の「一挙の共産主義化」を強要し、次々に死に到らしめたこと。彼等「新党」指導部は、自己を「現人神」としてよそおうことによつて、又そのことによつて自己の指導の誤りを合理化し腐敗を隠すべく、唯物論や史的唯物論の根本的立場を裏切り、孔孟の「天命論」や「天才論」に接近し、又マルクス主義の「路線第一の団結」に対して、「仁、義、忠誠―人の和―仁政」などの腐りきつた反動哲学の支配者思想に依拠しようとしたのです。ここに於て、プロレタリア革命を支配階級の思想・世界観に依拠しておこなわんとした故に、自らを当然にもブルジョア独裁の支配者に変質させてゆかざるを得なかつた。①男女の性的関係も、社会的政治的人間関係の反映であり一部である以上、男女問題に関しても具体的状況の具体的分析を通して、政治第一を中心にしつつ解決されてゆかねばならないのに対して、又、女性プロレタリアが革命家として決起するには、男性プロレタリアと違って、二重の社会的隷属からの決起として闘われざるを得ず、そこには多くの試行錯誤が存在すること（といつて、小ブル自由主義の女性解放論やブルジョア的性的放縦や、プロレタリア単婚制の否定が、肯定されていいわけではない）、正しい女性解放闘争の路線が現実の女性の社会的状態の分析を基礎としてその経済

的解放を機軸にして要求されていたこと。これ等複雑深く多面的な女性解放―男女問題に対する実際上の諸問題を不問にふし、これにかわって、一元的画一的な形式的な観念的男女平等論や小ブル自由主義の女権論や、絶対的道德（それは、おろおろにして、禁欲主義や女性蔑視の思想、或いはこの裏返しとしての、超階級的・男女闘争史観の）男から自立した女“、女のあまえをこえる”とかの女性の小ブル自由主義的自立論、等に裏付けられていた）をデッチあげ、偉大な道徳家、倫理家として下部同志達に対して君臨していったこと。

④このような非唯物論のウルトラ精神主義の「一挙的共産主義化」は、一方では、「共産主義化」のゴールはないが故に、必ず、下部同志を「敗北させ」死なせてしまい、「共産主義化」できるものは一人もいないことが増々立証され、かつ、指導部そのものも、現実の自己と、自己のよそおひ絶対者としての「現人神」との乖離からの自らの偽善に気づき、自己への不信は、ひるがえって他の同志への不信へと撥ねかえってゆき、又被総括者への不信感の増大となり、内部矛盾を激化せざるを得ず、かかる状態に対してこの「共産主義化運動」の清算は「新党」の崩壊に一挙に発展するが故に、この運動は一層激しく展開され、同時にこの進展過程は、「新党」指導部の強権的支配体制を防衛するものとして追求されてゆかざるを得ない。このようなものとして「集団的暴力援助」と称して、暴力が著しくその「運動」の中での比重をたかめ

性格を小ブル革命主義とその反動化として把えることを見忘れてはならないのです。

①以上、多少長く述べてきましたが、八木同志は、自らの小ブル人道主義、道徳主義、或いは超階級の生命論等の小ブル世界観故に、「粛清露呈」とブルジョア・キャンペーンに腰を抜き、ブルジョア人間性論の「超階級の極限人間の飢狼共食い論」に屈服し、「粛清」を「小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への止場の挫折・疎外化形態」としての、反動的思想・整風運動」と正しく規定できず、いぜん同志殺し“の認識にたっていること。

この点で八木同志に関して注目しておかなければならないのは、ブルジョアマスコミに攻撃された場合、「潮流にさかrazえず」ブルジョアや小ブル共にさえ、「いい子になってホメてもらおう」とする、小ブル自由主義インテリの「いい子ちゃん根性」が抜けていず、すぐ解体されてしまふセンスであること、M作戦では「もうついていけない」と悲鳴をあげ、銃撃戦にすら沈黙し、七・六や、大衆に党内闘争を還元しながら党建設を闘う党建設の方法を、「紅衛兵型党内闘争はマルクス主義の辞書にはない」とかのたまい、又、七・六には腰を抜かして、関西にかえる“とアラヌことをしゃべり、粛清・露呈ではこの小ブル道徳主義は極限に達し、「赤軍派の政治生命は終わった」「即時解散しよう」「連合フロントに自己批判しよう」「ヒタストラひたむきに身を削りつつ闘ったのに

誤りの責任を全体に分散させつつ、他方では、“逃亡防止”を旨として、非同志的な「大小便タレ流し」の「ロープで縛り」「寒気にさらし」「絶食状態を促進させ」「腕など腐ってもいい気概」をとき「百か零か」の「修養」を強要したのです。ブルジョア人間学（孔孟の道）に基づく、観念論の修養運動はその階級の本質からして、その方法・手段を支配階級の人民抑圧の方法・手段との同一性を与えてゆくのです。

ここには、実践を通じた変革、学習や教育等の、マルクス主義の方法などひとかけらもないのです。①又、綱領―組織―戦術上では、以下の問題があった。現代帝国主義を中心とする三プロットの統一的把握のアイマイ性、毛思想の正しい評価の限界性、綱領―権力問題・陣型問題のアイマイ性、党建設・党組織問題、戦術転換、過渡期世界論の止場の問題、等への対応の限界性等（詳しくは「論叢」Ⅱ4、Ⅱ3）。

以上、みてきた如く、この「共産主義化」運動は、ブルジョア共や八木同志等が考えるような「飢狼共食い論」ではなく、階級闘争の転換に照応する、思想・路線闘争に応えんとするものであったが、それは正しく貫徹されず、小ブル革命主義を反動化させ、ブルジョア修養運動の性質をもったものなのです。尚、銃撃戦はこの小ブル革命主義の反動化からの回復・止場の過程として存在していたのです。銃撃戦、粛清と露呈後二年目を迎え、我々は、この点に於て健忘症に陥いらず、連赤―新党の正反両面の特質とその主要側面の根本的階級的

何も報いられたなかった、挫折だ」と泣きごとをのべ、悲観し切り、常軌を逸した発言を続けたのです。又、問題点を組織内討論で解決してゆく作風を軽視し、獄中になれば、「党も組織もクソもない」と党外のサークルや個人に呼びかけたり、諸雑誌に無原則に自説を書いたりし、一寸した状況の変化にアワテフタメキ動揺してしまふこと。

②「粛清」を「飢狼共食い論」で分析するが故に当然にも、赤軍派―連赤―「新党」は、正しく正反両面において全体的に把えられず、当然にもオール否定され、赤軍派をオール清算すること。それは次のような理論的経路を辿って実現されてゆく。「共産主義化」「粛清」の因を、具体的情勢や主観的諸条件、路線問題、連赤指導部の思想・世界観（孔孟の哲学がその背骨にあったこと）等の分析に求めず、これ等と切り離して、無媒介に「小ブル性一般」に求めることによって、これを、今度は「赤軍派一般の小ブル性」に基底還元し、「粛清」は赤軍派の到達点だ」と「一が分れ二になること」を否定し、ベテンをいい、理論的にはこの根源を「赤軍」Ⅱ4に求めてゆく、「赤軍」Ⅱ4の部分的弱点を絶対化し、実践的には赤軍派の闘いの部分的弱点・限界を絶対化してゆく、功妙な論理を駆使する。要は、粛清の因を具体的状況の具体的分析抜きに、小ブル性一般に求めたところにこのマヤカシの種がある。

③従って、小ブル性を観念論の絶対論の見地でブルジョ

ア性と同じか、それ以上に罪惡視し諸惡の根源に昂めてゆき、小ブル性と名のつくものは全て否定してゆく。とりわけ「戰闘性」や「急進性」は全て「肅清」に直結していると錯覚し、自らの日和見主義の穩健主義や消極主義を正当化してゆく。失敗をオンレテ、闘いを避けてしまふ全くの消極主義。失敗に関して、我々は、「斗争—失敗—斗争—失敗……最後に勝利」の毛沢東の観点にたたなければならぬ。又、小ブル革命主義は、それ自体の急進性、革命性をもって、小ブル日和見主義や小ブル・メンシェヴィズムの合法マルクス主義と闘争しつつ、革命的マルクス・レーニン主義 Ⅱ プロレタリア革命主義へ自己止揚してゆけることを否定していること。

④ 観念論の絶対論に基づいて、「小ブル的思想性」を特別に取り出してゆくことをもって、同志八木の所有する小ブル思想主義を極限にまで拡大し、思想をマルクス主義的に把握する観点を喪失し、神秘化し、天賦論の見地に立ち、「赤軍派」の資質に肅清の責を求め責任転嫁し、自己のブルジョア的資質を問題にする如く、「新党」指導部の裏返しの天命論の天才論に陥いつている。他方では、小ブル思想主義は、講壇マルクス主義となつてあらわれること。

⑤ 小ブルインテリゲンチヤ特有の「小ブル出立の宿業論」みたいな独特の小ブル観をもっている。

⑥ 前節でみた「赤軍」派と赤軍派の実践の右翼日和見の清算の数々——その最大な犯罪は、コスモポリタニズムと

称して、プロレタリア国際主義の精華たる三つのテーゼを清算すること、そして今一つは、事物を唯物論の弁証法の見地にたつて相対的、全体的に、正反両面で、また「一が分かれて二となる」観点等で捉えようとしてないこと。

⑦ 唯物論の能動的反映論の見地とは似而非なる、法則否定の、観照主義、表相反映観、結局は現象論故に、言説に理論的体系性や一貫性がなくなる。不完全な薄平な、反映論としての現象論主義、実践的にはプラグマチズムになる、評議家の文筆家。

⑧ マルクス主義の資本主義批判に於ける、剰余価値論の輕視と榎原修正主義経済学への解体としての「労働と所有の分離論」の強調。

⑨ 無定見、無節操、無体系に、プラグマチズムの情況反映主義的に文章を書くこと、文章に責任をとらないこと、八木同志はこのことを総括するまで一度筆を断つ位に真剣に考えるべきだ。

⑩ 八木同志の、肅清露呈以前の同盟内での立場に関しては、同盟内の小ブル穩健主義の立場であり、とりわけ、保釈出獄を迎えることによつてこの立場を如何に実践化するのかをめぐつて、既に彼のその後の小ブルメンシェヴィズムの清算主義の方向は明確化していた（「緊要の任務」参照）。この立場から、肅清を①⑧の如き観点で総括していつたわけですが、我々が注目してゆかなければならないのは、その総

括の方法です。それは観念論の、結果解釈の清算主義として既に確認されているわけですが、我々は、これを彼が好んで多用する「肅清」は、赤軍派の必然的到達点だ」という方法です。（又これは立場、観点でもあり、この言葉に彼の全ての考え・思想が凝集されているわけですが）この言葉こそは、事態を簡明にえぐつていよう、多くの人々を大混乱に陥し入れ、清算主義に駆け込ませる決定的通路だったわけですが、これ程事態を具体的に分析し、情勢や諸条件の変化に応じて「一が分かれて二となる」という、唯物弁証法の根本原則を否定する巧妙な論理はないわけでは

前段階蜂起—日J闘争とその総括、「人の要素—前衛の軍人化・軍の中の党—遊撃戦」として開始された第二段階、第三段階に於て、客観的諸条件、主観的諸条件の中で、徐々に「一が分かれて二となり」始め、三分解現象を必然化させざるを得なかつたこと、又ここからML主義のプロレタリア革命派が生まれる必然性があつたこと。と同時に、小ブル革命主義の反動的要素が全面開花せざるを得ない必然性があつたこと。

このような唯物弁証法的な七一年の階級闘争を中心とする事態の矛盾的發展を、一切捨象することによつて、「肅清（銃撃戦）の連赤—「新党」を全否定しつつ、「肅清」は小ブル性に因り赤軍派の発生時からの小ブル性に問題あり」とし「創生赤軍派—肅清」とこの過程を一切抜かして、直

線的に総括すること。このような総括方法は連赤—「新党」指導部の特殊な直接の責任をアイマイにして、全てを「赤軍派」に責任を転嫁し、主要には否定的な「新党」派の特殊な接責任と、我々の主要には肯定的な発生基盤責任の区別と関係性を明確にする、責任解明に対して、自らの清算主義の逃亡を正当化する。為に、又、我々を清算主義の土俵に引き入れる為に「責任転嫁だ」とか称してケチツケをするわけです。

このような観念論の清算主義の方法に対して、同じく観念論の教条派は、同じく情勢と諸条件を通じて、小ブル革命主義が分化したことが分析できず、小ブル革命主義の反動化の「肅清」を許容してしまふのです。
（我々は、これまで、「新党」指導部と我々の関係に於ける区別と同一性に於ける関係性、従つて責任のとり方について、今一つ原則的な立場を、その方法、観点まで含めてアイマイな点をもつていたが——といっても基本線は十分明らかにしていたし、アレコレ批判されるべきものではないと考えるが——以後、この点をよりはっきりさせてゆくつもりです。）

ともあれ、我々は、八木同志等の「新党」派に責任を転嫁することは出来ない」という、一面においては正しい側面をもつた主張をもつて、今度はこれを悪用しつつ我々と新党派との区別と同一性の関係性を切り捨ててしまつて、赤軍派

に全面責任転嫁する論理・方法のベテンを厳しく暴き抜いておく必要があるのです。

第四節 『No 4』批判への理論上の反批判の諸論点

① ▲「法則発見と法則適用」の態度は正しいこと。ヘーゲルの藤本進治の「内的矛盾の自己展開」の自然成長論に陥ち込んでいたのは八木同志であること——過渡期世界把握の三層分析の方法、史的唯物論の放棄と事実の羅列、歴史記述主義としてのブルジョア実証主義への転落▼

最初に「法則発見—法則適用」の問題ですが、これは、スターリンの「連邦に於ける社会主義の経済的諸問題」の論文の中で、「法則適用に対する態度」に対して、黒田が「現代唯物論の研究」で「法則主義だ」と社会科学の対象は人間であるから自然科学のようにはいかない、法則と法則性は違うとか、わけのわからないことをいい、スターリンの「人の存在しない法則適用主義」を批判したまではよかったですけれど、結局「人間」を異常に強調し、唯物弁証法（弁証法的唯物論）、史的唯物論（唯物史観）の命題を否定していったわけですが、連合ブンドの諸君は、この黒田の所説に飛びつき、我々を「法則適用主義」とか、わけのわからない批判をしてきたわけです。これに感心した八木同志は、自己の当時の藤本進治の哲学への傾倒、又それに表現された、関西ブント以来の自己の自然成長論を反省する意味合いを隠して、私にそ

きた既存の生産諸関係とあるいは、法律的表现に過ぎないものであるが、所有関係と矛盾するようになる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激にくつがえる。このような変革を考察するさいには、自然科学の精確さで、確かめることが出来る。経済的生產諸条件に於ける物質的變革と人間が、この法則を意識し、又それを闘い抜く、法律的・政治的・宗教的・芸術的或いは哲学的な、つまり、イデオロギー的諸形態とはつねに区別されねばならない。「……社会的生産力と生産関係との間に衝突があるということによって説明しなければならぬ。大抵みについて、アジア的・古代的・封建的および近代ブルジョア的生產様式が経済的社会構成体のあいつく諸時期として表示される」（以上全て、マルクス「経済学批判」序文）

・「歴史がつくられるのは、最終的結果がつねに多くの個別的意志の衝突から生じるという形においてである。それ等の個別意志のおおのは、これまた多くの特殊の生活諸条件によって現在あるようなものにつくられているのである。従って、そこには交互に交錯する無数の力、力の平行四辺形の無限の群があってその中から一つの合成力——歴史的成果——が生じてくるのである。その合成力自体は、さらに全体としての無意識かつ無意識に作用する力の所産とみなすことが出来る。——こうして、従来の歴史は一個の自然過程の仕方を経過しており、そして又本質的には同一の運動法則にしたが

の反省を代行させようとしたわけです。だが、私は「赤軍」No 4を執筆した以前から、藤本進治の組織論は卒業していたし、勿論、関西ブントの政治過程論は完全に批判していた。

そのようなことは、上京グループのTA(M)、TA(K)、U E諸同志にいつもいつていたことです。ともあれ、読者は、「赤軍」No 4の第四章部分（八木同志執筆）の展開方法や内容をみてもらえば、これが「革命の哲学」にウリニつてあることを発見されるでしょう。八木君は自分を自己批判せず、卑劣にも私に自己の誤りをおかかせています。このようにやり方は宇野経済学の総括に関しても共通しています。私は「労働力商品としてのプロ」という用語は使用しているが、決して「労働力商品所有者」という小ブル個人主義の概念は使用してない。この用語は、第四章では存分に使われているわけです。又、余談ですが、自分の反省としての「主体的唯物論」の総括をも又、私にナすりつけていること。さて以上を踏まえた上で、マルクス・レーニン主義の史的唯物論や弁証法的唯物論に対する立場・観点をみておこう。

・「いっさいの自然現象の基礎には物質的原因があるから同様に、人間社会での社会の発展も人々の意識から独立した一つの自然史的過程である。」「……人間の意識が彼等の存在を規定するのではなく、^彼彼等の社会的存在が彼等の意識を規定するのです。社会の物質的生產諸力は、この発展のある段階で、それらが、それまでの内部で運動して

っている」（エンゲルス「J・プロッホへの手紙」「フォイエルバッハ論」）

・「自然においてはそこで交互に作用し合うのは、……まったく意識のない盲目的作用力である。これに反して社会の歴史に於ては、そこに行動しているものは、ただまったく意識を賦与され、考慮または情感をもって行動し一定の目標を目ざして努力するところの人間のみである。そこでは意識された企図、意欲された目標なしには何事も発生しない。けれども、それが如何に歴史の研究にとって重要であろうとも、歴史の経過がある内面的な一般法則によって支配されているという事実は、いささかの變動をも与えない」（エンゲルス「フォイエルバッハ論」）

・「この仮説が、はじめて科学的社会学の可能性をつくり出したという、もう一つの理由は、社会関係を生産関係に還元し、そして、この生産関係を生産力の水準に還元することだけが社会構成体の発展を自然史的過程として考える為の強固な基礎を与えたからである……（たとえば主観主義者は、歴史現象の法則性をみとめながらも、歴史現象の進化を自然史的過程としてみることとは出来なかった——その理由は、彼等が社会的観念や人類の目的にとどまっていた、これ等の観念や目的を物質的社会関係に還元することができなかったからである）」（レーニン「人民の友とは何か」）

以上、マルクス、エンゲルス、レーニンも人類の歴史の発

展、自然の法則的存在とは人間が歴史を創るという意味でその差異を認めつつもそれ故に、上部構造の下部構造への独自性や反作用をみとめながらも、「自然史的過程」として「法則」として考察しているわけです。

以上でもって、八木同志の批判は全くマルクス・レーニン主義を否定するかたちで展開しているのは明らかです。

「現代世界の歴史的・具体的な階級闘争を史的唯物論として原理的・哲学的に体系化しようとした観念論」（臨終報告ピラ）が諷刺中傷であると同時に、実際は、史的唯物論を放棄し「歴史的・具体的な階級闘争」と称して、全く分析の立場・方法や観点のない単なる事象を羅列する歴史記述主義のブルジョア実証主義の見地への転落であること。そうでなくとも、単なる世界把握は「情況分析」に矮小化されざるを得ないこと。彼の文章の表相的な観照性、歴史記述主義、羅列主義を想起せよ！

現実世界を正しく把握しようとするならば、正しい弁証法的唯物論を基礎にして、世界史の発展段階を如何なる生産様式の段階かを指定し（階級闘争が如何なる性格の如何なる段階のそれか）、その上にたつて、資本主義の発展段階を指定し、階級闘争を分析し、それを踏えつつ現状分析をする、（弁証法的唯物論）↓史的唯物論↓現実形態としての資本主義批判↓現状分析、の三層構造をとらなければなりません。これはマルクス主義の常識です。

「観念論であり、唯物史観とは反対のものである」とは言えないし、全くのひどい諷刺中傷です。このような批判を加えることによって、過渡期世界論を根底的に統一的に把握することが出来ず、八木同志の世界分析は単なる浅薄な事実の羅列の、現象主義になっているのです。

「Ⅵ4のこの思想は、プロレタリアートの組織形態、イデオロギー形態、総じて団結形態が何一つの原理（歴史的实践の弁証法）に沿って自立的に展開しているかの如き主張」一否、現実の階級闘争は、この原理の自立的発展・展開に貫かれ、むしろ発展・展開の場として把握されている。「これは藤本進治の『革命の哲学』に依拠したものであるが、プロレタリアートの階級闘争を何かその「内的矛盾の原理」の展開——本質と形式の矛盾の自己展開、自己疎外、自己止揚を通して本質を表現してゆく過程」——この見地はブルジョア的主体的唯物論の一形態であり、結局は時々の階級闘争の傾向性を抽出して、それを原理的・哲学的に意味付ける……、自然成長論の主観主義と母胎論の根拠でもある」（臨終パンフ、五五―六頁）

私は、これをそっくりそのまま八木同志個人の自己批判として受けとめる。しかし、八木同志の旧来の関西ブンド主義の克服の水準に、それを越えて進んでいる赤軍派の水準を二重写しにして、赤軍派にナゾラえてもらったは全く困ります。自分の狭い体験、水準をもってきてそれを赤軍派そのものの総括

私はこのことを、パンフ『赤軍』Ⅵ4の第一章第一節で述べたにすぎない。そして、第二節でこのような三層構造の分析方法（正確には四層か）をとらない限り、過渡期世界は、非資本主義圏や社帝が存在するが故に、とりわけ、把えきれないことを主張したのである。又、第三節で唯物史観の次元での規定と現実形態性の関連が、ロシア革命をもってどのような関係にたっているかを、とりわけ詳しく分析し、第二次ブンド内部にあった論争とこの偏向に対する注意を、「前提の修正と接近の方法の二つの誤ち」の第四節で、一方で、スタ・ブ・ハヤソ修、革共同等の「体制間矛盾論」的偏向や史的唯物論を万能化する偏向（我が同盟の一部にあったU同志やTA同志等の傾向を危視して）、他方での、旧来の旧ブンド系や青解派等の単純反帝一元論を批判したものです。つまり現在でできているような「史的唯物論万能主義」や「単純反帝一元論」を当時から自覚して批判しているのです。

これらの提起は全て正しいし、真面目に「赤軍」Ⅵ4第一章を読んだ人ならば、現在でも十分有効であるばかりか、増々その正しさを証明しつつあることが十分把握されるものと考えられる。そして、このような立場・方法・観点によってのみ現代過渡期世界を科学的に把握されるのです。このような観点が、「プロレタリアートの組織形態、闘争形態、イデオロギー形態が何か一つの原理にそって自立的に発展するかの如くにはありませぬ。

同志、読者諸氏は「赤軍」Ⅵ4の第四章二八―三〇頁の文章を読んでもらえば、このことはすぐ理解してもらえます。イチイ引用するのも面倒ですが、代表的な表現を引用しておきます。「現代過渡期世界を、それ自身、世界プロ独―世界社会主義へと変革すべき変革主体||プロレタリアートの世界的な存在様式||自然発生性とその内的矛盾の対象化された世界と把握、従って過渡期世界の変革||対象変革自身を、同時にこのプロレタリアートの内的矛盾の止揚||世界的階級への形成の運動として把握する」資本制分業の社会的―政治的存在様式を意識的にこえてゆく階級の結合形態を世界性―社会性―暴力性として体現し……、原理的に指定される世界プロレタリアートと世界ブルジョアの階級闘争が世界革命戦争として現実形態化するものとして指定する」（二八頁、傍点塩見）「ここに攻撃型階級闘争の本質的根拠がある」（二九頁）これは完全に藤本の「革命の哲学」そのものです。これこそ「内的矛盾の自己展開論」でなくてなんであるか！これなら、明らかに自然成長論の主観主義として総括されるのは当然です。

八木同志は、私の三層分析に基づく三つのテーゼに特徴付けられる「攻撃型階級闘争論」を藤本進治の「革命の哲学」と誤解して、理解したものと考え、実は、攻撃型階級闘争を

何一つ理解してはいなかったのです。これでは、彼が藤本批判を必死でやり、攻撃型階級闘争を単なる「思い付き」と考え、否定せんと努力するのも当然のことです。

「客観的存在の仕方それ自身の中にもつ矛盾によってその革命性が規定される存在であった。主観的生産力という存在形態のうちに、労働力商品所有者（塩見注：彼はこの文言をつかっている）私的的商品所有者（まさに宇野そのものだ）というブルジョア的存在と、機械制大工業の世界的発展と共に付与される世界性・普遍性・組織性的全体性を、……資本主義の展開過程に内的に規定されつつ前者の立場と後者の現実的獲得へと到る階級形成」（二九頁）

まさに「内的矛盾の自己展開」！ 観念論の自然成長論の権化！ 驚くべきだ！ しかも「労働力商品所有者私的的商品所有者」という、宇野の用語をおそれもなく使用している。全くもって、八木同志の総括を赤軍派の総括としてもらっては困るのだ。——しかし、彼は卑劣にもこのことを述べず、平気で傲慢にもデマるのだ！ 実際いって、第四章と第一章（第三章までとは全く展開の方法も立場も、迫力も全く違うというものなのだ。連合ブンドは、この第四章をもって「藤本進治だ！」とデマを流しまわってきたわけだ。この点、今となって我々は、第四章が「攻撃型階級闘争論」とは違う、似而非なる、藤本進治の「革命の哲学」であったことを確認し、この克服を訴えるものです。

「原則的資本主義批判が二律背反の一語で片づけられている」とかのケチつけをしているが、確かに、我々の当時の歴史的成长段階に規定され、価値論や剰余価値論、蓄積論、再生産論、等「資本論」の内容をしっかりと把握し切れていない面はあるが、それでも、「我々の立脚すべき地点」の九頁では、剰余価値論による賃金奴隷制批判を厳密ではないにせよやっていることからしても、「科学的社会主義の立場、方法、観点がない」などというのは全くのウソである。

又「資本主義的生産過程——流通過程の関係を機軸とする分業諸関係」として、機軸を主張しているし「生産関係を分業に解消」してはいないこと、「市民社会の総括としての国家」に対するアレコレの言説はケチツケ——「立脚点」をみよ！ これがイチャモンづけであることはすぐわかる。私は「立脚点」でちゃんと「国家と革命」の観点を展開している。尚「生産関係を分業問題に解消している」のは「資本制分業関係の社会的存在様式を意識的に越えてゆく……」（総集、「赤軍」Ⅵ4、二八頁）と述べている如く八木君であること。

「労働力商品ということにプロレタリアートの基本的特徴をみるのブルジョアジーの観点」と、榎原君に立脚して批判せんとしているが、「労働者が、労働力を売る以外には生かゆげず労働力商品として資本そのものになること」をプロレタリアートの最大の特徴とするのは全く正し。」「労働力

② 直接的生産過程に於ける「絶対的、相対的剰余価値の生産」を忘脚視し、榎原修正経済学に解体されている八木同志、「労働力商品所有者」を使用する八木同志

八木同志等は「赤軍」Ⅵ4を「科学的社会主義ではない」とデタラメを吹聴してまわっているわけですが、「Ⅵ4」一（二頁（赤軍派政治理論誌総集）をチャント読んでもらえれば、これが嘘であることはすぐ明瞭になる。

「プロレタリアートの革命のあり方を指定し、実践的な共産主義とその運動の成立と展開の在り方を導き出す。これは主要には唯物弁証法を基底とする唯物史観とマルクス主義経済学とを、かかる意味での階級闘争史観と階級闘争関係として把え直しここから革命論実現の方法に取りかかる」——「もともと革命論は、ブルジョアジーとプロレタリアートの間の唯物弁証法的な、歴史的な闘争関係の確認及び、これと一体をなすブルジョアジー打倒の戦争の勝利をめざす能動的な実践的歴史観を、即ち、唯物弁証法——唯物史観——マルクス主義経済学を前提として与えられる」——「プロレタリア世界革命の歴史・経済的基礎である、母体たる資本制生産から形成される過剰な生産が、自らの生成そのものである国民経済の……」（三（四頁）等として、資本の生産・蓄積からプロレタリア世界革命の必然性を説いている。以上の如く、プロレタリアートの対象たる資本の分析・批判を機軸にして共産主義革命の不可避性・特質・諸条件等を展開している。

商品所有者」と規定すればブルジョアジーの観点になるのだ。問題は、プロレタリアートはブルジョアジーの奴隷であり、経済（学）上は資本そのものであり、生産過程でも再生産過程でも資本のもとに緊縛されていること、従って資本と賃労働の関係は交換関係ではないこと等からして、宇野の如く「労働力商品所有者」として、プロレタリアートを独立した商品所有者の如く把えるのはブルジョア（or小ブル）イデオロギイであること。このブルジョアイデオロギイに毒されたのは、「Ⅵ4」第四章でも明らかなく、同志八木君であるわけだ。同志八木は「労働力商品」と「労働力商品所有者」を混同し、自分は「労働力商品所有者」という用語を使用しておきながら、これにふれず自分のことは棚にあげて、私を、ウソの事実を捏造した上でこれを批判しているわけだ。

尚、八木同志は榎原経済学に解体されて宇野批判をやるわけだが、そのことでもって、直接生産過程に於ける絶対的・相対的剰余価値の生産を通して賃金奴隷制が再生産されてゆく、決定的観点を見失っています。これは序章Ⅴ5やこのパンフでも明瞭です。

序章五号では「死んだ労働と生きた労働の交換論」に剰余価値の生産の秘密を修正し、「労働の処分権論」などの資本論以前の「経済学批判要綱」のレベルに榎原君とともに后退しているのは明瞭です。又、臨総パンフ六三頁でもこの榎原修正主義経済学への屈服は明瞭にあらわれている。謂く「資

本と賃労働の関係を価値関係とみなし」として資本と賃労働の關係は交換關係ではなかつても価値關係ではあるものを榎原君と同じ誤りを犯している。

⑧資本主義生産→ブルジョア民族国家→國際的暴力的競争戦の連関の無理解からのプロ國際主義の無理解と一國主義
八木同志は私が「ブルの一國性とプロの世界性」という二大階級の最も重要な特質を一つ展開支点にしつつ資本主義批判を基礎にしてプロレタリア世界革命の必然性、条件、特質形態、目的たる世界プロ独・世界社会主義・世界共産主義の不可避性・合理性・等を説明する主張に対して異常な執念を燃やして、突っかかって来、「小ブルジョアの眼からみたプロレタリアートの観念的解釈」、「二大階級の形而上的分類をスコラの解釈学として展開している」とかの誹謗をおこなひ又、「世界市場のみからプロの世界性を根拠づけている」「プロに世界性なる属性が出来そなわっているかの如き深淵なる思想」などと、歪曲やウソを言つて、プロレタリア國際主義とプロ世界共産主義革命（世界同時革命）の科学的根拠を踏みじり、自らの混乱と一國主義を正当化しようとしているわけだ。

又、この一國主義の観点を更に發展させ、世界把握の三層分析の方法やプロレタリア國際主義の精華たる三つのテーゼを清算してゆかんとしているわけです。この意味でこの点に關する八木同志の反批判は、パンフレットの防衛と發展にとつ

て、制度として確立する為に、租税、公債、郵便、交通、教育、軍隊、治安等のブルジョア国家制度を確立する中で形成されていった。この意味に於いて、資本主義とブルジョア民族国家とはその歴史的起源からして不可分一体の下部構造たる前者の、後者は上部構造であるわけです。

ブルジョア民族国家は、封建的經濟關係とその国家に対して一步歴史的進歩性を示し、資本主義生産はこのブルジョア民族国家を楨杆してその社会的生産を飛躍的に増大していったのです。

しかし他面では、全世界の地球的視野からみれば、この、資本主義→ブルジョア革命→ブルジョア民族国家は、全世界を無数のブルジョア民族国家によって細分し、これを固定し、機械制大工業をもって開始された無限の生産力の發展・生産の社会化・國際化をおしとどめる役割りを担つたのです。つまり、資本の剰余価値追求の本性からして、資本は全世界を自己の搾取、収奪、支配の下に統治せんとする人狼の渴望を持ち、総資本としての資本が完全に搾取、収奪、支配を専横している自國經濟内にとどまるものではないこと、それ故に、総資本の世界的・國際的支配の欲望は自らの暴力→ブルジョア軍隊を初めとするブルジョア国家の暴力装置に立脚して他資本主義国家や他被抑圧民族を支配せんとすること、このことを通して市場分割と領土占有戦の暴力的対立が恒常的に展開されざるを得ないこと。即ち、資本主義にとって自己の

て決定的な地位を占めていると考え、ガツチリ反批判してゆくことにします。

(1) 「ブルジョアジーが世界市場を前提としつつもこれは國民經濟→市民社会の総括としての国家を媒介にした世界性でしかない。(その限りでブルジョアジーは經濟的範テューウの人格的表現としては世界的でありながらも、經濟→政治の総体に於いては一國的存在でありそれは別の側面に於て、即ち支配階級としてあることを意味する)」(総集三頁)

これは断然正しい命題ですが、八木同志はまずこれにケチをつけようとするわけですので、この命題をより詳しく説明しておくことにする。どうも八木同志は私への反撥が昂じて私の述べることには、なんでも反対して、反対のことを言わないと気がすまならしく「ブルジョア階級の國際的性格」とかの用語に代表される如く、ブルジョアジーの最大的特質たる「ブルジョアジーの一國性」を否定していつているようにも考えられるので、この点にも留意しつつ、問題を提出していきます。

ブルジョア階級は資本制生産と商品經濟の生成、拡大ともにも發生し、機械的大工業の發展を挺子とした、資本主義經濟に種々に分断された地方經濟や中世經濟の分業諸關係が解体され、一般には民族を単位とする國民經濟に單一化される中で階級として形成されて、対外的には対外的競争戦、領有戦や貿易戦に共通關稅、対内的に賃金奴隸制度、私有財産制度

國際化・世界化は、他民族・他ブルジョア民族国家の搾取、収奪、暴力的打倒を通じて以外には實現されないわけで、この点に於てブルジョアジーはその歴史的・經濟的基礎からして、一國的・ブルジョア民族のしかあり得ないのです。決して國際的・世界的特質を本性としません。又、資本主義が利潤追求の熱望に規定されて巨大な生産力を生み出し、生産の社会化・國際化を無政府主義的に形成してゆくのに對して、初めは、その促進要因として機能していたブルジョア民族国家は、今度は桎梏となり、ブルジョア民族国家相互間の國際的な暴力的競争戦という形式をとってしかこれにかかわれなくなるわけです。この意味で、ブルジョアジーの世界性は擬制的でしかないのです。

つまり生産の社会化・國際化(これも社会化の一つ)に對して、ブルジョア民族国家は、私有財産制度とともに決定的な桎梏物とならざるを得ないこと、これが資本主義とブルジョア民族国家の歴史的運命なのです。

以上の意味あいにおいて、上述の「赤軍」の言説を理解すべきですし、又その正しさも明らかになります。

(2) 資本の利潤追求、無政府的競争とそれを通じた資本の蓄積、その国内的國際的展開は、常に、資本のもとに包摂されたプロレタリアの搾取・抑圧を基礎にし、又その競争戦の犠牲をプロレタリアートに転嫁しつつ遂行されることに於て、プロレタリアートは、その所屬する民族の如何にかかわらず、

何んらそこから利益を享受しないし、犠牲だけを押しつけられる性格であること、又この自己犠牲的国際競争戦を通じて、ときにはそれは、労働力の国境を越えた移出入という特殊な事態も含めて、プロレタリアートは国際的・世界的視野を広めること。このような意味に於て「プロレタリアートは祖国をもたない」のであり、全世界のプロレタリアートは資本主義に對して、又ブルジョア民族国家に對して、共通の、これを廃絶せんとする立場を礎けるのです。以上からして、プロレタリアートは単一の世界階級として生長してゆく経済的・歴史的な必然性をもっているのです。

又、資本制生産の無政府的発展を通して生産力の高度化、生産の社会化・国際化に對して、ブルジョアジーがブルジョア民族国家を通じて国際的暴力的競争戦に於てしか対処し得ず、本質的に資本制生産の拡大とブルジョア民族国家のブルジョア民族国家による分断・固定化の矛盾を解決し得ないに對して、プロレタリアートは資本主義が生み出した巨大な生産力の無限の発展・生産の社会化・国際化に十分対処し得、私有財産制度とブル独としてあるブルジョア民族国家を解体し、生産手段を共有化し、目的意識的に生産力を単一の世界的生産力に世界的に配置し、世界的に共産主義的生産関係を組織することによって、これに十分対措し得る能力をもっているし、又プロレタリア世界革命は資本主義生産の発展とブルジョア民族国家（その中核としての私有財産制度）の矛盾の国際的規模での拡

労働力商品」という意味内容は、可変資本としての資本のこ
とを意味していること、この資本は前述した如く、国際的暴
力的競争戦を通して、ブルジョアジーがブルジョア民族国家
のくびきにしばりつけられているに對して、プロレタリア
ートはこれを自己否定・止揚して単一の世界階級として存在
し得るのです。又これは当然にも、資本の国際的国内的蓄積、
国際的暴力的競争戦を内実とする世界市場を意味するのであ
って、この意味で、世界市場からプロレタリアートの世界性
を説いても一向に構わないこと。

「すなわちせよ、「赤軍」第4の第一章のプロレタリア世界
革命の主張は、資本制生産の発展とその国際化・社会化に對
して、資本主義の矛盾と一体のブルジョア民族国家が時代遅
れになり、この矛盾を自己否定・止揚する世界プロレタリア
ートを生成せざるを得ないし、世界共産主義を不可避化させ
ること（この世界共産主義は、ブルジョア民族国家は消滅し
ているが単一の世界プロレタリアートによって指導される民
族共同体——国家ではない——の復合を内包していても何ん
ら不思議ではない）。この資本制生産とブルジョア民族国家
の矛盾を基礎として、ブルジョアジーの一国性とプロレタ
リアートの世界性を特徴点にして、プロレタリア世界革命を導
くのは正しいのです。

八木同志の「プロレタリアートの世界性」の否定は、過渡
期世界に於ては頂点に達し、世界武装プロレタリアートを

大の中で、不可避に発展し、生長してゆくのです。

八木同志は、このような「プロレタリア国際主義」の科学
的把握が正しく統一的に把えきれず、臨終パンフでは全くバ
ラバラにしか把えきれず、結局一国主義に陥ち込んでいるの
です。

以上からして、プロレタリアートの国際的性格は、対象自
身の性格からして、歴史的に必然化されるものであり、まさ
に生来的に「世界性なる屬性」を保持している、と主張する
のは全く正しいわけです。このような意味に於ける私の「赤
軍」第4の三、四頁の、「プロレタリアートは国民経済が世
界市場と一体となって成立し、かつ世界市場を前提として成
立することによって、もともとその物的姿態としての労働力商
品が世界的であり世界性をもつことにおいても、自由で普遍
的で世界的であるということに於て存在する」の文句にアゲ
足をとり、「世界市場のみからプロレタリアートの」世界性
を根拠づけるのは全く一面的で、現象論的である」と批判す
るわけですが、私は、世界市場からのみの「世界性」を説い
てはいない。第4の四頁の前半部でも明確なように、資本の
国内的・国際的蓄積、国際的暴力的分割戦の観点からも説明
していること。

尚「物的姿態としての労働力商品が世界的であり、世界性
をもつことに於ても自由で、普遍的で世界的である」の命題
は、嚴密性を欠いた表現であるにせよ、「物的姿態としての

初めとする、三つのテーゼの全面否定に発展してゆき、反ス
ター一国主義と毛沢東思想への迎合をせわしなく往還しつつ浮
動を極めざるわけなのです。

尚、資本主義生産—ブルジョア民族国家—国際的暴力的分
割戦の連関構造は、過渡期世界に於て極限化し、多国籍企業
（実際はチャント国籍はある）という資本輸出の形態にみら
れる如く、帝国主義相互の暴力的対互が極力回避される関係
の中で、ウルトラ国際独占体が形成され、ブルジョア民族国
家と矛盾を深める関係になっている。ブルジョア民族国家は
一面では、ブルジョアジーにとってさえ極枯になってきてい
るのです。

この辺の問題に關しては、我々は現代帝国主義とブルジョ
ア民族国家という観点に於て、種々な問題を提起するつも
りです。

④ 八三層分析の方法への捏造の上での批判

三層分析の方法への自己の藤本哲学の視野からの「世界の
本質規定」「本質と擬制の内的矛盾」の自己疎外体—本質
の実現の獲得」とか、「原理が展開する為の外的条件、制
約条件として把える」のデタラメ極まる勝手な捏造的批判を
おこなっている。辱しく思え！

⑤ 八「コスモポリタニズム」という批判をおこなって、プ
ロレタリア国際主義を投げ捨てること

「世界武装プロ」は何一つとして、ヘーゲルの如き世界の

本質的規定として述べているのでは全くない。ロシア革命の成立を契機とする、極めて具体的なプロレタリアートの成熟度、国際的な階級関係を世界史的視野から捉えたものであり、何んら抽象物でもなければ神秘的なものでもない。八木同志は、自己流に「革命の哲学」の観点にたつて、自分勝手に観念的に捉えてアレコレ批判しているのです。まさに「自分で答」をもちあげて、自分の足を打っているのです。

この「世界武装プロ」として表現されたロシア革命のそのの切り拓いた、階級関係の根本的变化は、確かに六八年一〇・八〇一・一二の激動の中で国際階級闘争の昂場に直面して把みとられたものであり、それは決して単なる現状分析的認識の問題ではないし、「国内大衆武装アジア人民の武装—ロシア革命以降の武装の前進」を二重写しにしている見解でもない。我々は六〇年代後半の情勢をまさに三層分析と三つのテーゼによって捉えたのです。

「世界武装プロ」の提起は、具体的条件が飛び越えられ、空想化、平板化され、一挙の世界同時革命となり、それまで日本革命は「なし得ない」という急進的コスモポリタニズムとなる」に至っては、なにかいわんやで、世界同時革命は歪曲され投げ捨てられ、プロレタリア国際主義は急進的コスモポリタニズムというレッテルが貼られるのです。

要は八木同志の批判の眼目は、急進的コスモポリタニズム、自然成長論とかあれこれ誹謗中傷し、一国主義に舞い戻るこ

とにあったのです。

⑥「被制約の能動のテーゼ」の否定による攻撃型階級闘争の否定

被制約の能動のテーゼとして概括された、三プロクテターが自然成長論として放棄されること。これは客観的経済的政治的基礎をもっていること。主観的には中・朝・ベ・アジア三国民党の前進を条件として、能動化していること。これ等のことを抜きにして、「党の問題」を軽視しヌターリン主義を無視しているからこんな把握がされるのだ」ということは全くあてはまらないこと。その他は、三節で展開、繰り返さない。

四・一〇 執筆完了

註記

本論集において論究されている清算主義文献は次の通りです。

- 一、プロレタリア革命党建設とわれわれの緊要の任務(上) 八木健彦著
- 二、再生にむけて 赤軍派都委員会発行
- 三、共産同赤軍派臨時総会報告集 共産主義者同盟赤軍派中央委員会
- 四、共産同赤軍派政治機関誌、再刊一号 共産同赤軍派中央委員会

(2) 前史

目次

ゲバラ||カストロ路線とわれわれ……………2
——いわゆる世界革命の第三の道派について——

現代過渡期世界と世界革命の展望……………24

——世界プロレタリア統一戦線・
世界赤軍・世界党建設の第一歩へ——

4・14 シンガポール・クウェート連続作戦
勝利万歳ノバレスチナ・アラブ人民連帯集
会へのアピール……………34

序 「ゲバラ||カストロ路線とわれわれ」「8・3論文」
を復刻するにあたって

この両論文は、前者は「烽火」№5（関西ブンド理論機関誌、一九六七年一月三日発行）に掲載されたものであり、後者は、ブンド機関紙「戦旗」№一四一、一四二合併号（一九六八年八月五日発行）に掲載されたものです。

連赤敗北以後、同盟内に、今までの同盟の闘い、理論を全て否定し清算していくという清算主義が生れ横行する中で、同盟の闘いの歴史を正しく総括し、更に発展させる為に、赤軍前史・赤軍派誕生の出発点ともいえる、この両論文を復刻することは意義のあることだと考えます。この論文の現在の意義に関して、序文を同志塩見が書く予定でしたが、復刻の必要性の高まっている現在、早急にこれを復刻することが急務であると考え、時間的余裕の制限から、「序文」なしで復刻に乗り切らざるを得ないことを同志諸氏の「了解を得たい」と思います。しかしながら、既に発刊された「論叢」№6が、今回復刻されるこの両論文の「序文」の役目を十分に果たしていると我々は考えます。同志、読者諸氏は、「論叢」№6を合わせて読み御検討いただければ幸いです。

ゲバラ || カストロ 路線とわれわれ

——いわゆる世界革命の第三の道派について——

△I▽ 世界革命の第三の道派の登場とわれわれ

真の革命闘争の開始とインターナショナルリズムの復活が中南米階級闘争において実現の途についた。

「ヴェトナムと自由の為の世界闘争」（ゲバラ論文・本年四月発表）、「武装闘争 || 解放への唯一の道」（四月カストロ演説）をその内容としたOLAS会議での中南米革命家の鉄の団結の確立がそれである。

彼等の、ここ一〇年余の生死をかけた実践的経験の結晶は、我々に「勝利か死か」の階級闘争を呼びかける。彼等のさけびは、我々に巨大な衝激を与えた。彼等が世界革命の与えられた部署において定められた任務を言葉通り英雄的に果し始めたのに対し、我々↑先進国共産主義者のまず何よりも自覚し、果さなければならぬことは、我々こそが定められた任務を果しきれず、後進国人民に、とりわけベトナム人民や中南米人民に、世界史の全重量を負担せしめ、犠牲を強いている

性と後進国からの反撃が米帝国主義打倒の早道であることを力説し結論づけている。そして最後の結論はなんと「ゲバラに捧げる」である。なんと素町人的俗物的なことか。彼等の理論にその限界性は幾つも指摘できるであろうが、問題なのはその理論を支える思想そのものに根底的な病弊が潜んでいる。アメリカ帝国主義の矛盾は、他の誰彼が解決してくれるものではない。種々な闘争の段階や闘いの型態、そして世界革命での戦略配置の問題は、れ、つまるところ、アメリカ人民によってしか解放でき得ないことに對する全くの無自覚である。

「現代の理論」にたむろする諸君は、彼等に対し「真の国際主義の復活だ」と最大限の賞賛の辞を投げかけているが、何が「国際主義の復活」なのかは、一向に明らかでないばかりか、米ソを中心とする核戦争回避の努力、積極的共存政策に對する肯定的評価は全く見られない。……ひいき目にみても、そこには第三次世界大戦の現実的危険に對する歯どめが欠けており、後進地域の解放運動の立場からする一面的な国際情勢理解があると感じざるを得ない。」（「ゲリラ戦争」の訳者、五十間忠行）の如く、ゲバラ賞賛とは全くつじつまの合わぬクリ言を述べている。彼等は現代世界変質論を背景に、後進国階級闘争の特殊性に對して、先進国階級闘争の特殊性を對置し、その限りでゲバラ || カストロを賞賛し、他方で自らの任務に關しては「先進国の任務」とか「先進国と後進国との関連云々」全くの抽象的じゅもんを繰返している。

こと——そのことを彼等はあえて勇敢に引き受けているが——であるし、我々が彼等の階級闘争の領域に急速に入り込み、彼等に追い付き、彼等の巨大な負担を、いくばくなくとも我々が背負う闘いを組織することである。

我々は彼等よりも前進しているのか、否！ 我々は立ち遅れているのだ！

一〇・八羽田闘争は、全世界の労働者、人民に、とりわけ、ヴェトナム人民と彼等に対する我々のささやかな挨拶である。全世界の彼等の戦闘宣言に對する反響は端だつて二通りであり、その対応には天地の隔たりを示した。

その一つの典型は、ブラン || スウィージー（米国）や構改派諸派であり、総じてソ連派である。（勿論日共も、その一部である。）他方ブラックパワーの提唱者カーマイケル達である。

ブラン || スウィージーその「力作」 || 「独占資本」に於て、米資本主義を分析し、結局のところ、米国内での革命の不可能彼等には、何故ラテンアメリカ諸国に於て、ソ連派の平和共存路線が破綻しているのかを理解しようとしなさい。「メネズエラ共産党右派指導部はいわゆる削減理論を拡張し、武装闘争を放棄し、支配階級と和解する政策をつくり出す……かくして右派指導部は合法性を再び手に入れ代議制民主主義という選挙喜劇に参加しようとしている。いりまでもなくかかる政策は大衆運動にとって最も有害なものであり……修正主義者の政策は、革命運動に傭兵どもの銃弾よりもっと大きな損害を与える。」（ベネズエラ民族解放戦線・フランシスコ・ブラダ）が彼等の世界観と革命論に真向から挑戦していることを理解すべきである。もっともそのことは彼等にとって無理な注文であるが。

第三期階級闘争の展開は、如何なく、帝国主義の日和見主義の理論的表現こそ彼等の世界観であり、逆に右翼日和見主義の震源地が、その理論にあることをあばき始めた。OLASへの彼等の対応も又その一部である。

いづれにしても、彼等の対応からは、アレコレとゲバラ || カストロの部分を抱えての批判によって、自己の世界観の防衛に努める「エセ革命家」のサエズリの域を出ないし、ゲバラの呼びかけに実践で応えることなどは更でない。追いつくための闘いを組織する実践的前提を踏えない限り、一切は抽象的天上界に昇天し、先進国の共産主義者をしてエセ革命家に転落せしめるだろう。日共はどうか。彼等は構改派諸氏よ

りも巧妙であり、慎重である。赤旗での報告は、その内容にふれず、中ソ論争に対する「第三の道」が彼等の自主独立路線と同質であることを強調しているが、彼等と日共との根本的相異はいりまでもない。八月原水協でのキューバ代表が全学連・反戦青年委の砂川闘争を全面的に評価したことに対し、動揺が隠せなかったことが伝えられている。

「ベトナム人民と連帯しようとしている世界の進歩的陣営は市民達の拍手を受けてローマの競技場に立っている剣闘士をながめているような苦しいアイロニーを感じる。犠牲者の勝利を願うだけでは十分でなく、なすべきことは死と勝利の谷間で運命をともにして闘うことなのだ。ベトナム人の孤立について語るとき、我々は人間的な苦痛を感じる。アメリカ帝国主義の侵略は罪である。この罪は大きい。この罪は全世界が知っている。諸君！我々もすでに知っているのだ。しかし決定的な瞬間に動揺しベトナムを犯すことのできない社会主義の領域としなかつた者も、同様に犯罪者なのだ。まさしく全地球的な規模の戦争の危機をつきつけて、北アメリカ帝国主義者に決定を迫るべきだ。また社会主義陣営の二大勢力相互の侮蔑と嘲笑に満ちた争いを続けさせている者もまた犯罪者である。」（ゲバラ、「ヴェトナムと自由の為の世界の闘争」）のゲバラの呼びかけに答えて野獣と剣闘士の闘いを苦しいアイロニーを感じながらも觀賞するローマ市民から、剣闘士の仲間を決して加わるうとしない、バランスウィージー、

なものである。われわれはヴェトナムの事態がこちらの側の我々の闘争に影響を与え、また我々の行動がヴェトナム人民の闘争に影響を与えていることをよく知っている。」（同）
「勝利するか、さもなければ攻撃に失敗して殺されるかのどちらかだ、と叫んで我々は立ち上っている。」（同）、SNCCやSDSにとって、全世界階級闘争との闘争による連帯は運命的・不可避的であり、先進国、後進国階級闘争、或いは資本主義国、非資本主義国にあっても、その関連が、どちら側の立場に立っても、メダルの裏表であり、不可分一体の等質性を有していること、しかも、それは言葉でなく行動に於いて貫徹されねばならぬことが明白に自覚されていることを確認しなければならぬ。

中共派はゲバラ・カストロ路線に対して、「一方ではソ連の修正主義指導者とその追従者があり、他方ではアルバニアと中国を中心とする国際共産主義運動の健全な勢力があるのに対し、その間の矛盾について、ゲバラが皮相な妥協的判断しかもっていないことは嘆かざるを得ない。彼は、『……：……』と言って真理とウソ、反帝闘争の一貫した戦士と『首つり人のヒモが首つり人を与ええるように』この闘争を支えている者との区別を拒否している。……：ゲバラとその追従者は、現代修正主義者が帝国主義者の国際的憲兵であり、ソ連人民を含めて全世界人民の敵であるという正しい分析に到達すべきである……：、もっともこういつたからといって木

構改諸派、日共ソ連派に対し、我々は、剣闘士への連帯は我々が剣闘士になることによってしか果し得ないことを自覚しなければならぬ。以上の反応に対し、他方でのカーマイケルの反応はどうか。

アメリカ階級闘争については烽火三号、四号に詳しくふれられているが、七月デトロイト反乱が続いている折、カーマイケルはOLAS会議に出席し、次のような演説を行なった。それは、バランスウィージー達とは全く相異した、先進国共産主義者の実践的任務とその成果に裏打ちされたゲバラ・カストロに對等の資格を得たものの発言であった。

彼は黒人運動の発展段階と任務、黒人運動と白人労働者人民との連帯あるいはヴェトナム侵略戦争と米国防戦闘争、ラテンアメリカ人民との連帯としてアメリカ社会主義革命と世界革命との関連等を提起し、公然と米帝国主義打倒の内乱を提唱したのであった。ここでは二、三の彼の演説を引用するのにとどめておけばよい。何故ならば、彼等は言葉でなく行動において見事に自己の思想理論を説明しているからだ。

「われわれが同志である諸君にかたりかけるのは、我々の運命が相互に絡みあっていると考えていることを明らかにしたためである。我々の世界は、ただ第三世界としてのみ存在し得るのであり、種々の闘争はただ第三世界のためであり、我々の唯一の展望は第三世界についてである。」（カーマイケル演説）「我々が進めている闘争はインターナショナルな

を見て森を見ないのはいけない。ゲバラ論文にある多くの積極的な面を見落してはならない。」（フランスの中国派新聞「ユマニテ・ヌーギル」紙）、以上の見解を述べている。中共派はゲバラ・カストロ路線に関してあいまいである。

以上大雑把にOLASに対する我々の基本的思想性と国際的反映を概観したが、我々が彼等に対する我々の連帯の立て方を国際主義の立場を検討すればする程一層くっきりと、我々自身が、(1)世界階級闘争の段階と性格を如何に把握しているのか、(2)それとの関連で世界革命戦略は如何にあり、我々は日本に於て如何なる任務をもち、現在如何に行動しなければならぬか、(3)かかる(1)(2)には当然にも現在に於ける中ソ論争の決着と国際共産主義運動の指導部形成をいかに実践的に展望するか以上のことを明確にすることを否応なく強いる。

逆に、そのことは、ゲバラ・カストロ路線が、中ソ論争の不闘性に比し、実践的な問題であり、又そのように提起されている有効性故に中ソ論争や中国文化革命を上まわる歴史的役割を持ち得ているからに他ならない。

OLAS会議への反映に於ける、ソ連派、米国のSNCC、SDS、そして我々との典型的な相異、そして中共派のあいまい性をはっきりと前面に押し出したものこそ、とりもなおさず、戦後ヤルタ体制の動揺と第三期階級闘争の全世界的開始に他ならない。即ち第三期の開始に当って、プロレタリア独裁・世界革命派対平和共存・一国革命・一国社会主義派の

相異の顕在化であるし、中共派のこの二極間の動揺である。

これ等のことの意味は、第三期階級闘争の発展がゲバラ・カストロ路線、S.N.C.C. (フラックパワー)、S.D.S.、我々の如き、プロ独—世界革命派を新しく世界的に登場させつつあることであり五〇年代の闘いはスターリニズムとは全く相対的別個な創造的実践的な党派が登場し、過去の体制間矛盾—平和共存—一国社会主義建設—後進国民族解放、先進国—人民戦線派と真向から階級闘争推進の実践的観点からして対立し始めたこと、他方中共派がソ連派に対して経験主義の次元でしか実践的批判をなし切れないが故に同時に、自己自身の新たな第三期を展開するのに対し、その推進が経験の領域を越えるが故にその対応は常にプラグマティックであり、動揺し、第三の道派に対してあいまいにならざるを得ないのである。

国際共産主義運動の対立と分裂は、今や始めて過去のスターリン主義の枠を、大きく飛躍した新たな第三の道派の全世界至る所での登場をもってはじめて国際的規模で現実の実践に結びついた対立と分裂として統一の時代へと歩を踏み入れているのだ。

現実の闘いが、ナショナリズムと暴力に対して、分解しつつある大衆を全世界に世界革命の一点に向け組織する作業は、ゲバラ・カストロ、あるいはカーマイケル達によってもつまびらかでないし、その論理化ははまだ原則の領域を出ないのであるかも知れないが現実には要請された、帝国主義の暴力

との日常的対決は、「勝利か死か」の合言葉にも見られる如く、現代世論を突き崩す新たな世界観と体質を原初的に確立しているのである。

そのことが、正しくスターリン主義やスターリン主義の残滓を残した部分との根本的相異せしめつつある理由なのだ。

我々はあえて、我々と共に今後の国際共産主義運動を担う部分が誰かと問われるなら、まごつくことなく、第三の道派と答えるだろうし、今後先進国、後進国とりわけ西欧に於て統々、第三の道派が登場してくることを確認するものであるし、かかる第三の道派の階級闘争の前進こそが中共派の経験主義的、地方主義的闘いはっきりと世界史的な性格に変質出来得る唯一の方向である。

我々は以上の結論的視点の下に、再度(1)より詳細に整理し第三の道派の歴史的位置とその理論的点検、毛沢東派との実践的結合の方向、ソ連派の帰結と党派闘争の方向、第二にこれらを含んだ第三の道派の基本的課題としての世界戦略と世界革命の前—戦についての任務を基本的に明らかにすることによってO.L.A.S.会議への我々の態度としよう。

△△ 第三の道派とは何か— 彼らと毛沢東、ソ連派

それでは第三の道派とは一体何か。△△の項で述べた観点に従いながら彼等の歴史的、経済的、社会的背景と理論的

検を行なうことにしよう。

彼等の歴史的、経済的、社会的背景については烽火(3)(4)号の情勢分析、葛木論文においてのべられているから多くを述べる必要はない。ここで主に、(1)キューバ革命が第三期への突入過程で如何に対処しているかを、主に、中国文革やその世界革命との比較関連で明確にすること、(2)キューバを含んだラテンアメリカ諸国がO.L.A.S.で、④世界革命戦略を如何に立て、彼等の任務を如何に位置付けているか、⑤後進国に於ける社会主義革命と民族自決に対する態度、⑥①②との関連で統一戦線—戦術はどのように位置付けられているか、⑦いわゆるゲリラ戦—武装闘争とは何か、⑧先進国との結合の国際主義、⑨新植民地主義—勢力圏形成の先進帝国主義の動向に対して、後進国革命闘争が恐らく部分的孤立の不可避性が生じるが、これを如何に把握しているか、⑩中ソ論争に対しての彼等の国際革命指導部の考え、等が検討されねばならない。(3)に、又、S.D.S.、S.N.C.C.等の先進国運動の態度、以上三点が検討されねばならない。以上を基本的に確定する為に我々のこれらに対する基本的視点を明らかにしておく。

烽火(3)(4)号で明らかにされている如く、世界は再び資本の過剰と史上三度目の市場再分割戦に突入し、世界ヤルタ体制の政治的再編が進展している。アメリカ帝国主義の圧倒的経済的優位と政治的世界支配は、「社会主義国」の対応を帝国主義との国家間対立に世界政治に引き込み、「社会主義一諸

国内部に於ける階級闘争を米ソのヤルタ体制にここでも吸引したのであったが、かかるヤルタ体制を世界帝国主義の市場再分割戦は内部から突き破りつつある。かかる世界帝国主義の動向を軸に、第三期階級闘争は、帝国主義の侵略、ナショナリズム、暴力に対抗する唯一の展望を、プロレタリア独裁—世界革命をめざす、国際的連帯を基礎にした武装闘争の開始に運命を任せている。とりわけ先進帝国主義間に於ける対立紛争は、先進国階級闘争をして、自国帝国主義打倒の先進国—後進国階級闘争との連帯を増々鮮明にしつつある。(注)

注 これ等は米帝国主義に対して、相対的劣位にある西欧、日本に於いて、或いは西欧内部の、各国の対立に於いて、留意されねばならない。この試験は六九年N.A.T.O改編、七〇年安保—沖繩問題に於いて試されるだろう。

更に「社会主義」の防衛や、「社会主義」内部の階級対立も又、等しく、世界革命に向けてその一環として第三期階級闘争と結びつく以外には脱出口をもたない。

これ等のことは、先進国、後進国、「社会主義」国家の諸矛盾がプロ独—世界革命によって唯一解放されることを示すものである。以上のことを満足させつつあるものとして、S.D.S.、S.N.C.C.、カストロ—ゲバラ路線は存在するし、他方ソ連派の、平和共存—一国社会主義—二段階戦略路線が被縦し犯罪性を顕在化せしめる時代である。

そして、中国派は、ソ連派修正主義に對し、或いは、その世界的バックに對して、反撃の烽火をあげた点において決定の優位性を示しながらも、自己の世界革命戦略と、国内階級闘争に於けるプロ独運動の結合関係のあいまい性、或いは世界革命戦略に於ける、中国の農村から都市への周辺革命の引き移しとしての部分性を全体性に昇めている点に於いて、国際階級闘争の連帯に對して一面的である。プロレタリア独裁運動はそれ自体完結するものでなく、世界革命と結合し、それに向け用意されるものとしてなければならぬ。彼等の欠陥は世界帝国主義が独自の勢力圏形成に向け新植民主義を巨大に展開し始めれば始める程顕在化するだろうし、その時点に於いて彼等が先進国と後進国階級闘争、それ等と「社会主義国」とのプロ独運動との連帯を総体として把握する可能性を有するし、又その自党の促進的第三の道派の革命的任務である。

さて、以上の前提をふまえて、最初の問題提起に移ろう。

(ii) 五九年キューバ革命の成立以来、この二三年間、キューバ革命は決定的な岐路に立たされていた。他方同様に中南米階級闘争も又、そうであった。ベネズエラのゲリラ闘争、キューバとソ連派共産党との論争、コロンビア、(ペルー・ボリビア)の各ゲリラ闘争、ブラジル、アルゼンチンでのゲリラ闘争の準備、更にドミニカに於ける革命の不徹底、(ニカールマニヨ)と米帝国主義の反革命武力鎮圧、等々、中南米階級

闘争はケネディの進歩の為の同盟計画の枠をのりこえつつある。進歩のための同盟計画の典型的推進者「ブルジョア進歩主義のグラール政権(ブラジル)」はクーデターによって打ち倒された。

このように、中南米諸国に於ける農業危機と米帝国主義の収奪が一層深化し、幻想的進歩の為の同盟計画の挫折とその枠内での民主主義的民族運動は分解した。アメリカ帝国主義のブントデル・エステ会議でのジョンソン演説は、一方で、中南米をして米帝国主義の独自の経済圏への包摂をねらいとして、保護主義基調と特惠関税による中南米輸入の受入れと援助の拡大をテコとして、他方で軍事的にはアメリカ正規軍の配置と特殊なゲリラ対策作戦を約束し、中南米に対する一層の経済的、軍事的テコ入れの下に中南米革命の反革命抑圧を実現するものとして貫ぬかれていた。米帝国主義と各国の階級配置は、米帝国主義と民族ブルジョアジー、地主、軍閥のプロック、農民、労働者、学生、知識人、その他との非和解的対立へと転化しつつある。

そしてかかる、米帝国主義、民族ブル、地主、軍閥對農民、労働者、知識人、学生との非和解的対立は、中南米階級闘争を農民の土地革命の要求とプロレタリアートとの資本主義打倒との要求を、国際的規模に押し広げ国際的「反米帝・社会主義革命に永続的に発展せしめつつあるし、中南米での連帯を基礎に全世界の労働者人民(とりわけアメリカプロレタリアス、イタリア革命的共産主義者党)として、カストロとゲバラの経験主義とロマンチズムを批判した。だがブルジョアジーやボサダスの推測とは、進行していた事態は全く異なっていたし、その結果はゲバラ論文とカストロの演説―七月のOLAS会議に於いて実証された。確かに部分的にトロツキスト諸君の推測するような事実は幾つかあった。カストロの一連の演説のなかでの中国の米の輸出に對する反中国演説、続く、MR13と呼ばれるグアテマラの反ゲリラ活動をこきおろし、一連の中国批判を行なったこと等である。もしトロツキスト諸君の言葉通り進むなら、全ゆる意味で危機であつたらうが、それはボサダスの如き国際共産主義運動を「中国か、ソ連か」に限定する考え方そのものの危機にしか過ぎない。カストロとキューバ革命の指導者達は、自己の世界革命戦略の実現に向け、一切の労働組合運動の構成と役割の転換、独自の大胆な外交政策、キューバ人民の生活上の変革等々を準備しつつあったのだ。

かかる彼等の対応は一九二四、五―九九年に遭遇したロシア革命の問題、今その問題を経験主義的に対応しようとしている毛沢東とは異なり、全く次元の違う、中南米階級闘争との結合を基礎に国際的「反帝統一戦線」と世界革命の実現に向け、プロレタリア独裁運動を推進していくことであつたし、それを抜きにしてキューバ革命の防衛も有り得ないとする最も革命的原則的対応であつた。ゲバラやカストロの決定的飛躍へ

アート、人民)との連帯を通したインターナショナルな性格を必然的に帯びつつある。これ等の中南米階級闘争として、ヴェトナム人民の英雄的戦いの持続と北ヴェトナム革命の革命的防衛、或いは米帝国主義内部からの自国帝国主義打倒の指導部をもった反戦闘争の昂揚は、キューバ革命の新たな発展の方向を決定したのであつた。キューバ革命の岐路と彼等が決定した路線は何であつたのか。今一度キューバ革命に立ち帰ろう。

この問題を明らかにするには、カストロとゲバラの関係を明らかにすることから始めるのが適切である。一九六四年二月、チェ・ゲバラはアルジェ・北京・カイロを訪問し、一九六五年三月帰国後ぶつり消息をたつた。そして、更迭説、失脚説、病氣説、死亡説、フィデルとの不仲説等が流布され、同年十月カストロはキューバ共産党結成の際、チェがキューバを去った旨を明らかにした。又してもさまざまな説が流布され始め「中国派のゲバラは去り、カストロはいよいよソ連路線に切り換える決意を固めた」(一九六五年一〇月九日朝日新聞)など勝手な推測までとびだした。偏狭で性急な第四インターのトロツキスト達は、一九二五年―二九年のロシア革命の防衛と世界革命をめぐる、トロツキー、スターリンの分派闘争を現在のキューバに焼き直し「F.カストロはゲバラ追放という方法をとった。……こうしてソヴィエト官僚によって追放されたのである」(一九六五年J.ポサダ

の判断の根拠には、英雄的なヴェトナム人民と北ヴェトナム革命の不屈の防衛の可能性の実例、中南米階級闘争の展望、アメリカ国内での革命闘争の開始等が恐しく大きく入っているに違いない。

ここ二三年論争されていた、謂ゆる「物質主義か、精神主義か」の社会主義国に不可避の論争に彼等は世界革命の達成の実現から、それを止めたのであった。

確かに彼等のかかる決断は、全ゆる意味で直接的犠牲を覚悟しなければならなかった。米帝国主義によるアメリカ大陸からの経済封鎖と、キューバの国際収支の悪化、砂糖きび生産の低下、そしてキューバが砂糖や工業製品の供給に対する市場として、未だに「社会主義国」に依存している悪条件を考慮すれば、彼等の対応はすぐれて革命的である。

彼等はソ連の政策に対し「物質的刺激は、革命遂行上の諸問題に關する解決とはなり得ず、物質的刺激を重くみる人々と我々は戦わねばならない。社会主義国で物質的刺激が指導的役割りを果たすとすれば、それは退歩であり、資本主義への変質である。」(一九六五年八月一日グランマー・セーヌサ)「実際には資本主義の道を歩んでいるのに、共産主義を建設しているのだと信ずる事が、全く可能であり実際あり得るのだ」(カストロ演説)カストロ演説は感情的な中国批判が消え失せ、公然とソ連とその追隨者に対する批判がうかがえる。ソ連がチリーのフレイ政府との間に交わした通商金融

てのボルシェヴィキ党の目的意識的掌握に対する軽視である。

二八・二九年―三三年に至る世界恐慌と革命か反革命の時代に、かつロシアに於ける富農の胎頭、階級対立、これ等を世界革命の同時性を準備すべくロシア内部でのプロレタリアートの比重と独裁を用意し、工業化の促進を位置付け、スターリン主義と対決する必要があった。トロツキーはボルシェヴィキ党、第三インターの分裂に対し不決断であり、二九年合同反対派の結成は遅すぎた。このことについては別の機会に詳細に述べる。

現在中国やキューバが遭遇している地点は正にトロツキー、ブハーリン論争から、トロツキー、スターリン論争の地点であることは疑いを容れない。

この地点にあって、毛沢東は、国内に於ける実権派の批判とプロ独運動を強めながらも、かかるプロ独運動が、後進国社会主義革命と先進国(特に日本)に於ける革命に向けて準備することに對して軽視し、後進国解放斗争に軸をおいているし、又国際階級斗争との結合が不可避であることに對する自覚が弱く、中国文革運動は明確な世界革命戦略としてないが故に、その運動は常に浮動している。精神主義や個人崇拜等を生み落す基盤や一国社会主義建設に転落する歯どめもその世界戦略には明白にみいだし得ない。勿論このことは我々の日本での運動での弱さと不可分であり、かつ将来に於いて、

協定を批判して「キューバに對し敵対的な政策を取っているフレイ政府はその反動的な帝国主義的政策を露骨に押し進めているが、そのフレイ政府を援助しているソ連はアメリカ帝国主義と同じような役割りを果している」(カストロ)と強くソ連に警告を発している。

以上のことからキューバ革命の遭遇した問題点と、彼等が如何なる方向にカジを向けているかは明らかである。

ゲバラはカストロ路線は、史上、プロレタリアート権力が遭遇した最も困難な事業に對し最も有り得べき創造的な切り込みを開始しつつある。

レーニン死後の第三インターはこの問題を解決し得ずスターリンの一国社会主義建設に世界階級斗争を従属せしめ、各国階級斗争を反ファシズム民主主義防衛路線に転落せしめ国際的労働者人民を血の海におぼれさせた。ただ一人斗い抜いたトロツキーも又、ソ連社会主義建設とプロレタリアートを世界革命戦略(特にヨーロッパ)の一環として把握し、そのもとにボルシェヴィキ党を鍛えあげることに挫折した。そしてロシア革命は農民の現状維持的要求とプロレタリアートの無気力性に染まったスターリニズムを充満せしめた。

(注) かかる挫折の根拠は、根底的にトロツキーが世界同時革命戦略の明確な意識化とその下でのプロレタリア独裁運動の確立、その環としてそれ等の担い手とし

日帝のアジア侵略とアジア人民の反撃の過程で最も彼等が確かな世界革命の根拠地に成長転化することを排除するものではない。

(iii) 以上のOLAS会議(注)に至る経過と要因をみてきたが彼等の理論内容はどうか。

(注) 「OLAS参加国は二七ヶ国、世界各国からオプザバーの参加、その中にはカーマイケルも含まれる。OLASの決議に決議案はウルグアイ、コスタリカ、エル、サルバドルが反対し一五対三、棄権九で採択された。議題は、①ラテン・アメリカに於ける革命斗争及び反帝斗争、②ラテン・アメリカに對する帝国主義の政治的軍事的侵略並びに経済的思想的浸透に對する共通の立場と行動、③民族解放のために闘うラテン・アメリカ人民の連帯、④ラテン・アメリカ人民連帯機構(OLAS)の規約、以上である。」

その理論的検討のポイントは以下ほぼ四点である。①世界革命戦略を、如何にたてているか、その中でラテン・アメリカ革命の位置を如何に位置付けているか。②民族解放運動と社会主義革命の関連を如何に把えているか、③統一戦線と戦術、④中ソ論争に對する態度と実践的解決の方向、である。①②③④の順に検討していこう。

①「要するに、はっきりさせておくべきことは、帝国主義が世界的規模での体系であるということである。それ故にそれは世界的規模の激突において打倒されるのである。」「ア

メリカ合衆国の政治的経済的支配は本質的に極点に達し、いまやこれ以上の展開は望み得ない状態にあるのでいかなる変化も、その主導的位置からの没落を意味するものである。それ故にアメリカ合衆国の政策はすべての征服状態を維持することに向けられ、いかなるものであれすべての解放斗争に野蛮な弾圧を加えるのである。」(ゲバラ)の如く、ゲバラはカストロは米帝国主義を世界的支配の支柱と設定し、その支配が三大大陸人民の矛盾の深化と帝国主義、ブルジョアジー、地主ブルックとの非和解的対立と世界的攻防が形成されること、その成熟を基礎に「二つ、三つのヴェトナム」を三大大陸に主体的に起すことが、アメリカ帝国主義の力を動揺させ、分散させ、先進国内部からの反撃を準備するものになること、これ等の展望こそが世界革命に三大大陸人民の課せられた任務であることを明言している。カストロは、「人民の革命斗争の発展につれて、合衆国人民は事態をよりはっきりさとするだろう」(四月・カストロ演説)の項でアメリカ労働者人民の闘いを必須条件として明確に位置付けている。更にこのことを「ラテン・アメリカの斗争は、アジア、アフリカ社会主義諸国の人民および資本主義諸国との労働者の結びつき、なかく階級的搾取、貧困、失業、人種差別、最も基本的な人権の否定になやまされいるとともに革命斗争の重要な勢力となっているアメリカ黒人住民との結合をつよめる」とOLAS一般決議の一八項で述べている。しかも彼等は彼等の任

文章は悪であり、同時に、ある文章を自明のこととして受け入れるのも悪である」の項で「自由な進歩的ブルジョアジーとやらの出現を待ち望んでいる間に、どれだけ多くの紙数やどれだけ多くの文章が、どれだけ多くの無駄な議論が使い尽されたことであろう。今我々はラテン・アメリカに於ける一部のブルジョアジーの持つ革命的役割りに信頼をおくことができる人が果しているか、どうか検討しているのだ。」(カストロの発言)これ等を見るならば、社会主義革命と民族解放闘争との関連は明白である。現代世界は、はっきりと先進帝国主義と民族ブルジョアジーの癒着とその反動性を余すところなく表現している。以上の結論は「まず民族解放を国民的統一戦線を基礎に」それから「社会主義革命を」の二段階戦略の誤謬を突き出しており、帝国主義とブルジョアジーの癒着を通じて民族解放斗争でありながらも、にも拘らずその発展は不可避に、プロレタリアートのヘゲモニーによって、社会主義世界革命を戦略的に設定してのみ斗われ、逆にそのように斗われた民族解放斗争の上にしか、社会主義革命も有り得ないことを示している。(注)

(注) 何故カストロが教条主義の批判を敢てとりあげたかは、ソ連派がレーニンの文献を取りあげ、レーニン主義を御旗にして(実はスターリン主義者による二段階戦略論による歪曲であるが)民族ブルジョアジーとの同盟、議会主義路線を合理化することへの痛烈な批

務を世界的観点から明確にし、国際主義を打ち出しながらも先進国革命についての不明確な点では「世界はいま非常に複雑な構造をもっている。自由の獲得という課題はいまなお旧ヨーロッパ諸国の課題である。……旧ヨーロッパ諸国において矛盾が爆発するのは次の時代であって、その矛盾の解決は我々のような従属させられ、経済的に遅れた国とは異なる方法をとるであろう」世界階級斗争の有機的一体性と国際的連帯を原則的に踏えながら、なお慎重に留保している。だが、ゲバラ論文やカストロ演説の隅々まで先進国革命が、平和共存や議会革命の可能性を支持しないばかりか、真向から否定している、ことも又事実である。我々は彼等の見解を全面的に支持する必要があるし、我々こそが、彼等の後進国での世界戦略と横の国際統一戦線に対して先進国からの世界革命戦略を提起し完成させる任務を負わねばならない。彼等の対応は中共派の周辺革命戦略の先進国への直線的持ち込みの教条主義とは異なる開かれた創造的実践的なものである。

② 「現代のいかなる変革も、それが社会主義革命でなければ、革命の戯面でしかない。」(ゲバラ)「ラテン・アメリカ革命の主要な内容は、帝国主義とブルジョア及び大土地私有者との斗争である。従って革命は、民族の独立、少数独裁者からの解放および完全な経済的・社会的発展のための社会主義の道をめざす斗争という性格をもつ」(OLAS一般決議三項)或いはOLASの閉会の辞での「意味のない

判であろう。レーニンは一九二一年の著作に於いて、民族自決を主張し、民族ブルジョアジーとの提携をプロレタリアートの社会主義のヘゲモニーを維持しつつ主張した。当時に於いては帝国主義と民族ブルとの明確な癒着はみられず民族ブルはその限りで一定の進歩性を有していた。勿論レーニンは民族解放斗争を世界革命の一環として先進国以後進国プロレタリアートの結合を楨杆に、プロレタリア世界革命に発展させようと考えていた。又一九二一年の「帝国主義と民族、植民地問題」では、ロシア革命の成立を経て、民族ブルと帝国主義との癒着を確認し、プロレタリア世界革命のヘゲモニーの強化と民族ブルの反動性を強調している。尚、カストロの発言は、レーニン主義の「二つの戦術」に於ける「労働者農民の革命的民主的独裁」から一九一七年四月テーゼに発展する過程の質と同質であるし、考え方も「理論は教条ではなく実践の指針である」と述べている考えと似通っている。又、四月テーゼをめぐってレーニンとトロツキー対、スターリン、カーメネフとジノビエフの対立は、ブルジョア革命を如何なる階級が担うかについての決定的相異を示し、スターリンはレーニンの戦略を二段階戦略II(ブルジョアブル、プロはそれを支援、プロ革Iプロ)の如くドグマ化して現在、それがレーニン主義かの如

く理解されてしまった。

③ 統一戦線、戦術、斗争と前衛に関しては後進国階級斗争の独特の対応を結論づけている。

OLAS宣言冒頭は「最も重要な階級斗争が深化するのは農村である。……現代の革命戦争は職業的軍隊と必然的に斗わねばならず我々は都市の大衆運動の敗北の経験から、多くの国では都市の大衆斗争だけではなくは権力を奪取することは困難であると考える。しかし都市の労働者階級の重要な役割りを否定するものではない。労働者階級の役割りはプロレタリアートの思想を農村の解放斗争のなかで実践していく……この革命戦争は農民の戦争ではない。それはプロレタリアートの思想に導かれる農村に於ける革命戦争である。革命運動の突撃隊であるゲリラは……ゲリラは革命運動の前衛である。前衛は労働者の団結を守り援助しなければならぬ。前衛は革命を指導し、斗争の政治的、理論的分析を行なうと同時に高度の軍事的能力をもたねばならない。」と述べている。このことの本能的根拠は、後進国に於いて、その一国のみでの危機が、その国のみで力関係では結着付けられないこと、即ちアメリカ帝国主義の圧倒的軍事力がブルジョアジー、地主ブルジョアを媒介にして投下され、斗いは単にブルジョア、地主ブルジョアではないからだ。それ故に斗いは永続的に国際的背景を持たねばならぬこと、他方で上記の如き都市での労働者人民の潜在的な組織化を行ないながらも、現実的に、圧倒的な職業

反革命軍隊と対決するには農民の土地革命の要求と結びつき、彼等の根強い支援を受けての武装ゲリラ斗争を基礎に農村解放根拠地の拡大という革命方式が弁証法的であることを意味している。この革命方式は毛沢東の解放区―赤軍方式と似通っているが、同時にそれ以上に現代的である。何故なら、毛の抗日統一戦線論はなお日米の侵略下で民族ブルジョアジー（王陽明、蔣介石）が巨大な部隊を持ち、それ等両者との協定の下での日抗統一戦線であった。だが中南米階級斗争は最もそれを簡素化した。毛沢東の抗日統一戦線論は、現在の周辺革命論の基礎であるが、そのことは現在に於いて一定のマイナス要因に転化していることは否めない。インドネシア革命の敗北はその実例であろう。

④ 「しかし決定的な瞬間に動揺し、ベトナムを犯すことの出来ない社会主義の領域としなかったものも、同様に犯罪的である。……又社会主義陣営内部の二大勢力相互の侮蔑と嘲笑に満ちた争いを続けさせているものも、また犯罪的である。正直な答を聞きたい。二つの対立する陣営間に危険な共存政策をとることによって、ベトナムは孤立させられているのか、いないのか？」（ゲバラ）「今は論争を慎んですべてを闘争の為にささげるときである。……論争の当事者が拒否しているのに対話を始める方法をさがすのは徒勞である。……そしてこれ等の攻撃が我々を統一させるだろう。我々局外者は……決して対立する一方を支持することは出来ない。

話し合いによって対立点に関して合意を得ることを期待するのは幻想である。どちらが正しいかは歴史が決定するだろう。我々の斗争の世界では、戦略をめぐって、すなわち一定の目的を達成する為の行動の方法をめぐっての異論を含んでいる問題については、異なる見方を十分尊重して分析しなければならぬ。斗争によって帝国主義を打倒するという大きな戦略的目標に関しては、この点でこそ我々は非妥協的でなければならぬ。」（同）

以上のゲバラの主張は徹頭徹尾リアルで最も実践的な中論争に対する対応である。

ゲバラ・カストロ等は、中論争に一定の距離をおいている。だがそれは主体抜き、どちらか一方を選ぶことに迷っているからではない。彼等は、彼等の中論争に從属しなくても、革命の展望を切り開き得る戦略を持ち得ているし、その戦略から中論争を検討した時に両者の犯罪性と部分性を確認せざるを得なかったからであるし、そのことはスターリン主義とスターリン主義の残滓或いは明確にスターリン主義を清算し得ない部分に対する本能的直感でもあった。そして、もつとリアルで実践的な最も世界革命に向け早道なOLASの結成と第三の世界革命の道を開始したのであった。今やアメリカ大陸の階級斗争は史上例をみない最も原則的及び創造的指導部がカーマイケル、SDS、SNCC、カストロ・ゲバラ或いは中南米における若い断固とした既存の斗わざる左翼組織

にとって代った二〇代の青年達の組織MIR（チリー）、人民行動隊AP（ブラジル）、コロンビヤ民族解放戦線（FLN）、さらにFLN、FALN（ベネズエラ）等々の単一の世界革命戦略に基づいた確固たる単一指導部を生み出した。彼等は世界階級斗争の鉄火の最前線にアメリカ階級斗争を牽引していくであろう。以上の第三の道派の戦闘宣言に対して我々先進国の共産主義者の任務は如何なるものか。

△Ⅲ△ 第三の道派としての我々の任務は何か。

1 OLASに結集した第三の道派に対して我々は先進国共産主義者として如何なる戦略と実践でもって応えねばならないのか。

ゲバラ・カストロは後進国に於いて到達し得る限りの基本的視点に立った革命戦争を開始している。だが、にも拘らず、先進国に於ける階級斗争が今のままで、帝国主義に屈服する事態が生みだされるならば、我々が烽火(2)・(3)号で分析した如く、先進帝国主義の保護主義と新植民地主義を基底にした、それ等相互の政治的・軍事的対立、後進国帝国主義癒着派を背景に、後進国への侵略と反革命抑圧の集中砲火を浴び孤立し極めて困難な斗いに追い込まれていくであろう。再びソ連修正主義派が台頭するだろうし、中国文革も挫折せしめられるだろう。しかし、他方で、彼等が切り開いた世界革命の第四

の波を、先進国の米、西欧、日本の第三の道派の共産主義者が受けとめ、先進国の反戦斗争や諸個別斗争を国際的世界革命の視点に立って斗い抜くならば、事態は、第三期階級斗争をしてプロ独世界革命の思想に裏打ちされた単一の世界階級に拡げ、深化し、統合していくであろう。このことは、アレコレの予見とは全く相異し、六〇年代後半から七〇年代前後の国際階級斗争が後進国の武装解放斗争の波と先進国の反帝反戦斗争を機軸にした諸斗争が、或いは米帝国主義と他の相対的劣位な先進国帝国主義との経済的・政治的・軍事的対立から引起される、先進国相互の矛盾が、単一の下から結合を獲得して前進するか否か、その一点を決定的に問われることを示しているに他ならない。この実現こそが世界革命の前哨戦の「要」である。O.L.A.S.に対して我々は以上をふまえて、その前哨戦の「要」での基本的任務を明らかにして応えよう。

あるべき世界革命をめざす「国際共産党」からみた場合の、現時点七〇年代前後の世界革命の前哨戦に於ける先進国に於ける階級斗争の問題点と先進国共産主義者の任務は以下のほぼ五点である。

① 単一に結合され始めた国際階級斗争に対しそれを意識化させ排外主義に労働者人民が対決し得る基本的政治内容と国際的プロレタリア統一戦線、及びその政治的ブロックスローガンについてである。一語でいえば、現在におけるプロレタリア国際主義をはっきりさせることである。

(注) 政党集会による実践との関連での、或いは綱領説明、機関紙の販売、宣伝ビラ、機関紙配布、同盟へのオルグ。

そして我々の斗争が非和解的な権力との暴力的対決を軸にした公然たる大衆斗争を職場から街頭を問わず貫徹されねばならないが故に、それは単なる口先での空文句やエセ革命家かどうかの選別に理論に裏打ちされた革命的实践に於いて我々へに不断に問い続ける。かかる権力の国際戦略との確立と国内へのナショナリズムと暴力の攻撃に対決し得る公然たる闘いを、労働者階級の内部から、組織しなければならぬことは、党活動と大衆組織の活動、公然活動、非公然活動、職場諸政党の流動と再編の確定、或いは、独自路線の現在の意味と実践内容、或いは宣伝煽動の仕方、職場細胞と上級機関に於ける意識のづれから起る現場主義的傾向と機関との遊離等の必然的形成は、根本的に労働運動内部からはじめてボルシェヴィキ的傾向とが実践的路線・方針をめぐって顕在化しつつあることを示している。我々は既定の路線を貫徹しつつ、これ等の諸問題をボルシェヴィキ的指導性と体質を、現在のには、①既成統一戦線の分解と再編の科学的確定と、労働運動職場末端での第三潮流形成の統一路線戦術の確立、②他方での合法・非合法活動、党活動と大衆組織の実践的活動形態、それ等の機軸である上からの中央集権的党組織の型を実践的に明確に具体化しなければならぬ。

② 先進国における暴力斗争（街頭機動戦、陣地戦、政治スト、工場委員会）の不可避性と必要性、かつそれとの関連で「民主主義」運動、「全人民的政治斗争」、「個別斗争」の関連と結合された政策への対応とその防衛を軸としたプロレタリア統一戦線の形成について。

③ 今や戦后市民的統一戦線は我々の指摘したように現実的・具体的に崩壊の局面に入っている。そして、今までの上での分解と再編の動向は、日帝の膨張、国際戦略の明確化と暴力の発動を媒介にして即ち反戦斗争が米—ヴェトナムという関係に対する間接的対応から、日帝のアジア侵略と軍事的強化の路線が全面的に開始されることを通して、自国政府打倒斗争に発展し、現実的・下部での反戦斗争の実践推進の問題として職場内統一戦線の分解と再編に及びつつある。この時点で文字通り、労働運動に於ける第三潮流の形成の展望が与えられつつある。だが、このことは、既成の職場統一戦線が分解し、逆に、既成の観点に立った技術上の労働運動の左翼的推進をはかることは違って、勿論それ等を過渡的に含みながらも、その諸技術そのものを把える立場と視点の転換をふまえての根本的には職場に築かれつつある政党の国家に対する根本的態度と路線をめぐって、全ゆる斗争が斗わされる。争われる斗争は分派斗争の過程でもあるが故に、我々にとっでは職場に於ける飛躍的な公然たる党活動（注）が展開されねばならない。

④ 権力との真正面からの直接的暴力的対決の必然性と必要性は全ゆる意味で党の維持拡大を、かかる政治過程に対して、合法活動・非合法活動・非合法諸技術として基本的政治的認識を一致せしめ具体的政策として実践化することを要請している。さて以上四点について最初に結論を提起し、その上に、それ等の意味を世界革命とその前哨戦に於ける戦略的観点から明らかにし、ゲバラ—カストロ路線を完成させよう。

2 ①については、後進国—先進国、先進国—後進国、後進国—後進国或は非資本主義諸国の諸関係から提出される国際階級斗争の結合の目的意識的環は、①ゲバラ—カストロ或いは本論に規定されている意味での民族自決の承認、②自国政府打倒（特に、先進国—先進国の関連に於いて）、③労働者国家の帝国主義からの無条件の防衛、以上三つが各国プロレタリアートの国際主義の基本的スローガンでなければならぬ。

以上の基本的政治スローガンの下に、第三期階級斗争への世界的突入に対し、全世界の共産主義者を結集し、何よりもその実践に於いてプロレタリア統一戦線を創出し、第三の道派の結集を基礎にしつつ、中共派との斗争による同盟とその政治的結集及びソ連派との党派斗争との解体を促進することである。

②については、現在の軍事—外交を軸とした先進国競争とアジア侵略が日本帝国主義の生命線であるが故に、それは

単にナシヨナリズム攻勢ではなく、ナシヨナリズムに結びついた、暴力の全面的に発動をとまなう攻勢であること、従って、それ故に我々の政策路線は、かかる暴力を回避しては、新たなプロレタリア政治は決して形成出来得ないこと、政治的対立はその極限的に暴力的対決に至らざるを得ないのである。この単純な、最もはっきりした真理に対して、それが実現出来るか否かが根本的に今後の政治過程に問われ、政治と暴力とが一体となることを機軸にして、戦后諸党派は実際的分裂に入った。我々は以上のことをはっきりと把みとらなければならぬ。O.L.A.Sの「革命戦争」武装斗争が唯一の道である」という主張は、後進国の特殊性に限定することは出来ない。型態や戦術こそ違え、帝国主義の反動と暴力の世界の普遍性に対抗し得る道は全世界労働者人民の暴力から武装斗争即ち現在から将来に於いて工場に於ける政治スト、暴力的占拠—工場評議会による工場管理等の暴力的機動戦—陣地戦の全国的結合を展望していかねばならない。かかる暴力斗争の実現を前提にしてこそ始めて市民主義派とその運動を左翼的に発展転化せしめ得るし、他方個別斗争に於ける根本的な組合主義的質を転換出来得る。更に産別に於ける死活的組織化を地区—機関との結合を媒介に組織化の質を換え得るのである。確かに現在の実力斗争といわゆる「大衆斗争」とは遊離しており、現象的には、大衆的実力斗争への発展の道程は、アレカコレカの如く立てられる現状でしかない。だが我

々の基本は上述の方向で、市民主義運動に対しては市民主義の発展とその左翼的分解を通じて大衆的実力斗争を推進しなければならぬ。(注)

(注) だが他方で、斗争の暴力性を全ゆる斗争に貫徹していくことと、暴力斗争が全てであることを等置してはならない。即ち暴力斗争を頂点に、かつそれを基礎にしつつも他方で、大衆の意識の発展段階に依じて、その遊離を埋める方向で、斗争の暴力性を貫徹すべき戦術形態等を考慮し運動全体性に於いて暴力性を貫徹する絶体性が必要である。

他方完全に間違った考え、日和見主義の思考は実力斗争を認めるような言質を与えながら、主体抜きに、大衆の遅れた意識を如何に発展させるかの如く考える思考である。暴力性の貫徹や実力斗争の必要性はわかっているといいながら、その実何も理解出来ていず、その根底には自己の大衆拝跪と遅れた意識、日和見主義に無自覚な諸君である。

③については問題提起を前述したが、その基本は職場内既成統一戦線の分解と我々を軸とした再編を通して、職場末端に党、大衆組織の両者を問わず、合法・非合法活動を駆使し、第三の街頭暴力斗争、工場政治ストII工場の占拠とプロレタリア管理をめざす、第三の大衆的政治部隊を登場させることである。この時おさえておかねばならぬことは、既成の統一戦線が自然成長的、丸抱え的に発展転化するのではないこと、

成程我々まで含んで対象化した発展過程はそうであるかも知れないが、実践は我々の主体を媒介してのみ考え得ることであって哲学者風の思考ではなく、実践的我々の活動という観点に立った場合、我々が今後の基調を形成するかも知れないが、現在に於いては部分としての左派を代表し突出することを前提に全ゆる不均等な意識を反映する諸党派にそれに応じた統一戦線と党派斗争を開始することである。このこと、自覚と実践は今我々にとって死活といっても言い過ぎではない。何故なら、その第一は、日本帝国主義の軍事—外交を軸とした国際戦略とその暴力的実現をめぐる、その転換の過渡期がまず上からの政党の分裂によって開始されながらも、末端職場にまで波及し切れなかった段階からそれが上から下へ波及し、社会党—総評は末端に於いて本格的分解を開始したことである。社会党—総評の末端組織は言うまでもなく、その主単産を官公労におき、中小企業と若干の民間基幹産業である。構改右派(宝樹派)、協会、構改左派、加入派インター、解放派(謂ゆる社青同)或いは同盟、革共であり、共産党ソ連派、中共派がその末端に於いて勢力の角逐を行なっている。さて、第三期の本格的開始をもって、組合幹部と社青同を軸に、それを左から突きあげたり協調していた、新左翼系諸派と日共等の既成の職場内統一戦線は、七〇年安保の攻防をめぐる動揺から崩壊に突入しつつある。

これ等は結論的には、社青同に於ける分解を通し、宝樹構

改右派は同盟会議—IMF・JCとの同盟へ、かつ協会派はその内部で、今深刻な党派斗争が展開されているが、彼等は、内部崩壊を遂げるか、議会主義、平和革命の路線故にソ連派と同盟を結ぶか、或いは佐々木派の動向、大田の動向と絡みながら独自の新党結成に向かうか、我々との提携をめざすか等々である。いずれにしても、六〇年三池斗争に於ける五人組—職場斗争、全国統一到達斗争論等ははっきりとその限界を露呈せしめている。構改左派は、我々の如何によって、日共との対抗関係で左派ブツクの最右派としての一翼をになうかも知れないが、基本的に「左翼」人民戦線の域を出ないことは明確である。加入派四トロ、社青同解放派は今動揺の渦中にあるが、彼等は社会党—民同からの自立を唱え、反戦斗争の推進—反戦青年委の上からの掌握をめざしているが、彼等の加入戦術の動揺は激しい。他方日共、官本派は、民同との労働運動での協調と民社—JCとの一線を画しつつも、潜在的な党内の中共派の動向が外からの中共派諸派の「左」翼的動向に影響され、動揺ははなはだしい。これ等諸党派の動向は官公労部内の労働者の左翼的傾向と社会党—総評—組合等への不信と相まって、戦后戦斗的市民主義の根本的分解を準備しつつあるし、七〇年前後の攻防は、明確にそのことをドラスティックに推進せずにはおかないことである。我々は個々の諸党派の盛衰をアレコレと予言することに興味をもっているのではなく、勿論そのことも必要不可欠であるが

戦后市民的統一戦線の中核―社会党―総評がその中枢に於いて、排外主義派と合法秩序派と革命的左派に分化しつつあることであり、しかも合法秩序派は徐々に運動の中心的牽引力を全ゆる意味で革命的左派にとって替わられつつあり、その基盤を確実に成熟させつつあることの確認こそ重要である。

第二に、その実践的結論として、全ゆる活動において我々は過去の統一戦線を前提にして問題をたてる思考や、既成指導部の突き上げ、逆手に我々の統一戦線の全体を設定することを決定的に拒否する必要があること。その実践的決断を抜きにしては、実践と結びついた第三潮流形成としての党の公然・非公然活動、地区と産別、機関と末端細胞、反戦運動の大胆な戦場への持ち込み等は全くの空語として理論と実践との遊離を引き起さずにはおかない。我々は基本的に独自の路線を、情勢を先取りしつつ貫徹する主体的対応との関連で、統一戦線を再編する必要がある。

④については、第三期階級斗争での新たな政治過程は、常に我々をして、権力の全面的弾圧の前にさすし、そのことにおいて、党組織の防衛は最も根本的な政治問題として登場するし、それとの関連での合法、非合法活動は一面規定されねばならない。又そのようなものとして政治的に処理されねばならない。しかし組織の防衛は決して個人の防衛と二重写しにされてはならない。組織の防衛は革命の担い手としての正に組織での防衛であり、個人の防衛ではない。権力による

組織の弾圧や同盟自身への暴虐は避けられないし、又そのことを絶対に恐れてはならない。問題なのは、かかる不可避的弾圧の中でも、耐えきれぬ、戦略―政治路線の全面的一致であり、その思想―理論―方針―組織拡大を生み出すべき、組織の指揮―活動機構を防衛することである。以上の基本的観点に立って、正に党は党として、大衆の前面に登場し、大衆と前衛との意識の遊離を埋めるべく、党の公然たる独自活動を展開しなければならぬ。

従って第三期こそ、政党運動の時代として政治活動を公然と展開しても、逆に組織の拡大が圧倒的に実現するものとして、理解されねばならないし、党の表（国会議員、政党による直接の大衆運動の指導、組織、政治集会、機関紙売り、理論機関紙の配布、オルグ活動等）と裏は厳密に区別されて、当初から対応されねばならない。個人の防衛の観点から、それはとりもなおさず五〇年代政治過程の延長としてしか自己を確認し得ないことから起るのだが―理解し得ない場合、全くの無気力な完全な地下団体的陰謀家組織か、完全な合法政党の日和見主義政党的裏表として、組織防衛は結果するであろう。以上の基本点に立って始めて我々は種々な組織防衛の種々の政策は学び創造されねばならぬ。

3 以上の、日帝の軍事外交から国際戦略表現に向けてのナショナリズム、軍事力強化、排外主義労働運動形成を基礎とした暴力の反動としてある、第三期階級斗争の政治過程、

言わば七〇年前後の攻防戦に於ける、基本的結論は、世界同時革命の形成に向けての世界戦略と七〇年前后とそれ以降の革命の前哨戦との関連で如何なる位置を占めているか。

我々の世界革命戦略は、単一に後進国階級斗争からの追いつめと先進国階級闘争に於ける自国政府の、後進国の侵略と抑圧、或いは先進国相互の経済的・政治的・軍事的対立、或いは先進国、後進国を含んだ労働者国家の反革命作戦に反撃した自国政府打倒の闘いが結合して斗われる過程で、その国際階級斗争の国際恐慌との結合に向け、一切を集中することを内容としなければならぬ。単一の世界同時革命の一環としての日本革命戦略は、対外軍事―外交政策の破綻と国内へのはねかえり、国内危機が国際恐慌と結びついた地点こそがそうである。

それが遅いか早いかは現在に於いて確定する必要もないし、わからないことである。だが革命の客観条件と主体的条件の基本的ポイントには正にそこにある。

このことを確認する前には、基本的なレーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」のスローガンの現在の意味と、第二次世界大戦前後に於ける世界革命の流産に於ける基本的総括が必要である。世界革命の流産の根本的要因は中心的に三〇年代前半に至るまでのコミンテルンの対応に求められねばならない。その基本要因は、全般的危機論と危機の帝国主義戦争の過程での内乱の二つの「現代」帝国主義の評価に於ける誤ちから

の危機の引き延した把握を機軸にした世界革命戦略の誤ちであり、そのことは、一方で、ロシアに於ける労働者権力の防衛を世界革命と不可分一体のものとして、世界革命の一環としてのプロレタリア独裁、逆にプロレタリアを抜きにした、即ちプロレタリアの陣地と結合した世界革命戦略の内的関連性を、全たく曖まい模糊とせしめたこと、更にかかる戦略の誤ちが後進国解放斗争を先進国と固く結合した意識的世界革命の一環とし切れなかったことである。

それでは基本的世界革命戦略は如何にしなければならなかったのか。それは二九年世界恐慌から三二―三三年前后に向け、国際恐慌と対外軍事外交問題との結合（米帝国主義の破綻から同じこもり―ニューディール政策、独直接的に東欧進出をめぐっての仏、英、米のヴェルサイユ体制を如何なる内容に於いて打破するか否か、日本、韓国から山東出兵―中国蒙古への侵略と中国人民の反撃の国内へのはねかえり等々）を通じた、決定的国内流動を見通し、全般的危機論や帝国戦争を内乱へのスローガンを排して、国際恐慌と対外軍事問題の労働者人民への全面的重任を内乱に転化する世界革命の戦略（注）に、かつそれに向け労働者国家防衛―内部に於ける階級斗争の激化を世界革命をめざすプロレタリア運動を通じ集約、後進国階級斗争、世界革命の一環としての結果である。かつかかる戦略に向けての、正にレーニン主義の国際共産党と国内に於ける上からの党の建設の組織論の曖昧性こそが流産の根本的要

因である。

(注) かかる戦略上の誤ちの基本的根拠は、資本主義に於ける階級斗争は、一九一七年ロシア革命の成立以降、資本主義内部に於ける階級斗争を外から外在的に規定し、組織化された労働者階級を生み落すことによって根本的に帝国主義論の経済法則を貫徹しながらも、資本主義の法則としての、世界市場の再分轄と帝国主義戦争を行なう以前に、それが上から下からかは別にして労働者階級を粉碎し農民、中小企業をブルジョアジの下に包摂しなければ、逆に帝国主義戦争に突入し得ない内的法則が貫徹したことである。それ故に帝国主義戦争の前段階に於いて、革命か反革命かが国際恐慌と軍事外交問題の重圧からの内乱のスローガンが決定的であったのだ。以上からかかる矛盾の激烈な資本主義諸国に於いて、ファシズムを生み出さざるを得なかったのでもある。我々は革命戦略を、謂ゆる何か特殊な現代資本主義論から導き出すとは思わない。資本主義の経済法則は資本論を基礎としたレーニン帝国主義論に従って貫徹されているのだ。このことの重要性をふまえると同時に、だが他方で重要なことは過渡期世界に於いてはかかる経済過程に外から階級斗争が外在的に規定され(内在的には決して決してない!)革命的危機の形成を現象的に、(経済的側面からみれば)

際個別斗争の結合と国際恐慌は、民間基幹産労働者の結集した排外主義労働運動を基礎にした上からのブルジョア独裁権力をも、民間基幹労働者階級自身の反逆と激動を生み出すことよって上からのブルジョア独裁の統治に下からの中小企業、新・旧中間農民の反革命が進行すると同時に、他方でのプロレタリアートの革命との二重権力状況の形成がどのように発展するかは、すぐれてそれ以前の民間基幹部門での組織の確立及び官公労働者が、他の階級をどのような統一戦線に形成しているかこの二つにかかっている。

正に日本帝国主義の七〇年前後をめぐる全面的攻防は、根本的に民間基幹部門でのIMF・JC、同盟の排外主義労働のおよその確立に対してこれを、戦後の市民的反政府性をもった官公労働者の分解再編過程に、ナショナリズム、暴力をもつて、排外主義労働運動に転化せしめることであり、合せて、日本資本主義の停滞の矛盾を受け、非和解な激烈な不満を持ちつつある、中小企業、農民階級階層に対し、その不満の方向を、民間、官公労働の日帝の国際的展望の下、排外主義潮流に包摂することである。逆に我々にとって、軍事外交||七〇年安保、それをめぐる治安―弾圧に対し、官公労働運動の分解を予見しつつ、新たな第三潮流に再編し、農民、中小企業を引きつけ、他方、民間への介入の核を広汎に形成することこそ正に世界革命戦略実現に向けての要である。かかる意味に於いて、軍事外交||七〇年安保をめぐる斗いは、

―だがそのことは革命にとって根本的だが―変化させたのであった。帝国主義戦争については、言葉通り、先進帝国主義間の戦争であることを誤解なきようことわっておく。

以上の基本的視点の下に、特に戦前の日本、独革命の総括を基本点に於いてみていく必要がある。このことは、III章全体に渡って、結論を更に詳細にしなければならぬ責任を筆者はもつので別稿にゆづる。

さて本題にもどらう。

以上の単一の同時世界革命戦略の一環としての日本革命戦略||対外軍事―外交政策の破綻と国際恐慌の結合としての国内危機を内乱に転化せしめる展望の過程で、七〇年前後の階級斗争は如何なる決定的位置を占めるのか。我々は「政治決戦」或いは革命の「前哨戦」の時期と規定したが、それは如何なる実践的機軸をさすのか。日本帝国主義と国際的階級斗争との関連では、この間一連の見解が発表されているし、本論文において述べているので、それは繰返さない。むしろ実践的にこれ等の国際諸関係が、国内諸関係(権力、階級配置、統一戦線の再編等々)と如何なる結合関係を生み出すのかが実践的にも重要な問題となりつつある。前述した革命情勢の国内に於ける根本的権力と階級流動は、正に対外軍事外交政策(新植民地主義、侵略||反革命戦争を主軸にして先進国との経済―政治―軍事的競争の激化)の普段の国内危機への転化、国

決定的に重要であり、世界革命の前哨戦を占める深さと広さをもった攻防である。

我々は七〇年前後の斗いを勝利的に乗りきり、国際的プロレタリアートの単一の団結に深く支えられて革命派、合法人民戦線派、排外主義派の三潮流、テイ立の七〇年代ブレ・ファシズム下の政治過程を迎えねばならない。

そのことを実現することこそがゲバラ・カストロに唯一応える我々の実践的道である。

追記

特に第三章はすぐれて筆者の個人的見解であり、同志、読者諸氏の適切なる批判をおおぎたい。尚第三章に関しては、更に詳しく述べるのが筆者の責任であるが、紙数の場合もあって別稿で責任をもって詳細したい。

現代過渡期世界と世界革命の展望

——世界プロレタリア統一戦線・世界党建設の第一歩を——

8・3集會に結集した國際的第三潮流に問われている中心的任務は当面④六九年NATO、七〇年安保を共に闘う。⑤安保沖繩、ヴェトナムを環太平洋諸國の武装闘争、ストライキ、デモで闘う。⑥佐藤訪米を羽田、ワシントンで阻止する。⑦10・8又は10・21を國際共同行動で闘う。⑧國際共産主義インターへむけての協議機關設立の準備、國際学連の再建。かかる行動組織方針を実現することである。

一、國際集會の中心的任務

世界プロレタリア統一戦線へと同時に第一に如何にして七〇年安保、六九年NATO粉砕、ヴェトナム反戦を闘う過程で國際反帝統一戦線を中ソの路線を解体しつつ世界プロレタリア統一戦線に昂め、世界革命の前衛として、単一の世界党へと組織していくかである。

第二にかかる七〇年前後の國際階級闘争の勝利的前進にお

いて世界プロレタリア統一戦線の形成、世界赤軍世界党の建設を決定的武器とすることによって、各国党が如何にして西独、日帝のファシズムの成立をもって、かつそれを基軸としたブルジョアジーのヘゲモニーによる世界永続戦争の一切の可能性を粉砕しつつ、一切の攻防をプロレタリアートのヘゲモニーで闘い、逆に帝國主義者の混乱、統括能力の後退、弱さ故の反革命同盟の強化、むき出しのヘゲモニーを喪失して反革命を引きずり出し、プロレタリアートのブルジョアジーへの革命戦争への発展が世界同時革命への転化として闘い抜くかである。かかる課題に応えるものとして又かかる七〇年代階級闘争の展望への連結的結節点として、七〇年安保、六九年NATOを基軸とする七〇年前後の階級闘争は闘われねばならない。先進国—労働者國家、先進国—後進国を結合せしめるプロレタリア國際主義の内実も、日・西独・米プロレタリアートの結合を核にはじめて統一し得る。

だが、先進帝國主義相互の——自國の敗北を促進する方向での自國帝國主義打倒の——プロレタリア國際主義を、現代

世界革命理論として整理することは容易ではない。この整理は以下三点において整理され、明確にされねばならない。

第一に、現在の労働者國家の存在と攻撃型階級闘争が進展している過程での、米への日、西独の再分割と米の對抗の抗争關係を集中的に体现する六九年NATO、七〇年安保は

(A)帝國主義世界全体に於いて何を意味するか。(B)日、米、西独に於いては如何なる意味をもつか。(C)プロレタリアートにとって、それは何を意味するか。

第二に、日米關係、西独米關係は、日米西独の諸階級、諸階層に如何なる關係をもち、如何なる反帝統一戦線が形成され、それを如何にプロレタリア統一戦線に再編するか。とりわけ西独、日本での米軍の諸活動に対して西独、日本プロレタリアートは如何に対応しなければならぬか。

第三に、世界党—各国党の關連ではどうするか。

以上三点との關連で、自國帝國主義打倒—革命的敗北主義は、現代的に革命的に再構成されねばならない。

非攻撃型理論と中ソスターリン主義 不均等発展と過渡期世界の攻撃型階級闘争、革命戦略革命の型、組織論として構成した上での、その路線の下でのプロレタリアートの進撃の内に統一する立場で、現代帝國主義國家の危機の形成の仕方、國家間關係の特異性を指定し得ないところからの二つのプロレタリア國際主義の歪曲の体系がはびこっている。かかる体

系は、先進國共産主義運動を分裂—解体させずにはおかない。その一つは、不均等発展を階級闘争の基底要因としてみながら—それ故現代修正主義との決定的境界線を保持して、革命的でありながらも—過渡期世界の攻撃型階級闘争との關連を組み込む方法論が依然として受動理論で、或いは不分明で—結果として—あるが故に、現代帝國主義國家の危機を西独、日本のファシズムの成立と、反革命戦争を巻きこんだ帝國主義間戦争の結果としての革命へと論理的には純化し、従って反革命同盟の形骸化—解体を展望することから、その現在の活動に主軸をおくことに於て正当性をもちながらも、軸を西独日本のファシズムの動向との対決、反革命同盟との対決とそれを媒介にした日西独での米帝の反革命侵略活動を自國帝國主義打倒との關連に組みこみ得ない体系である。

他の犯罪的な一つは中ソのスターリン主義の体系である。体制間矛盾を世界の基本矛盾として、不均等発展の矛盾をそれらに「従属」させ、結果として巨大帝國主義への他帝國主義の従属—屈服論や世界資本主義論争であり、共通に主体抜きの帝國主義の全般的危機—資本主義の自動崩壊論に支えられたものである。ソ連の平和共存世界戦略の下での後進國民族自決統一戦線路線、先進國人民戦線、或いは中共派の周辺革命—中間地帯化—反米統一戦線戦略の下での、後進國—武装民族解放戦争、先進國—左翼人民戦線のその典型である。この世界観は、先進國の共産主義者が遭遇している先進國相互

のプロレタリア国際主義の現在の適用を全く欠落させ独帝、日帝の侵略、反革命活動を捨象し、闘争を反米民族主義に歪曲せずにはおかない。この二つの体系の再生産は、主体を抜きにした場合、世界は全くあたかも二元論的に展開されているかの如くみえる様相を示すからである。

二、現代革命の基本問題

現代帝国主義国家と階級闘争の質　ロシア革命成立以降、更に第二次帝国主義戦争を経ての中国をはじめとする諸労働者国家群の成立をもって増々、労働者階級の攻勢は激化しつつある。労働者国家群を媒介に各国労働者階級は自然発生的、即目的、或いは歪曲され、疎外されながらも世界的に結合され、世界プロレタリアートへと転化した。

最早、ロシア革命以前の如く、プロレタリアートは国民や民族として、国民経済を基礎に帝国主義国家を通じてブルジョアジーの支配の論理に封じ込められ、分断された自然的形態から即目的にはあれ、労働者国家群を結合することによって解放されつつある。

帝国主義者は階級対立を国家間対立として統一することを困難にされつつある。何故なら、内のプロレタリアートを支配せんとすれば、外の労働者国家全体を、即ち世界プロレタリアート全体を支配する能力を保持しなければならなくなっ

たからである。国外の階級闘争に反革命的に介入せんとすれば、同様に内のプロレタリアートを粉砕せずには、即ち世界プロレタリアートを粉砕する能力を持たねばならなくなったからである。

帝国主義者は、階級矛盾と帝国主義との不均等発展の矛盾を、以前は国家の論理を媒介に後者に統一し得た。今や、五〇年代の米帝国主義の如き超巨大帝国主義か、あるいは議会制民主主義と労働組合等の一切の民主組織を解体し、プロレタリアートの団結を粉砕する小ブル、農民と同盟したファシズムとその永続戦争にむけてしか、對他帝国主義との対抗と国際プロレタリアートのそれは、単独においては統一されない。

戦後の米帝の全面的な君臨　五〇年代から六〇年代後半の米帝国主義以外の先進帝国主義国家、あるいは後進ブルジョワ国家は米帝国主義の軍事力を利用することによって、一応の平和的形態で内のプロレタリアートを支配したが、米帝国主義との相対的劣位な同盟の下に、制圧され、かつ国家の支配の論理を不純なものにしたが故に、小ブル、農民、都市中間層、学生、市民主義、民族主義からの反抗を受けざるを得ず、常に政治的不安定を経済過程とは相対的独自にでも露呈せざるを得なかった。五〇年代から六〇年代前半の帝国主義国家は、米帝国主義以外、特異な侵略、反革命同盟を結ぶことを支配機能の重要要素としたのであった。米帝国主義は経

済的優位に加え、かかる歴史的なプロレタリアートとブルジョアジーの力関係の転位からの現代帝国主義国家の危機を反

革命同盟でもって糊塗することから他帝国主義に君臨したのであった。これ等のことは、明らかにロシア革命以降、第二次世界大戦を経て、本格的に以前のブルジョアジーの優勢、プロレタリアートの防衛の関係が逆転し、プロレタリアートは攻勢を展開する力を保持したことを意味する。

米帝国主義の国際憲兵としての、他帝国主義国の制圧と世界プロレタリアートへの反革命を統一し得た根拠は、第二次帝国主義戦争による独、日、伊帝への再分割戦の勝利を基礎にした圧倒的経済力、軍事力、政治力であった。

スターリン主義と攻勢の戦略―戦術　労働者国家の労働者、人民は一国社会主義二段階戦略によって、自己の歴史的優勢の力としての労働者国家をプロレタリア独裁を形態として世界革命根拠地国家たることから疎外された。帝国主義の包囲下での、しかも後進国での経済―政治面にわたる社会主義建設の困難性の克服の方向は、唯一自らが世界革命根拠地国家として、世界プロレタリアートの攻撃的革命の前衛たることによって、世界社会主義を展望する世界革命政治の一環としての国内プロレタリア政治としてのみ設定される。生産手段の労働者による共同社会的所有に基づく「等量労働交換」の支配する社会主義社会（≡労働証書制）への志向をもった擬制的労賃制を採用しつつ経済建設の困難性は克服される方向

をもつ。

スターリン主義の発生基盤は帝国主義の包囲の中での経済建設の困難性、主体的には、その克服の方向を攻撃型世界革命戦略を解明し、その下にプロレタリア独裁擬制的労賃制を結合させ得ず一国社会主義―二段階戦略、プロレタリア独裁の放棄、出来高払い制の導入として攻撃的自然発生性に拝跪し、ついにマルクス・レーニン主義を放棄したことにある。すでに世界的にブルジョアジーとプロレタリアートとの力関係が逆転したこと、更に現代帝国主義国家は帝国主義の不均等発展の法則と世界プロレタリアートへの反革命を自力では前者に統一し得ない矛盾を内包していることを述べたが、このことは、現代革命の条件と危機の形成、形態を根本的に受動から攻撃の質へと転換せしめた。即ち、ロシア革命以前の革命の論理は、帝国主義の不均等発展を国家の支配の論理を媒介に、労働者人民を帝国主義戦争に動員し、帝国主義戦争の過程で労働者人民は国境を越え結合し、共産主義者は前衛党を建設し、帝国主義戦争の終結と経済危機の激化を持って大衆と党は結合することによって世界革命を実現する内的構造を持っていた。

三、革命戦争、世界同時革命

帝国主義とプロレタリア革命　プロレタリアートはブルジョ

ヨーロッパの攻勢に受動的に対応し、その攻防のヘゲモニーはブルジョアジーにあった。帝国主義戦争の開始から崩壊の過程で攻勢に向かった。だが、現代世界に於て本格化された現代帝国主義国家の危機は、不均等発展の貫徹とそれが攻撃型階級闘争に阻れることによって、内部の矛盾を経済的には膨張してでも、政治的には全面的侵略反革命戦争に直線的に外化しえず、逆に外化したものを政治的には内在化するところからの高度の階級矛盾の激成―それが経済危機と結合した地点で革命と反革命として政治的に発現する構造をもつ。帝国主義の侵略、反革命戦争は国内反革命と一体化して発現する。だから、革命の条件は全面戦争の前段階で成熟せざるを得ない。もし、革命と反革命にプロレタリアートが粉碎され得るならば複合的な帝国主義間の反革命戦争の全世界永続戦争へと発展する過程を第二次大戦後一層普遍化しつつある。かかる危機にむけての政治過程の質は、帝国主義にとって、対帝国主義、対反革命を統一せんと志向しつつも、増々乖離せざるを得ず、国際的混乱と動揺、不決断、統治能力の圧倒的後退として現出する過程であり、同時にファシズムの萌芽的登場をみる過程である。ファシズムは不均等発展と世界プロレタリアートの乖離をプロレタリアートの攻勢的戦略―戦術の不在からの不決断に対し、小ブル、農民、ルンプロ、知識人等が狂乱化し、ブルジョアジーと結合し、プロレタリアートを暴力的に粉碎する現代反革命の最も鋭い形態である。こ

に慣れ親しみ、権力の攻撃に受動的に反撃する思考を止揚し、敵権力の計画が確定されてもいないものを確定されていると思ひ込み、現在の攻防を位置付けることは、我々を完全な待期主義と日和見主義に転落せしめずにはおかない。かかる戦略―戦術の設定の質はいうまでもなく、革命の条件の形成の仕方、根本的には帝国主義国家の現代的危機に起因することはいうまでもない。だが、スターリン主義は、かかる攻勢的戦略―戦術を国際プロレタリアートの攻撃性を物化し、疎外し、外化させ、帝国主義に和解せしめ、同時に自己を世界革命根拠地国家から疎外された労働者国家へと物化せしめたのであった。我々はプロレタリアートの世界プロレタリアートとしての登場を捨象し（結果的にかもしれない）不均等発展―受動革命の現代革命の「左」からの日和見主義の一派でもない。或いはかかるプロレタリアートの攻勢の質を外化させ、不均等発展を捨象する（結果的にかもしれない）右からの日和見主義でもない。

我々は不均等発展の法則が攻撃型階級闘争に圧倒されつつ貫徹され、その政治的発現形態を内から外へ、そして外から内へと累積される矛盾が革命と反革命の型の戦略的路線を経るブルジョアジーに結合せしめることによって、二元論的現象をブルジョワジーではなく、かかる党とプロレタリアートの攻勢が政治過程を統一し得ると考える立場である。

れに対して、プロレタリアートは世界党の指導の下、世界プロレタリア統一戦線の一環として、正規軍を赤軍として組織し、帝国主義の普遍的危機を見通し、自ら政治過程を革命戦争として創出し世界同時革命を実現し得る。まさにプロレタリア革命の型は、ブルジョアジーの歴史的弱点和後退に對して、それがヘゲモニーを持ち得ないながらも一挙的に展開される反革命に對してその過程に向けプロレタリアートの国際的革命戦線への一環として正規軍を組織し鍛え抜き、警察権力を陵駕する力量を保持し、帝国主義軍隊内部に不断に動揺から革命軍と反革命軍に分解せしめなければならぬ。公然たる革命戦争を不断に組織し統合持統し得る党―赤軍―プロレタリア統一戦線（IIソヴェト）の系列が準備され、これを基礎に中央権力闘争とそれへの陣地戦の統合が運動論的に整理されねばならぬ。

攻勢的戦略戦術の確定　ところで、かかるプロレタリアートがブルジョワジーの動向まで見通し、計画的に戦術を展開し政治過程を主導し抜くプロレタリアートの主体的攻勢とそれを攻勢の理論として統一し切れる質は、プロレタリア革命の戦略―戦術論の内実を受動的なものではなく、自己の将来の計画に逆に対敵ブルジョワジーの動向を組み込んだ戦略的展望の下に現在の戦術を設定する攻勢的戦略―戦術論として根底的に認識しなおされねばならない。われわれは、攻撃型階級闘争がいまだ本格的に登場していない戦後第二期階級闘争

四、戦後帝国主義と軍事同盟

米帝国主義は戦後帝国主義世界の盟主としてあっただけでなく、過渡期世界の盟主でもあった。西欧日本帝国主義に對する圧倒的経済的、政治的優位において制圧し、全世界各国に侵略、反革命軍事網を張りめぐらし、核を独占した。かかる侵略・反革命同盟は、労働者国家と世界プロレタリアートの攻撃性を反革命抑圧することと同時に、他帝国主義国家を牽制する二重の政治的軍事的意味をもっていた。又彼等は第二次帝国主義戦争とその終結過程に於てAFLLCIOの排外主義労働運動を育成することによって事実上米プロレタリアートを完全に武装解除した。米帝国主義は対他帝国主義、対労働者国家と世界プロレタリアートへの反革命をその経済政治、軍事力によって統一し、現代帝国主義国家の危機を突破し、逆に労働者国家群をも含め自己の利益を貫徹する世界の秩序（IIヤルタ体制）に再編したのであった。

だがかかる米帝国主義国家の存立の基礎は一方で、西欧帝国主義、日帝の再分割の挑戦に六〇年代に於て全面的に迫られ、他方西独帝、日帝にはNATO―安保の再編と核保有（すでに仏帝は核武装）を要求され、後進国に於てはヴェトナムを頂点とする人民の反撃の前に後退を余儀なくされた。かかる米帝国主義世界秩序IIヤルタ「体制」の動揺から互壊の過程は、米帝国主義内部の自然発生的攻撃型階級闘争を勃

発せしめた。

帝国主義の二律背反的な抗争と依存　かくして、米帝国主義の侵略と反革命の統一し得る経済的政治的軍事的基盤は失なわれた。戦後ヤルタ「体制」は最終的にそれが、安保、NATOの日帝、西独帝によって再編される地点で、米帝を世界の盟主の地位から引きずり落さずにはおかない。不均等発展の深化と攻撃型階級闘争の進展は、米帝をして侵略と反革命を統一し得る根柢を消失せしめ米帝国主義国家を死の苦悶に追い込んだ。だが、それは米帝国主義だけの危機だろうか。新興帝国主義西独帝、日帝は米帝にとって替って、かつての米帝の如く侵略と反革命を統一せんと志向している。だが彼らは米帝国主義を苦境に追い込め得ても他帝国主義に圧倒的優位を確保し、同時に帝国主義の腐朽と不均等発展から自然発生的攻撃的階級闘争を反革命―制圧する能力を現在の時点においては持ち得ていないし、また、国内の労働者人民の戦闘組織と議会民主主義制度を解体するファシズム形態も今は持ち得ていない。新興帝国主義西独は、その新興性故に對外膨張からの他帝国主義への対抗・攻撃型階級闘争への反革命を統一することを、極度に要請されつつ、国内矛盾を外化し、逆にその結果としての對外矛盾を激化させ、それを再び国内矛盾として累積せしめ、政治的矛盾を深めている。内部にファシズムの萌芽を胎頭させつつも、にも拘らず、自己の現在的力量故に、戦後ヤルタ「体制」―憲法体制あるいは―

たが、労働者国家と攻撃型階級闘争に対する妥協は、帝国主義国家の根本的危機を回避したブルジョワ的な意味で過渡的でしかなく、独帝との抗争、米帝の巻き返しに破れることと結合し内部崩壊を五月革命として露呈し、地方的、没落帝国主義特有の永続的危機、死の苦悶を開始した。

五、危機と攻撃的階級闘争

スターリン主義の破産とNATO―安保　まさに帝国主義はその腐朽と不均等発展を拡大―深化し、同時にそこから引き起された攻撃型階級闘争の自然発生的昂揚に対し、侵略と反革命を統一し得ずその政治的発現形態を内部の政治危機の構造化と相互反撥と依存の二律背反的安保・NATOを基軸とする侵略反革命同盟の維持強化に見出したのである。他方スターリン主義によって労働者国家群はヤルタ「体制」に組み込まれ、帝国主義に屈服し、スターリン主義とスターリニスト・レジュームを定着されるかにみえたが、帝国主義の膨脹と弱さの反映としての反革命同盟の強化の過程で、スターリン主義の破産を労働者国家内部の階級闘争の発現に対して、反革命的対応と、後進国↓国民的統一戦線から民主的民族国家の建設、先進国↓人民戦線の路線の反動性として表現した。労働者国家内部の階級闘争は、かかるスターリン主義とその対極としてのブルジョア民族主義・帝国主義のゆ着派を台頭

独体制の枠を突破し得ず、その内部再編を志向することから、その中途半端性は、国内諸階層の統合力をも喪失せしめているのみならず、ブルジョア―内部の動揺と分裂を深めている。これら日・西独帝の自己矛盾は根本的には、現在の経済・軍事力・経済力では、侵略と反革命を同時に統一し得ず、不可避的に国内反革命を媒介にしてのファシズム体制を成立させる方向に於てしか危機の突破はありえない。だからといって現在の独帝・日帝の政治委員会が対米帝政策に於てかかる方向に一貫性を保っているかと言えばそうではなく、その逆であり、まさに侵略と反革命を統一しきれない矛盾が極度に体现され、ヤルタ「体制」の枠内からの内部再編の方向とファシズムの方向とは二極に分解している。キーンガー政府は右から、下からファシズムの反乱を抱え、日帝はその政治委員会内部にその萌芽的傾向を抱えている。

以上のことは米帝国主義のみでも、西独・日帝のみでも、単独では現代過渡期世界をブルジョア的に維持し得る方向をもちえず、即ち侵略と反革命を統一し得ず、安保・NATOを強化しつつその内部でのではない手をめぐっての争いとして激化し、帝国主義はその侵略と反革命の不統一性を、国際関係に妥協相互依存と抗争の二律背反的質をもって体现させるのである。仏帝国主義は米帝国主義の後退に挑戦し、西欧帝国主義の盟主として登場せんとしたが、自己の経済的政治的軍事的力量故に、他帝国主義に対する一定の制圧力を持ち得

させ、かつ真に革命的な攻撃型階級闘争と結合し、世界革命↓世界社会主義に於て、自己の経済的危機を合わせて結合せんとするプロレタリア独裁・世界革命派の萌芽を生み落した。これらの動向は今やベトナムを接点とする段階から、東西独問題、38度線　台湾の緊張等々を媒介に安保―NATO同盟と激突し、世界階級闘争は結合されざるを得ない。

中共はいち早く反米後進国階級闘争の激化からその周辺二段階革命―反米中間地帯化戦略の破産を迫られ、国内階級矛盾をソ連と結合し、帝国主義との軍事的均衡を基礎にして平和共存（裏返し）の冷戦）―国内一國社会主義建設の路線をとる方向で解決するか、或いは世界階級闘争と結合し世界革命根柢地国家としてプロ独により解決する方向をとるかを問われた。だが、毛沢東派は従来の世界戦略を後進国に於て経験主義的に修正しつつも先進国革命を機軸にした世界単一の同時革命戦略確定に到らず、周辺―中間地帯化革命戦略を固執することによってベトナム政策、国内政策を反動的なものにしつつあり、安保―NATO闘争の巨大な意義を見失っている。

ファシズムかプロレタリア独裁か　以上のNATO―安保を軸とする過渡期世界の全体の動向の中心点は、以下のことからである。

第一に帝国主義が死の苦悶を開始し、現代帝国主義国家固有の危機の拡大と侵略反革命の増大を、帝国主義個々の侵略

反革命を統一し得ないところの弱さの反映としての相互反撥
・ 依存の二律背反的国家間関係の強化を通じて実現すること
によってますます危機を増大させる内部構造を形成すること
によって政治的帝国主義の破局の歴史的一時代を迎えたので
ある。安保・NATOを軸とする反革命侵略同盟は、帝国主
義世界防衛の最後の帝国主義日・独・米帝国主義にとって
世界各国プロレタリアートと自国のプロレタリアートに対し
て、侵略・反革命・抑圧の最後の同盟であり、侵略と反革命
をファシズム以外の形態で統一せんとする、或いはファシズ
ム以外のに連続せんとする最後の死活をかけた最終的反撃
の性格故に、安保・NATOへ改訂維持強化せんとする日
・ 独・米帝国主義の攻撃は自国労働者・世界プロレタリア
ト労働者国家へも拡がり反革命に転化する質をもつものであ
る。第二に、七〇年安保―六九年NATOを機軸とする日・
西独・米の国際反革命―国内反革命の攻撃は他方で一国毎のプ
ルジョア国家の次元からみれば、自らが要求し、請い望んで
いた自国一国で侵略と反革命を統一することが不可能になる
ことよって各国ブルジョワジー相互の抗争は激化し、連絡
は混乱し、かつ各国ブルジョワジーは、プロレタリアートの
反撃をもって矛盾を露呈せざるを得ない。自国一国で侵略と
反革命を統一し得ないところからの相互依存と反撥の日・米、
西独―米関係に対し、小ブル、農民、ルンプロ等々を反政府
的立場に追い込みプロレタリアートはそれを引きつける可能

性をもつ。以上の事は、世界プロレタリアートが、七〇年代
攻撃型世界革命を展望することと結合することによって、反
革命に対抗し得るし、同時にかかる世界革命戦略の現在の攻
防として闘い抜くことよってブルジョアジーの国際的混乱
―無計画性、国内的小ブル農民の政府からの離脱を契機にし
た統合力の圧倒的限界等の帝国主義国家の矛盾を拡大し、プ
ロレタリアートが革命の路線でもって政治過程を主導し、革
命戦争への発展から世界革命へと連続させられる。即ち後進
国に於てベトナム解放民戦線が反革命軍に対して戦
闘のヘゲモニーを握り、初期の侵略、反革命戦
争の様相を革命戦争に転化させたが、安保・NATOの攻防
戦を通じてプロレタリアートとブルジョアジーの力関係を逆
転させ、即ち七〇年前後を境に世界階級闘争は全世界各国で
革命と反革命の激突に発展する。

第三に、安保・NATOが米・西独・日の国内労働者人民
の反革命的抑圧ばかりでなく、後進国人民のそれであり、直
接的に労働者国家群の侵略・反革命を準備するものであり、
かつ労働者国家内部の矛盾が成熟していることから、逆に安
保―NATO闘争は日・西独・米の階級闘争を機軸に、労働
者国家、後進国の階級闘争を統合し、完全に単一なものにす
るが故に、全世界規模でスターリン主義との闘争をし、その
分解と破産を用意しなければならない。

以上一、二、三の世界革命の展望に支えられることによつ

て国際反帝統一戦線は世界プロレタリア統一戦線に高められ
ねばならない。第四に、かかる認識に支えられた世界党の建
設、各国での革命戦争実現に備えての赤軍建設と世界党の下
へのその統合によつて、不断に分裂と動揺にさらされた協
同のブルジョワ反革命戦線への世界革命戦線の攻勢とセン
滅。

4. 14 シンガポール・クウェート作戦勝利、パレスチナ・アラブ人民連帯集会へのアピール

PFLP、アラブ赤軍、日本赤軍、被占領地の息子達の同志達によるシンガポール・クウェート作戦を断乎支持し、又、パレスチナ・アラブ人民と日本・世界人民との連帯の勝利を心から喜びます。私達はパレスチナ人民を国際帝国主義とシオニズム・イスラエルの搾取者の新たなクビキの下につなぎとめるミニ「パレスチナ国家案」なる陰謀を許さず、これに反対するパレスチナ・アラブ人民の闘いを全ゆる方法でもって支持、支援してゆかなければなりません。

△1▽

米帝等国際帝国主義は、戦後一貫してソ修を同盟者にして、民族解放闘争とその指導部たる中国を強権的に封じ込め、第三世界を、封建反動とブルジョア民族主義を利用し、新・旧の植民地主義の下につなぎとめ、反革命・抑圧・搾取・収奪の限りを尽してきた。又、ここから吸いあげてきた超過利潤を西欧帝や日本に投下し、更なる暴利と金融的支配を強めてきたわけですが、かかる米帝を主軸とする帝国主義世界体制が、ベトナム・印度支那人民を最先鋒とする全世界人民の反撃において、政治的・軍事的・経済的に解体され、又、他の帝国主義との不均等発展の拡大に規定され、互壊化し始めた

こと。かくて、米帝世界体制は構造的危機・互壊に直面し、その敗勢を挽回すべく、一歩後退した力関係を認めた上で、「和平」を通じるなかで、印度支那人民やその他の急進的・進歩的民族主義運動を、「援助」という糖衣砲弾で変質させ、合わせて、自己の肥大化した、金融的・軍事的生産力の過剰の解消をはからんとしてきた。又、この手練手管で中国をユゴ化する、反革命的策動を開始した。

又、後退した他帝国主義との経済戦に、ドル体制を死守し、多国籍企業という、米帝国際独占体を援助し、EC、日本等の経済的再支配に乗り出した。このような、陰険にして、巧かつな、ニクソン・キッシンジャー戦略の一環として、石油資源の安定確保をめざし、第三次中東戦争を引き起し、期待するほどシオニズムの力量がないとみるや、一転、アラブ反動派、ブルジョア民族主義派やPLO右派を捲き込み、パレスチナ・アラブ革命派の孤立やリビア等の急進的小ブル民族主義を分解させる、「和平」——ミニ「パレスチナ国家」案の策動を打出してきたのです。

従って、パレスチナ・アラブ民族、民主主義革命は決定的な岐路にたたされています。その一つの道は、典型的にはインド

ネシアのスカルノ・スハルトに表現された小ブル急進民族主義からブルジョア民族主義の新植民地主義への屈服の道です。今一つの道は、中国・ベトナム・朝鮮等において成巧裡に切拓かれつつある、民族民主主義革命をプロレタリア的のマルクス・レーニン主義でもって闘い、この徹底の上に連統的に国際帝国主義と闘い、世界革命をめざし、社会主義革命を推進してゆく道です。前者の道は、形式的独立と引き替えて、国際帝国主義・シオニズム—アラブ反動派等への実質上の民族的屈服、一握りの資本家や地主の富裕化と他方での大多数のプロ・農民の貧困・抑圧・搾取の隷属の新たな奴隷化を生み出す道です。後者の道こそが、現代第三世界人民の危機を根本的に唯一解決してくれる正しい道なのです。この道は犠牲の多い道だが、階級的・民族的誇りに満ちた、農工の不均衡をなくす自力更生の経済と、世界社会主義共同体の利益を統一し、資本主義をプロレタリア的に利用しうる経済的解放の道であり、又全世界の人民に貢献しうる偉大な道です。従って我々は、世界プロ共産主義革命の一環としての、連統的な民族解放・社会主義革命を追求する、PFLPに代表されるPLO左派の路線を支持すべきです。この闘いは、プロレタリア世界革命の観点からみれば、パレスチナ・アラブ人民が印度支那人民と並んで、石油エネルギーをアラブ人民が革命的に占取する問題を含んでいるが故に、国際資本主義の土台を互解させる決定力を秘めているが故に、世界革命の火薬庫の位置をも含んだ、世界革命戦争の最前線を担う道です。

戦略の破綻と結びついて、必ず、その勝利を約束されているのです。この米帝の戦略転換によって、中国周辺反共国家の朝鮮・タイ・フィリピン等が危機を迎え、又、新植民地主義は危機を解決することなく、民族抑圧と階級矛盾を激化させ、これは中進国にまで波及し、第三世界人民の決起はますます増大し、中国—印度支那人民はこのベテן戦略を粉碎し、逆制動していること、更に、米帝の経済的捲き返しは、帝国主義相互の矛盾を深め、通貨・インフレ危機として爆発し、政治的不安定を増大し、この矛盾を先進国人民に転化していること、等からして、この戦略は全く白日の痴人の夢でしかないことが、はっきりさせられます。

従って、米帝にあやつられたアラブ反動派やサダト等ブルジョア民族主義、或はこれとは性質が違うガダフィ等急進民主主義の「和平」——近代化—ミニ「国家案」の破綻は必至であり、アラブ人民は解放されず、アラブ人民は全面的にPFLP等の人々の闘いを支持してゆく必然性があり、全世界人民が支持してゆく必然性があるのです。

△2▽
このようなパレスチナ・アラブ人民の連統革命の勝利の展望は存在するのでしょうか？ これはニクソン・キッシンジャー

ここに於て、パレスチナ・アラブの革命的左翼は、パレスチナ・アラブ革命の指導部であると同時に、世界革命の指導部の役割りをも要求されざるを得ない。現に、パレスチナ革命は、ベトナム「和平」以降、世界階級闘争の最前線を担い、焦点を形成してきました。従って、アラブ—日本赤軍の同志達とPFLP、被占領地の息子達の人々が、反帝反社帝、イ

スラエル・シオニズム、アラブ反動派とブル民族主義打倒の手を組み、世界プロ共産主義革命、世界プロ独、世界革命戦争、三ブロック・テーゼ、世界党―世界赤軍―世界革命統一戦線の旗の下、一致団結し前進し得る条件が十分あるようです。我々は、この合流を世界革命戦争―世界党の路線の下におしすすめ、この路線の下に、アラブ革命派は勿論、全世界の革命的翼を統合してゆかなければなりません。しかし、この合流は思想的・綱領的の一致をめざし、党建設と共同行動を区別して、戦闘主義を排して進められるべきです。我々は、これを「世界革命綱領問題」として特殊に重視し、現代帝国主義批判を深め、中ソ論争を、相対的に中国を我々より以上の経験豊富なマルクス・レーニン主義の正しい路線として、評価しつつ、かつそれを止揚する方向で総括し、世界革命綱領問題を解決し、この成果をもって、ベトナム―中国―朝鮮のプロレタリア党との原則的革命的連携を促進しなければなりません。

△3V

印度支那三国人民はベテンの和平策動にたぶらかされることなく、これを利用して、更なる闘いを推進しています。

中国共産党に対する帝国主義者や社帝や反スタ・トロツキストからのニクソン・キッシンジャー戦略に屈服した、新平和共存路線々とかの、口汚い中傷が投げかけられています。私達は、中国人民外交―十全大会―批林批孔闘争の軌跡を断乎支持すべきです。

我々は、このような途上国人民の闘いを民族解放―社会主義、世界革命の観点から支持・支援・連帯し、逆に、日本革命勢力をプロレタリア国際主義の精神でもって改造する契機をつくってゆかねばなりません。

今や日帝の戦後相対的案定期を創出した、技術革新、第三世界人民の原料の収奪と搾取、プロ農民の搾取・収奪・分解―プロレタリア化等を条件とする高度成長―強蓄積は、日米関係の矛盾、国際帝国主義からの孤立、技術革新の頭打ち化、「資源ナショナリズム」―国際人民の反撃、プロ・農民の反抗、インフレ・騰貴、買占め、「物不足」、都市・農村問題等の爆発となって破産した。にも拘らず、日帝はこの矛盾の一切を、国際的・国内的人民に転嫁しつつ、国際反革命、軍国主義、排外主義、差別と分断のなし崩しファシズムでもって、更なる強蓄積を求めて絶望的暴進をおこなっています。そしてこの暴進は、更なる国際的・国内的人民の反撃を呼び起し、構造的革命的危機、七〇年安保大会戦のスケールを越えて増々成熟しつつあり、世界革命戦争の先進国での突破口を担う。日本プロ革命戦争の攻撃的蜂起の陣型への、人民の闘いの再編・統合の闘いが緊要化しつつあります。

このような七〇年代中期階級闘争に対して、革命勢力の一翼を担った「革命戦争」派の闘いは、その端緒期の闘いを連赤敗北をもって好むと好まざるとに拘らず、区切りをつけられ、革命戦争の端緒期から定着期への移行を正しく行なうこ

中国人民外交は、国際帝国主義と社帝の二つの敵を打倒する程には客観情勢が成熟してはず、又、これを領導する力量が形成し切れなかった段階で、これまでの有利な力関係保持しつつ、次の総反攻に向けて力量を貯えて、持久的に闘う正しい対応であり、その後の十全大会はプロ文革の成果が防衛され、反帝反修と連続革命の路線がしっかり保持されていることを示したし、又、昨春秋以降開始された批林批孔闘争の全面的爆発は、一面では「左翼」日和見主義の林彪主義の最後の掃蕩であると同時に、主要な眼目は、防修反修のソ修批判等、反右派闘争に置かれており、中国人民と中国共産党の世界革命と継続革命への並々ならぬ決意を示すものです。人民を数千年にわたって毒し続けてきた、支配階級の思想哲学の源流たる「己に克ちて、礼にかえる」の反動綱領に代表される「孔孟の道」をキレイサッパリ一掃する革命的思想運動なのです。中国はこの革命的思想運動を楨杆にして、「天下大動乱」の「山雨きたらんと欲して、風塵に満つ」の情勢にゆっくりと「左」旋回を開始しているのです。

又、朝鮮労働党は朝鮮南部の労働者・学生を革命的決起を全面的に支持・支援し、世界革命・朝鮮南部解放・継続革命の路線を堅守しています。従って、アラブ・パレスチナ革命とアジアの民族解放・社会主義革命はより一層固く結合し、世界革命―世界党の実現の条件は十分存在しているのです。

△4V

とに挫折した。だが、この敗北は巨視的にみればプロレタリア革命派の生長の為の不可避の行程であり、この敗北を「悪魔の所業」と深刻振り、悲感し、闘いを清算してゆくことは許されない。この敗北以降問われたのは、無反省・無総括な「革命戦争主義」の賛美を排しつつ、この敗北の経験を正しく総括し、弁証法的唯物論・史的唯物論・資本主義批判を基礎とする革命的マルクス・レーニン主義をもって、革命主体の思想路線や政治路線を無原則な内ゲバを排しつつ革命左翼内に正しい思想・理論の論戦の作風を養うなかで糺し、綱領と権力問題を解決し、正しい陣型を勝ちとり、この獲得された思想・政治路線の成果をもって、建党・建軍・革命戦争の路線に生命を吹き込み、この基本路線の堅持の下に、日米帝国主義の国際反革命、軍国主義と差別と分断、搾取と収奪、生活破壊に抗し、決起するアジア・全世界の人民や下層労働者、被差別部落大衆、在日アジア人、女性、「身障者」、老人、沖繩人民、或いは、(獄中)「犯罪者」といわれる人々、政治犯等の七〇年代革命勢力の中核と、これを包む労働者、農漁民、零落する小ブルジョア層等の多種多様な闘いを、誠心誠意支持・支援し、これらの人々から学び、かつ、同時に、革命戦争の路線へと結集を呼びかけることであつたのです。又、これ等の闘いの中で帝国主義の別動隊に成り下りつつある日共や革マルを正しく批判・制動してゆく、反帝反修の二面闘争を執拗に持続することだったのでつた。

そしてこのような日本革命の道こそが、パレスチナ・アラブ人民との更なる連帯の道だったのです。我々プロレタリア革命派は以上の基本路線の下に、PFLP・アラブ赤軍と連帯し、再出発を開始しなければなりません。

四・一二 東拘にて

(3) 情勢分析

目次

七〇年代中期国際情勢の基本的動向と世界革命の展望

△1▽戦後国際帝国主義体制の瓦解と世界革命戦争 の対峙段階……………	2
△2▽米ソ超大国体制の現出とニクソンIIキッシン ジャー侵略、世界プロレタリア革命勢力の反 帝反社帝戦略への再編成の根拠……………	4
△3▽ニクソンIIキッシンジャー戦略の破綻の必然 性と民族解放・社会主義……………	6
△4▽中国共産党と批林批孔闘争……………	6
△5▽中進国危機とバレスチナIIアラブ革命……………	7
△6▽現代帝国主義の危機と、世界・各国革命戦争 の成熟……………	9
△7▽社会帝国主義ソ連の運命……………	12
△補論▽中国「社会主義下『階級』闘争」路線の擁 護の為に——トロツキズム社会主義論の敗北 性を批判す……………	17
△結論▽……………	21

ハ1 戦後国際帝国主義体制の瓦解と世界

革命戦争の対峙段階の到達

七一年にその頂点をみた、インド支那三国人民を最先鋒とする全世界人民の斗いは、米帝を支柱とする、帝国主義世界体制を根底的瓦解に追い込んだ。そして、これは、今少し巨視的にみれば、ロシア革命以降開始された、プロレタリア共産主義世界の、世界プロレタリア独裁運動としての世界革命戦争が、一方では、スターリン主義へと三〇年代変質してゆきつつも、主要には、民族解放・社会主義革命の大奔流となつて受け継がれ、中国・朝鮮・ベトナム革命を中心に、第二次大戦後も更に発展し、遂に、世界革命戦争の防禦段階を突破し、主導的な世界革命戦争の総反攻につらなる対峙段階が切り拓かれたことを意味する。

第二次世界大戦は、帝国主義戦争が主要な側面であるが、最初は、ロシア革命を機軸とする二〇年代後半に到るまでの、ソ連コミンテルンの世界革命戦争の展開に対する、国際帝国主義の側からの、独を最先鋒とする国際反革命戦争の側面も有していた。が、二〇年代と三〇年代の世界革命の挫折を経、また、帝国主義間の諸矛盾を、激戦を通して、この側面が減退し、「連合国」対「同盟国」の帝国主義間戦争に転化していったものである。そして、スターリン・コミンテルン勢力は変質し、この帝国主義間戦争に、逆に包摂される中で自己の存立を維持しようとした。しかし、この反動的な反ファッ

シヨール人民戦線の世界戦略の枠内に置かれながら、これから独立し、これを越える勢力として、毛沢東に指導された中国共産党を中心とする、マルクス・レーニン主義のプロレタリアートの指導権の下での、民族解放・社会主義革命の一大潮流が生み出されていったのです。この意味で、第二次世界大戦は、反帝反植民地・民族解放革命戦争の側面も有していたのです。そして、この斗いを一つの中心にしつつ、帝国主義戦争の終了過程で、再び、世界革命の一大昂揚期が形成された。

かかる事態に対して、この大戦の中で、超一流帝国主義に成長し、全世界市場の大半を再分割し、世界の経済・軍事の盟主として君臨し始めた米帝国主義は、帝国主義戦争終息過程で、拡大しつつあるアジア・ヨーロッパ革命に対して、この圧殺をはかり、この指導部たるソ連共産党の更なる変質と、中国共産党の変質を促進せんとした。

米帝は、第二次大戦過程を経て、米大陸のみの植民地支配に飽き足らず、アジア・アフリカの新旧の植民地支配を、欧帝と分割、交替しつつ実現し、第三世界人民から超過利潤の搾取と収奪を、最大の源泉にした、圧倒的な資本の集中・集積を誇り、国際独占体を実現し、そこから生じた過剰資本を、欧・日本市場に投下することをもって、他帝国主義の経済的・金融的支配を強める、国際的・立体的蓄積構造を確立した。このような中で、欧帝や日帝は、この米帝戦略を受け入れつ

つ、自立・侵略の道を進むことを強制された。かかる米帝の国際蓄積構造の上に、第三世界人民を全く無視、犠牲にし、他帝国主義に不利益な、I.M.P.・ガット体制が構築され、ま

た、第三世界の民族解放・社会主義の斗いを最前線とする世界革命の昂まりを圧殺し、旧植民地体制を新植民地体制に再編・包摂し、その指導部中国を封じ込め、更に、欧革命を封殺し、ソ連を冷戦で包囲し、スターリン主義の社会帝国主義としての完成たる、ブルシチョフ平和共存戦略を引き出すべく、国際反革命体制が構築されていったのです。そして、ソ連は、ますます国際帝国主義体制の救済者・補完物に転落し、他方、中国は第三世界の一員として、民族解放・社会主義の指導部として、頑強に斗い続け、他面では、現代修正主義Ⅱ社帝のソ連に対して「中ソ論争」を展開していった。

かかる、基本的には、第三世界人民の犠牲の上に主要に成立する、米帝を中心とする、戦後一〇年間の世界体制は、その体制の要の位置を占める反革命・植民地体制を、ベトナム人民を始めとするインドシナ三国人民、そして、これを支援する途上国・資本主義国・労働者国家の人民がつき崩し、米帝を中心とする国際反革命軍を敗退させた。このことによつて、帝国主義世界体制を未曾有の危機にたたき込んだのです。つまり、第一に、米帝を支柱とする国際帝国主義は、その寄生性の存立源泉たる植民地体制を維持し得なくなり、民族解放・社会主義革命の勝利の不可避性が、ますますはつきり

し、その指導部の位置を占める中国人民の斗いを無視し得なくなつたこと。

第二に、途上国の反革命・植民地支配を楨杆・源泉にしつつ、他帝国主義や諸反動勢力に経済的・政治的統制力を保持していた構造が、これをもって著しく減退し、欧帝や日帝の経済的・政治的独立性が増大し、不均等発展の矛盾が激化し、また、新植民地体制に組み込まれた途上国の「原料資源国」との軋轢が増し、帝国主義や諸反動勢力相互の矛盾が激化してきたこと。

第三に、戦後世界体制の護持という点で、共通の利益をもつた同盟者たる、社会帝国主義Ⅱソ連への優位性が、相対的に減退したこと。

つまり、第四に、米帝の後退を補填するかたちでソ修が侵渉し、民族解放・社会主義革命を抑圧し、社会帝国主義の新しい型の新植民地主義を展開し始めたこと。そして、これは、中国の述べる「米ソ二大超大国の世界の分割支配」という構造が現出し始めていること。

以上の、政治的・軍事的不利にもかかわらず、米帝の巨大な過剰生産力、過剰資本は、また、米帝と並んで、同じく過剰資本・生産力を抱える欧帝や日帝は、発展途上国を自らの蓄積・再生産構造に組み入れた、強蓄積構造をぬきにしては存在し得ない、根本的矛盾に逢着し、閉塞状態を現出させたこと。

ハ2 ヴ 米ソ超大国体制の現出とニクソン

キッシンジャー侵略、世界プロレタリア革命勢力の反帝反社帝戦略への再編成の根拠

かかる国際階級勢力の相互関係を、もつと詳しく分析するならば以下です。

戦後国際体制は、米帝に代表されるブルジョアアジアが、フルシチョフ平和共存戦略を引き出し、これを利用して、世界革命の最前線たる民族解放・社会主義の勢力と、その指導部中国を封じ込めたこと。ソ連は、米帝に世界体制を防衛せんとする限りで協力し、民族解放斗争と中国には、米帝の力を弱める限りではこれを利用して、援助してきた。民族解放勢力と中国は、ソ連修正主義とは依拠する基盤も世界観も相違していたが、二つの敵を一举に相手にする力量はさらになく、また、当面の最大の敵たる、米帝等の植民地体制の打破に必要な攻撃対象を絞らざるを得ず、その目的に向けてソ修と妥協し、利用せざるを得なかった。しかし、民族解放・社会主義の指導部中国とソ連との路線争いは、五〇年代より激化せざるを得なかった。

かかる構造と関係をもつて、民族解放・社会主義革命の闘いが前進し、戦後米帝体制を瓦解させるまでに前進していった。だが、この段階で、五〇年代の平和共存世界戦略の中で、すっかり社会帝国主義に変質し、米帝に次ぐ圧倒的な過剰生

産力を抱えたソ連修正主義は、米帝の下で維持されていた植民地体制を、新たに自己の覇権の下に再編成し、侵略せんと策謀したが故に、民族解放革命を起爆刀にした世界革命の爆発には狂気の如く反対し、狂気の如くこの革命を抑圧せんとした。最早、ソ修にとっては、民族解放斗争は、米帝の駆逐の役割を終え、自らと敵対する勢いを示し出したが故に、利用価値がなくなってきたからです。ロンノル政権支持、アラブ・パレスチナの「戦争でも、平和でもない状態の維持」、インド支持と中国包囲戦略等をみよ。

かくて、民族解放革命勢力は、米帝を決定的危機に追い込んだが、過去、力量を貯える為に妥協し、自らが利用してきたソ修との対決を迫られ、反米反帝斗争と同時に反社会帝国主義斗争の、二つの戦線の形成を要求されてきた。とりわけ、社会帝国主義ソ連に対する、非和解的斗争関係にたつことによつて、これの打倒抜きには、新たな高い段階の前進を獲得することはできなくなった。そして、この問題は、民族解放・社会主義の最高指導勢力たる中共に最初に煮つもらざるを得ず、中国は一時的に帝国主義と妥協し、反帝反社帝の世界戦略をより一層強く押し出していったのです。ソ修は、この中国の動向に対し、国境線に大規模な軍隊を集ませ、中国包囲のベテンのアジア集団安全保障条約なる、マヤカシの外交を展開してきたのです。かくて、民族解放・社会主義・中国とソ連社帝との緊張関係が激化し、この複雑な国際階級関係

と中ソの関係を利用しながら、米帝がニクソン・キッシンジャー戦略のベテן政治を展開し始めたわけです。つまり、二面戦線の限界性につけ込み、中国をブルジョア国際政治と帝国主義経済世界に引き入れて、変質させ、あわせて民族解放・社会主義革命を変質させんとしたわけです。

以上、戦後米帝一元体制は崩壊し、これが、ソ修が米帝の後退を補填するかたちで侵出し、米ソ二大超大国の覇権支配へと再編され、民族解放・社会主義と中国を始めとする世界プロレタリア革命勢力は、米ソ超大国体制との全面対決へと、その斗争関係を改変し、構造化していった。

米帝等、国際帝国主義は、この構造的敗退に対して、懸命な巻き返しをはかってきた。それが、ニクソン・キッシンジャー戦略と呼ばれるものです。

その最大の特徴は、反革命軍事力を強化し、チリ反革命クーデターや第四次中東戦争の挑発を行なって、国際反革命の常套政治を堅持しつつも、その一方で、自己の後退した力関係を一定程度認めたと上で、民族解放・社会主義革命の闘いの波を、反革命軍事体制を再編強化・堅持しつつも、自らの過剰資本の処理という資本の要求を基底に置きつつ、また、原料・資源問題の解決を念頭において、和平劇を利用しつつ、労働者国家まで巻き込んで、「援助」と「経済開発」の名の下に、新々植民地主義の、資本主義の軌道の中に引き入れんとする包括的戦略であるということです。この限りで、旧植

民地主義やゴリ反革命分断国家政策や、古い型の新植民地主義はナリをひそめ、民族解放・社会主義の指導部であり、根拠地である中国を、その実力を認め、封鎖体制から一定程度解除し、同時に、ソ修と企てて、中国のユーゴ・チトー化を促進せんとする苦肉の戦略です。

第二は、E.C.、日本諸国の米帝への経済的急迫に対して、資本輸出を徹底して支援し、部分的には、ドル平価切下等の通貨調整をし、また、S.D.R.などの譲歩をしつつも、「多国籍企業」という名の、米国際独占体の、逆にドル本位の国際通貨体制を、再編強化し、これらの諸国への経済的・金融的支配の再強化をはからんとするものです。この間の「通貨調整劇」と「大西洋憲章」の提起なるものがその現われである。

第三は、極度に矛盾を抱え込みながらも、資本主義の発達をみている、第三世界の中進国、乃至は中進国に接近しつつある、インドネシア、エジプト、アルジェリア、アラブ諸国、ブラジル、アルゼンチン、中南米諸国を中心しながら、この諸国の一定の資本主義と資本主義市場の発展を促進し（自己の再生産の安定した下層構造に組み入れ、自己の過剰資本の処理、原料・労働力の確保を充すものとして）、あわせて民族解放・社会主義への危機を回避し、そのことによつて、これらの国よりも、より経済的発展の低い諸国の模範をつくる、等のプランを策動していること。

例えば、最近の中東和平と、ミニ「パレスチナ国家案」の

提起による、アラブ革命勢力の孤立化、エジプトの米化を機軸とするアラブ勢力関係の再編成、或いは、中南米憲章の提起、等のみ。

△3 V ニクソン・キッシンジャー戦略の破綻の必然性と民族解放・社会主義

だが、このようなニクソン・キッシンジャー戦略が、全くの白屋夢でしかないことは明らかです。

第一に、ベトナム等インドシナ三国人民は、和平劇のベテランにだまされて、武装を解除しただらうか？ 全く否である。インドシナ三国人民は、和平交渉を最大限、主導的に利用しつつ、不屈に、更なる民族解放・社会主義革命の闘いを継続している。また、これにパレスチナ・アラブ人民が続き、ポルトガル植民地主義に抗した、ギニア・ビザウ、アンゴラ、モザンビーク等の人民が続き、三大大陸の民族解放武装勢力が続いている。

現在の農業植民地国（封建的生産関係を主とする）の矛盾は、国際帝国主義の下層構造に組み入れられて、資本主義発展の道をはかるうとしても、それすらはかれないこと。国際帝国主義に従属した地主・資本家の支配の下に、労働者・農民の矛盾は、激化するばかりで、矛盾の拡大再生産以外に何も結果しない。

この矛盾の根底的解決は、封建的生産関係を廃絶し、プロレタリアの拡大に力を注がなければならなかったこと。中国共産党は、この世界革命戦争の持久的対峙戦の主導的貫徹を、「天下大動乱の時」「山雨きたらんと欲して、風廊に満つ」情勢と評し、これに対して、「批林批孔」の一大思想運動を組織し、プロレタリア国際主義の大後方化路線・プロ文革新の防衛・反社帝の防修の、継続革命をおし進め、ゆつくりと左へ旋回を開始している。

批林批孔斗争とは、直接には林彪の左翼日和見主義の、極右思想の批判を契機としているが、主要な側面は、反修・防修の資本主義の復活を防ぎ、共産主義に前進することを眼目とし、数千年にわたって被抑圧階級人民を毒し、抑圧し続けしてきた、支配階級の思想・世界観たる、「己れに克ちて、礼に復る」や女性蔑視の反動綱領に代表される、「孔孟の道」を全面的に批判・暴露することによって、また、これとの比較関係の中で、ML主義・毛思想を正しく理解し、プロレタリア人民を覚醒せしめ、階級的思想・理論武装を強め、階級敵を見破り、摘発していこうとするものです。これは、なみなみならぬ、プロレタリア共産主義世界革命への、革命中国八億人民の決意を示す、偉大な闘いです。

以上からして、帝国主義や反スタ・トロツキストの「中国革命の変質」「新平和共存」とかいった、反動的観測は全くあたらないわけです。

また、朝鮮労働党は、朝鮮南部の革命的危機の成熟からの、

レタリア・人民による、全面的な土地革命を成功させ、かつ、生産手段を共有化し、工業を興し、大規模共同農業を興し、この相互均衡の相互作用の中で拡大再生産し、この自力更生の下に、他の諸国との世界社会主義をめざす、有無相通する互恵の国際経済路線を確立する社会主義をめざした、共同経済体制を築くことによるのみ救済される。このような、中国人民が勝利的に前進している道を、これらの諸国の人民は確固として邁進しているのであり、資本主義の軌道に引き入れられるなんて、全くの幻想にすぎない。

△4 V 中国共産党と批林批孔斗争

中国はユーゴの道を辿っているだらうか？ 全く否である。ニクソン訪中、中国人民外交の展開に表明され、十全大会で確認された路線は、国際プロレタリアート革命勢力は世界革命戦争の防禦段階から対峙段階への、決定的に優位な段階を切り拓いたが、これにひきついで、一挙に国際帝国主義を攻略し切る程には、客観的な資本主義の危機が完全には成熟してないこと、とりわけ、先進国に於ける革命勢力とプロレタリア党建設の闘いが前進し切れてないこと、とりわけ米帝の後退を補填する形で侵渉する、社会帝国主義IIソ連への闘いが不十分であること、総じて、反帝反社帝の全世界的武装勢力が成熟してない。従って、獲得した力関係を打固めつつ、総反攻に向けて、反帝反社帝の国際的・国内的革命勢力の強

労働者人民の反米反日反朴の革命的決起に対して、これを全面的支持・支援し、世界革命・継続革命・朝鮮南部の解放に向けて、確固たる闘いを展開しています。

ニクソン・キッシンジャーや日本ブルジョアジーどもの「中国のチトリー化」等は、まさに白屋夢に過ぎないので。また、ニクソン・キッシンジャーの、一定の路線修正に規定されて、旧来の反共国家が存立できなくなり、いちはやく、中国周辺の反共諸国家、タイ・タノムIIブラバートや朝鮮南部・朴に政治危機が招来し、同様に危機が台湾、ビルマ、マレーシア、フィリピンにも潜在していることを我々はみておくべきです。

△5 V 中進国危機とパレスチナIIアラブ革命

先進国の強蓄積の犠牲を受けているのは、最も後進的な農業・植民地国のみに限らず、いわゆる、第二次世界大戦を前後して、民族解放・社会主義革命のあかりを受けながら、小ブル急進民族主義（一面では、民族ブルジョアジーや農民、或いは、労働者までも包含し、革命的な側面も持つが、全体的な視野・歴史観がなく、極端に労働者と反動的階級の間を浮動し、プロレタリア・ヘゲモニーでもって、嘶呼たる土地革命を断行し、社会主義革命に連続させる路線を持ち得てない）スカルノ、ナセル、ルムンバ、現在ではカダフィ等）で形式的に独立を得たり、或いは、小ブル急進民族主義の挫

折の後で、ブルジョア民族主義によつて指導される、後中進国においてすら、新植民地主義の矛盾が成熟してきている。これらの国で、一定の経済的解放を求めて、民族解放斗争や国有化運動が勃発するのに対して、帝国主義は、より温和に援助と経済開発に協力するかたちで経済侵略をはかり、これらの諸国の資本主義の発展を促進する中で、自国の市場に組み入れんとする、新たな新植民地主義の試みをはかるが、それは部分的な資本主義の発展によつて、一部資本家・地主・軍部・官僚等々を肥え太らせ、他面で、その矛盾を一身に受ける労働者階級を大規模に誕生させることによつて、階級対階級の勢力を強めた、より労働者階級の比重の高くなった、民族民主主義革命とその社会主義革命への転化の連続的發展の基礎を強め、他方では、先進資本主義国の再生産の最下部構造を担っていることにおいて、先進国プロレタリア人民の社会主義革命との結合を深めさせ、その連続斗争に、国際的性格を付与し、世界革命斗争の一環たる位置を与えざるを得なくなる。

このような、新たなニクソン・キッシンジャーの新植民地戦略の一環として、パレスチナ・アラブ政策が、石油資源確保とからんで、急速に登場してきつつある。第四次中東戦争は、まだ五〇年代・六〇年代の米帝の中東戦略たる、シオニズム・イスラエルを侵略・反革命橋頭堡にして、この下に反動王制勢力を結集し、石油の安定確保とパレスチナ・アラブ革命

△6▽ 現代帝国主義の危機と、世界・各国

革命戦争の成熟

ニクソン・キッシンジャーの他帝国主義への巻き返し戦略はどうか。

米帝は、第二次大戦過程と五〇年代において、資本の圧倒的集中・集積を誇り、又、高度な技術革新力を保持していたわけだが、このような米帝の経済力の源泉は、第一は、特殊に、第二次大戦過程での集積を含みながらも、恒常的には、全世界の第三世界から、新・旧植民地主義を通じ、暴利を搾取・収奪し、この成果をもつて、欧米や日本を経済的・金融的に支配したことにあります。このような米帝の基本源動力は、六〇年代に至ってもかわらないわけですが、五八年の結成や五〇年代末の日帝の復活、そして、高度成長にみられる如く、他帝国主義の勃興を経験する中で、急激な地盤沈下に陥り、必死で大合理化・合併の集中運動や、公共投資の拡大や、ケネディ・ラウンドにみられるドル防衛や関税引下げ戦略を追求したが、結局、巧を奏さず、軍事経済・ベトナム戦争への全面投入によつて危機を回避せんとし、今一つは、ドルの発行権を独占し、国際通貨の有利な操作ができることを利用し、減価したドルを、それ以上の価値として偽装することによつて、ドル資本の西欧へのダンピングをやりつつ、E.C.の外貨規制の枠を越えて、資本輸出を展開した。このような資本をブルジョア共は「多国籍企業」と名付けて、

の庄殺をはかるものであったが、そして、米帝はこの下に、ベトナム「和平」後の軍事的手余り状態を解消すべく、第四次中東戦争を挑発したが、イスラエル軍事力の相対的弱体化を経験し、産油国の石油攻勢に、急拠、エジプト、サウジアラビアの反動王制勢力とブルジョア民族主義の結合を支柱とし、カダフィ等小ブル急進民族主義や、P.F.L.P.等の民族解放・社会主義の勢力の分解・孤立化を狙い、和平「ミニ」パレスチナ国家案」を提起し、新々植民地戦略を展開せんとしているが、この挫折は明瞭です。

これは、アラブ・パレスチナ人民の望むところではなく、世界革命の一環としての民族解放・社会主義革命を望む労働者人民の勢力を背景にして、P.F.L.P.やアラブ赤軍の同志達を最先頭に、シオニズム紛争、和平紛争、パレスチナ・アラブの完全解放、プロレタリア共産主義、世界革命の旗印の下、国際的ゲリラ戦が世界革命戦線の最前線を担って展開されている。このパレスチナ・アラブ革命は、将来、国際資本主義のエネルギー源たる石油を独占する可能性をはらんでいる点で、世界革命と反革命の、最も鋭く、深い激突を内包し、世界革命の爆薬庫たる位置を占めている。かくて、ニクソン・キッシンジャー戦略は、ここでも破綻は約束されているのです。我々は、第一次、第二次帝国主義戦争の最深部に、中東石油資源の争奪戦が、大きな比重をもつて存在していたことを忘れてはならない。

その階級的性格をゴマかしているが、国籍は明確に米帝であり、資本輸出の現代的形態にすぎない。この資本輸出を欧帝、特に仏帝は許容することなく、頑強に拒否してきたが、通貨操作や西独（独帝は相対的競争力があり、また、軍事的従属関係からしても、比較的流入を寛容）を通じて流入したわけだが、巨視的には、E.C.諸国が米帝を軸とする世界市場を分断することを回避する、歴史的諸条件によって規定されている。ともあれ、ニクソン・キッシンジャーは、西欧のこの米資本を強化・拡大し、米帝の欧州再支配を、ドルの切り下げ、S.D.R.の採用等の譲歩をはかりつつも、全体的には、よりドル体制を防衛することによつて、もくろんだわけだが、これは、西欧帝や日本の過剰ドルの規制、S.D.R.の拡大、変動相場制の採用や、更なる外貨規制の強化などで反撃を受け、また、西欧や日本もインフレ流入に逆インフレで対抗し、遊弋過剰ドルの追い払いをやったりして限界づけられている。

総体として、米・E.C.・日本の不均等発展の激化と平準化が拡大し、この大勢をかえることはできない。つまり、E.C.諸国は日本と共に五〇年代米帝の、金融的・経済的・軍事的関係の下に復活・自立したのち、六〇年代対ソ・対米、周辺ヨーロッパの包摂、中近東・アフリカの下層構造下、資本と労働の自由移動、技術の交流、農業の再配置・再編成・分解等を目的に、広域統一市場を一定程度実現し、高度成長を突現した。とりわけ、トルコ、ギリシャ、イタリア、スペイン、

アルジェリア等の、周辺からの移入、農民の分解とプロレタリア文化等が、発展の基礎にあった。が、今や、生産の社会化・国際化とブルジョア民族国家の矛盾は累積し、ブルジョア民族国家の枠がとりはらわれるわけではないことを示している。内部ですらこんな状態であるが故に、外からの米資本の流入に対して、これを規制するのは自明のことです。むしろ、欧帝や日帝は、米帝に比べれば、比較にならない資本力ではあれ、第三世界のアジア・中近東・アフリカへ、逆再分割を挑んでいるのが現状である。

尙、我々は、米・日帝に挾撃されて没落した老朽帝国主義英の危機、日帝内部でのイタリヤの矛盾と危機の先行、或いは、日帝の下層構造としての、欧州の田舎、ギリシャ、トルコ、スペイン、ポルトガルへの矛盾のしわ寄せからの、ギリシャやトルコの軍事独裁政権の成立、スペインのフランコ体制、ポルトガルのギニア・アンゴラ・モザンビーク等への植民地主義の継続と動揺等の情況も、見落してはならない。

むしろ、一定程度、ニクソン・キッシンジャー戦略が効を奏し、その犠牲にされているのは日帝です。日帝は、日帝諸国の如き連合もなければ、国際環境の相違からしても——現代修正主義のソ連に比して、アジアの民族解放・社会主義と、中国・朝鮮・ベトナムの社会主義ベルトに包囲されているし——米帝から、日帝諸国程の相対的自立もできず、結局、米帝に従わざるを得ず、国際帝国主義相互の国際競争戦のしわ

かかる帝国主義経済体制の不安定・各国金利格差の不均衡を利用して、膨大な遊体過剰資本が、投機利潤を求めて、全世界を遊弋（ゆうよく）する事態も生れる。そして、ユーロダラーの大移動が、益々世界金融体制を動揺させてゆく。また、国際帝国主義は、ドルにかわる国際通貨を願望するが、しかし、米帝を追い落とす程の力もなく——特殊には、金本位制への一挙の復帰などは、ドルと金の交換の際、予想もつかない取り付け騒ぎを起し、一挙に恐慌に発展することも考えられる——結局は、米帝のドルの発行権は容認し、ドルの平価の切下と、各国通貨の部分的国際通貨化（SDRで満足せざるを得ない。それ故、米帝のドルのタレ流しは止めることができず、これに対抗するかたちで、各国は逆インフレで対抗する。このような悪循環をもって、全世界的インフレが蔓延しているわけです。かかる国際通貨体制の解体的安定の根拠は、先進帝国主義相互は、米帝に対しては損をしているが、第三世界諸国との関連では圧倒的利益を得ること、今一つは、恐慌と世界革命の回避を共通の利益とし、また、かかる状態を、衰えたとはいえ、米帝が事態を統合する機軸に坐る力量はもっていること、にある。従って、我々は、中核派の如く「三〇年代へのラセン的回帰」を現代世界の最大の特徴として把えることはできない。

資本の本能的衝動として、このような側面が益々強まってゆくことは、明瞭なわけだが、これを阻む経済的・政治的条

寄せを、集中的に受けざるを得ないからです。この点において、日本帝国主義は、国際帝国主義の矛盾を二度の円切り上げ等に見られる如く、集中的に転嫁される点で、先進国階級斗争の焦点を形成せざるを得ないわけです。

いずれにせよ、ニクソン・キッシンジャー戦略の、対先進国戦略の破綻は明確であり、米帝の地盤沈下は、益々急テンポ化することは明瞭です。米帝の地盤沈下は、益々植民地体制を動揺させ、更に、それが帝国主義相互のせめぎ合いの拡大へとね返り、国際通貨体制は、益々空洞化し、これにに応じて、なし崩しのブロック化が進展し、世界統一市場の分断化傾向が増し、他方では、先進国経済体制から排除されていた、中・後進国の一歩先んじた危機が、"資源国ナシリズム"として爆発し、先進国再生産構造を動揺させ、これからの矛盾を乗り越えるかたちで、先進帝国主義は、より一層、中・後進国に依存した寄生性を益々増大させた、国際的蓄積構造の再編強化を強いざるを得ない。

他方では、過剰生産—過剰資本の矛盾の爆発 恐慌の大爆発を回避する為、「有効需要の促進」という名の、財政・公共・軍事・対外援助の拡大を展開し、米帝の輸入インフレと相乗化されつつ、猛烈なインフレをひき起させつつ、他方では、各国蓄積・再生産構造の改造が追求され、これらの負担は、全て労働者・人民に「国民経済の危機・産業の救済」という名の下に、転嫁されてゆかざるを得ない。

件が存在していること。このような、ブロック化傾向や世界恐慌の要因が、益々成熟しつつも、これが一挙に爆発するのではなく、なし崩し的に先へ先へと引き延ばされながら進行し、各国帝国主義相互、或いは、諸資本主義諸国家は、極度に矛盾をはらみつつも統一され、かかる矛盾の国際諸国家関係は、先進資本主義国を機軸とする、ドル通貨体制を楨杆とする、国際・国内蓄積構造の下に包含されざるを得ない。資本蓄積の本来の循環たる、好況—恐慌—不況—活況が、人為的に疎外・変型される。いくら景気刺激策を施しても、投資が停滞し、活況を呈さず、独占のみがより巨大化し、全ゆる分野での独占化が進行し、他方では、これから排除された資本の過当競争の激化や、遊体資本の投機熱の昂揚と、このプロレタリア人民への矛盾の転化、農業の破壊と農漁民の搾取・収奪・プロレタリア文化、小ブル層の没落、対外的には、より一層の対外援助・新植民地主義をもって資本輸出をおこない、先進帝国主義の再生産構造の下層に、発展途上国を組み込んでしまうこと。ここから必然的に惹起される、民族解放・社会主義の闘いに、局地的反革命・侵略・抑圧戦争で対抗せざるを得なくなる。そして、この矛盾を国内人民に再転嫁してくるわけです。

かくして、このような帝国主義の国際的・国内的蓄積構造—プロ人民への矛盾転嫁の長期経済停滞—局地的反革命・侵略・抑圧戦争を通じて、国際・国内人民は一つに結合し、内

乱・内戦・蜂起のプロレタリア革命戦争が、先進資本主義のど真中で、成長してゆかざるを得ないのです。これこそが、現代帝国主義の必然的運命なのです。但し、この過程は、世界革命戦争において、帝国主義と社会帝国主義の同盟による、共同反革命に対して、反帝反社帝の世界革命勢力の形成が、自己の危機を社会帝国主義を動員し、自らの危機を補填させるかたちで利用するが故に、反帝反社帝の二面戦争として展開されてゆくことを、はっきり確認しておくべきです。

そして、かかる矛盾を通して生み出された、現代帝国主義が創り出した、生産の社会化・国際化は、世界プロレタリア独裁を経ての、世界共産主義社会の物質的基礎を成熟させ、他面では、プロレタリアートを世界プロレタリアートに、より一層打ち鍛え、世界党・世界赤軍・世界革命戦線の陣型を発展させ、形式的には、各国毎に開始された革命は、反帝反社帝の世界共産主義革命として、ブルジョア民族国家の枠を越えて成長してゆかざるを得ないのです。

△7V 社会帝国主義ノ連の運命

尚、プロレタリア国家は、一つにはこの資本主義世界に孕まれ、成長しつつあるプロレタリア世界共産主義革命戦争に対して如何なる態度をとるのかをめぐって、また今一つは、一国経済の限界性と又そこから生じる階級・階級闘争（或いは、擬制的な）に如何なる態度をとるのかをめぐって、根本

要があること。二〇年代のスターリンの政策は比較的レーニンに忠実で——この点で我々は、トロツキーの立場にはたらない。むしろブハーリンが一番駄目なのだ——レーニン主義と十月革命の遺産はまだ食いつぶされていないこと。スターリン・コミンテルン路線は二八年第六回大会（スタ・ブハ路線）にみられる如く、国際帝国主義の危機に対して「第三期の到来↓階級対階級」と左旋回し世界革命を追求する姿勢は十分あったこと。トロツキー流の社会ファシズム論は間違い、これは全く右翼的な間違つた批判です。だが、「民族解放・社会主義戦争——前段階決戦のプロレタリア社会主義革命戦争——根拠地化↓継続革命」の三ブロック同時革命の世界革命戦争の路線を敷ききれず、独革命↓中国革命を両輪にして総敗北し、またスターリン式の「農業国有化↓クラーク撲滅↓工業化」の「社会主義建設路線」も、その偉大な試みにも拘らず、上からの強権的性格が強くと、プロレタリアと農民の全国的な大衆の革命運動として、中国革命の如く、大衆路線に基づく性格が弱く、それ故この試みも、部分的で中途半端に終り、決定的なのはその後、中国革命の如く、「二つの道の階級闘争の継続革命」の路線を敷ききれず「階級なき全人民社会」を宣言し、従って「党と」国家」を批判するのは人民の敵↓帝国主義の手先」として、人民内部の矛盾に敵対矛盾を混同し、プロ人民の階級闘争を圧殺・肅清していったので

的分解にたたされる。中国共産党は、前者に対して、反米民族主義の戦略の問題性はあるが、プロレタリア世界革命の後方↓根拠地になる方向を追求し、又、後者に対しては自力更生の旗の下、農業基礎↓工業主導の方向で、工業と農業のバランスをもった拡大再生産構造を確立し、まずもって一国経済の確立をめざし、他方では、この一国経済の根底的限界性を世界共産主義経済で突破する戦略的方向性を獲得している。このような政治・経済的方向性を実現する要として、「生産力の最大のもは人間である」「獲得された新しい経済関係に見合う上部構造の革命——資本主義の生産関係と上部構造を一扫する階級闘争の推進」「資本主義の復活との闘い——社会帝国主義の闘い」等を提出し、「社会主義」の下での二つの道の階級闘争の路線を提出している。

我々は、世界戦略の問題性はあるが、この路線がトロツキーの敗北主義の一国社会主義存立不可能——プロ国家内階級闘争の世界革命への全面還元論の小ブル空論主義や、ブハーリン・スターリンに端を発する民族的利己主義と国内資本主義勢力に立脚した、世界革命と「二つの道の階級闘争」を放棄した「一国社会主義」路線とは異なる路線であることをしっかりと見究めておかなければなりません。

ただ、このような「一国社会主義」路線は、一九二〇年代のスターリン・トロツキーの党内闘争に端を発しているが、しかし二〇年代のこの路線と三〇年代との区別をみておく必要がある。従って我々は、スターリン主義を、二〇年代末—三〇年代の世界階級危機に対して、三ブロック・テーゼに基づく三ブロック同時革命の創造的展開への挫折、それ故の帝国主義の勝利・延命とロシア革命の再包圍網の強化の中で発生したものと把握すべきです。この点で、我々はトロツキストの如くトロツキズムを美化する「スターリン主義二〇年代発生論」を排し、他方では、毛教条派の如く、現代修正主義はフルシチョフ以降として、三〇年代のスターリン主義を擁護する毛教条派の立場をもとるべきではない。

スターリン主義は三〇年代世界革命の敗北に規定され、帝国主義間戦争のどちらか一方を支持し、全世界人民の闘いを犠牲にし、民族的利己主義と国内資本主義勢力に妥協する中で、「革命」を延命させようとして成立したのです。かかる三〇年代世界革命の敗北、ロシア革命の変質の上に国際帝国主義に包摂された反ファシヨ統一戦線↓人民戦線路線（第七回大会）が打出され、国内では、この反動路線に反対するものを何百万にもわたって肅清し、これを対外的に拡大したのです。スターリン憲法とコンミュニオン四原則の放棄、労働の質に於ける分配の導入、軍隊内への位階制の導入、秘密警察の拡大、強制収容所の拡大、被抑圧、大ロシアシヨヴィズムの鼓吹等。従って我々はおかざる脈絡で、スターリン主義の生成を把握し、三〇年代スターリン主義を否認するものです。

毛沢東主席に指導された中国共産党は、かかる「過渡期世界の革命」に挫折したスターリン路線の変質の枠内から出発しつつも、従ってこの反動性の犠牲を蒙りつつもこれに反対し乗り越えるかたちで、中国革命の鉄火の実践の中で、成長していったこと。毛主席と中国共産党は、スターリンが指導出来なかつたプロレタリアの下での民族解放・社会主義革命の連続革命に成功し、又、過渡期世界でのプロレタリア国家の根拠地化に継続革命・社会帝国主義批判にも成功することによって、マルクス・レーニン主義を過渡期世界の革命路線として継承・発展させ、偉大な業績を残していったことをしっかりと確認しておかなければならない。毛沢東思想に基本的に残された点は、先進国に於ける前段階決戦→反帝反米の攻撃的蜂起としてのプロレタリア革命路線の成功を経験して、それ故コミンテルンの三〇年代の先進国革命や現在の先進国革命にはつきりした態度がとれず、反米民族主義の路線を許容することです。(しかしこれは、我々の問題であり、毛主席や中国共産党にアレコレ言えたりではない)。

ともあれ、三〇年代後半のスターリン主義の決定的反動化を経て、第二次帝国主義戦争の終熄過程で勃発する世界革命の大昂揚に対して、スターリンは、反ファシズム統一戦線から反米「冷戦」戦略へと転換したものの世界革命の波を中途で押しとどめる「新しい性質と型の革命たる人民民主主義革命」をブチ、西欧革命を制限し、中国→朝鮮→ベトナム革

命等に枠をはめようとした。しかし既に中国共産党を初めとするアジアの民族解放・社会主義の革命勢力はスターリン・コミンテルンから離脱し、自力独行出来る力量を蓄積していたこと。スターリンの死を経て、戦後世界革命の総括、或いは第二次世界大戦を経ての国際帝国主義と諸階級の大変動(米帝を頭目とする世界体制→植民地体制の動揺と民族解放運動の昂揚、幾つもの「プロレタリア国家」の成立、先進国内部の労働者人民の前進)に対して、新たな国際共産主義運動の総路線が問われる中で、三〇年代からのソ連の重化学工業化・軍事経済化の進展の中で形成された工場管理・技術者層を新しい支配階級勢力に加えたフルシチョフが、米帝に屈服することを前提とする平和共存戦略を掲げて、スターリン(の個人)批判をおこないながら登場した。これがいわゆる共二〇回大会です。以降六〇年初頭のフルシチョフ失脚以降、ブレジネフ・コスイギン路線が、フルシチョフ路線を部分的に手直ししつつ、スターリンを部分的には復権しつつ、登場し現在にいたる。スターリンが一応表面的に、マルクス・レーニン主義の継承者として、世界革命・暴力革命・プロレタリア独裁等を掲げ、自らの日和見路線をML主義の尺度から整合せんとするだけの「左翼性」「原則性」を保持していたのに対して、このような「左翼性」「原則性」は全て投げ捨てられ、スターリンの修正主義部分だけが肥大化して継承され、平和共存→生産力競争戦→議会を通じた平和移

行→新植民地主義の背中合せの小ブル或いはブルジョア民族主義の許容とプロレタリアの連続革命路線の放棄、社会主義大家族制、社会主義労働」という名の下でのソ連民族経済への他国の隷従、等の現代修正主義の路線が定式化され、国内的には、共産主義的生産の源動力は本来共産主義的所有関係にもとづく社会構成員の共産主義的階級的自覚にもとづく労働であるわけだが、このような所有関係と階級意識が欠如しているソ連社会は、社会的生産は結局、商品経済関係に基づく価値関係に立脚しておこなわれざるを得ない。そしてそれは必然的に利潤率を賃金でもって生産とそれをめぐる人と人との関係を規定せざるを得なくなり、その帰結としての官僚管理・技術層の資本化と利潤率→ホズラチュード制に基づく企業間競争が資本の競争戦と同じ論理でもって展開され、これに応じて生産的労働者の賃金奴隷化が進行せざるを得ない。労働給付が「物質的刺戟」と称され出来高払い賃金に近い賃金制度にとつかわられること、ソ連社会は、単一の国家資本に個別資本が完全に包含されているが故に、純然たる資本主義生産関係→自由競争・価値法則による市場調整・賃金奴隷制は、資本主義社会ほどではないが、自由価格制は採用されていないにせよ、このような事態が生まれないと保証することは出来ない。そして労働の移動も。

このような国家官僚制・資本主義生産関係は、生産手段の共有化と生産を、コミニューン四原則のプロレタリア民主主

義に立脚し展開し、取残された資本主義上部構造の諸関係を不断に変革し、不断に発生する、とりわけ精神労働と肉体労働の資本主義的分業から発生する、新旧の資本主義勢力を階級闘争を通じて消滅させてゆく闘いが伴わなかつたところに根拠がある。そして、この社会では「一方では富の蓄積が他方での貧困の蓄積となつてゆく」関係はいぜん継続し、又、利潤率の高生産分野としての都市の重化学工業部門が、利潤率の低い農村を荒廃させ、これを犠牲にしつつ→何んら第一部門と第二部門の正しい比例的な均衡的發展は促進されず(中国と比較せよ)→進展してゆく。それ故に農業労働者は優遇されず農業部門は必然的に停滞し、社会的分業の矛盾が拡大してゆくソ連の農業部門の恒常的不信はこれに由来する。又、農業部門の停滞、工業部門の緩慢な発展と限界故に、国家に所有された資本は遊休化し、超過利潤を求めて、これは第三世界へ借款や「援助」という名目で投下され、途上国の経済的従属を促進させ、又これと引き替えに原料資源が収奪され、又ソ連の衛星国として軍事基地が求められる。そして、このようなソ連国家資本主義の必然的帰結としてソ連艦隊の七つの海に浮上する炮艦外交が展開されてゆくのです。

我々のはかかる実態としてあるソ連を「超大国の社会帝国主義」として規定せずしてなんと規定したらいいのか! 又、自国の経済的停滞をプロレタリア人民の革命的共産主義生産運動によって突破出来ないで、利潤率本位の生産の拡大に頼

る結果として、先進帝国主義の資本移入をチュメニ油田開発やシベリア鉄道開発等に利用し、増々、資本主義化を強めてゆくこと。

今やソ連社帝は、米帝の後退の穴を補填すべく、増々、帝国主義的侵出を繰り返し、コモン諸国との矛盾も激化し、世界の闘う人民からその正体が暴露され、内側から種々な反体制勢力が成長し、その象徴として小ブル自由主義の観点からのソルジェニーツィン博士等の告発が持続している——我々は絶対にこのようなソルジェニーツィンのような立場を四トロの如くブル新まがい、革命勢力として支持するわけにはゆかないが。

かくて我々のプロレタリア共産主義革命は、反帝反社帝の世界革命になるのは明瞭です。(但し、その革命が、全面的暴力革命・革命戦争を機軸とするものか、イデオロギー戦争・政治闘争が主体となった形態かはわからない。だが我々は、官僚・高級技術者・学者・文化人・軍人等の資本家勢力を明確に敵対階級として規定し、プロレタリアの独裁ソヴェエトの復活をめざし、第二プロレタリア革命を開始する観点は厳に明確化しなければならない。)

我々は、ソ連を「墮落した労働者国家」とか「小ブル化したプロ国家」とかの曖昧な規定をおこない、社会帝国主義を美化する日共や第四インター等の勢力に対して、断乎たる批判を加え——中国の社帝批判を、「スターリンの社会ファシ

々の闘いの生涯の赤旗であることにはかわりはない。

△補論▽中国「社会主義下『階級』闘争」路線の擁護の為に——トロツキズム社会主義論の敗北性を批判す

さて最後に、中国の「社会主義下階級闘争存続論」にケチをつけ「反中国」の旗振りにうつつを抜かしている反スタロツキストの諸君に対して、我々の理論的・政治的態度をはっきりさせておこう。

① 第一にこれ等の諸君は、中国革命が切り拓いた民族解放—社会主義の闘いを、又、根拠地化ⁱⁱ継続革命の種々な闘いを真面目に理解し検討する姿勢が全くなく、その部分的欠陥を把えて全てを否定する「唯物論の相対論」の観点にたてない、「観念論の絶対論」の見地にたつ小ブル傲慢主義の立場であること、我々はこのような態度を断乎排してゆく姿勢をもつべきであること。彼等にとっては、プロレタリア文化大革命も、ブルジョアマスコミまがいの単なる「権力争い」の類にしか評価されていないからです。毛沢東もスターリニストであり、「マオスターリニスト」として一蹴して喜んでゐるわけです。

② 問題なのはこのような反スタロツキストではなく、中国革命を真面目に評価し、「社会主義下階級闘争説」の内実を評価しつつも、「ゴータ綱領批判」によって「社会主義

ズム論だ」と批判する笑うべき目出たい連中なのだ——社会帝国主義打倒の闘いを全面的に推進しなければなりません。

ソ連をどのように把握するかは、第二インターをレーニンの如く社会排外主義と規定するか、トロツキーの曖昧化し動揺するか、決定的分岐を形成するものであり、この点に於ける原則的闘いが組織されなければならない。今や反スタロツキストの諸君はワケがわからなくなつて——主に四トロの類、バプロ系——日共と同じように「社会主義勢力の不団結論」に依拠し、「国際共産主義運動の分裂を固定化する」という、国際帝国主義に屈服し、社会帝国主義批判を中心とする中国の全体的な相対的修正さを陰蔽する主張を展開しているが、これ程危険なまちがった意見はない。従つてこのような問題に明確な態度をとれず、プラグマチックに対応している革命的自主独立派のキューバやベトナム・朝鮮の革命的労働者党に、相対的に中国の正しさを承認し、中国の側にたちこれを乗り越えるよう要求しなければならぬ。とりわけキューバのソ修への迎合は、厳しい同志的批判がなされなければならない。この点では、我が敬愛すべきゲバラ同志も、世界革命の綱領上の理論問題、国際共産主義運動の総括を正しくやりきれず、理論闘争—国際党派闘争を通じて世界党建設の闘いを、ゲリラ戦の中に解消してゆく傾向があったことを敢て確認しておかなければならない——といつても六六年の当時ですら彼は、現在の我々の理論水準には達していたのだが。その点でゲバラ同志の旗は、依然として我

「共産主義第一段階では階級は存在しない筈だが？」と考え、この意味をとらえかねている諸君です。これに対して反スタ主義者は、「『ゴータ綱領批判』の修正だ」と、文献解釈学の教条主義的主張を展開し、又これに反撥し、毛沢東思想を擁護せんとしてつとも正しく擁護し得ず、結局、社会主義の概念をプロ独期と修正し、結局は、社会主義の段階をマルクス主義の中から追放してゆく間違つた修正主義的見解も生れるのです。つまり「プロ独—社会主義」論は、マルクス主義の修正であるばかりでなく、毛沢東思想にとつても迷惑なわけです。又、我々としても、誤解が我々にまで振りかかってくる点で、極わめて迷惑なわけです。

「ゴータ綱領批判」は、社会主義は共産主義の第一段階であり、生産手段が共有化され、労働が総労働の直接の一環として存在し、階級が消滅し、残された階級差異・三分業・個人差等の克服がめざされ、徐々に「能力に応じて働き労働に応じて受けとる」段階から「能力に応じて働き必要に応じて受けとる」段階への移行期である、等やその他の諸規定が展開されている。これ等は正しいし、我々の共産主義論はここから出発しなければならぬ。それでは中国の「社会主義下階級闘争存続論」は間違つていて修正主義なのか。断じて否です。まず以下の二、三の予備知識を本題に入る前に確認しておこう。

中国の社会主義の見解は広義の概念規定で、生産手段の全

面共有化し全人民所有以前の部分的全人民所有十集団所有の混合したプロ独期の段階まで拡張していること。このような概念の拡張は、狭義の社会主義し生産手段の全人民所有の下の共産主義の第一段階とプロ独期との区別があり、狭義の概念を開放しない限りレーニンも使用しているので全く正しい。又、現在の中国の段階は全人民所有十集団所有の段階であり、従って厳密な意味での社会主義社会ではない——つまりプロ独社会——ここからして、中国の「社会主義下階級闘争存続論」は実践上プロ独社会での階級闘争を意味しななら問題ではない。

しかし、中国はこの理論し路線を狭義の社会主義の段階でも階級闘争の存続を主張している。問題は、この点が理論上正しいか、否かです。

① まずこの点で、中国の階級概念についてですが、これは「死滅しつつかあるが、正しい路線の指導がない限り復活する階級」とも規定し得る二面性を持ち、資本主義生産関係下の経済的基礎をもつ階級概念とはかなり異っていること。

レーニンが「偉大なる創意」で規定しているように、階級は、②生産手段の所有関係を軸とする生産関係から規定される、③ここから規定され、労働の成果の分配関係から規定される、④この②③④の生産分配関係に規定された人と人との社会関係から規定される、と三つの側面から規定される。この点で、所有面で社会主義化されても階級・階級闘争が自動的

一步であるが、国有化から共有化へは自動的に発展するのではないこと、そこには、プロレタリアートを社会の主人公とするプロレタリア民主主義が生産・分配・消費の中で貫徹され、生産手段の管理者を完全に所有し支配階級化を排除し、これをめぐる新旧の資本主義的社会関係が消滅させられ、新しい共産主義的社会関係・上部構造を樹立する闘いが存在しなければならぬこと。このような所有関係と上部構造の革命的変革を通じて、擬制的な半階級から階級は徐々に死滅してゆくこと。もしこのような、生産手段共有化後の所有関係と上部構造の変革が（勿論生産力の増強は前提として）放棄されれば階級は消滅せず、これを階級は消滅したと考へ、後には生産力の拡大のみと捉え、擬制的な半階級と階級闘争の消滅の闘いを放棄した場合、資本主義と階級の復活・逆行現象が生ずるのは当然であること。とりわけ、国際帝国主義と競争下下であり、国際反革命が不断に内面化し、また生れればかりでブルジョア社会の母斑を多分に有した低生産力のプロレタリア国家では旧資本主義勢力が不断に復活を企み、それがプロレタリア党と管理者層に浸透し、正しい根拠地化と継続革命の国際し国内路線がない場合、従ってこの路線に基づく「二つの道の階級闘争」がない場合、党と管理者が変質し、内側から新しい資本主義勢力が形成され資本主義の復活が実現することは十分あるし、現にソ連では（それ以前のユーゴは勿論）実現されてしまっている。このような資本主義の復

に消滅するのではなく、全面的でないにせよ存続すること。この完全な消滅は⑤や⑥を消滅させる上部構造の革命が意識的になされない限り、階級は消滅しはしないこと。中国の階級概念はこのような規定性をもっていること。我々は、かかる状態を純粹な階級概念でも規定されず、さりとて超階級的な単なる階級的差異や個人差や或いは進んだ生産力と遅れた生産関係の矛盾から生じる矛盾とは捉えない。かかる半階級状態の概念規定として、我々は擬制的階級・擬制的階級闘争として捉えるのだが、中国の階級概念はこのような擬制として総括されるべきです。つまり、半ば階級であるが、純然たる階級ではない点で、擬制的な状態を概念付けたこと。

⑤ 我々は、階級の消滅を所有関係を軸にして確定する。従って、所有関係がかわれば階級も消滅すると大雑把に考えがちであるし、基本的にはこれは正しい観点である。しかし、ここには概念上の陥穽が存在すること。生産手段の国有化（集産化）は、必ずしも生産手段の全人民所有化を全面的には意味しないこと。生産手段の国有化と生産手段の全人民所有化の間には種々な階梯があり、どちらも資本主義の私的所有を排除しているが、前者は全人民的所有とは同一視出来ないこと。そこには生産手段の国有化・集産化が官僚・管理者所有に変質するか、官僚・管理者占有を通じて、全人民所有として名実ともに生産手段の共有化が実現するかの、矛盾が存在すること。つまり、生産手段の国有化は、共有化の

活と階級闘争の存在は、国際帝国主義（と社帝）が打倒された世界社会主義社会まで、不断につきまとうものです。尚、以上の理解を踏まえたとすれば、このような「社会」は共産主義の第一段階とは言え、極めて低段階の社会であり、国際帝国主義と対抗している面も加味した場合はプロ独社会（高い段階）とみてもさしつかえない。

⑥ 以上から、生産手段が国有化された段階、つまり「共有化」された段階でも擬制的な半階級・階級闘争が存在し、プロ独が（対外的のみならず、対内的に）必要である点で、中共の「社会主義下階級闘争論」は理論が実際に測して発展させられている点で全く正しいわけですが、このような実践的な過渡期論や共産主義論を反スタロツキストは全く理解できないわけではあります。彼等は「ゴータ綱領批判」を真に理解せず、その命題を教条主義的にあてはめて、「階級は存在しない——修正主義だ」とガナリたてるわけだが、「ゴータ綱領批判」の命題が現実の経験に測してどのように正しく発展させられねばならぬかはほとんど問題意識がない。「ゴータ綱領批判」の命題は、資本主義を否定的に抽象して導き出されたものであり、その点では純粹に理論上の抽象であり、このような一般的抽象命題が、現実の中でどのように貫徹されるかを究明しない限り、単なる現実のケチつけに終り実践上の闘う路線とは全くならないこと。この点では彼等は生産手段共有化後の実践的路线を全く所有せず、実践上はソ連の「全

人民的国家論」を對置し、過渡期世界でのプロレタリア国家の生産手段共有化後の特殊な矛盾の解決を提出できずソ修を美化してしまふのです。

① 以上の如き毛沢東過渡期論の理解の上にたつて初めて、我々は一九二〇年代のレーニン死後のスタ・トロ論争を総括することが出来る。トロツキーは、国際帝国主義に包囲され、低生産力のソ連では一国からの社会主義は出来ない↓従つて、国際帝国主義打倒に集中し、この為には経済的には農民を搾取してもプロ独の下で工業化を進めるべき、と主張したわけだが、この見解は国際帝国主義や低生産力の条件を過大に評価し、プロレタリアと農民の革命的団結を信じないペンシズムであり敗北主義です。経済的にも、社会主義経済の拡大再生産の発展構造と資本主義の重化学工業第一の発展構造の區別が出来ず、プロレタリアートと農民を敵対させるブルジョアの理論です。この点でプレオブラセシスキーの社会主義原始蓄積論は誤りです。スターリンは、まがりなりにも最初多くのミスをやつつも、レーニンの路線を受け継ぎ、まずもつて一国から社会主義を建設してゆくりアルな現実を理解し、世界革命と国内建設、プロレタリアートと農民の団結、工業と農業の關係等を統一せんとした志向をもつていた点で、我々はスタ・トロ論争に於ては相対的にはスターリンの方が正しい対応をしたと確認しておくべきです。スターリンは二〇年代では一国社会主義存続可能とは主張したが完成可能とは

ハ9V 結論

以上の国際情勢の分析から我々は如何なる実践的結論を引き出す必要があるだろうか。簡単にこれまでの分析を要約しつつ、我々の結論を展開することにします。

① 戦後国際帝国主義の世界体制は米帝を支柱として、IMF・ガット、国際反革命同盟の多国的・政治経済機構を媒介にして、新(旧)植民地を搾取・収奪・抑圧し、ここから搾りとつた利潤を分配し合うことによつて、帝国主義相互の矛盾や帝国主義内部の階級矛盾を緩和していた。ソ連は、国際反革命同盟に暴力的に規制され、かかる国際帝国主義の体制に平和共存をとをえ組み込まれていったこと。従つて、国際帝国主義は新植民地体制を基底にして、自らの蓄積と再生産の構造を確立し、存続してきたこと。

② この国際帝国主義の国際的・国内的な蓄積・再生産構造が、それ自身が生み出す第三世界人民の犠牲の深まり、他方でのその指導部中国の正しい指導の下で、印度支那革命戦争を始めとして、民族解放・社会主義革命の昂まりの中で、又これを支える国際的人民の闘いの昂まりの中で、破綻しかり、それまで抑制・隠蔽されていた帝国主義相互の矛盾や帝国主義内部の階級矛盾が激化し始め、「南北問題」「原料資源問題」「国際的連動インフレ」、先進国内階級闘争の激化として爆発していき、帝国主義世界体制が瓦解し始めたこと。

いっていないこと。ブーリンは、最初トロツキー以上の世界革命の攻勢論者として、極左日和見主義だったが、世界革命の退潮の中で今度は一転して、右翼日和見主義の現在の劉少奇以上の資本主義復活路線を提唱した点で断乎批判されなければならぬ。

しかしスターリンは、毛沢東の如く世界革命と自国革命を統一し、プロレタリアートと農民、工業と農業の統一をめざし、根拠地化と継続革命の「二つの道の階級闘争」を貫徹出来ず、右に妥協し「左」の国有化路線のジクザクを跡り、遂には世界革命の正しい路線を打出せず、挫折・変質してしまつたこと。

我々は、スターリン的な、とくに三〇年代に明確化した「世界革命の放棄と民族利己主義、資本主義勢力への屈服を旨とするスターリン的「一国社会主義論」は排されなければならぬが、「一国社会主義存続可能論」を展開したらずくそれを世界革命の放棄やスターリン主義と結びつけてしまつたトロツキー的な左翼日和見主義の世界革命還元論の理論傾向を排し、世界革命の根拠地化と継続革命を統一する「二つの道の階級闘争」の内に裏打ちされた、一国社会主義存続可能論(完成は世界プロ独を経た世界社会主義に於てしか可能だが)をあらためて主張しておかなければならぬ。

③ この瓦解に対して、超一流帝国主義米帝のみが独自に大勢挽回せんとする力量を保持し——他の帝国主義は米帝にかわつて世界体制を自力で再編する能力や意欲はなく——米帝は必死で延命をはからんとし、他の帝国主義もこれに矛盾を持ちつつも、追隨協力してゆこうとしていること。

かかる帝国主義世界体制の危機の中で、帝国主義体制の戦後の安定の中で、自らの社会帝国主義の政治経済的基礎を確立し、停滞しながらも著るしく肥大化してきた、ソ連社帝は、自己の存立の問題として、帝国主義世界体制を必死で救済し、第三世界人民とこれをとりまく全世界の革命闘争の昂まりを、その指導部中国を、反革命包囲せんとしていること。そして、この米帝との共同反革命の上で、米帝と相互に協力し、米帝の後退の穴を埋め帝国主義的利益を篡奪していること。正に、二大超大国によつて帝国主義世界体制は護持され、再分割されんとしている。

かかる構造は世界プロレタリア共産主義勢力の世界革命戦争の防禦段階の勝利的前進にもとづくものであり、この構造の確立をもつて、世界人民の勝利の趨勢をおしとどめることは出来ないこと。

かかる二大超大国の世界体制の階級的特質を見抜かず、社民や資本主義内社帝の如く、またトロツキストの如く、「中ソの不幸な分裂が米帝を利している」とするのは、ソ連社帝を免罪し、プロレタリア世界革命を完遂する上で、狡猾にし

て反革命の誤ちであること。

④ 結局、我々が分析してきた世界革命戦争の対峙段階の最大特徴とは、国際帝国主義の絶対的危機とこれを救済する帝の全面化にもとづく帝国主義世界体制の延命のために帝国主義と社会帝国主義がブロックを組むことに特徴付けられる米ソ超大国支配体制であり、この帝・社帝のブロックを打ち破る力量が形成された時、世界革命戦争の総反攻・総蜂起が形成されること、この時帝国主義は最早裸の一握りのファシズム勢力を残すのみで自己の敗北を迎えねばならない。かかる帝と社帝のブロックによる帝国主義の延命の構造は、世界的レベルの階級構造の問題だけではなく、途上国・先進国を問わず、また各ブロックを問わず、形成されていること。資本主義国に於ける政府危機と資本家と社民・社帝のブロックにもとづく連合政権や社民政権、或いは社共連合政権の誕生など。

⑤ かかる帝・社帝のブロックに基づく米ソ超大国世界体制に対して、国際共産主義者は反帝反社帝の世界革命戦略を獲得し、世界共産主義革命に占める民族解放・社会主義の重要な位置を正しく把握し、この世界共産主義・世界プロ独、反帝反社帝の世界革命戦略で武装された、世界革命戦争を遂行する世界党の建設をめざし、この世界党建設の闘いを楯柱にして、世界共産主義革命勢力の強化を促進し、次の総反攻に向け持久的に闘い抜かねばならない。この世界党の建設は、

我々独自の課題であると同時に、毛思想で武装された中国共産党の指導権を同志的批判的關係の中で強く要請することを、特殊に留意しなければならぬこと。中国共産党は、国家・民族・階級に関する曖昧性や、先進資本主義国内の人民民主主義革命や受動的蜂起主義を許容するような問題点がありつつも、いぜんとして第三世界人民のチャンピオンであり、反帝反社帝戦略を実現し抜くもつとも強力を指導部であること。

更に、口先だけの「左翼」空論主義の小ブル日和見主義者のトロツキストや、毛沢東教条主義の小ブル民族主義、民主主義の諸党派を党派闘争を通じて変革・止揚してゆかないればならないこと。トロツキズムは毛沢東思想の意義を全く理解せず、スターリン主義として把握、民族解放・社会主義革命勢力に敵対し、世界史的階級關係の変化に規定された帝国主義の国際的・国内的蓄積構造を理解せず、単純に不均等発展を絶対化したりする幼稚極まる世界把握であり、日共等資本主義内社帝勢力と同じく、社会帝国主義の階級的性質を見破れず、これを美化していること。トロツキー流「社会ファシズム論批判」で自己満足していること。毛沢東教条主義者は、毛沢東思想の部分的欠陥を致命的絶対的な欠陥に昂めていること。

かかる、社会帝国主義紛砕！ 毛沢東思想断乎支持！ トロツキズムと毛沢東教条主義の克服止揚の三大機軸を党建設に党派闘争の中心に据え、この中で革命的ML主義のプロレ

タリア世界観をより一層打ち固め、プロヘゲモニーを強化し、これを軸にして革命闘争と党派闘争を展開し、大きく反帝反社帝の陣型と党建設を遂行することが肝要であること。

⑥ 防禦段階の戦略―戦術の最大の特徴は、⑤の如き党建設にあり、この党建設を楯柱にして、これを中核にして、プロレタリア・ヘゲモニーを独自に強化しつつ、プロレタリア人民の闘いを全力で支持支援し、その階級的現れを組織し、結合し、階級意識と組織を発達させ、革命勢力を総反攻に向けて大規模に強化育成してゆくことにあること。

従って、このプロヘゲの形成に党建設の問題を抜きにして、経済主義や社会改良主義の政権戦略の路線を遂行したり、またこれ等の勢力と自己を政治的に区別し切れないのは階級的犯罪であること。今一つは、世界的総反攻に向けて党建設を軸にして、持久的な陣型を構築してゆかず、小ブルジョワの自然発生性に拝跪する、超階級的軍事絶対主義や小ブル革命戦争主義、ゲリラ主義、テロリズム、サンヂカリズムは、断乎排除されなければならないこと。

本書は連赤敗北の総括の一環であると同時に、共産主義者同盟第七回大会以降、思想綱領上の主要な軸として、その後の赤軍派の闘いを領導し牽引してきた「一向過渡期世界論」の継承と防衛、その発展のために展開されたボレミークの書である。

即ち、 \wedge 一向過渡期世界論 \vee として定立された三つのテーゼ

一 階級闘争の世界史的攻撃段階——世界武装プロレタリアートへの到達のテーゼ

二 現代帝国主義の恒常的、国内・国際侵略抑圧反革命戦争と、なし崩しファシズム——これによって規定された三プロック階級闘争

・発展途上国の民族解放——社会主義革命

・先進国の前段階決戦 \parallel 攻撃的蜂起 \parallel プロレタリア社会主義革命戦争

その結合としての世界性、及び攻撃性動性として位置づけられる逆制約の能動のテーゼ

一 それらの特質を止揚するものとしての世界プロレタリア共産主義革命——世界プロレタリア独裁、世界党——世界赤軍——世界革命戦線の \wedge 革命路線 \vee のテーゼ

は)階級・階級闘争が存在しないという反スタ主義者の命題を批判したこと、又、労働者国家の役割を世界革命の根拠地化とプロ独の遂行として規定したこと。第四は、世界史的階級関係と帝国主義の不均衡発展の矛盾から、資本主義に世界恐慌や戦争を経ないでプロレタリア社会主義革命が実現される可能性があり、これを戦争前の前段階決戦として追求する必要があること、これを戦前の独革命の総括を通じて例証せんとしたこと。第五に、この発展途上国、プロ国家発展した資本主義国の革命を統合する三プロック同時革命を主張したこと。スターリン主義はこの三プロック革命の放棄から発生したことを指摘したこと。第六に、岩田弘の世界資本主義論に上述の過渡期世界論とレーニン帝国主義論を対置し宇野経済学を批判したこと。——資本論レベルでの批判はやりきれなかったが。第七に、マル戦派の戦略——戦術の党や、下からのローザ、トロツキーの党組織論に対してレーニンの『何をなすべきか』に立脚し、『外部注入』の上からの中央集権的職革党、第五インターの世界党の建設を提出した。第八に、これ等の要約と一定の補足的発展として六八年8・3国際反戦集会で世界革命戦争路線と『世界党——世界赤軍——世界プロレタリア統一戦線』の陣型が提出されていた。これ等が、大体に於ける第二次ブンドの『過渡期世界論』といわれる内実である。第九に、この『過渡期世界論』はその後ブンド全体の闘いの方向を決定したし、実際ここにも

これらをいかに継承し、防衛し、止揚発展させるかが本書での主要なテーマである。であるならば \wedge 一向過渡期世界論 \vee への批判は、どのような形で提出され、展開されてきたのか？そのまえに、 \wedge 一向過渡期世界論 \vee とは、どのような内容をもってわれわれの前にあったのか。ここでは共産主義者同盟赤軍派(プロ革)第一次綱領草案として起草された別の文章からその内実を見てみよう。

「第七回大会は、直接には、マル戦派の理論、路線を批判し指導権を争うものであったが、それ以上に10・8・11・12闘争の総括と今後の方向性をめぐって持たれたものであり、その歴史的課題と意義は、もっと深かった。それは第七回大会綱領草案に典型的に展開された。第一は、資本主義批判に立脚するML主義のプロレタリア思想はまだ獲得するにほいたっていなかったが、現代世界を、資本主義から共産主義に至る過渡期と捉え、プロレタリア世界革命が攻撃的に展開される時代であるという歴史観を提起するにいたったこと。

第二は、民族解放闘争をベトナム革命闘争やキューバ革命・ゲバラの闘いを総括しつつ、『スターリン主義による代理闘争だ』といていたどうしようもない革共同系の反スタ一國主義を批判し、公然とこれを民族解放闘争と社会主義革命の連続革命と規定し、これを支持したこと。第三は、中国プロレタリア文化大革命を評価し、中共の規定をスターリン主義と規定しない志向を示したこと。そして、労働者国家のプロ独期には(社会主義への過程に

指摘した限りの命題は全て正しいものであった。この『過渡期世界論』の提起によって、統一ブンド系は初めて、それまでの反綱領主義、反前衛主義の『自立論』や『擬似前衛論』『政治過程論』過程としての党』という考え方を払拭し、前衛党建設の志向を公然化させた。この点で、第二次ブンドは単純には、『戦略——戦術の党』とは言えず、『思想・綱領の党』に前進を開始していたこと。」(『第一次綱領草案』第六章第四節)本書に復刻収録された二つの論文「ゲバラ \parallel カストロ路線とわれわれ」、「現代過渡期世界と世界革命の展望」こそは、これらの内実を展開提起した最初の記念すべき号砲であった。さて、 \wedge 一向過渡期世界論 \vee 批判の、主要な傾向は本書に於いて次のように要約される。

1. 戦旗派(日向)、及び千葉正健氏に代表される「純正小ブル反スタトロツキズム」の立場からの批判
2. 連合ブンドのいわゆる『12・18路線』に代表される「中間的小ブル反スタトロツキズム」の立場から批判、その支流としての赤報派の批判
3. 臨総パンフに代表される同盟内「右翼清算派」からの批判
4. 「実践上は反清算主義で『左』からの清算主義の傾向を持」つ、「小ブル教条派の、その一部の反スタ主義」の立場からの批判
5. 「一〇四の反スタトロツキズムの見解に反発するあま

り毛沢東思想に溶解し、『過渡期世界論』を發展させた
と称するような見解」

6. 「過渡期世界論」の継承と發展をうたいつつもその内
実を「小ブル反スタ主義に」転落せしめていく傾向。本
書に於いては主要に「仏派」の立場としてとらえている。
7. アラブ赤軍及び、VZ58の名前に於いて提出された立
場からの批判(その主要な批判点は『査証』六号「ディ
ル・ヤシン作戦勝利万歳!」に於いて要約的に展開され
てゐる)

以上、七点に代表される批判、及び中傷誹謗をも含むとこ
ろの「左」右の清算主義、日和見主義に抗して、敢然とイデ
オロギー的理論戦を完遂し、防衛しつつ、『赤軍』再刊準備
一号、第一次綱領草案へと結実發展していく前段階としての
位置に、本書は立っているのである。

ここで、具体的な論争の経緯を文献によって、最小限度明
らかにしておかねばならないだろう。

連合赤軍「新党」の敗北以降、ただちに明らかにされた
「今回の問題について」(『査証』三号)、一篇を別にすれ
ば、この間の主要な論争は全て、『塩見孝也論叢』誌によ
っている。『塩見孝也論叢』は、連赤敗北後、九ヶ月を経た時
点で、第二集「同盟の革命的再建のために(その2)」――
連合赤軍敗北の正しい総括の下、プロレタリア革命主義の旗を高

と發展・飛躍をもって獲得されたものである。それは全く必
然であり、正当なことである。連合赤軍「新党」の敗北以
来、跳梁跋扈した「左」右の清算主義・日和見主義に抗して、
ブルジョアジーの重包囲に耐えぬき、敢然とイデオロギー的
理論的戦闘を貫徹し、革命戦争の再開と赤軍派再建プロレ
タリア党創建へ向けて、ついに今、プロ革派結成に登りつめ
た。この巨大な第一歩を刻印した闘いを領導したのは、紛
れもなく「塩見孝也論叢」誌であった。

そして、この再刊準備第一号こそは、『塩見孝也論叢』九号
として、まさに第一次「論叢」の完結を記念すべき号として
提出されたのである。

さて、論争の経緯は『論叢』の目次内容が何よりも明確に
表現している、と書いた。そうである以上、ここでは更なる
一方の(文献)もまたここに明らかにされなければならない
だろう。ここでは一歩すすめて、『論叢』誌以外で展開され
た文献とともに、具体的なボレミークを記しておきたい。公
表時日を、時刻表として追っておく。

- 1972・4「今回の問題について」(『査証』No.6)塩見
孝也/72・5「塩見孝也」今回の問題について「批判」(『
赤報』No.3)共産同(RG)中央委員会/72・5「同盟
第三次転換とプロレタリア共産主義思想・反米反帝の人民
民主主義革命の総路線とプロレタリア前衛党の建設に向けて
」(パンフレット)塩見孝也/72・8「アラブ赤軍からの

く掲げてさらに前進しよう!」の発刊をもって刊行が開始さ
れた。この『論叢』こそは、まさに「論争」の同音同義語と
して表現されたイデオロギー的理論戦の武器、そして譬とし
てあったのである。さまざまな局面に於ける論争の経緯に関
しては、何よりも『論叢』各集の目次に、その内容が明確に
表現されている。刊行順に主要な題目を追ってみると、たと
えば以下の如くである。第一集「ある同志への手紙I・II」
「同志高原を批判す」、第三集「トロツキズム・毛沢東教条
主義を止揚し、プロレタリア革命綱領を獲得するために――
千葉正健論文「赤軍の同志たちへ」への反批判」、第四集「連
赤の責任回避と小ブル民族主義」生産力主義を批判し、マル
クス・レーニン主義の正しい継承と發展の実践的獲得のため
に「日共革命左派(神)川島、渡辺両氏への再批判」、第五
集「共産同(RG)批判への基本視点・メモ」革左(神)
派の坂口君を批判す――

そして、今、このような形で提示されている本書こそ『論
叢』第六集一八集の集成として成立しているものである。
先述されているように、この『論叢』の發展結実したものとして、
われわれはすでに『赤軍』再刊準備一号「第一次綱領
草案」を読むことができる。昨年末に刊行された(それは『
論叢』が開始されたのち、丁度二年の歳月を経た、まさにそ
の日であった。)同誌は、前文に次のようにいう。

「この『赤軍』誌再刊準備号は「塩見孝也論叢」誌の継承
テーゼ」(『世界革命戦線』No.1)アラブ赤軍/72・9「
革命戦争勝利の道とは何か」赤軍派「第三次転換」路線批判
派批判」(『査証』No.5)共産同(RG)矢草三郎/72・10「赤軍
/72・11「人民独裁にむけて」(『序章』臨時増刊)日本
共産党(革左)神奈川県常任編集委員会/72・12「ディル
・ヤシン作戦勝利万歳!」(『査証』No.6)VZ58・来見弘
/72・12「同盟12・18路線の意義と限界」コスモポリタニ
ズムと一國主義の往還を突破する道とは何か!」(『査証』
No.6)共産同全国委/72・12「塩見孝也論叢第二集刊行」
/1973・1「論叢第一集刊行」/73・2「赤軍の同志
たちへ」(『情況』73年2月号)千葉正健/73・3「赤
軍派の分派闘争に対する我々の態度」『塩見孝也論叢』の批
判」(『赤報』No.9及びNo.11)共産同(RG)/73・4「
連合赤軍との党派闘争」(『共産主義』No.16)共産同(RG)
/73・5「論叢第三集刊行」/73・9「公開質問状」赤
軍派塩見同志へ」(『序章』No.12)川島豪・渡辺正則/73
・9「川島・渡辺両氏の公開質問にこたえる」(『序章』No.
12)塩見孝也/73・9「銃撃戦と「粛清」と」(序章社)
日本共産党(革左)神奈川県常任編集委員会/73・10「日
本の戦士へ呼びかける」世界党――世界赤軍――世界革命
統一戦線の構築を!」(『査証』No.7)アラブ赤軍/73・
10「連赤敗北の総括の第二段階と民々革命論の検討」(『査

証』№7) 塩見孝也／73・10「塩見孝也論叢をめぐって——宇野経済学批判の立場から」(『査証』№7) 共產同(RG) 榎原均／73・10「塩見孝也論叢をめぐって——塩見君の『連合赤軍問題』の総括の仕方と『プロレタリア革命主義』の内容」(『査証』№7) 労働者共產主義委員会・北田肇／73・10「連赤敗北における山岳根拠地路線の意義の明確化を」(『新左翼』163〜9号) 塩見孝也／73・11「赤軍派塩見同志への再批判」(『序章』№13) 川島豪・渡辺正則／1974・2「論叢第四集刊行」／74・3「論叢第五集刊行」／74・4「赤軍派塩見氏への反論」(『序章』№14) 坂口弘／74・6「論叢第七集刊行」／74・9「武装闘争の第三段階へむけ第二次共産同の最終的決着を」(『蜂起』№57)／74・10「銃の殲滅戦の『玉破主義』『人の要素』の全面破産を止揚し、建党・建軍—先武闘—共產主義政治の大道を」(『蜂起』№58)／74・10「論叢第八集刊行」／74・12「三たび塩見氏を批判する——武装闘争清算の現代経済主義に断固反対しよう」(『解放の旗』12月1日特別号) 日本共産党(革左) 神奈川県常任委員会／74・12「全国の正規軍、ゲリラ武闘軍団と結合し、12・18武闘派政治集会へ」(『蜂起』№60)／74・12「論叢第九集」『赤軍』再刊準備一号刊行」

尚、右には、ふれ得なかつたが、この論争の根幹をなす文献として、次のものを参照検討された。『共産主義14・15

号」(「わが同盟の立脚点について」—この第一章は「わが同盟の過渡期世界論総括」として提出され、その第二章は「世界プロレタリア独裁の綱領的諸問題」として提出されている。『過渡期世界の革命』日向翔、『プロレタリア革命党建設とわれわれの緊要の任務(上)』八木健彦、赤軍派都委員会『再生にむけて』各号、赤軍派関西地方委員会機関誌『人民の軍隊』(72・9)、『共産同赤軍派臨時総会報告集』『赤軍派政治理論機関誌総集』等。

本書は、すでに明らかのように、「塩見孝也論叢」第六(八集を母体として成立している。これらは、「一向過渡期世界論の防衛と発展のために」の総題のもとに、それぞれ、序論、前史、情勢分析として明らかにされた。執筆時日は「序論」(1974・4)、「前史」(『ゲバラ・カストロ路線とわれわれ』1967・11)、『現代過渡期世界と世界革命の展望』1968・8)、「情勢分析」(74・7)である。本書の作成にあたって、「情勢分析」からは「プロレタリア日本革命の性格・その基本問題と我々の綱領」が削除され(この論文は『赤軍』再刊準備一号、「第一次綱領草案」中に、第七章として位置づけられた)。「序論」に於いては新たに「序章」の部分が公表付加された。

一向過渡期世界論の防衛と発展のために

著者 塩見孝也

初版発行 一九七五年三月二〇日

発行所 査証出版

定価 九八〇円

一向過渡期世界論の防衛と發展のために(1) 序論 正誤表

頁	段行	誤	正
1	2	キャンベール	キャンベーン
2	上5	清	肅清
2	下1	キャンベール	キャンベーン
2	下18	正して立場	正しい立場
3	上23	64は駄目だ	64は駄目だ
3	下13	烽火五号	烽火五号
4	上6	剽窃見解	剽窃見解
4	上23	屈服	屈服
4	下1	火派の諸君	烽火派の諸君
4	下1	仏派、派	仏派、烽火派
4	下1	剽窃グループ	剽窃グループ
5	上3	整理しま	整理し、ま
5	上15	「反ス	「ス
5	下5	「共産主義」	「共産主義」
6	上4	綱領点問題	綱領的諸問題
6	上15	攻撃的蜂起	攻撃的蜂起
7	上7	傲慢さ	傲慢さ
7	上11	闘ったの如き	闘ったかの如き
7	上13	「第二次ブンド	第二次ブンド
7	下9	梯経済哲学	梯哲学
8	下23	ゴマ・カシカ	ゴマ・カシカ
9	上10	間違いのなか	間違いのなか。又、「剰余
9	下19	ことよって	これよって
10	上1	剰余価値法則さえあれば	トル
10	上9	知っておれば	知っておれば
11	下12	品あらわされる労働	品にあらわされる労働
13	上9	デマリ召還主義	デマリ、召還主義

56	上21	銃撃戦「肅清」と	銃撃戦と「肅清」
57	下20	巧妙な	巧妙な
58	上17	ブルーリン	ブルーリン
58	下9	評論家的	評論家的
59	上20	捨象することよって	捨象することよって
60	上9	法則返見	法則発見
60	下7	ウリニツ	ウリニツ
60	下21	彼等の	彼等の
61	上9	衝突	衝突
61	下11	エンゲルス	エンゲルス
63	上4	単なる	単なる
63	上7	何か一つの	何か一つの
63	下1	スリかえて	スリかえて
65	上20	みるのは	みるのは
65	上22	きつゆけば	きつゆけば
66	上8	特質	特質
67	上8	槓杆として	槓杆として
67	上22	市場細分割	市場再分割
67	下15	を極枯物	な極枯物
69	上1	可変資本	可変資本
69	上6	蓄積	蓄積、
70	上7	斧をもちあげて	斧をもちあげて

「一向過渡期世界論の防衛と發展のために(1) 序論」(塩見孝也論叢6)において以上の誤植が生じました。この他にも、「召換」召還、「歪少」矮小、「徹廢」撤廢、「陰蔽」隱蔽、「循環」循環、「批難」非難、また拗音、促音の表記等についてもいろいろ指摘していませんが、誤りが生じました。執筆者たる塩見同志、ならびに読者諸氏に対してお詫びして、訂正いたします。今後このようなことのないよう最善の注意を更に払いたいと思えます。

①

④

13 上 19 正しくも、
 13 下 9 完全に
 13 下 10 名文
 13 下 22 のだろうか。」
 14 下 2 明です。
 14 下 17 所得の
 14 下 17 資本主義的私有利
 15 上 1 「反スタ修正主義経済学
 15 下 5 くべきです。
 16 下 4 政治的中黒一」を入れる思
 16 下 6 想的
 17 下 3 小ブル傲慢主義
 17 下 3 もっと空論的
 17 下 17 金融寡頭制
 17 下 20 超巨大金融
 20 上 11 社会帝国主義化と
 20 下 13 我々の立脚点について
 22 上 5 愚かにもつかない
 23 上 5 『赤軍派④』
 23 下 8 労働商品所有
 26 下 18 生命力をもつ だから
 26 下 18 非資本主義ウク
 26 下 20 自動崩壊する この
 27 上 3 ウクラウド
 27 上 5 統一されていると、
 27 下 11 対馬忠行
 28 上 2 とするの論
 30 上 2 連続革命
 30 下 3 七一年
 35 上 14 小ブル革命

正しくも指摘している如く
 完全に
 名分
 のだろうか？
 です。
 所有の
 資本主義的私有制
 「反スタ修正主義経済学」
 おくべきです。
 政治的・思想的
 小ブル傲慢主義
 もっとも空論的
 金融寡頭制
 超巨大金融
 社会帝国主義化
 我々の立脚すべき地点
 愚かにもつかない
 『赤軍派④』
 労働商品所有
 生命力をもつ↓だから
 非資本主義
 自動崩壊する↓この
 ウクラウド
 統一されている」と、
 対馬忠行
 とするの論
 連続革命
 七〇年
 小ブル革命

②

35 上 14 であつた)を
 36 下 15 堂々として
 39 上 16 謀サークル
 40 下 16 逃亡の否定
 40 下 18 到錯
 41 上 6 コスモポリタニズム
 42 上 3 連続M作戦
 42 上 21 綱領論争
 43 上 11 武闘を
 43 上 23 活字活用
 45 上 2 「法則主義を
 45 上 13 ウクラウド
 45 下 19 撤回
 45 下 21 労働力商品
 46 上 20 揚棄して
 46 下 10 コスモポリタニズム
 47 下 1 綱領
 47 下 9 末路
 48 上 18 蓄積構造
 49 下 7 内的衝撃力
 49 下 12 異常
 50 上 5 見失をわれて
 50 下 2 被差別部落大衆
 52 上 16 する、といった
 53 上 8 要求する。組
 54 上 5 整備運動
 54 下 16 しないかった
 55 上 2 小ブル
 56 上 15 気づかされ

であつた)を
 堂々として
 某サークル
 逃亡の否定
 倒錯
 コスモポリタニズム
 連続M作戦
 綱領論争
 「武闘を
 活字活用
 「法則主義」を
 ウクラウド
 撤回
 労働力商品
 揚棄して
 コスモポリタニズム
 綱領
 末路
 蓄積構造
 内的衝撃力
 異常
 見失をわれて
 被差別部落大衆
 する、といった
 要求する、組
 整備運動
 しないかった
 小ブル革
 気づかされ

③

ロシア革命以降の国際階級闘争の持久的対峙段階への到達と、三ブロック・テーゼのもとでの第三世界の民族解放・社会主義革命を主導とする攻撃型階級闘争の陣型を明らかにした、一向過渡期世界論こそは二次ブンド→赤軍派の、ひいては世界プロレタリアートの最も明確な現代世界史認識であり、世界共産主義社会実現へ向けた闘いの、世界革命戦争の闘いの、全ての兵士のための理論的根拠の構想である。

本書は、連赤→「新党」の痛痕の敗北を、思想問題として切開し、反スタ・トロツキズム、毛沢東教条主義の同時相互止揚と、七二年以降の混乱、動揺の中で跳梁跋扈した内外の「左」右の日和見主義、清算主義を完膚なきまでに粉碎、克服し、同盟赤軍派再建→プロレタリア党創建を目ざして果敢なイデオロギー的戦闘を展開した『塩見孝也論叢』の第六、七、八集「一向過渡期世界論の防衛と発展のために」の増訂版である。